神戸市西区

西神ニュータウンNo.62 遺跡

- 2 号神戸西バイパス事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 VI -

平成 25 (2013) 年 2 月

兵庫県教育委員会

神戸市西区

西神ニュータウンNo.62 遺跡

- 2号神戸西バイパス事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 VI -

平成 25 (2013) 年 2 月

兵庫県教育委員会



遺跡遠景 明石川合流点付近から見る(南西から)



遺跡全景 (東から)



中区 竪穴住居跡と掘立柱建物跡 (西から)



中区 掘立柱建物跡 (西から)



中区 井戸 (南から)



中区 中世墓(南から)



東区 谷部西壁断面 (東から)



東区 谷部南壁断面(北から)



東区 竪穴住居跡 (東から)



東区 掘立柱建物跡 (東から)



中区 SH-C12出土土器



中区・東区 出土中世土器

例 言

- 1 本書は、神戸市西区櫨谷町菅野に所在する西神ニュータウンNo62遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、2号神戸西バイパス事業に伴うもので、建設省(国土交通省)近畿地方整備局兵庫国道 事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事 務所を調査機関として実施した。

出土品整理作業は、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、平成21年度~平成23年度は兵庫県立考古博物館が平成24年度は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。

3 調査の推移

(発掘作業)

確認調査 平成8~10・12年度

実施機関:兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

本発掘調査 平成8·10·12·13年度

実施機関:兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

(出土品整理作業)

平成21年度~平成23年度

実施機関:兵庫県立考古博物館

平成24年度

実施機関:公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

- 4 本書の執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 長濱誠司・山上雅 弘・岸本一宏が分担して行い、編集は増田麻子の補助を得て長濱が行った。
- 5 遺物写真撮影は、㈱地域文化財研究所に委託して行った。
- 6 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会(兵庫県立考古博物館) で保管している。
- 7 発掘調査及び報告書の作成にあたっては多数の方々にご教示、ご指導を頂いた。ここの感謝の意を 表します。

凡例

- ・調査成果の測量は、座標は日本測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。
- ・本書に用いた方位は座標北を示し、標高は東京湾平均海水準 (T.P.) を基準とした。

・遺構

遺構番号は本報告にあたって以下に従ってすべて新番号に振りなおした。

・種類ごとに名称の頭に以下の略号を用いた。

SB:掘立柱建物、SD:溝·溝状遺構、SE:井戸、SH:竪穴住居、SK:土坑、

SX:墓·特殊遺構、SV:谷地形、P:柱穴

・続けて地区ごとにW:西区、C:中区、E:東区とし、遺構に種別ごとに01から始めた。 ただし、柱穴のうち掘立柱建物および竪穴住居を構成するものについては、それぞれの遺構 番号を冠してP1からつけている。

新旧遺構番号の対照は第3表~第14表に記している。なお、出土遺物の収納については、添付する 遺物カードは旧遺構番号のままである。

・遺物

土器は1~とした。

土器の断面は、弥生土器・土師器を白抜き、須恵器を黒塗り、陶磁器を網かけとして区別した。 石器・石製品はM、金属製品はS、玉はJを頭につけて土器と区別しそれぞれ1~はじめた。

- ・土器の色調や土層などの表記については、小山正忠・竹原秀雄著『新版 標準土色帖』1999年版を使用した。
- ・本書で使用した地図は以下のとおりである。

第3図 1/2,500 神戸市都市計画図 『菅野』

第8図 国土地理院 1/25,000 『加古川』、『高砂』、『東二見』1996年

『三木』1997年

本文目次

第	1章 訂	調査の経過	
9	第1節	調査に至る経緯	1
9	第2節	西神ニュータウンNo62遺跡	1
1	第3節	神戸西バイパスに伴う調査の経過	3
	第4節	遺物整理作業の経過と体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	10
第	2章 j	遺跡をとりまく環境	
3	第1節	地理的環境	12
í	第2節		
第	3章 詞	調査区の概要	
1	第1節	調査区の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
į	第2節	調査区の地区割り	15
第	4章 国	西区の調査	
9	第1節	調査区の概要	17
1	第2節	遺構	17
1	第3節	出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	19
第	5章 『	中区の調査	
1	第1節	調査区の概要	21
9	第2節	調査区の層序	22
9	第3節	遺構	22
1	第4節	出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	44
第	6章 頁	東区の調査	
9	第1節	調査区の概要	57
1	第2節	遺構	58
-	第3節	出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	70
第	7章	自然科学分析	
Ī	西神ニュ	ユータウンNo62遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)㈱加速器分析研究所	83
第	8章 言	まとめ	85
報	告書抄釒	禄	106

挿図目次

第1図	遺跡の位置
第2図	調査区の位置
第3図	遺跡と調査区の位置
第4図	確認調査トレンチの位置4
第5図	平成8年度調査区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第6図	出土木製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第7図	調査区の名称9
第8図	周辺の遺跡14
第9図	中・東区の地形
第10図	赤色顔料顕微鏡写真30
第11図	[参考] 暦年較正年代グラフ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第12図	調査区周辺の地形と検出遺構86
第13図	弥生時代の遺構・・・・・・・9]
第14図	古墳時代の遺構・・・・・・・92
第15図	古代の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第16図	中世の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	表 目 次
第1表	測定結果 (1)
第2表	測定結果(2)
第3表	西区新旧遺構番号対照表95
第4表	中区新旧遺構番号対照表(1)
第5表	中区新旧遺構番号対照表(2) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第6表	中区新旧遺構番号対照表(3)97
第7表	中区新旧遺構番号対照表(4)
第8表	東区新旧遺構番号対照表99
第9表	中区掘立柱建物 新旧柱穴番号対照表 (1) 100
第10表	中区掘立柱建物 新旧柱穴番号対照表 (2)10]
第11表	中区掘立柱建物 新旧柱穴番号対照表 (3)102
第12表	中区掘立柱建物 新旧柱穴番号対照表 (4)103
第13表	中区掘立柱建物 新旧柱穴番号対照表 (5)104
bbs a a b	東区掘立柱建物·竪穴住居 新旧柱穴番号対照表······105

図版目次

	-m-t	Valu J.Hr	A Alabat
図版 1	西区	遺構	全体図
図版 2	西区	遺構	土坑・土器埋納遺構
図版3	西区	遺構	溝
図版 4	中区	遺構	全体図
図版 5	中区	遺構	南東部の地形・断面位置図
図版 6	中区	遺構	調査区断面図
図版7	中区	遺構	竪穴住居跡 1
図版 8	中区	遺構	竪穴住居跡 2
図版 9	中区	遺構	竪穴住居跡 3
図版10	中区	遺構	竪穴住居跡 4
図版11	中区	遺構	竪穴住居跡 5
図版12	中区	遺構	竪穴住居跡 6
図版13	中区	遺構	竪穴住居跡 7
図版14	中区	遺構	掘立柱建物跡1
図版15	中区	遺構	掘立柱建物跡 2
図版16	中区	遺構	掘立柱建物跡3
図版17	中区	遺構	掘立柱建物跡 4
図版18	中区	遺構	掘立柱建物跡 5
図版19	中区	遺構	掘立柱建物跡 6
図版20	中区	遺構	掘立柱建物跡7
図版21	中区	遺構	掘立柱建物跡 8
図版22	中区	遺構	掘立柱建物跡 9 (建物群詳細図)
図版23	中区	遺構	掘立柱建物跡10
図版24	中区	遺構	掘立柱建物跡11
図版25	中区	遺構	掘立柱建物跡12
図版26	中区	遺構	掘立柱建物跡13
図版27	中区	遺構	掘立柱建物跡14
図版28	中区	遺構	柱穴・土器埋納遺構・中世墓
図版29	中区	遺構	土坑1
図版30	中区	遺構	土坑 2
図版31	中区	遺構	土坑3・井戸
図版32	東区	遺構	全体図
図版33	東区	遺構	南東部の地形・断面位置図
図版34	東区	遺構	SV-E01断面図
図版35	東区	遺構	溝
図版36	東区	遺構	竪穴住居跡 1
図版37	東区	遺構	竪穴住居跡 2・土坑 1
図版38			掘立柱建物跡1
図版39	東区	遺構	掘立柱建物跡 2

図版40 東区 遺構 掘立柱建物跡3 図版41 東区 遺構 掘立柱建物跡 4 図版42 東区 遺構 掘立柱建物跡 5 図版43 東区 遺構 柱穴・土坑2 図版44 西区 出土遺物 遺構・包含層 図版45 中区 出土遺物 竪穴住居跡1 図版46 中区 出土遺物 竪穴住居跡 2 図版47 中区 出土遺物 竪穴住居跡 3 図版48 中区 出土遺物 掘立柱建物跡 図版49 中区 出土遺物 柱穴1 図版50 中区 出土遺物 柱穴2 図版51 中区 出土遺物 土坑1 図版52 中区 出土遺物 土坑 2 図版53 中区 出土遺物 土坑 3・溝 図版54 中区 出土遺物 井戸1 図版55 中区 出土遺物 井戸2 図版56 中区 出土遺物 包含層1 図版57 中区 出土遺物 包含層 2 図版58 中区 出土遺物 包含層 3 図版59 東区 出土遺物 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴1 図版60 東区 出土遺物 柱穴2 図版61 東区 出土遺物 柱穴3・土坑 図版62 東区 出土遺物 SD-E01 (1)

図版63 東区 出土遺物 SD-E01 (2) 図版64 東区 出土遺物 出土石器 図版65 東区 出土遺物 SV-E01 図版66 東区 出土遺物 包含層 1 図版67 東区 出土遺物 包含層 2

卷頭図版目次

巻頭写真図版 1 遺跡遠景 明石川合流点付近から見る/遺跡全景 巻頭写真図版 2 中区 竪穴住居跡と掘立柱建物跡/中区 掘立柱建物跡 巻頭写真図版 3 中区 井戸/中区 中世墓 巻頭写真図版 4 東区 谷部西壁断面/東区 谷部南壁断面 巻頭写真図版 5 東区 竪穴住居跡/東区 掘立柱建物跡 巻頭写真図版 6 中区 SH-C12出土土器/中区・東区 出土中世土器

写真図版目次

写真図版 1	遺跡	遺跡付近航空写真				
写真図版 2	遺跡	明石川合流点付近から見た櫨谷川流域/遺跡の遠景				
写真図版3	遺跡	遺跡の)遠景/遺跡の遠景			
写真図版4	遺跡	西区詞	周查前/中区調査前/東区調査前/調査風景			
写真図版5	西区	遺構	全景			
写真図版6	西区	遺構	全景/調査区付近の地形			
写真図版7	西区	遺構	全景/全景/神戸市教委調査区重複箇所			
写真図版8	西区	遺構	SX-W01検出状況/SX-W01/SX-W01			
写真図版9	西区	遺構	竪穴住居跡/SK-W02/SK-W02土層断面/SK-W02土器出土状況/			
			SK-W03土層断面			
写真図版10	西区	遺構	SD-W01土層断面/SD-W03/SD-W03土層断面①/SD-W03土層断面②/			
			SD-W04			
写真図版11	西区	遺構	SD-W04土層断面①/SD-W04土層断面②/SD-W02下層溝/下層焼土面			
写真図版12	中区	遺構	平成13年度第1次調査区(2-2区)全景			
写真図版13	中区	遺構	平成13年度第1次調査区(2-2区)全景/平成13年度第1次調査区(2-2			
			区)全景/平成13年度第1次調査区(2-2区)全景			
写真図版14	中区	遺構	平成13年度第1次調査区(2-1区)全景			
写真図版15	中区	遺構	平成13年度第1次調査区(2-1区)全景/平成13年度第1次調査区(2-1			
			区)全景/平成13年度第1次調査区(2-1区)全景			
写真図版16	中区	遺構	平成13年度第2次調査区全景			
写真図版17	中区	遺構	平成13年度第2次調査区(1-1区)全景/平成13年度第2次調査区(1-1			
			区)全景/平成13年度第2次調査区(1-1区)全景			
写真図版18	中区	遺構	平成13年度第2次調査区(1-2区)全景/平成13年度第2次調査区(1-2			
			区)全景/平成12年度調査区(Ⅰ・Ⅱ区)全景			
写真図版19	中区	遺構	平成12年度調査区(I区)全景/平成12年度調査区(I-a区)全景/			
			平成12年度調査区(I-a区)全景			
写真図版20	中区	遺構	平成12年度調査区(I-b区)全景/平成12年度調査区(Ⅱ区)全景/			
			平成12年度調査区(Ⅱ区)全景			
写真図版21	中区	遺構	平成10年度調査区(A区)全景/平成10年度調査区(A区)全景/			
			平成10年度調査区(A区)全景			
写真図版22	中区	遺構	平成10年度調査区北壁土層断面/平成10年度調査区北壁土層断面(段丘上)			
			/SV-C01/SV-C01土器出土状況(確認調査時)			
写真図版23	中区	遺構	SH-C01/SH-C01土層断面/SH-C01土層断面/			
			SH-C01周壁溝内土器出土状況			
写真図版24	中区	遺構	SH-C02·03/SH-C02電検出状況/SH-C02電/SH-C03土層断面			
写真図版25	中区	遺構	SH-C04/SH-C05/SH-C07			
写真図版26	中区	遺構	SH-C08/SH-C08電/SH-C09			
写真図版27	中区	遺構	SH-C10/SH-C10電/SH-C11			
写真図版28	中区	遺構	SH-C12/SH-C12土層断面/SH-C12土器出土状況/SH-C13			

写真図版29 中区 遺構 SH-C14/SH-C14土層断面/SH-C15 写真図版30 中区 遺構 SH-C16/SH-C16土層断面/SH-C16周壁溝土層断面/SH-C16竃土層断面 /SH-C16竃土層断面 写真図版31 中区 遺構 SH-C17/SH-C17土層断面/SH-C17土器出土状況/P-C53土器出土状況/ SH-C18 写真図版32 中区 遺構 SB-C01/SB-C02・03/SB-C04 写真図版33 中区 遺構 SB-C05 · 06周辺/SB-C06/SB-C07 写真図版34 中区 遺構 SB-C08/SB-C09~11/SB-C12 写真図版35 中区 遺構 SB-C13・14周辺/SB-C16/SB-C16P1断割断面/SB-C16P4断割断面/ SB-C16P5断割断面/SB-C16P6断割断面/SB-C16P7断割断面/ SB-C16P8断割断面 写真図版36 中区 遺構 SB-C17~19周辺/SB-C20·21/SB-C20 写真図版37 中区 遺構 SB-C23~28周辺(平成13年度第2次調査区)/SB-C23~28周辺(平成13 年度第2次調査区) /SB-C23~28周辺 (平成13年度第2次調査区) 写真図版38 中区 遺構 SB-C29~32周辺/SB-C30·31/SB-C32 写真図版39 中区 遺構 SB-C31P6土器出土状況/SB-C31P1断割断面/SB-C31P3断割断面/ SB-C32P8断割断面/SB-C32P11断割断面/SB-C32P12断割断面/ SB-C32P13断割断面/SB-C32P15断割断面 写真図版40 中区 遺構 SB-C12P2土器出土状況/SB-C24P12土器出土状況/P-C02土器出土状況/ P-C14土器出土状况/P-C19土器出土状况/P-C20土器出土状况/ P-C37土器出土状況/P-C39土器出土状況 写真図版41 中区 遺構 SX-C01/SX-C02/SX-C03礫敷/SX-C03 写真図版42 中区 遺構 SK-C01/SK-C01土器出土状況/SK-C06土層断面/SK-C10/SK-C07/ SK-C07土層断面/SK-C08土層断面/SK-C08土器出土状況 写真図版43 中区 遺構 SK-C11土層断面/SK-C13/SK-C13土層断面/SK-C14 写真図版44 中区 遺構 SK-C15/SK-C15土器出土状況/SK-C15土層断面/SK-C5完掘状況 写真図版45 中区 遺構 SK-C17/SE-C01/SE-C01土層断面/SE-C01断割断面/SE-C01土器出土 状况(中層)/SE-C01土器出土状况(底) 写真図版46 東区 遺構 平成10年度調査区 (B区) 全景 写真図版47 東区 遺構 平成10年度調査区(B区)全景/平成10年度調査区(B区)全景 写真図版48 東区 遺構 平成13年度調査区(2区)全景 写真図版49 東区 遺構 平成13年度調査区 (2区) と周辺の地形/平成13年度調査区 (2区) 全景/ 平成13年度調査区(2区)全景 写真図版50 東区 遺構 平成12年度調査区 (Ⅲ区) 全景/平成12年度調査区 (Ⅲ区) と周辺の地形 写真図版51 東区 遺構 平成12年度調査区 (Ⅲ区) 全景/平成12年度調査区 (Ⅲ区) 全景/平成12年 度調査区(Ⅲ区)南半部上層検出遺構 写真図版52 東区 遺構 SH-E01/SH-E02~05/SH-E06/SH-E06土層断面 写真図版53 東区 遺構 SH-E07/SH-E07中央土坑土層断面/SH-E07中央土坑/SB-E01・02 写真図版54 東区 遺構 SB-E01P1断割断面/SB-E01P2断割断面/SB-E01P7断割断面/ SB-E01P8断割断面/SB-E01P9断割断面/SB-E01P11断割断面/

SB-E01P12断割断面/SB-E01P13断割断面/SB-E01P14断割断面/

SB-E01P15断割断面/SB-E02P2断割断面/SB-E02P4断割断面/ SB-E03P 2 断割断面/SB-E03P3断割断面

写真図版55 東区 遺構 SB-E04/SB-E05/SB-E06

写真図版56 東区 遺構 SB-E07 · 08/SB-E07 · 08/SB-E07P1断割断面

写真図版57 東区 遺構 SB-E07P2断割断面/SB-E07P3断割断面/SB-E07P4断割断面/SB-E07P5

断割断面/SB-E07P6断割断面/SB-E07P7断割断面/SB-E07P9断割断面/

SB-E07P8断割断面

写真図版58 東区 遺構 SB-E07P10断割断面/SB-E07P11断割断面/SB-E07P12断割断面/

SB-E08P1断割断面/SB-E08P2断割断面/SB-E08P3断割断面/

SB-E08P5断割断面/SB-E08P6断割断面/

写真図版59 東区 遺構 SB-E08P8断割断面/SB-E08P9断割断面/SB-E09·10/P-E01土器出土状

況/SX-E01/SX-E01土層断面

写真図版60 東区 遺構 SX-E02/SX-E02土層断面/SK-E05/SK-E05土層断面

写真図版61 東区 遺構 SD-E01/SD-E01/SD-E01土器出土状況/SD-E01土層断面(A-A')

写真図版62 東区 遺構 SD-E01土層断面 (B-B') /SV-E01埋土土層断面 (A-A') /

SV-E01埋土土層断面(B-B')

写真図版63 西区 出土遺物 遺構・包含層1

写真図版64 西区 出土遺物 包含層 2

写真図版65 中区 出土遺物 遺構1

写真図版66 中区 出土遺物 遺構2

写真図版67 中区 出土遺物 遺構 3

写真図版68 中区 出土遺物 遺構 4

写真図版69 中区 出土遺物 遺構 5

写真図版70 中区 出土遺物 遺構 6

写真図版71 中区 出土遺物 遺構7

写真図版72 中区 出土遺物 遺構 8

写真図版73 中区 出土遺物 遺構 9

写真図版74 中区 出土遺物 遺構10

写真図版75 中区 出土遺物 遺構11

写真図版76 中区 出土遺物 遺構12

写真図版77 中区 出土遺物 遺構13

写真図版78 中区 出土遺物 遺構14・包含層1

写真図版79 中区 出土遺物 包含層 2

写真図版80 中区 出土遺物 包含層 3

写真図版81 中区 出土遺物 包含層 4

写真図版82 中区 出土遺物 包含層 5

写真図版83 東区 出土遺物 遺構1

写真図版84 東区 出土遺物 遺構2

写真図版85 東区 出土遺物 遺構 3

写真図版86 東区 出土遺物 遺構 4

写真図版87 東区 出土遺物 遺構 5

写真図版88 東区 出土遺物 遺構6・包含層1

写真図版89 東区 出土遺物 遺構7

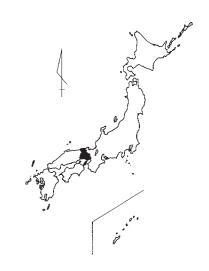
写真図版90 東区 出土遺物 遺構8・包含層2

写真図版91 東区 出土遺物 包含層 3

写真図版92 東区 出土遺物 包含層 4

写真図版93 東区 出土遺物 包含層 5

写真図版94 東区 出土遺物 包含層 6





第1図 遺跡の位置

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

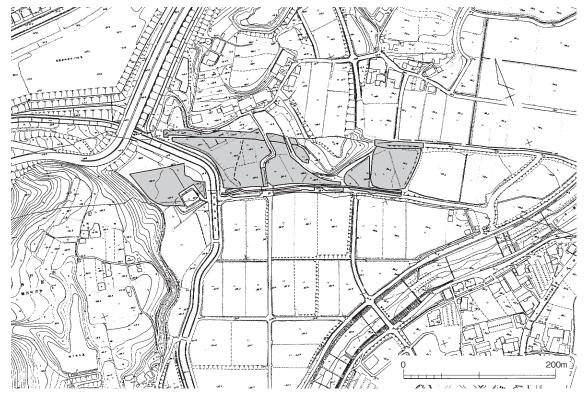
発掘調査の起因となった神戸西バイパスは、明石海峡大橋から西方面へのアクセス道路として国土交通省(平成13年1月6日以前は建設省)近畿地方整備局兵庫国道事務所によって事業が進められている。この事業への埋蔵文化財の対応は、平成4年3月に事業地内の分布調査を実施したことに始まる。また、本発掘調査は、神戸市西区伊川谷町域に所在する長坂遺跡、上脇遺跡、表山遺跡、池ノ内群集墳について実施し、その成果を調査報告書にまとめている。伊川谷町域を経て阪神高速道路北神戸線と合流する永井谷ジャンクションまでの区間は平成10年4月に開通し、国道2号の混雑緩和に寄与している。

永井谷ジャンクション以西の計画路線のうち、国道175号と交差する西区平野町までの区間(第3工区)について事業が具体化した。この区間にあたる神戸市西区櫨谷町域については、分布調査の成果や神戸市教育委員会の行った周辺での発掘調査成果に基づいて埋蔵文化財の実態を確認する確認調査を行った。その結果周知の遺跡である西神ニュータウンNo62(以下西神N.T.No62と略す)遺跡に隣接して広い範囲に埋蔵文化財が所在することが明らかとなった。以後事業の進捗に伴い国土交通省(建設省)の依頼により櫨谷町域に所在する栃木遺跡と併行して本報告の西神N.T.No62遺跡の本発掘調査を実施することとなった。

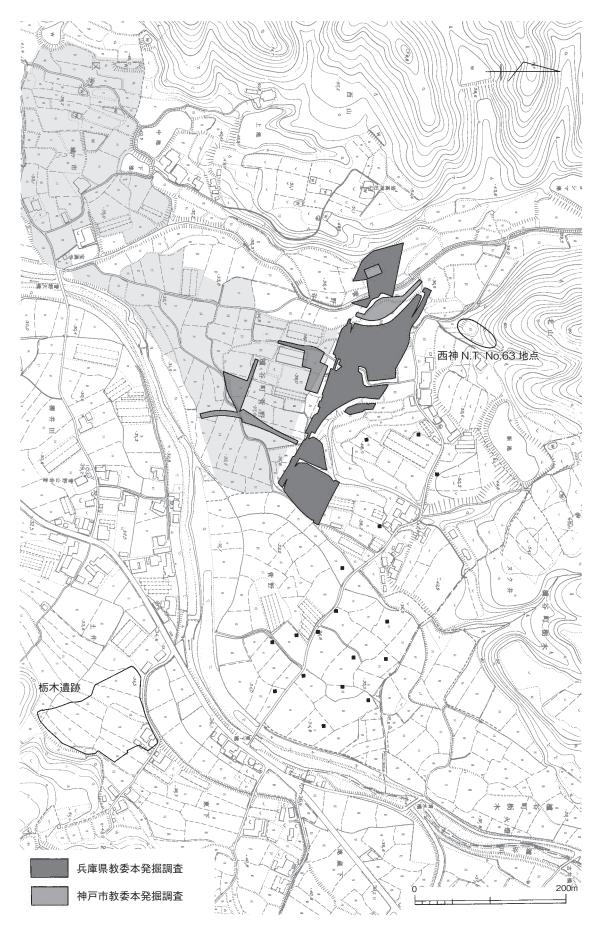
なお栃木遺跡については既に本発掘調査および遺物整理作業も終了し、調査報告書が刊行されている。

第2節 西神ニュータウンNo.62遺跡

西神N.T.No62遺跡は神戸市西区櫨谷町菅野に所在する周知の遺跡である。



第2図 調査区の位置



第3図 遺跡と調査区の位置

発見の契機は、西神ニュータウン造成に伴い1970年に行われた分布調査である。この時丘陵の各所で古墳や遺物散布地が確認されたが、No62地点もそのうちの1地点であり、櫨谷町菅野に所在する岩高神社付近(本報告の西区の西側丘陵上)で須恵器の散布が確認されたものである。

発掘調査としては、昭和56年度以降、神戸市教育委員会が継続して行っている。

昭和56~58年度には菅野谷川河川改修に伴い、本報告の西区および中区の間にあたる現菅野谷川および側道部分を対象に本発掘調査が行われた。昭和56年度調査区は本報告の西区と重複する。

平成4年度に菅野地区の土地改良総合整備事業(ほ場整備事業)に伴い試掘調査が行われ、遺跡の広がりなどが把握された。その成果に基づいて平成7・8年度に本発掘調査を行っている。平成7年度には本報告の東区西端から南へのび、櫨谷川までの間市道菅野栃木線(第6次調査)と、第6次調査区から西側の切り土部分、水路部分(第5次調査)を対象とした本発掘調査を行った。

平成8年度には本報告の中区中央付近に南接する箇所を対象とした本発掘調査を行っている。

昭和56年度 「第62地点A遺跡」『昭和56年度 神戸市埋蔵文化財年報』1983年

昭和57年度 「西神第62地点B遺跡」『昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報』1985年

昭和58年度 「西神第62 B 地点遺跡」『昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報』1986年

平成7年度 第5次調査 「西神ニュータウン第62地点遺跡第5次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化 財年報』1998年

第6次調査 「西神ニュータウン第62地点遺跡第6次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化 財度年報』1998年

平成8年度 第7次調査 「西神ニュータウン内第62地点遺跡」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』 1999年

第3節 神戸西バイパスに伴う調査の経過

1. 分布調査

調査番号 910154

調査期間 平成4年3月17日~19日

調查担当者 大平 茂·久保弘幸・鐵 英記・柏原正民・所崎明雄

概要

神戸西バイパス事業地のうち、明石市大久保町から神戸市西区伊川谷町長坂までの区間約8kmを対象とした。本報告に該当する箇所は、周知の遺跡の範囲に隣接するほ場整備未実施の水田で、古墳時代の 須恵器・土師器片を採集している。

2. 発掘調査の経過

神戸西バイパス建設に伴う発掘調査は平成8年度に行った本発掘調査に始まる。本発掘調査が先行したのは南接地で行われたは場整備事業に伴う確認調査および本発掘調査により遺跡の広がりが事業対象地も含まれることが確実と考えられたためである。

①確認調査



第4図 確認調査トレンチの位置

西神N.T.No62遺跡を対象とした有無・範囲を確認する調査は、事業の進捗に伴い平成8年度から12年度まで4次にわたって行った。

平成8年度

調査番号 960443

調査期間 平成9年2月4日

調査担当者 西口和彦

調査面積 24㎡

概要

バイパス建設に先行して側道工事を行うが、それに伴う用排水路敷設箇所に 2×2 mのグリッドを 6 箇所設定し調査した。対象地は櫨谷川西岸であり、いずれのグリッドも耕作土・表土層以下は砂層、あるいはグライ化した粘土層となり櫨谷川の旧氾濫原であることが判明した。遺構・遺物は全く検出できなかった。

平成9年度

調査番号 970425

調査期間 平成9年12月2日~3日

調査担当者 山下史朗・守岡克倫

調査面積 53㎡

概要

仮側道移設範囲(a地点)、神戸市道菅野栃木線(b地点)との交差範囲について先行して工事することから遺跡の範囲を把握することとなった。

a地点 トレンチ2本を設定した。いずれのトレンチでも土坑状の落ち込みを検出し、埋土から古墳時代の土器が出土した。この範囲については本発掘調査に移行した。(平成10年度調査A地区)

b地点 トレンチ3本を設定した。扇状地の開析谷にあたる箇所では厚い遺物包含層を検出し、奈良時代の土器が出土した。段丘面にあたる箇所では柱穴を検出した。この範囲については本発掘調査に移行した。(平成10年度調査B地区)丘陵突端部および裾部では遺構・遺物は検出できなかった。

平成10年度

調査番号 980216

調査期間 平成11年1月5日~3日25日

調査担当者 岸本一宏・松野健児・小田 賢

調査面積 458㎡

概要

本発掘調査と平行し、菅野谷川から櫨谷川の間の本線部分を対象にトレンチ45本を設定した。櫨谷川旧氾濫原の範囲と丘陵頂部付近を除く全域で遺構・遺物を検出した。検出した遺構は柱穴、溝、土坑などであり、出土した遺物から古墳時代、奈良時代、中世に属するものである。また谷地形部分には厚い遺物包含層があり、奈良時代などの土器のほか、鉄滓が出土している。遺構の広がる範囲については、神戸市教育委員会による周辺の調査成果とも合致している。この範囲については平成12・13年度に本発掘調査に移行した。

平成12年度

調査番号 2000249

調査期間 平成13年1月5日~3日2日

調査担当者 山上雅弘・柏原正民・宮田耕平

調査面積 140m²

概要

菅野谷川以西の事業が具体化したことから、丘陵部(No18・19地点)とともに菅野谷川西岸の沖積地(No 17地点)を対象にトレンチ14本を設定した。対象地の東接箇所では神戸市教育委員会の調査により遺構が確認されている。対象地南部に設定したトレンチ(T17、19~24)では基盤層上で柱穴や落ち込み状の遺構を検出したほか、基盤層の上層で遺物の包含が認められた。この成果は周辺の調査成果とも合致している。

北西部に設定したトレンチでは基盤層が確認できず、遺構・遺物も検出できなった。以上の結果により対象範囲の南東部について本発掘調査(平成12年度:調査番号2001002・1区)に移行した。

なお丘陵部 (No.18・19地点) は、西神N.T.No.62遺跡発見の契機となった遺物採集地点の西側に隣接する山林が対象地であったが、遺構・遺物は検出されなかった。

②本発掘調査

本発掘調査は平成8年度に側道の側溝敷設に伴い実施したことを最初とし、その後確認調査の成果に基づき平成10年度に換地部分および市道との交差部分、12年度に側道部分、平成13年度に本線部分を対象として発掘調査を行った。

平成8年度調査は性格上制約の多い調査であり掘削深度も原則として工事で影響のある範囲にとどめている。しかし結果的に櫨谷川から菅野谷川にはさまれる段丘および低地を東西に横断する形で調査することとなり、地形と遺構の有無の関係について概観できる成果を得ることができた。その成果をここで記しておく。

平成8年度

調査番号 960029

調査期間 平成8年5月7日~15日

調査面積 340㎡

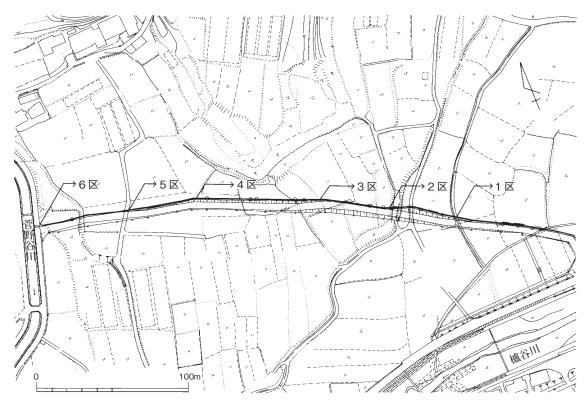
調査担当者 岡田章一・山下史朗・菱田淳子・多賀茂治・水嶋正稔

調査の結果

側道建設に伴う側溝敷設が計画された。当該地に隣接してほ場整備などの調査が実施され、一帯に弥 生時代から中世に至る遺跡の存在が確認されていることから、敷設箇所の本発掘調査を行った。

調査区の幅は1mであり、延長は340mである。

地形の状況により東から西へ便宜的に $1\sim6$ 区と地区割りし、地区ごとに概要を述べる。(第 5 図参照) 検出した遺構については、全体図(図版 $4\cdot32$)にはめ込んでいる。



第5図 平成8年度調査区

$1 \boxtimes$

現表土の下に水田土壌層が2面程度あり、以下砂礫層となる。近世以降の溝状落ち込みを検出したほか、水田土壌層より18世紀代の肥前系染付磁器碗が出土している。

$2 \, \mathbb{Z}$

現耕作土直下に水田土壌層が1面あり、以下は旧河道内の堆積となる。この旧河道は幅32mを測り、西側は段丘となり現地表面での比高差は4.4mである。また東側の水田も1段高くなっており北から南へ緩く弧を描く水田にその痕跡を残している。旧河道埋土内で曲物底板(W1)が出土しているほかは時期を示す遺物は出土していない。

3区

平成10年度調査区のB地区と重複する。現水田面下に旧水田面が1面あり、少量の須恵器・土師器片を包含する遺物包含層をはさんで地山となる。東端で時期不明の柱穴1基を検出した。西側は中世以降の水田造成の影響を受ける。時期不明の溝を検出している。

4区

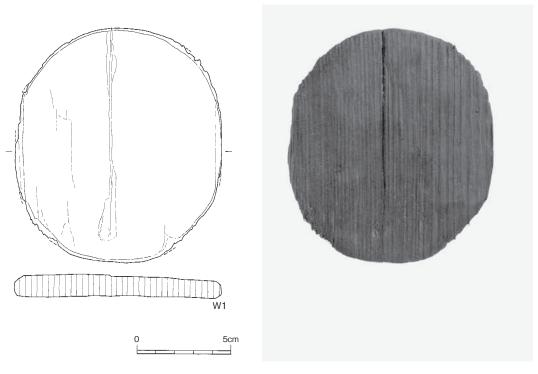
現表土の下に水田土壌層が2面程度あり、以下遺物を包含する砂礫層となる。調査では地山まで掘削は達していない。平成11年度調査区のII区南半から平成10年度調査区のB地区南西で検出した谷地形にあたる。

5区

現水田面直下で地山となる。東寄りでは地山直上に遺物包含層が存在する。柱穴18基と時期不明の溝を検出した。柱穴の一部は平成12年度調査区Ⅱ区検出の掘立柱建物跡を構成するものである。

6区

平成10年度調査区A地区と重複する。中央付近を境に約2mの比高差がある。東半部は現水田面直下



第6図 出土木製品

で地山となる。水田造成によるためか遺構は検出されなかった。西半部も現水田面直下で地山となるが、 西寄りでは地山直上に少量の土師器を包含する層があり、断面観察で一部柱穴はこの層の上面から切り 込むものがあることを確認した。

出土遺物 (第6図)

W1は2区旧河道から出土した曲物底板である。径11.2~12.5cmの楕円形を呈し、厚さ1.0cmを測る。

平成10年度

調査番号 980215

調査期間 平成11年1月5日~3月25日

調査面積 2,007㎡

調査担当者 岸本一宏・松野健児・小田 賢

概要

平成9年度に実施した確認調査結果に基づき、農地境界の換地部分(A地区)と、市道菅野栃木線との交差部(B地区)を対象とし、菅野谷川から櫨谷川までの本線部分の確認調査(調査番号980216)と平行して調査した。なお調査区は平成8年度調査区の6区がA地区と、3地区B地区と一部が重複している。

航空写真測量は株式会社サンヨーに委託し、平成11年3月2日に実施した。

平成12年度

調査番号 2000248

調査期間 平成13年1月5日~3月23日

調査面積 3,220㎡

調査担当者 山上雅弘・柏原正民・宮田耕平

概要

平成10年度に実施した確認調査結果に基づき、バイパスに付帯する側道部分の調査を行った。菅野谷川東側を対象とし、本線の北側(Ⅱ区)と南側(Ⅲ区)、平成10年度調査B地区の北側(Ⅲ区)の3地区に分かれ、さらに通路確保などの理由から各地区は細分化される。Ⅲ区については、一部遺構面を上下2面で調査している。調査は菅野谷川西側の確認調査と平行して行った。なお調査区は平成8年度調査区の4・5区がⅢ区と一部が重複している。

航空写真測量は富士測量株式会社に委託し、平成13年2月9日と3月8日の2回実施した。

平成13年度

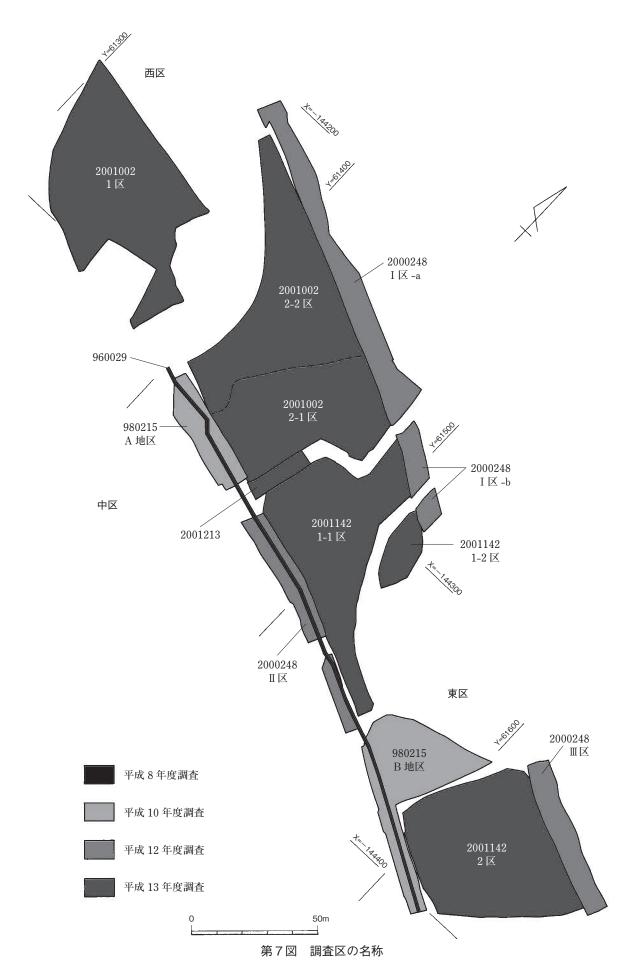
第1次調査

調査番号 2001002

調査期間 平成13年6月18日~10月20日

調査面積 7.928m²

調査担当者 山上雅弘・長濱誠司・柏原正民



概要

道路本線部分の調査であり、菅野谷川の東西を対象とした。西側を1区、東側を2区とし、2区は残土処理の都合から2分割して調査し、東側を2-1区、西側を2-2区とした。1区には神戸市教育委員会が昭和56年度に調査した調査区が含まれる。

航空写真測量は富士測量株式会社に委託し、平成13年8月7日、9月19日、10月5日の3回実施した。 8月11日には地元住民を対象とした説明会を実施し、遺構や出土遺物の一部を公開した。

第2次調査

調査番号 2001142

調査期間 平成13年10月22日~平成14年2月15日

調査面積 5,798㎡

調査担当者 山上雅弘・長濱誠司・柏原正民

概要

上記調査の 2 区東側を対象とし、平成10年度 B地区まで(1 区)と、B地区東側(2 区)の 2地区について栃木遺跡と平行して調査を行った。 1 区は水路保護のため 2 分割して調査し、丘陵裾部を 1-1 区、斜面部を 1-2 区とした。

航空写真測量は日本テクノ株式会社に委託し、平成13年12月17日と平成14年2月8日の2回実施した。

第3次調査

調査番号 2001213

調査期間 平成14年1月28日~3月15日

調查面積 148㎡

調査担当者 中川 渉・日置 智

概要

上記2次の調査区間に残った里道部分を対象とし、栃木遺跡と平行して調査した。調査区の平面実測 は調査員および調査補助員が1/20縮尺で行った。

第4節 遺物整理作業の経過と体制

遺物整理作業は、本発掘調査時に現地にて出土遺物の水洗などを行ったことから始まるが、本格的な作業は、平成21年度に兵庫県立考古博物館および魚住分館に搬入して開始した。

なお、作業実施機関は、平成21~23年度は兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部であったが、平成24年4月より組織改変により公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部となる。

平成21年度

県立考古博物館魚住分館にて水洗・ネーミングを行った。終了後に県立考古博物館に遺物を搬入し、 接合・補強作業を行った。また出土金属器の保存処理を県立考古博物館にて行った。

整理保存課

事務担当 篠宮 正

工程管理担当 岡田章一・菱田淳子

保存処理担当 岡本一秀

非常勤嘱託員 家光和子・小野潤子・小林陽子

長濱重美・藤井光代・前田恵利子・有馬利耶子

平成22年度

出土木製品の保存処理を行い、前年度接合・補強作業を行った土器および保存処理を終えた木製品の 実測を行った。

遺物包含層採取土壌について放射性炭素年代測定(AMS測定)を株式会社加速器分析研究所に委託 して行った。

整理保存課

事務担当 篠宮 正

工程管理担当 岡田章一・山本 誠

保存処理担当 岡本一秀

非常勤嘱託員 増田麻子・栗原美緒

吉田優子・嶺岡美見・吉村あけみ・佐々木愛

今村直子・小林俊子・渡辺二三代・村上令子

平成23年度

出土石器と金属器の実測を行った。

土器の復元作業を行い、作業を終えた出土遺物の写真撮影を行った。写真撮影は㈱地域文化財研究所に委託した。

遺構および遺物図版の図面補正からトレースの作業を行った。

整理保存課

事務担当 篠宮 正

工程管理担当 山本 誠・深江英憲

保存処理担当 岡本一秀

非常勤嘱託員等 増田麻子・加藤裕美

荻野麻衣・藤尾裕子・嶺岡美見・吉村あけみ・佐々木愛・又江立子・宮野正子

平成24年度

出土品整理作業の最終年度であり、レイアウトから刊行までの諸作業を行った。

整理保存課

工程管理担当 篠宮 正・深江英憲

非常勤嘱託員 增田麻子

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

西神N.T.No62遺跡は神戸市西区に所在する。神戸市は県南東部に所在する兵庫県庁の所在地である。 人口は約154万人を数え県人口の約27%を占める(平成24年現在)。約552kmある市域は9つの区に分けられる。市域は背骨のように六甲山地が北東から南西方向に延び、南は大阪湾に面する。市域の大部分は旧攝津国に属するが六甲山地の西側にあたる垂水区と遺跡の所在する西区は旧播磨国明石郡に属している。神戸市街地とは六甲山地で隔てられ、長らく明石市域と結びつきの強い地域であった。

西区の区域は明石川水系によって形成された明石平野とその周辺の段丘および丘陵から構成される。面積は約137kmあり、市域の約1/4を占める。そのうち山林・原野が約27%、農地が約40%、宅地が約26%である。緑が豊かな区域では長らく稲作を中心とした農業が主産業であったが、近年は都市近郊農業として園芸や畜産も盛んであり観光農園も経営されている。一方、1960年代より宅地化も進み、1970年代以降丘陵部を中心に西神ニュータウン、西神南ニュータウンなどの新都市建設、平野部での市街地整備も始まり宅地化が進んでいる。また地下鉄や道路整備により神戸市街地へのアクセスも良好となった。多くの開発事業により人口増加が著しいことから1982年に垂水区西半部の7町が分区して西区となった。人口は分区当初9区中最小の約9万4千人だったが、現在は最大の約24万人に増加している。新都市建設に併せて工業団地も造成され、9区の中で工業事業所数は2位、工業従業員数は1位である。このように山林や農地が減少し、宅地や工場が増加する傾向にあるものの、まだ緑が多く残る地域である。西区の主要河川である明石川は六甲山地を源とし、明石市域において播磨灘に流れ込む21km(法定河川延長)の2級河川であり、流域の約6割は山地・丘陵である。途中平野町付近で六甲山地と平行する方向の北東・南西方向から南へ流れを変える。主要な支流である櫨谷川、伊川も本流と平行し、櫨谷川は玉津町出合付近で、伊川は明石市との市境付近で本流と合流する。

第2節 歷史的環境

西神N.T.No62地点遺跡の所在する明石川流域は各時期の遺跡が高密度に分布する地域である。これは 当該地域が新都市建設などの大規模開発に伴って実施された発掘調査による成果が大きい。

旧石器・縄文時代

更新世段丘縁辺部では旧石器〜縄文時代の遺物散布地が知られ、ナイフ形石器などが採集されている。 集落の形成が確認されるのは縄文時代後期以降である。伊川流域では長坂遺跡(61)で竪穴住居が検出 されている。明石川流域では玉津田中遺跡(26)、印路遺跡(51)で土坑などが検出される。大畑遺跡(29)、 西戸田遺跡(50)などでも後期〜晩期の遺物が出土している。

弥生時代

吉田遺跡からは明石川流域で最古の土器が出土しているが遺構は検出されていない。これにやや遅れて玉津田中遺跡(26)、新方遺跡が出現し、弥生時代を通じて集落が営まれる。玉津田中遺跡では前期の方形周溝墓などが検出されている。

中期に入ると遺跡数は急増する。この時期の遺跡は新方遺跡、今津遺跡、居住小山遺跡などがあり、 新方遺跡では玉作り関連の遺物が出土する。

中期後半に入ると遺跡は丘陵上に営まれる特徴がある。西神N.T.No38(42)・50(38)・65(19)遺跡、

伊川流域の池上口ノ池遺跡、頭高山遺跡など標高100mを超える丘陵上に集落が立地し、尾根上や斜面に住居などを築く、いわゆる高地性集落である。西神N.T.No.50 (38) は竪穴住居20棟、段状遺構などが検出され、明石川流域最大の高地性集落である。西神N.T.No.65遺跡(19)も中~後期の高地性集落であり、溝内より石製銅鐸鋳型が出土している。青谷遺跡(11) は丘陵上に立地し、遺跡の実態は不明であるが、土器多数のほか小型倣製鏡も採集されている。またこの時期の墳墓も丘陵上に築造される。西神N.T.No.40遺跡、印路台状墓(52) では方形台状墓、西神N.T.No.42 (41)・47 (39)・59遺跡では木棺墓や土壙墓が検出されている。中期末から後期前半も丘陵上に集落が立地する。この時期の集落として城が谷遺跡(12)、表山遺跡(63) がある。表山遺跡は環濠をもち、吉備系土器や倣製鏡が出土している。

後期に入ると集落は再び低地に営まれるようになる。この時期の集落は、玉津田中遺跡(26)、新方遺跡のほかに吉田南遺跡、池上北遺跡(59)、大畑遺跡(29)などが新たに出現する。

古墳時代

明石側流域最古の古墳は天王山4・5号墳(56)であり、これに続いて最古の前方後円墳となる白水瓢塚古墳(57)が築造される。このほかに前期古墳として西神N.TNo.44・45遺跡、堅田1号墳(46)、印路古墳群(52)などがあり、いずれも丘陵上に築造された方墳という点で共通している。吉田王塚古墳(55)は明石川西岸に所在する流域で最大規模の古墳である。流域では白水瓢塚古墳に続く前方後円墳であり、被葬者は明石川流域を統合した豪族と想定される。

明石川流域では約200基の後期古墳が知られているが、その多くは木棺直葬墳である。また遺跡の調査では消滅した古墳の痕跡が検出されることも多く、さらに多くの古墳が存在したものと思われる。

出合遺跡(54)は5~6世紀の集落が検出され、隣接して須恵器窯跡が検出されている。集落背後の 丘陵上には帆立貝式古墳である亀塚古墳など複数の古墳の痕跡が検出されている。

古代

明石川流域はこの時期、旧播磨国明石郡に属する。『播磨国風土記』には明石郡の条を欠き文献から郡内の状況を探ることはできない。郡内には古代山陽道が東西に通過していたが、須磨から明石に至るルートは海岸沿いに進むもの、峠越えで伊川流域を進むものの2説があり、明石駅家は大寺遺跡付近に想定される。吉田南遺跡は大型掘立柱建物や官衙的な遺物が検出されていることから、明石郡衙の有力な推定地である。出合遺跡(54)でも大型掘立柱建物が検出され、吉田南遺跡との関連が指摘されている。中世

明石平野には条里制地割が明瞭に残存していた。この地割がいつ造成されたものか明らかではないが、中世の集落の多くはこの地割の規制を受けている。玉津田中遺跡(26)では地割に沿う建物群を径移出している。また同遺跡辻ケ内地区では周囲を堀で囲んだ1町以上の屋敷地を検出し、堀の内部には瓦葺き建物と園地がある。神出で須恵器の生産・流通に関わった有力者の居館あるいは寺院と想定されている。二ツ屋遺跡(21)でも池を伴う礎石建物などが検出される。西神N.TNo62遺跡と櫨谷川を挟んで立地する栃木遺跡(2)では溝によって方形に区画された地割が検出され、その中に複数の屋敷地がある。集落は12世紀後半に土地開発されるが、13世紀前半には廃絶する。

この時期明石川流域の神出町付近は須恵器の一大生産地であり、多数の窯跡が検出される。その製品は広域に流通し、そのうち瓦は京の寺院や鳥羽離宮に供給されている。神出の周辺地域でも繁田古窯址(40)などの須恵器窯が確認されている。

城館は、伊川流域では脇村構居(上脇遺跡)(62)、太山寺城など、櫨谷川流域では端谷城(16)、池谷城(15)

などがあり周辺地域と比較しても集中している。1580年の三木合戦の後これら多くの城館は廃絶し、明石川流域の中世は終焉する。その後明石川河口付近に船上城、1616年に明石城が築城される。

寺院は天台宗寺院として伊川流域に太山寺、櫨谷川流域に如意寺があり、12世紀以降伽藍が整備される。如意寺周辺では中近世の塔頭址(13)などの調査が行われる。栃木遺跡(2)も如意寺に関連する集落と考えられる。同じ天台宗寺院である日輪寺(20)は調査で区画溝が検出される。頭高山遺跡では大谷寺跡と推定される遺構が検出される。



第8図 周辺の遺跡

1. 西神 N.T. No. 62 遺跡 2. 栃木遺跡 3. 櫨谷中遺跡 4. 長谷遺跡 5. 池谷遺跡 6. 西区No. 255 遺跡 7. 川重裏山古墳 8. 菅野遺跡 9. 松本群集墳 10. 西区No. 190 遺跡 11. 青谷遺跡 12. 城が谷遺跡 13. 如意寺塔頭址 14. 如意寺裏山遺跡 15. 池谷城跡 16. 端谷城跡 17. 西神 N.T. No. 84 遺跡 18. 西神 N.T. No. 66・67 遺跡 19. 西神 N.T. No. 65 遺跡 20. 日輪寺遺跡 21. 二ツ屋遺跡 22. 二ツ屋東遺跡 23. 水谷遺跡 24. 丸塚遺跡 25. 居住遺跡 26. 玉津田中遺跡 27. 芝崎遺跡 28. 福中城跡 29. 大畑遺跡 30. 繁田遺跡 31. 堅田遺跡 32. 下村古墳群 33. 春日神社西遺跡 34. 西神 N.T. No. 56~60 遺跡 35. 西神 N.T. No. 55 遺跡 36. 春日神社裏山群集墳 37. 西神 N.T. No. 48 遺跡 38. 西神 N.T. No. 50 遺跡 39. 西神 N.T. No. 47 遺跡 40. 繁田古窯址 41. 西神 N.T. No. 41・42 遺跡 42. 西神 N.T. No. 38・39 遺跡 43. 西神 N.T. No. 28・29 遺跡 44. 西神 N.T. No. 34・35 遺跡 45. 西神 N.T. No. 30~33 遺跡 46. 堅田神社古墳群 47. 黒田遺跡 48. 常本遺跡 49. 少年保養所裏山群集墳 50. 西戸田遺跡 51. 印路遺跡 52. 印路群集墳 53. 中村群集墳 54. 出合遺跡 55. 吉田王塚古墳 56. 天王山古墳群 57. 白水瓢塚古墳 58. 北別府遺跡 59. 池上北遺跡 60. 池上遺跡 61. 長坂遺跡 62. 上脇遺跡 63. 表山遺跡・池ノ内群集墳 64. 柏ケ谷群集墳 65. 岡遺跡

第3章 調査区の概要

第1節 調査区の概況

櫨谷川流域は段丘地形が発達し、本遺跡もまた巨視的には丘陵を背後としたこの段丘上に立地している。さらに子細に調査区付近の地形を観察すると、調査対象範囲は菅野谷川を境界としてその西岸から丘陵までと、東岸から櫨谷川までに大別される。

櫨谷川から菅野谷川までの調査対象範囲は、事業の進捗に対応してのべ4年次、12地区に細分して調査を行っている。しかしこれらの調査区をつなぎ合わせると東西約340m、南北約80mを測る東西に長い一連の調査区となる。調査対象範囲の現況(調査開始前)は、一部宅地があるものの、大部分が水田(休耕地を含む)である。調査区北側は丘陵が立ち上がるが、その裾から斜面にかけては現在集落が形成されている。また丘陵斜面も耕地化が進み棚田状に地形が改変されている。

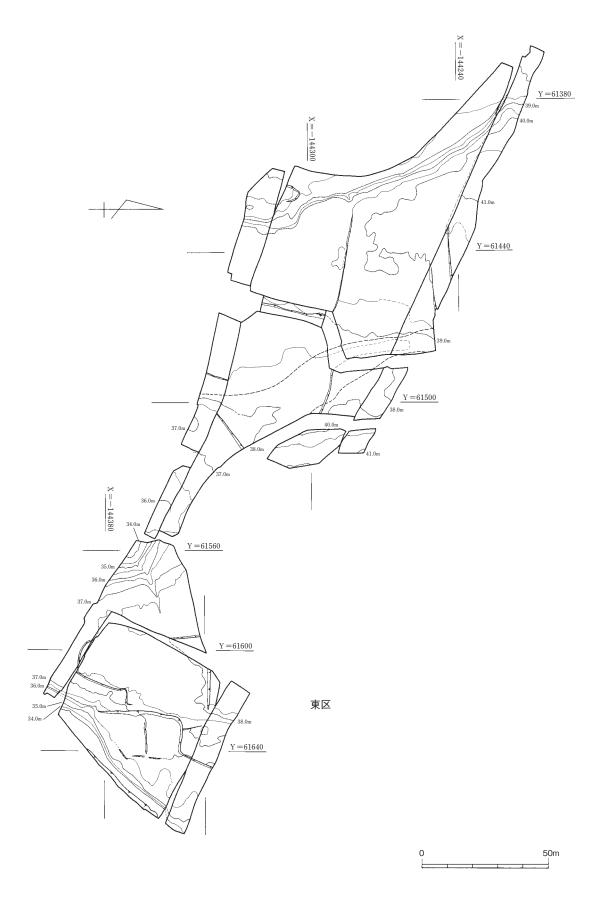
この範囲の地形を観察すると、菅野谷川左岸の下位の段丘から段丘崖を経て上位の段丘面となっている。上下の段丘面の比高差は約2mある。下位の段丘面は現状では菅野谷川と段丘崖に挟まれた狭いものだが、これは河川改修により河川を東側に付け替えたためである。上位の段丘面は丘陵から南北方向にのび、段丘上面は周囲に矩形の水田が多い中で比較的広い水田になっている。付近の標高は40m前後を測るが、中央付近に段差があり、南北方向では調査範囲の両端で1m弱の比高差があり、南へ下降している。その東側は南北方向に丘陵が張り出しているが、谷地形が丘陵裾に沿って北西から南東方向にのび、櫨谷川のある南側へ向かって下降している。

調査対象範囲に北側から張り出した丘陵は、先端部の標高が約45mを測る。調査対象範囲は丘陵によって東西に隔てられるが、その東半部は丘陵からの舌状の張り出しが台地状を呈し、この付近の標高は約38mを測る。台地状となる部分は比較的広い水田となっている。約1.8mの段差を経て櫨谷川の段丘面となる。櫨谷川に面した段丘崖は約4mの段差となり直下に櫨谷川旧河道が南北方向にのびている。旧河道は調査時でも凹地としてその痕跡を認めることができた。既調査の成果などからこの段丘崖が遺跡の東端になると判断している。

第2節 調査区の地区割り

調査対象範囲は前述のとおり菅野谷川と中央付近にのびる谷により隔てられる。調査により検出した 遺構群もまた3分割され、これらを跨いで連続するものはない。そこで本報告書では調査対象範囲を3 地区に大別しすることとした。地区割りと該当する調査・調査区は下記のとおりであり、以下この地区 ごとに記述していくこととする。

- 西区 丘陵から菅野谷川西岸まで(平成13年度第1次調査1区)
- 中区 菅野谷川東岸から谷部まで(平成8年度4~6区、平成10年度A地区、平成12年度Ⅰ・Ⅱ区、 13年度第1次調査2区、第2次調査1区、3次調査区)
- 東区 谷部から櫨谷川段丘崖まで(平成8年度3区、平成10年度B地区、平成12年度Ⅲ区、13年度第 2次調査2区)



第9図 中・東区の地形

第4章 西区の調査

第1節 概 要

本調査区は平成12年度に確認調査、平成13年度に本発掘調査を実施している。中・東区とは菅野谷川により隔てられている。当初の西神N.T.No62遺跡は本調査区西側の丘陵上であり、その地点の標高は約51m、本調査区との比高差は約13mを測る。この地点と本調査区の間は丘陵斜面であり、連続する遺構は存在しない。現在の菅野谷川は河川改修により当初の流路を東側に付け替えたもので、旧河道は本調査区内にあったが、埋め立てられ、その際に一帯の地形も改変されている。なお第12図に示した地形のうち西区付近は改変後の状況を示し、当初の地形の状況を示してはいない。

本地区の調査では調査区東半部で昭和57年以前の菅野谷川旧河道および氾濫原を検出した。また菅野谷川河川改修に伴い神戸市教委が昭和56年度に行った西神N.T.No.62A遺跡の調査区が本調査区の中央付近に位置する。今回の調査では昭和56年度調査区内に砂を入れ現状保存されていた遺構を再検出した。

また東側の菅野谷川現河道にあたる箇所は河川改修に伴い神戸市教委が昭和57・58年度に調査を実施しており、その調査区は本調査区に隣接する。

調査対象範囲は1.5m程度の盛土がなされ、旧地形は損なわれている。盛土以下の堆積は、旧耕作土・床土、茶褐色シルト質細砂、黄褐色シルトである。茶褐色シルト質細砂層は少量ながら須恵器・土師器の包含が確認できた。黄褐色シルト層は基盤層であり、中区以東と同質である。この上面が遺構検出面であるのも中区以東の状況と共通する。基盤層は緩やかに菅野谷川のある北側へ落ち込む。また南端部も南側へ落ち込む傾向にあるが、調査は中世の遺構を検出した面で止めている。

調査区北東部には昭和57~58年に埋め立てられた菅野谷川の旧河道および氾濫原があり、遺構の広がりは旧河道の西岸から丘陵裾部まで、幅30~40m程度の狭い範囲に限定される。遺構面は川の沖積作用で細かい起伏があるものの北西隅付近の標高37.5m前後をピークとして南東方向けて緩やかに傾斜している。また調査区中央付近の西端では丘陵の立ち上がりを検出した。

遺構面は部分的に上下2面存在し、SD-W02付近では下面でSD-W02と同方向にのびる溝と焼土面を 検出しているが、その他に遺構は検出していない。

第2節 遺 構

1. 竪穴住居跡(写真図版9)

昭和56年度に検出・調査された弥生時代中期後半の円形住居跡である。 1 棟のみ所在し、今回の調査ではその周辺で新規に検出したものはない。この竪穴住居については、『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』(1983年 神戸市教育委員会発行)に報告されている。

2. 柱穴

SD-W03沿いに集中する傾向にあり、他の箇所ではほとんど検出していない。また掘立柱建物も復元 しえない。昭和56年度調査区内では溝肩に並んで検出されたが、本調査区内では一部溝肩で検出したも のがあるものの列として把握はできない。出土遺物は本調査区検出のものに限れば中世が主体である。

3. 土器埋納遺構

SX-W01 (図版2 写真図版8)

検出状況 竪穴住居の南側で検出した。調査区のセクション内にあり、一部が掘削により損なわれ、当 初は断面にて検出した。SK-W01と重複し、本遺構が切られている。

形状・規模 一部を欠くが、本来は平面が楕円形を呈し、規模は1.0m×1 m以上である。深さは0.7m であり断面はすり鉢状を呈する。SK-W01と重複し本遺構が切られている。

埋土 掘方内に褐細砂を入れた後に土器を据え、にぶい黄褐細砂により安定させる。

土器 中央付近に弥生土器壺頸部 (5) を直立状態に据える。土器は上下端を打ち欠くが、下端の大きく欠損した箇所には拳大の円礫をはめ込み安定を図っている。また上端の開口する部分にも円礫が載せられている。検出時には内部に土が充満しており、この土を持ち帰り洗浄したが内容物は検出できなかった。ただし礫で開口部を覆うことなどから内容物に対する意識がうかがえ、本遺構の性格は土器棺墓などであることを想定する。

4. 土坑

SK-W01 (図版2)

検出状況 SX-W01と重複し、本遺構が切っている。

形状・規模 0.5m×0.8m程度の楕円形を呈する。検出面からの深さは0.3mを測り、断面はすり鉢状を呈する。

埋土 褐細砂の単一埋土である。

出土遺物 底部付近より土師器甕(6)が出土した。

SK-W02 (図版2 写真図版9)

検出状況 調査区西端付近にあるSD-W04の底で検出した。

形状・規模 主軸は溝の方向とは直交する東西方向にもつ。平面形は不整な長方形を呈し長さ1.75m、幅0.8mを測る。溝底からの深さは20cmである。底部は西から東へやや傾斜をもち東よりが不整な楕円形のくぼみとなる。

出土遺物 底部より土師器高坏が出土する。

SK-W03 (図版2 写真図版9)

検出状況 調査区の南寄りで検出された土坑である。

形状・規模 円形の土坑で、直径0.9m、深さ0.15mを測る。

埋土 下層に炭層が検出された。

出土遺物 出土していない。

5. 溝

SD-W01 (図版3 写真図版10)

検出状況 調査区の南端で検出された短い溝である。

形状・規模 幅0.35m、深さ0.1m、検出範囲での長さは9mで、溝はさらに南側の調査区外へ伸びている。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SD-W02 (図版3)

検出状況 調査区中央から西寄りで検出した。

形状・規模 北西 - 南西方向に断続的にのび、両端ともに調査区内で消滅する。幅0.3m、検出面からの深さ8cm程度で断面はU字状を呈する。

埋土 黄灰系の極細砂の単一埋土であるが、下層にある溝状遺構の最終埋土の可能性がある。

出土遺物 埋土下層より高坏坏部(8)が出土する。

SD-W03 (図版3 写真図版10)

検出状況 大半は神戸市教委昭和56年度調査区で検出され、その成果は『昭和56年度神戸市埋蔵文化財 年報』に記述されている。

形状・規模 東西方向に直線的にのびる溝であり、検出長約30mを測る。西側は調査区内で終結し、東側は菅野谷川旧河道により削平される。西端付近は浅いが、中央以東は断面台形状を呈する。

埋土 比較的粒子の細かい埋土であるが、中央付近では礫が混じる。

出土遺物 今回検出した部分の埋土中より須恵器坏($9\sim12$)が出土した。また弥生土器底部(13)も出土しているがこれは混入遺物であろう。

SD-W04 (図版3 写真図版10·11)

検出状況 調査区西端付近で検出した。中央付近の溝底で土坑SK-W02を検出した。

形状・規模 標高37m付近の等高線に平行して直線的にのびる。検出長は約26mである。溝の両側はいずれも調査区外へ続くが、南側は調査区外で丘陵斜面となる。幅は2.5~3.2mである。検出面からの深さは0.2~0.5mを測り、断面は皿状を呈するが部分的に起伏がある。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

第3節 出土遺物

1. 柱穴

P-W01 (図版44)

1は須恵器埦の底部片で高台が残り内面底部が凹む個体である。

P-W02 (図版44)

2は須恵器鉢の口縁部片である。法量は口径25.15cmを測る。口縁部を上下に拡張し、ややずんぐりとした縁帯を持つ。内面、口縁部直下に凹線状の窪みをもつ。

P-W03 (図版44)

3は土師器埦の底部片で、底径6.3cmを測る。

P-W04 (図版44)

4は青磁皿の破片で、口径9.95cmを測る。

2. 十器埋納遺構

SX-W01 (図版44 写真図版)

5 は土器棺に転用された弥生土器壺の頸部と思われ、口縁部や体部を欠く。外面には加飾はみられない。

3. 土坑

SK-W01 (図版 写真図版63)

6は土師器甕である。直立ぎみの体部から口縁部がわずかに外反し、そのくびれは浅い。摩滅により 内外面の調整は不明である。

SK-W02 (図版44 写真図版63)

7は土師器高坏であり脚裾部を欠く。坏部の稜は不明瞭であり口縁端部付近でわずかに外反する。脚柱部は下半が膨らみをもつ。

4. 溝

SD-W02 (図版44 写真図版63)

8 は弥生土器高坏である。屈曲する浅い坏部のみ残存する。外反する口縁部の直下には凹線を4条巡らせる。

J1はガラス小玉である。径約4mm、厚さ3mm、重さ0.06gを測る。色調は淡い青である。

SD-W03 (図版44 写真図版63)

9・10は須恵器坏蓋である。9は天井部と体部の境界は沈線状を呈し口縁端部は丸みをもつ。10は天井部と体部の境界はわずかな凸状の段となる。口縁端部は稜をもつ。11・12は須恵器坏身である。11は立ち上がりがやや内傾し口縁端部を丸くおさめる。12も立ち上がりはやや内傾するが、口縁端部は稜をもつ。13は弥生土器底部である。外面はタテ方向にミガキ調整を施す。

5. 包含層 (図版44 写真図版63·64)

14は土師器小皿で、法量は口径8.6cm、器高1.6、底径6.0cmを測る。斜めに短く開く体部をもち、口縁部は丸くおえる。底部に糸切り手法によって切り離す。

15は須恵器坏身。立ち上がりが内傾する。16・17は須恵器甕。16は、口縁端部は平坦でやや内傾する。外面は口縁部付近まで平行タタキが認められる。17は須恵器甕である。SD-W03西端からSD-W04までの間の広範囲に破片が散布していたもので、特に丘陵裾となる南壁際から多く出土した。く字状に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は内側ににぶく突出し、端面はほぼ水平である。口縁部外面に3条の波状文と、その下に凹線2条を施す。なお口縁部付近と接合できなかったため図化していないが、大型の体部片も出土している。18は土師器高坏である。坏部は埦状に内湾し、脚柱部と裾部の境界が屈曲する。

第5章 中区の調査

第1節 調査区の概要

中区は本発掘調査の中で主体となる地区であり、菅野谷川東岸の段丘に立地する。調査区中央付近の 北半から標高約60mをピークとする丘陵の斜面へと移行する。調査区は、西側は菅野谷川により西区と、 東側は調査区東半部を北西 – 南東方向にのびる谷によって東区と隔てられる。本調査区の南側は平成7・ 8年度に神戸市教育委員会により発掘調査が行われ、弥生時代から中世の遺構が多数検出されている。 したがって同じ段丘頂部に位置し、地形的に続く本調査区は遺跡の中心にあたることが想定された。

本調査区は、バイパス本線部分にあたる範囲を平成13年度に 3 次(調査番号: 2001002 2 区、調査番号: 2001142 1 区、調査番号2001213)に分けておこなったが、それに付帯する側道部分などの調査を先行して行っている。本線の北側に平成12年度調査の I 区、南西側に平成10年度調査のA地区、南東側に平成12年度調査の II 区がある。また側溝部分を対象とした平成8年度調査区のうち5区が平成10年度調査のA地区、6区が平成12年度調査の II 区に含まれる。本地区における本発掘調査は合計6次にわたって行っている。

遺構は菅野谷川に面した段丘上で検出した。段丘は上下2面あり、段丘崖は平成12年度A地区西端から平成13年度第1次調査区、平成10年度調査区を経て調査区南側へ続き、上下面の比高差は2m前後ある。下段は調査区の制約があったものの、隣接する現菅野谷川にあたる範囲は昭和57・58年度に神戸市教委によって調査が行われ、今回検出した遺構が旧菅野谷川河道まで約50m広がっていたことが明らかになっている。

東半は東区との間に谷があり、この部分では遺構を検出していない。この谷部は、その延長にあたる 東区および神戸市教委の調査では弥生時代以降の遺物を包含していることが確認されているが、本地区 内においては、顕著な遺物の出土はみられなかった。

調査区は全域にわたり削平の影響を受け、遺構の残存状況は良好とはいえず、少なからず消滅した遺構があるものと考えられる。最も高位となり丘陵への変換点となる調査区北半部、平成13年度第1次調査区の北西部から平成12年度調査のI区にわたる範囲では遺構はほとんど検出していない。

平成10年度調査区は中区の南西部に位置し、東西約48m、南北約12mで、面積は518㎡である。遺構面の地形は東西で大きく分かれており、東半分の遺構面の標高は39.2mであるが、西半分は約2mの比高差をもって低くなっており、その斜面幅は約5.0mで崖面に近い形状となっている。(図版5)

東半部の遺構面はほぼ水平・平坦であるが、西半分は西側が低くなる緩傾斜となっており、西半部東端の標高は37.1m、西端では36.0mで、その差は1.1mである。

東半部で検出した遺構には柱穴・土坑・溝があるが、時期的には中世後期と思われ、古墳時代以前の古い時期の遺構は検出していない。西半部では柱穴・土坑のほか、竪穴住居跡状遺構が2基あり、古墳時代の可能性がある。西半部の柱穴は中央部に集中するかたちで古墳時代の包含層(下部包含層)の上下で検出し、時期は下層が古墳時代、上層は平安時代末と思われる。

したがって、平成10年度調査区内では、東半部では中世後期と新しく、西半部はそれより古い時代の 遺構となっているが、東半部では削平された古い時期の遺構が存在していた可能性は否定できない。

本調査区は上下の段丘と直交方向に設定し、本地区の標準的な土層堆積状況をうかがうことができる。 そこで調査区東壁の断面を図版6に示した。 平成12年度調査区のうち、中区北端となる I 区は全体的に削平を受けており、特に中央付近は丘陵斜面となるため影響が著しい。遺構は主に谷部に近い東半部で検出した。検出した遺構は掘立柱建物、柱穴、土坑、溝などがあり、出土遺物から弥生時代、古墳時代後期、中世の 3 時期に大きく分けられる。上段段丘は遺物包含層が薄くほぼ水田面直下が地山となり、ここが遺構検出面となる。下段段丘にあたる部分では遺構は検出できなかったものの、若干の遺物包含層が残存していた。

Ⅱ区は古墳時代の竪穴住居、掘立柱建物などを検出し、南接する神戸市教委平成8年度(第7次)調査区に続くものと考える。遺物包含層は薄く、ほぼ水田面直下が地山となり、ここが遺構検出面となる。平成13年度の調査区は、3次にわたり遺構の広がりを面的に把握した。東半部は谷部、北西半部は削平により遺構は希薄だが、中央部分は北西から南東にのびる段丘の頂部にあたり竪穴住居跡、掘立柱建物跡、柱穴、土坑など非常に多くの遺構を検出した。遺構の密度は高く重複も多い。南側に位置する神戸市教委調査区も含めて遺跡の中心をなす部分であろう。ただ結果的に最も遺構の密度の高い部分を3分割することとなり、特に中世の屋敷地の全容を調査時点で明らかにしえなかったのは残念であった。また段丘上は削平の影響が大きく、ほぼ水田面直下が地山となる。したがって遺物包含層はほとんど残存しない。また遺構の残存状況も良好といえず、遺構の残存深度は浅い。

第2次調査の1-2区は平成12年度調査のI-b区とともに東半部の谷部をはさんだ丘陵斜面に位置する。隣接する1-1区との比高差は約2mである。この調査区は厳密にいえば後述する東区と地形的に連続するが、確認調査ではその間の丘陵部で遺構が検出されていないことから中区に含めている。水田化による削平の影響が大きく、検出した遺構は竪穴住居跡のみである。ただし裾にのびる谷部からの遺物の出土状況をみると丘陵上の集落の展開を示唆するものと考えている。

第2節 調査区の層序

調査区東半部の土層関係(図版 6)は、表土の耕土(第 3 層)直下に第 4 層の床土が貼られ、その下層にはおそらく水田造成盛土と思われる第27~第32層が厚さ30cm程度で認められた。遺構面はその下層であるが、部分的に褐色の第33層やにぶい黄褐色の第34層が遺存しており、中世後期の遺物包含層の可能性がある。

調査区西半部では、最上層の耕土(第3層)下に第5~第7層が厚く堆積しており、水田造成のための客土盛土と思われる。西端部分では、その下層に第8層の旧耕土や第9層の床土が遺存していた。西半部東部では、上部包含層とした第14層の2.5Y6/1黄灰色+10YR5/3にぶい黄褐色の土層が堆積しており、その下層が上層遺構面となっていた。

さらにその下層には第36層・第39層・第41層の遺物包含層(下部包含層)が存在しており、下部包含層の下面が下層遺構面となっていた。下層遺構面は地山であり、地山は砂層や礫層と粗粒シルト・極細砂・細砂の互層となっている部分が多く、洪水堆積によって形成されたものであることが想定できる。

第3節 遺構

1. 竪穴住居

SH-C01 (図版7 写真図版23)

検出状況 調査区北西部の段丘崖際で検出した。後世の耕作に伴うと考える溝状遺構と重複し、本遺構 が切られている。 形状・規模 平面形はやや不整な隅丸方形を呈する。北東-南西方向に5.5m、北西-南東方向に5.1mである。床は4.9m、4.4m。検出面から床面までの深さは削平のために浅く、最も深いところで約20cm、その他は10cm前後を測る。

埋土 主に基盤層に類似した土が堆積し、壁面の崩落土や流入土が自然堆積したものと考える。

屋内施設 周壁溝、中央土坑、排水溝、柱穴を検出した。

周壁溝 壁際を全周する。幅20cm床面からの深さ10cm前後を測る。埋土は基盤層に類似したもので、壁面崩落土が自然堆積したものと考える。

中央土坑 床面中央付近で検出した。径約1mの円形を呈する。床面からの深さは25cm程度である。床面から緩やかに傾斜するが、深さ10cm前後で傾斜が変換する。埋土は黒褐シルト質極細砂の単層で、炭片が多く混じる。

排水溝 中央土坑から斜面下方となる西側住居外まで伸びる。検出長3.3mを測る。

柱穴 床面では約10基の柱穴を検出したが、断面観察などにより本遺構廃絶後もものも含まれる。本住居の主柱穴は検出位置などから4本柱と考える。掘形の径30~50cm、床面からの深さ30~40cmを測る。出土遺物 周壁溝内から弥生土器壺 (19)、床面から弥生土器底部 (20) が出土した。また埋土内から柱状片刃石斧 (S1)、鉄鏃 (M1) が出土した。鉄鏃は埋土内から出土のため確実に本住居に伴うかは明らかにしえない。

SH-C02 (図版7 写真図版24)

検出状況 調査区北西部の段丘崖際で検出した。削平などにより西半部は損なわれ、残存状況は不良である。SK-C04と重複し、本遺構が切られている。

形状・規模 残存する周壁溝の形状から平面形は方形を呈するとみられ、竃が付設されている。南北辺の長さは4.8mを測り、床面は4.2mである。南北の長さは不明である。検出面から床面までの深さは、 残存する箇所でも15cm程度である。

埋土 ほとんど残存しない。唯一黄褐ブロックを含む暗黄灰細砂が認められる。これは張床の可能性も あるが、部分的なもので明らかにしえない。

屋内施設 周壁溝、竃、柱穴を検出した。

周壁溝 北半部のみコ字状に残存する。本来全周していたかは明らかでない。幅20~30cm、検出面からの深さ10cmを測る。

電 北壁際の中央付近に設けられ、規模は奥行1.45m、焚き口幅約65cm、壁は10cm程度が遺存していた。 床面は屋外に向け緩やかに上がり、奥壁が急に立ち上がって屋外に抜ける。焚き口付近には床面に炭 が散布している。埋土は上下2層に分けられ上層には焼土が混じる。

柱穴 床面では6基検出したが、本住居に伴うものは隅部の2基のみであり、本来は、主柱穴は4本柱であったと考える。掘形の径25~40cm、床面からの深さ20cm程度を測る。

出土遺物 竈の奥壁付近の堆積土内より土師器甕(21)が出土した。

SH-C03 (図版 8 写真図版24)

検出状況 調査区北西部の段丘崖際で検出した。SH-C02の南西に近接する。遺構の大半は流失し、わずかに北東隅付近を検出したに過ぎない。

形状・規模 周壁溝がL字状に屈曲するため平面形は方形を呈すると考える。本来の規模は不明である。 検出面から床面までの深さは、最も残存する部分で20cmを測る。

埋土 流入土とみられる自然堆積の単層である。

屋内施設 周壁溝の残欠と柱穴を検出したのみである。

周壁溝 隅部のみ検出した。床面からの深さ5cm程度、幅は15cm程度を測る。埋土は壁面崩落土とみられる灰黄褐シルト質極細砂の単層である。

柱穴 主柱穴は4本柱と考えるが、抽出しえなかった。

出土遺物 埋土内より須恵器坏蓋(22)が出土している。

SH-C04 (図版 8 写真図版25)

検出状況 調査区中央部の西より段丘上で検出した。SB-C08と重複する。削平のため壁面の立ち上が りはなく検出面で周壁溝、柱穴を検出した。したがって検出面が本来の床面であるかは不明である。

形状・規模 周壁溝がL字状に屈曲するため平面形は方形を呈すると考える。本来の規模は不明であるが、屋内施設の配置から東西4.5m、南北5.5m程度の規模を想定する。

埋土 削平のため残存しない。

屋内施設 周壁溝の残欠と柱穴を検出したのみである。

周壁溝 南西隅付近をL字状に検出した。幅25cm、検出面からの深さ5cm程度である。

柱穴 検出した柱穴の配置から主柱穴は4本柱と考える。柱穴は掘形の径50cm前後、検出面からの深さ15cmを測る。

出土遺物 埋土内より須恵器坏身(23)が出土している。

SH-C05 (図版 8 写真図版25)

検出状況 調査区中央部の西より段丘上で検出した。SB-C09・10・11と重複する。削平のため検出し えたのは北半部のみである。

形状・規模 検出した周壁溝は「コ」字状に屈曲しているため、平面形は方形を呈すると考える。東西 長は4m、床面長は3.4mを測る。南北方向の本来の規模は不明である。壁面の立ち上がりは5cm程度 残存する。

埋土 削平のためほとんど残存しない。

屋内施設 周壁溝の残欠と柱穴を検出した。その他の施設は検出していない。

周壁溝 北辺付近をコ字状に検出した。幅15cm、検出面からの深さ3cm程度である。

柱穴 主柱穴は4本柱と考える。ただし床面では8基の柱穴を検出したが、うち2基は掘立柱建物に伴うものである。その他の柱穴も別の掘立柱建物に伴う可能性があり、本住居に伴う柱穴の抽出はしえなかった。

出土遺物 遺物は出土していない。

SH-C06 (図版8)

検出状況 調査区中央付近の段丘崖際で検出した。削平などのため遺存状況は不良であり北東半部を検 出しえたのみである。また検出できた南半については本来の床面は損なわれているものと考える。 形状・規模 周壁溝がL字状に屈曲することから、本来の平面形は方形を呈するものと考える。主軸はほぼ南北方向にもつ。ただし残存状況が不良のため、本来の規模は不明である。壁面の立ち上がりは北側でわずかに認められ、検出面から床面までは5cm程度を測る。

埋土 削平のためほとんど残存しない。

屋内施設 周壁溝の残欠と柱穴を検出した。

周壁溝 北東隅をL字状に検出した。幅20cm前後、床面からの深さ3cm程度である。

柱穴 主柱穴は4本柱と考える。ただし床面では6基の柱穴を検出したが、いずれが本住居に伴うものかは明らかにできなかった。断面を図示した柱穴は主柱穴か明確にできなかったが、仮に主柱穴とした場合、柱穴の掘形の径30cm前後、床面からの深さは残存のよいもので25cmを測る。その場合は住居の南北の復元長は3.6m程度になると考える。

出土遺物 P1より須恵器坏蓋(24)が出土している。

SH-C07 (図版 8 写真図版25)

検出状況 調査区中央付近の段丘崖際で検出した。南半部の壁面の立ち上がりは削平や流失により損な われており残存状況は良好でない。比較的遺構密度の高い地点に所在し、隣接して中世の掘立柱建物跡 が所在する。本住居内に重複する複数の柱穴がある。

形状・規模 平面形は円形または不整な隅丸方形を呈すると考える。規模は東西長6.1m、南北の現存 長5.2mを測る。北・東辺沿いに高床部をもつ。高床部の幅は北側で0.8m、東側で1.2mを測る。検出面 から高床部までの深さは5cm、高床部から床面までの深さは5cmである。高床に囲まれた床面は一辺約 3.5mの方形を呈するとみられる。

埋土 住居内には基盤層土と類似する土が堆積する。したがって埋土は流入土や壁面崩落土などが自然 堆積したものと考える。

屋内施設 中央土坑、柱穴を検出した。周壁溝はもたない。また床面の西側中央付近に台石(S2)を 設置している。

中央土坑 床面中央付近で検出した。平面形は不整な方形を呈する。東西1.0m、南北1.2mを測る。床面からの深さは30cmであり、断面は逆台形を呈する。

柱穴 高床部や床面で柱穴を10基以上検出したが主柱穴を抽出しえなかった。

出土遺物 図化しうる土器片は出土していない。床面に据えられた石皿(S2)がある。

SH-C08 (図版 9 写真図版26)

検出状況 調査区中央付近の段丘上で検出した。比較的遺構密度の高い地点に所在し、中世の掘立柱建物跡が重複・近接する。削平の影響を受けているが完存し遺構の残存状況は良好である。

形状・規模 平面形は東西に主軸をもつ長方形を呈する。規模は東西5.7m、南北4.9mを測る。床面の 規模は東西5.0m、南北4.4mである。検出面から床面までの深さは5cm程度である。

埋土 基盤層土と類似する土が堆積し、流入土や壁面崩落土が自然堆積したものと考える。

屋内施設 周壁溝、壁際土坑、柱穴を検出した。

周壁溝 壁際土坑のある西辺中央付近を除いて各辺を巡る。断面は逆台形を呈し、幅約20cm、床面からの深さ5cmである。壁面崩落土により埋没する。

電 西壁際中央付近に設けられる。平面形は東西に主軸をもつ不整な隅丸長方形を呈し、規模は東西1.1 m、南北80cmを測る。床面からの深さは10cmである。断面は皿状を呈し、底部にはやや凹凸がある。

埋土は焼土が混じる灰極細砂が単層で堆積している。東側の肩付近からは須恵器杯蓋が出土している。 柱穴 床面では10基以上の柱穴を検出したが、主柱穴は4本柱であると考える。本住居の伴う柱穴は掘 形の径50~60cmを測り、他の柱穴よりも大きい。床面からの深さは30cm程度である。

出土遺物 竈の肩付近より須恵器坏蓋(25)が出土している。

SH-C09 (図版 9 写真図版26)

検出状況 調査区中央付近の段丘上で検出した。比較的遺構密度の高い箇所に所在し、SD-C01や柱穴などが重複するほか、古代・中世の掘立柱建物が近接する。削平のため壁面の立ち上がりはほとんど確認できないが、ほぼ全容を検出しえた。

形状・規模 東西に主軸をもつ長方形を呈し、規模は東西5.0m、南北4.8mである。床面の規模は東西4.6m、南北4.8mを測る。ただし削平のため検出した床面部分が本来の床面かは明らかにしえない。

埋土 ほとんど残存しない。

屋内施設 周壁溝、柱穴がある。竃や壁際土坑などの施設は確認できなかった。

周壁溝 東西壁際の中央付近を除いて各辺を巡る。断面U字状を呈し幅は10~20cm、検出面からの深さ5cm程度である。

柱穴 床面では多数の柱穴を検出したが、主柱穴は4本柱であると考える。本住居の伴うと考える柱穴は掘形の径40~60cmを測り、床面からの深さは10~30cm程度である。

出土遺物 床面にあるP-1から須恵器坏身(26)が出土しているが、本住居に伴うかは明らかでない。

SH-C10 (図版10 写真図版27)

検出状況 調査区中央付近の段丘上で検出した。比較的遺構密度の高い地点に所在し、柱穴やSK-C01・02などが重複するほか、中世の掘立柱建物が近接して所在する。平成13年度第1・3次調査区にまたがるが東半部にあたる第3次調査区では削平のために検出できなかった。

形状・規模 残存する部分から、平面形は東西に主軸をもつ長方形を呈すると考える。規模は、南北長 6.4m、東西の残存長6.8mである。検出面から床面までの深さは、10cm程度である。

埋土 自然堆積である褐灰シルト質細砂~極細砂の単層である。

屋内施設 壁溝、竃、柱穴がある。

壁溝 北壁沿いに延び、他の壁際には存在しない。断面U字状を呈し幅15cm床面からの深さ5cm程度である。

電 西壁際中央付近に設けられ、規模は奥行1.5m、焚き口幅約70cm、壁は5~10cm程度が遺存していた。 床面は焚き口付近から屋外に向け緩やかに上がり屋外に抜ける。焼成部内の堆積土には炭・焼土が混 びる

柱穴 床面では多数の柱穴を検出したが、本住居に伴うものを抽出しえていない。主柱穴は4本柱であると考える。

出土遺物 床面などから須恵器蓋 (27)、坏身 (28・29) が出土している。

SH-C11 (図版11 写真図版10)

検出状況 調査区中央付近の段丘上で検出した。SH-C09の北東側に隣接する。一部SK-C03と重複するがほぼ全容を検出しえた。

形状・規模 平面形は東西に主軸をもつ長方形を呈する。東西長4.9m、南北長4.6mである。削平のため壁面の立ち上がりはほとんど確認できない。

埋土 ほとんど残存しない。

屋内施設 周壁溝、柱穴がある。竈や壁際土坑は検出していない。

周壁溝 東辺は断続的に検出したが、本来は全周するものと考える。幅は約20cm、検出面からの深さは約5cmである。

柱穴 住居内で約20基の柱穴を検出したが、主柱穴は4本柱と考える。本住居に伴うと考える柱穴は、掘形の径40cm、検出面からの深さ約20cmである。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SH-C12 (図版11 写真図版28)

検出状況 調査区西端にあたる下位段丘面で検出した。調査区の制約により東半部のみ調査し、西半部 は調査区外となる。ただし神戸市教委が昭和58年度に西側で調査した際検出したSB10が検出位置から 本住居と同一となる可能性がある。本住居埋没後に掘立柱建物SB-C20に伴う柱穴が掘り込まれる。

形状・規模 検出部分の形状から平面形は方形を呈すると考える。南北の長さは5.2m、床面で4.6mを 測る。南壁の立ち上がりは下部が急に立ち上がるが、上部は崩落しテラス状となる。また東壁は崩落が 進みなだらかに立ち上がる。検出面から床面までの深さは40~50cmある。

埋土 視全堆積した黒色系の埋土2層からなる。上層には土器片を多く包含する。

屋内施設 調査した範囲においては床面では柱穴などを検出していない。

出土遺物 床面の東壁際で土師器甕 (34)、小型壺 (37)、小型鉢 (38~40) が出土している。また埋土 内から土器片が多数出土し、そのうち須恵器坏蓋 (30・31)、坏身 (32・33) と土師器甕 (35・36)、高 坏 (41) を図化した。

SH-C13 (図版11 写真図版)

検出状況 調査区西端にあたる下位段丘面で検出した。流失により南半部が損なわれて北半部のみ残存する。

形状・規模 全容は明らかにしえないが、残存する周壁溝の形状から平面形は方形を呈すると考える。 規模は南北長方向では長さ4.0m、床面は3.5mである。削平のため壁面の立ち上がりはほとんど確認で きず検出した床面部分が本来の床面かは明らかにしえない。

埋土 ほとんど残存しない。

屋内施設 周壁溝、柱穴を検出した。

周壁溝 コ字状に検出した。断面はU字状を呈し、幅約20cm、検出面からの深さ10~15cmを測る。

柱穴 床面では柱穴を4基検出したが、主柱穴は4本柱と考える。柱穴の規模は、掘形の径40cm、検出面からの深さ約20cmである。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SH-C14 (図版12 写真図版29)

検出状況 調査区南東部の谷部に面した丘陵斜面で検出した。後世の水田化に際して削平されているが、 全容を検出した。

形状・規模 平面形は等高線方向に主軸をもつ楕円形を呈し北東部に張り出しをもつ。規模は長径6.4m、 短径5.6mである。床面は長径5.6m、短径4.8mを測る。検出面から床面までの深さは最も残存状況のよ い北東部分で50cmあるが、斜面側の南西部分では立ち上がりはほとんどない。

埋土 床面上には広範囲に炭・焼土が堆積し、本住居が焼失したものと考えられる。上層は流入土や壁 面崩落土が自然堆積する。

屋内施設 周壁溝、中央土坑、柱穴、張り出し部がある。

周壁溝 壁際を全周する。断面U字状を呈し、幅約20cm、床面からの深さ約10cmである。埋土は灰黄系の単層で炭や焼土の混じりは少量である。

中央土坑 平面形は東西方向に主軸をもつ楕円形を呈する。長径1.0m、短径0.8mである。断面は浅い U字状を呈し、中層の炭がレンズ状に堆積する。上層は床面から炭が流入したものである。

中央土坑から西側へ溝が延びる。幅は30cmである。溝は周壁溝までで屋外までは延びない。

柱穴 主柱穴は4本柱と考える。規模は、掘形の径50~60cm、床面からの深さ約20cmである。

張り出し部 北東側壁際の周壁溝外で検出した。床面は1m×1mである。床面上には炭などの堆積層があり、本住居に伴うものと判断した。北東側の壁は傾斜をもって立ち上がるが、これは壁面が崩落したためであろう。

出土遺物 埋土下層の炭堆積層より弥生土器高坏脚部 (42)、中央土坑埋土より砥石 (S3)、周壁溝より敲石 (S4) が出土した。

SH-C15 (図版12 写真図版29)

検出状況 調査区南東部の谷部に面した丘陵斜面、SH-C14南側で検出した。調査区の制約により東半部のみを検出した。後世の水田化に際して削平されているが残存状況は比較的良好である。

形状・規模 検出した部分は半円状を呈するため円形住居であろう。南北の長さは4.1m、東西の検出 長は4.4mである。床面は南北で3.6mを測る。検出面から床面までの深さは最も残存する東側で60cm程 度あるが、東から西へ傾斜をもつため、西半部は本来の床面が損なわれている可能性がある。斜面下方 となる調査区西壁の断面観察では壁面の立ち上がりはほとんど残存していない。

埋土 粗砂・細礫混じり灰黄褐細砂の単層であり、流入した自然堆積層であろう。

屋内施設 周壁溝、土坑状落ち込み、柱穴がある。

周壁溝 北半部の壁際にのみ巡る。規模は幅約20cm、床面からの深さ約10cmである。

土坑 調査区の制約により全容は検出しえなかったが、平面形は不整な円形を呈し、径1.6m、深さ10 cmを測る。埋土は住居内の堆積土と同じ流入土である。

柱穴 床面で2基、土坑と重複するものを2基検出した。検出した位置から、主柱穴は4本柱であると考える。規模は、掘形の径30~40cm、床面からの深さ約20cmを測る。

台石 東側の周壁溝際に設置されている。

出土遺物 埋土内よりミニチュアの壺形土器 (43)、弥生土器高坏 (44) が出土している。また床面には台石 (S5) がある。本住居は調査区の制約から全容は明らかにできなかったが、埋土出土の土器を

本住居に伴うものとした場合、隣接するSH-C14に後出することになる。

SH-C16 (図版13 写真図版30)

検出状況 調査区南端、北東 - 南西方向にのびる谷に面した地点に位置する。遺構密度の比較的高い地 点にあるためSB-C30・31や多数の柱穴と重複し、断面観察などから本住居がこれらに先行すると判断 した。大半を検出したが一部が南側調査区外へ広がる。

形状・規模 全容は検出していないが、平面形は北西 – 南東に主軸をもつ長方形を呈する。規模は4.6 m×6.4m、床面は4.4m×5.6mを測る。削平のため検出面から床面までの深さは5cm程度と浅い。

埋土 ほとんど残存しないが、黄灰系のシルト〜細礫を埋土とし、自然堆積と考える。

屋内施設 周壁溝、竃、柱穴がある。

周壁溝 北東および南東の壁際と北西壁際の竃までコ字状にのびるが、南西壁際では検出していない。 断面はU字状を呈し、幅約20cm、床面からの深さ5cmを測る。埋土は住居の埋土と類似する。

電 北西壁際、中央よりやや西側に設けられる。北西端は柱穴に切られているが、規模は奥行1.2m、 焚き口幅約1.0mを測り、壁は5cm程度が遺存していた。床面は焚き口付近から屋外に向けわずかに上 がり屋外に抜ける。焼成部内の堆積土は灰黄褐シルト質極細砂であり、中央付近の上層に焼土が堆積す る。

柱穴 床面では多数の柱穴を検出したが、本住居に伴うものを抽出しえていない。主柱穴は4本柱であると考える。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。床面で検出した柱穴から須恵器坏身(45)が出土したが、 断面観察から本住居埋没後に掘り込まれたSB-C31に伴うものと判断した。

SH-C17 (図版13 写真図版31)

検出状況 SH-C16北東側で検出した。調査区南端、北東 - 南西方向にのびる谷に面した地点に位置する。遺構密度の比較的高い地点にあり多数の柱穴と重複するが、断面観察などから本住居がこれらに先行すると判断した。削平などのために大きく東半部を損なっている。平成12年度調査Ⅱ区の壁際で検出したが、隣接する平成13年度第2次調査1-1区では周壁溝や壁面の立ち上がりを検出していない。

形状・規模 残存状況が不良にため明らかにしがたいが、残存する周壁溝の形状から平面形は東西 4 m 以上、南北 1 m以上の方形を呈するものと考える。検出面からの深さは最も残存する箇所で $5\,\mathrm{cm}$ 程度である。

埋土 埋土として褐灰シルト~極細砂がわずかに残存する。

屋内施設 周壁溝、柱穴がある。竃などの施設は検出しえなかった。

周壁溝 南および西壁際でL字状に検出した。本来壁際を全周していたかは不明である。断面はU字状を呈し、幅約10cm、床面からの深さ5cm程度である。

柱穴 床面では多数の柱穴を検出したが、本住居に伴うものを抽出しえていない。主柱穴は4本柱であると考える。

P-C53は本住居の北側で検出した。本住居に伴うかは明らかでないが検出位置から主柱穴の1つである可能性がある。掘形の径30cm、検出面からの深さ65cmを測る。柱抜き取り後に土師器高坏を入れている。出土遺物 埋土内から土師器甕(46)、高坏(47)が出土している。またP-C53から土師器高坏(48)

が出土している。

SH-C18 (図版13 写真図版31)

検出状況 SH-C16北東側で検出した。調査区南端、北東 - 南西方向にのびる谷に面した地点に位置する。削平などの影響が大きく、残存状況は不良であり検出しえたのは北隅付近だけである。平成13年度第2次調査1-1区の壁際で検出したが、隣接する平成12年度調査Ⅱ区では削平のため周壁溝や壁面の立ち上がりを検出していない。

形状・規模 残存状況が不良にため明らかにしえないが、周壁溝の形状から本来の平面形は方形を呈するものと考える。検出面からの深さは最も残存する箇所で5cm程度である。

埋土 ほとんど残存しない。

屋内施設 周壁溝、柱穴がある。竃などの施設は検出しえなかった。

周壁溝 北隅付近でL字状に検出した。本来壁際を全周していたかは不明である。断面は浅いU字状を 呈し、幅約20cm、床面からの深さ5cm程度である。

柱穴 床面では複数の柱穴を検出した。本住居に伴うものを抽出しえていないが、主柱穴は4本柱であると考える。

出土遺物 出土していない。

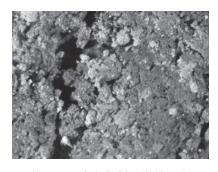
SH-C19 (図版 5 写真図版21)

検出状況 P-C26の約1m南西側で、遺構面上に直径45cmの範囲で赤色顔料の広がりが認められた箇所があり、竪穴住居跡の床面と想定した。赤色顔料は分析の結果、ベンガラであることが判明した。

形状・規模 壁の立ち上がりや床面を検出していないので、形状や規模は不明である。

柱穴 竪穴住居跡とした場合、P-C24~P-C26の一帯に存在する柱穴が、竪穴住居跡の主柱穴となることが想定できるであろう。

出土遺物 赤色顔料以外に遺構面上から出土した遺物は認められない。ただし、想定範囲内に存在する柱穴が竪穴住居跡に伴うものと仮定した場合、P-C24~P-C26で出土している土器と同時期の古墳時代中期末~後期初頭である可能性があろう。



第10図 赤色顔料顕微鏡写真

2. 掘立柱建物跡

SB-C01 (図版14 写真図版32)

検出状況 調査区の西北端、段丘下で検出された単独の建物である。菅野谷川に隣接する場所にある。 形状・規模 南北2間×東西1間以上の建物である。

柱穴 円形ないし楕円形、直径40~45cm、深さは20~25cm前後が残されるが、全体的に削平が著しく、 北辺の側柱1基が削平によって消失している。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C02·03 (図版14 写真図版32)

検出状況 調査区北西半部にあたる上位段丘の端付近で検出した。この地点付近は調査区内では最も高所にあたる。ほぼ同じ方向をとる2棟が重複し、柱穴の切り合い関係からSB-C02がSB-C03に先行している。おそらくSB-C02からSB-C03への建て替えが行われたものと考える。その他の遺構との重複はみられない。

SB-C02

形状・規模 北東部の柱穴を欠くが2間×3間の側柱建物になると考え、規模は桁行4.4、梁行3.3mを測る。南北方向に主軸をもち、N22°Wの偏りを示す。柱穴間距離は1.6m前後を測るが、中央の1間のみ1m前後となり他よりも短い。柱の並びは良好である。

柱穴 掘形の形状が円形または隅丸方形を呈し、径または一辺が0.6m程度の規模である。検出面からの深さは、20~50cmを測る。

SB-C03

形状・規模 北辺の柱穴を欠くが2間×3間の総柱建物であり、規模は桁行4.0、梁行3.0mを測る。南 北方向に主軸をもち、N24°Wの偏りを示す。柱穴間距離は、桁行が1.4m前後を測り北側の1間のみ1 m程度とやや短い。梁行は東側の1間が1.6m、西側の1間が1.4m前後を測る。柱の並びは北西部がや や歪だが、他は良好である。

柱穴 掘形の形状が円形を呈し一部隅丸方形を呈するものがある。径または一辺が0.3~0.5mの規模である。検出面からの深さは、20~30cmを測る。柱穴の大半はSB-C02を構成する柱穴を切っていることから、本建物はSB-C02を建替えたものと考える。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C04 (図版15 写真図版32)

検出状況 調査区北側の中央、段丘上に位置する建物である。

形状・規模 桁行3間×2間(7.5×4.9~5.8m)の南北棟である。

柱穴 円形で直径30~40cmであるが、深さは10~15cm前後と上面の削平のため浅い。柱並びや柱通りは 良好であるが、北東隅の柱P3がやや外側に張り出す。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C05 (図版15 写真図版33)

検出状況 調査区の中央北寄り、段丘上で検出された建物である。

形状・規模 桁行3間×梁行2間(7.5×3.4m)の総柱建物である。

柱穴 円形ないし楕円形で、直径25~40cm、深さは10~25cmで、上面の削平が著しい。柱間は桁行1.4~2.7 m、梁行1.6~2.0mで、桁行は中央の柱間が狭く、両端が広くなる。柱並びは比較的良好である。

出土遺物 P2から須恵器皿(49)が出土している。

SB-C06 (図版15 写真図版33)

検出状況 SB-C05と並んで検出された建物である。

形状・規模 桁行 3 間×2 間(4.0×2.9m)の総柱建物である。建物の軸方向は南北方向である。

柱穴 平面円形で、直径70cm前後、深さ10~15cm前後を測る。柱間は桁行1.0~1.8m、梁行1.2~1.8mであるが、西側の桁行側の柱並びがやや歪になる。

出土遺物 P10から土師器埦 (50) が出土している。

SB-C07 (図版16 写真図版33)

検出状況 調査区西より菅野谷川の東岸段丘縁で検出された建物である。

形状・規模 桁行3間×梁行2間(5.7×3.7m)の東西棟で、総柱構造になる。

柱穴 平面円形で直径30cm前後、深さ10~20cm前後を測る。ただし、西側は削平のため西南側の柱穴が 消滅し、周辺の柱も痕跡程度となる。このため、実際には西側にさらに伸びていた可能性も残される。 柱間は1.8~1.9mである。

出土遺物 P2から須恵器椀 (51)、P6から須恵器鉢 (52) が出土した。出土遺物から建物は13世紀代と考えられる。

SB-C08 (図版16 写真図版34)

検出状況 調査区中央付近で検出した。一帯は削平が著しい。また柱穴などの遺構が集中する箇所であり、複数の柱穴と重複して建物の全容は明確にしえない。

形状・規模 残存状況は良好でないが、2間×2間の側柱建物になると考える。南北方向の建物の偏りはN11°Wを示し、規模は東西、南北ともに3.4mを測る。

柱穴 掘形の形状が円形を呈し径は0.4~0.6mの規模である。検出面からの深さは15cm以下で浅い。柱の並びは比較的良好である。柱穴間距離は、桁行が1.6m前後を測る。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C09·10·11 (図版17 写真図版34)

検出状況 調査区西寄りの段丘上で検出された。3棟が重なり、いずれも南側が削平されて残らない。 形状・規模 これらの3棟は規模もほぼ同一で、東西2間、南北1間以上の建物である。おそらく同一 場所での建て替えと考えられる。

SB-C09 東西4.9m×南北2.4m以上の総柱建物である。東西の柱間は2~2.8mを測る。

SB-C10 東西4.5m×南北2.3m以上の総柱建物である。東西の柱間は2~2.7mを測る。

SB-C11 東西4.5m×南北2.3m以上の総柱建物である。東西の柱間は2~2.1mを測る。

柱穴 いずれも削平が著しく、堀形の形状は円形で直径25~50cm、深さは10~15cm前後を測る。

出土遺物 SB-C09P1から須恵器椀 (53) が出土している。

SB-C12 (図版17 写真図版34)

検出状況 調査区西より菅野谷川の東岸段丘縁で検出された建物でSB-C13・14と重なる。

形状・規模 南北2間×東西2間(4.7~5.0m×4.8~5.4m)の総柱建物であるが、柱穴のうち東辺の1基が検出できなかった。また、建物の南辺が広がっており平面台形を呈する。柱間は南北2.2~2.5m、東西2.4mである。

柱穴 円形で40~70cm前後と比較的大型のものが多い。東西の柱間は2~2.8mを測る。

出土遺物 P2から須恵器埦(54)・同皿(55)が出土している。

SB-C13 (図版18 写真図版35)

検出状況 調査区西寄りの段丘上で検出されたもので、SB-C12・14と重なって検出された。

形状・規模 桁行 3 間×梁行 2 間(6.5×3.8m)の総柱の東西棟である。ただし西辺の東柱を削平のために欠損する。柱間は桁行が2.0~2.4m、梁行が2.0mで、ややばらつきがみられるが、柱並びは良好である。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C14 (図版18 写真図版35)

検出状況 調査区西寄りの段丘上で検出されたもので、SB-C13と重なって検出された。

形状・規模 桁行3間×梁行2間(6.3×4.0m)の総柱建物である。

柱穴 平面形は円形が多く、柱間は桁行が1.8~2.3m、梁行が2.0mを測るもので、西端の柱間がやや狭くなる。柱並びは比較的良好である。ただし、南辺の並びが不明確である。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C15 (図版19)

検出状況 調査区西よりの段丘上で検出されたもので、SB-C13・14に隣接する。

形状・規模 側柱建物であるが、南側が削平によって消失している。建物の規模は南北2間×東西3間 (4.5×4.5m) を測る。

柱穴 柱間は南北2.0~2.4m、東西1.6mを測る。柱並びは比較的良好であるが、建物平面がやや矩形になる。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C16 (図版19 写真図版35)

検出状況 調査区中央付近の段丘上で検出した。比較的柱穴が集中する箇所であり本建物や構成する柱 穴と重複関係・あるいは隣接する遺構も複数ある。

形状・規模 南北方向に主軸をもつ桁行4間、梁行3間の側柱建物である。桁行方向はN23°Eの偏りを示す。規模は桁行7.0m、梁行4.6mを測る。柱穴間距離は、桁行1.6~2.0m、梁行1.4m前後を測る。

柱穴 本建物を構成する柱穴掘形の規模は大型であり、他の柱穴と区別することは比較的容易であった。 掘方の形状が円形または隅丸方形を呈し、径または一辺が0.5~0.8mの規模である。検出面からの深さ は最も深いものでも35cmである。柱の並びは良好である。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していないが、柱穴の形状などから古代に属すると推定する。

SB-C17 (図版20 写真図版36)

検出状況 調査区の中央西寄りに位置する総柱建物で、SB-C18・19・SH-C01などと重なって検出された。

形状・規模 建物の規模は南北 1 間以上×東西 3 間 (1.8以上×7.0m) を測る。柱間は東西方向が2.3~2.6 m、南北方向は1.5mである。

柱穴 平面円形のものが多く、直径30~40cm前後、深さ10~40cm前後である。全体的に削平が著しく柱 穴が浅くなっている。ただ、周辺には多くの柱穴が重なって検出されていることから、何回かの建て替 えが行われたものと考えられ、他にも建物が存在した可能性が高い。

出土遺物 P3から白磁碗 (58)、P4から土師器羽釜 (57) が出土している。

SB-C18 (図版20 写真図版36)

検出状況 調査区の西寄りで検出された側柱建物で、SB-C17・19やSH-C01と重なる。

形状・規模 南北 1 間×東西 3 間 $(6.4 \times 1.8 \text{m})$ を測る。柱間は南北 $1.8 \sim 1.6 \text{m}$ であるが、東西は $1.6 \sim 2.7$ mと大きく開く。

柱穴 円形のもので直径30~60cm、深さ20~40cmを測る。柱穴は本遺跡の中では比較的残りがよい。 出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C19 (図版20 写真図版36)

検出状況 調査区の西寄りで検出された側柱建物で、SB-C17・19・SH-C01と重なって検出された。

形状・規模 南北 3 間×東西 3 間 (5.8×7.6m) を測る。柱間は南北1.8~2.0mであるが、東西は2.3~2.67 mで東側の柱間がやや広い。

柱穴 円形のもので直径30~60cm、深さ20~40cmを測る。柱並びは全体に良好であるが南側の柱の遺存 状態は良好ではない。南側の束柱が検出できなかったが、もともと存在したかどうかは不明である。 出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C20 (図版21 写真図版36)

検出状況 調査区西端の菅野谷川の川岸に位置する側柱建物である。

形状・規模 南北 2 間×東西 3 間(4.3×4.6 m)を測る。柱間は南北2.2m、東西 $1.3 \sim 1.7$ mであるが、東西は2.3mである。

柱穴 円形のもので直径30~60cm、深さ20~25cmを測る。柱並びはやや歪である。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C21 (図版21 写真図版36)

検出状況 調査区西端に位置し、SB-C020に隣接する建物である。

形状・規模 南北 2 間×東西 1 間以上、(2.7×1.1m) を測る。小型の建物でSB-C20に付属する建物と 考えられる。柱間は南北1.3~1.4mである。

出土遺物 P2から須恵器城 (60)・(61) が出土している。

SB-C22 (図版21)

検出状況 調査区中央西寄りで検出された建物で、SE-C01の西側に位置する建物である。

形状・規模 基本的に総柱構造の南北棟で、建物の規模は桁行4間×梁行4間(10.7×7.0m)、柱間は

桁行方向が2.2~2.6m、梁行方向が1.6~1.8mで、桁行の方が顕著に広い。ただ、桁行の柱間は南側の間隔が広く、東側は狭くなる傾向があるので、南北で建物構造が異なる可能性がある。

柱穴 円形ないし楕円形で直径25~45cm前後、深さ5~30cmで、比較的浅いものが多いので、全体に上層の削平が著しいと考えられる。さらに、北東側及び南西隅の柱穴を欠く。

出土遺物 P14からマダコ壺 (62) が出土している。

SB-C23 (図版23 写真図版37)

検出状況 調査区中央の建物群が密集する場所で検出された建物で、SB-C23~27の5棟が重なる。この建物は本遺跡の中でも最大規模の建物である。検出状況や位置からすると屋敷の主屋に相当するものと考えられる。SB-C23をはじめとして何時期にも渡って建物の建て替えが行われている。

形状・規模 基本的に総柱構造の南北棟で、建物の規模は桁行 6 間×梁行 4 間(10.7×7.0 m)を測る。 柱間は桁行が $2.2 \sim 2.3$ m、梁行が $2.1 \sim 2.3$ mで、桁・梁の狭長は大きくない。

柱穴 円形ないし楕円形で直径25~45cm前後、深さ5~30cmで、全体に上層の削平が著しいためか浅いものが多い。また、北西隅の柱穴1基を検出できなかったが、元々存在するかどうかは不明である。

出土遺物 P5から土師器甕 (66)、P6から土師器甕 (67)、P7から須恵器埦 (63)、鉄鏃 (M2)、P15から須恵器鉢 (64)、土師器小皿 (65) が出土している。

SB-C24 (図版24 写真図版37)

検出状況 SB-C023同様、調査区中央の建物群が密集する場所で検出された大規模な建物である。検出 状況からすると屋敷の主屋に相当する。

形状・規模 基本的に総柱構造の南北棟で、建物の規模は桁行5間×梁行5間(10.6×10.4m)を測る。 柱間は桁行が1.7~2.4 m、梁行が2.0m前後であるが、西辺の南から2間目のみが1.4mと狭くなる。大きな狭長差は認められないが梁行きの方が、若干間隔が狭い。

柱穴 円形ないし楕円形で直径25~45cm前後、深さ5~25cmで、全体に上層の削平が著しく浅いものが 多い。また、北西隅の柱穴数基、および建物内部の束柱がいくつか検出できなかったが、元々存在する かどうかは不明である。

出土遺物 P3から須恵器埦 (68)、P9から須恵器埦 (70)、P12から須恵器埦 (69)・土師器小皿 (74)、P17から土師器坏 (71)・(72)、同小皿 (73) が出土している。

SB-C25 (図版25 写真図版37)

検出状況 SB-C023同様、調査区中央の建物群が密集する場所で検出された大規模な建物である。検出 状況からすると屋敷の中心建物である。

形状・規模 基本的に総柱構造の南北棟であるが北西側の東柱 2 基が検出できなかった。建物の規模は 桁行 5 間×梁行 5 間 (9.3×8.0m) を測る。柱間は桁行が2.0~2.6m、梁行が2.0m前後である。桁行の東 辺の柱間が広くなる。他は大きな狭長差は認められないが、全体的に梁行の間隔が狭くなる。

柱穴 円形ないし楕円形で直径25~45cm前後、深さ5~25cmで、全体に上層の削平が著しいためか浅いものが多い。また、北西隅の柱穴数基、および建物内部の東柱を欠失するが、元々存在するかどうかは不明である。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C26 (図版25 写真図版37)

検出状況 調査区中央の建物群が密集する場所にある建物である。ただし、小規模な建物で、SB-C23など大型の建物の北側に位置するので、屋敷の付属屋と考えられる。

形状・規模 基本的に総柱構造の南北棟で、建物の規模は桁行3間×梁行2間(5.8×4.34m)を測る。 柱間は桁行が1.7~2.4 m、梁行が2.1~2.2m前後である。桁行は東側が広く、西側が狭くなる。梁行に は大きな狭長差は認められない。

柱穴 円形ないし楕円形で直径25~30cm前後、深さ5~15cm前後で、全体に上層の削平が著しいため浅いものが多い。柱並びは良好である。

出土遺物 P4から鉄釘 (M3)、P6から須恵器埦 (75) が出土している。

SB-C27 (図版26 写真図版37)

検出状況 調査区中央の建物が密集する場所で検出された建物である。

形状・規模 総柱構造であるが南西隅の柱穴1基を欠失する。建物の規模は桁行3間×梁行2間(6.0×4.5 m)を測る。柱間は桁行1.8~2.3m、梁行2.0~2.3mを測る。

柱穴 円形ないし楕円形で直径25~40cm、深さ5~10cmと浅く検出された。

出土遺物 P3から須恵器埦 (76) が出土している。この遺物から建物の時期は13世紀代と考えられる。

SB-C28 (図版26 写真図版37)

検出状況 調査区中央の建物群に隣接して検出された建物である。

形状・規模 建物は総柱構造で、規模は南北 2 間×東西 2 間(4.2×3.9 m)である。ただし、南西隅の柱穴 1 基が削平によって消失している。規模や位置からすると本建物はSB-C23~27の付属屋と考えられる。柱穴 平面形は円形ないし楕円形で直径25~35cm前後、深さ10~15cmである。柱並びは良好で柱間は南北2.1m、東西0.9~1.0mである。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-C29 (図版26 写真図版38)

検出状況 調査区中央南端付近の段丘上で検出した。付近の遺構分布は疎らであるものの、調査区南側 の神戸市教委が調査した部分では遺構密度が高く、遺跡の中心部分の一角に位置するものと考える。

形状・規模 桁行 2 間、梁行 1 間の南北棟の側柱建物として復元できる。桁行方向はN 7°Wの偏りを示す。規模は桁行5.0m、梁行3.4mを測る。柱の並びは良好であり、柱穴間距離は、桁行の南側 1 間が 2 m前後である他は 3 m前後を測る。

柱穴 掘形の形状が円形または隅丸方形を呈し、径または一辺が0.4~0.7mの規模である。この規模は付近に分布する柱穴より明らかに大型であり容易に建物として抽出できた。検出面からの深さは最も深いものでも20cm程度しか残存していない。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していないが、P6から出土した土器片は古墳時代後期のものがある。

SB-C30 (図版26 写真図版38)

検出状況 調査区南東端の建物群の1棟である。

形状・規模 側柱構造の東西棟で建物の規模は桁行3間×梁行1間(5.5×2.4m)である。

柱穴 平面形は円形ないし楕円形で直径40~60cm前後、深さ10~20cmである。柱並びは良好であるが、 柱間は東辺の狭長が著しい。また、北東隅の柱穴が削平によって痕跡程度となっている。

出土遺物 P7から須恵器埦 (77) が出土している。出土遺物から建物は12世紀代と考えられる。

SB-C31 (図版27 写真図版38·39)

検出状況 調査区南東部の南壁際で検出した。遺跡の中心部分の一角にあたるものの東側は谷部に面し、中区の遺構が分布する範囲の東端付近となる。建物は南側は調査区外へ続き全容は明らかにしえなかった。SH-C16と重複するが断面観察ではSH-C16が埋没した後に本建物の柱穴が掘り込まれている。

形状・規模 北東 - 南西方向に主軸をもつ東西 2 間、南北 2 間以上の総柱建物である。規模は東西4.4m、南北3.2m以上を測る。南北方向の建物の偏りはN34° Eを示す。柱の並びは良好であり、柱穴間距離は、東西が2.2m前後、南北は1.6m前後を測る。

柱穴 掘形の形状が不整な楕円形を呈し、径は0.4×0.6mの規模である。検出面からの深さは最も深い ものでも30cm程度しか残存していない。

出土遺物 P6より須恵器坏身(45)が、P2より鉇(M4)が出土している。須恵器坏身は出土状況から柱 抜き取り後に投入したものと判断している。したがって本建物の廃絶時期は6世紀末頃と推定する。

SB-C32 (図版27 写真図版38·39)

検出状況 調査区南東部で検出した。遺跡の中心部分の一角にあたるものの東側は谷部に面し、中区の 遺構が分布する範囲の東端付近となる。SH-C17・18と重複し、切合関係から少なくともSH-C17より本 建物が後出する。

形状・規模 削平などにより一部柱穴を欠くものの桁行3間、梁行3間の総柱建物として復元できる。 梁行方向の偏りはN19°Wを示す。規模は桁行4.8m、梁行3.8mを測る。柱の並びは良好であり、柱穴間 距離は、桁行が1.6m前後、梁行は1.2m前後を測る。

柱穴 掘形の形状が不整な円形または隅丸方形を呈し、径または一辺が0.4~0.6mの規模である。検出 面からの深さは20~40cm程度である。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していないが、P9・14から出土した土器片は古墳時代後期のものがある。

3. 柱穴

概要

調査区内で多数検出したが、大半は削平により深さは浅く残存状況は良好でない。中区中央付近では 非常に高い密度で検出した。ここで記述したものは掘立柱建物跡として復元しえなかったものである。

平成10年度調査区内東半部では18基、西半部では約50基の柱穴を検出したが、掘立柱建物跡として組み合うものは認められなかった。ただし、西半部の南半部に存在する柱穴群は掘立柱建物跡の一部である可能性がある。

以下遺物が出土したものを主体に説明する。

P-C02 (図版28 写真図版40)

検出状況 SB-C23~27が検出された柱穴で、SD-C03を掘り込んでいた。

形状・規模 堀形の平面は円形で、直径0.35mの規模を持つ。

出土遺物 内部からは須恵器埦 (79) が据えられていた。柱抜き取り後の地鎮めと考えられる。

P-C19 (図版28 写真図版40)

検出状況 SB-C23~27を検出した建物群の北東半部で検出した。溝状遺構と重複している。

形状・規模 掘形は隅丸方形状を呈し、径38cmを測る。検出面からの深さは30cmである。

出土遺物 土師器堝 (96) が破砕された状態で出土した。比較的大型の破片を立てるような状況から、 柱の抜き取り後に投入したものと考える。

P-C22 (図版 5 写真図版21)

検出状況 西半部段丘下の北部で検出した。竪穴住居跡状遺構SK-C18の想定東側壁下に位置する。 形状・規模 掘形は径35cmの円形で、柱痕は長径18cmである。検出面からの深さは30cmを測る。 出土遺物 掘形から弥生土器甕口縁部の小片(99)が出土したが、柱穴の時期を示すものではない。

P-C23 (図版 5 写真図版21)

検出状況 西半部段丘下の北部で検出した。竪穴住居跡状遺構SK-C19の想定東側壁下に位置する。 形状・規模 掘形は径33cmの円形で、柱痕は検出できなかった。検出面からの深さは64cmである。 出土遺物 柱穴埋土から弥生土器底部と思われる小片(100)が出土したが、柱穴の時期は不明である。

P-C24 (図版 5 写真図版21)

検出状況 西半部段丘下中央部で検出した。竪穴住居跡状遺構SH-C19の想定範囲内に位置する。 形状・規模 掘形は径約50cmの円形で、柱痕は径15cmと小さい。検出面からの深さは20cmを測る。 出土遺物 掘形から古墳時代須恵器坏小片(101)が出土しており、柱穴の時期を示す可能性がある。

P-C25 (図版 5 写真図版21)

検出状況 西半部段丘下南部で検出した。竪穴住居跡状遺構SH-C19の想定範囲内に位置する。 形状・規模 掘形は径32cmの円形で、柱痕は径10cmである。検出面からの深さは27cmを測る。 出土遺物 柱穴埋土から土師器甕口縁部の小片(102)が出土した。奈良時代~平安時代の可能性がある。

P-C26 (図版 5 写真図版21)

検出状況 西半部段丘下中央部で検出し、竪穴住居跡状遺構SH-C19の赤色顔料出土位置に近接する。 形状・規模 掘形は長径35cm・短径28cmの楕円形で、柱痕は径12cm。検出面からの深さは22cmを測る。 出土遺物 掘形から竈破片(103)が出土している。古墳時代後期の可能性があり、SH-C19に伴うもの かもしれない。 P-C27 (図版 5 写真図版21)

検出状況 西半部段丘下の北部で検出した。竪穴住居跡状遺構SK-C18の想定範囲内に位置する。

形状・規模 掘形は長径26cm・短径19cmの小さな楕円形で、柱痕は径12cmである。検出面からの深さは 25cmを測る。

出土遺物 掘形から平安時代頃の土師器埦口縁部片 (104) が出土していることから、SK-C18に伴うものでないことは明らかである。

P-C37 (図版28 写真図版40)

検出状況 調査区西寄りSB-C19の南辺に重なって検出された。

形状・規模 堀形の平面は円形で直径0.3mの規模を持つ。

出土遺物 柱穴底には土師器羽釜(117)が据えられていた。柱抜き取り後の地鎮めと考えられる。

4. 土器埋納遺構・墓

SX-C01 (図版28 写真図版41)

検出状況 調査区西半部の段丘崖裾付近で検出した土器埋納遺構である。他の遺構との重複はみられない。

形状・規模 掘方は円形を呈し、径0.85m、検出面からの深さは15cm。削平により残存状況は不良である。 出土遺物 掘形底から弥生土器底部(136)が出土した。出土状況から甕または壺を横倒させた状態で 埋納していたものと推定する。

SX-C02 (図版28 写真図版41)

検出状況 中世墓である。墓坑底に礫を敷き詰めた状態で検出された。

形状・規模 墓坑の規模は長軸1.1m、幅1.2m、検出深さ0.15mである。礫は亜角礫が多いが円礫も混じるので川原から採取したものである可能性が高い。SX-E03の検出状況からするとこの周囲に堀形が存在した可能性がある。

出土遺物 出土していない。

SX-C03 (図版28 写真図版41)

検出状況 中世墓である。広く掘られた堀形の南東寄りに主体部が構築される。

形状・規模 SX-C02同様、墓穴底に円礫を敷き詰めていた。ただ、これらの礫はSX-C02よりは小型のものである。堀形は長さ1.4m、幅0.7mの規模で、主体部は長さ0.75m、幅0.45mである。

出土遺物 出土していない。

5. 土坑

SK-C01 (図版29 写真図版42)

検出状況 SH-C10と重複し、SH-C10埋没後に本遺構が掘り込まれる。

形状・規模 楕円形の土坑で、長軸2.3m、幅1.7m、深さ0.4mの規模をもつ。

出土遺物 土坑底からまとまった状態で土師器坏137~140が出土している。この遺物の出土から土坑の

時期は12世紀後半~13世紀初頭と考えられる。

SK-C02 (図版10 写真図版27)

検出状況 調査区中央付近の上位段丘上で検出した。SH-C10と重複し、断面観察から本遺構が先行すると判断した。平成13年度第1・3次調査区にまたがって検出している。第1次調査時には円形の竪穴住居跡を想定したが、その後の第3次調査の結果により土坑とした。東半部は削平により掘り込みはほとんど損なわれている。

形状・規模 平面形は北西 - 南東方向に主軸をもつ楕円形を呈する。長径約5 m、短径約4 mを測る。最も残存状況のよい西端付近では、SH-C10床面からの深さ15cmを測る。底はほぼ平坦だが地形の下降に伴い自然消滅する。

埋土 黒褐を呈する上層と、黄褐を呈する下層からなる。

出土遺物 埋土下層から須恵器甕 (141)、坏身 (142)、土師器甕 (143) などが出土しているが、SH-C10のものが混入している可能性もある。

SK-C03 (図版11 写真図版27)

検出状況 調査区中央付近の段丘上で検出した。SH-C11や複数の柱穴と重複する。SH-C11との先後関係は不明であるが、柱穴には先行している。

形状・規模 平面形は北西 - 南東方向にのびる不整な長楕円形を呈する。長径4.7m、短径1.8mを測る。 検出面からの深さは15cm程度で断面は皿状を呈する。

埋土 自然堆積である。

SK-C04 (図版7 写真図版24)

検出状況 調査区北西部の段丘崖際で検出した。SH-C02と重複し本遺構が後出する。また柱穴と重複するが先後関係は不明である。

形状・規模 南北方向に主軸をもつ不整な隅丸長方形を呈する。長さ3.9m、幅1.7mを測る。底部は北から南へ向けて傾斜する。

埋土 上下2層に大別でき、いずれも礫が混じる。また上層には黄褐シルトブロックが混じる。

出土遺物 埋土内より須恵器坏蓋 (149)、坏身 (150) が出土している。ただしSH-C02に伴うものが混入している可能性もある。

SK-C05 (図版29 写真図版)

検出状況 調査区調査区中央付近の段丘上で検出した。遺構の密度が高い箇所であり、本遺構はSB-C22と重複し、それを構成する柱穴に切られている。

形状・規模 長さ3.9m、幅1.53m、深さ15cmの規模を持つ。平面が長楕円形の土坑である。

埋土 灰黄シルト質極細砂の単層である。

出土遺物 埋土内より土師器城(151)が出土している。時期は中世と考えられる。

SK-C06 (図版29 写真図版42)

検出状況 本土坑はSD-C01を切るもので、SB-C22の東側で検出された。

形状・規模 長さ1.1m、幅0.55m、深さ0.16mの規模で、平面が楕円形の土坑である。

出土遺物 内部からは須恵器城 (152) が出土した。これから遺構の時期は13世紀代と考えられる。

SK-C07 (図版29 写真図版42)

検出状況 調査区調査区中央付近の段丘上で検出した。中世の掘立柱建物跡が複数重複する中にあり、 それらを構成する柱穴に本遺構が切られている。

形状・規模 北東 - 南西方向に主軸をもつ不整な隅丸長方形を呈する。長さ1.0m、幅0.85mを測る。断面は逆台形を呈し、底部はほぼ平坦である。検出面からの深さは15cmである。

埋土 焼土や地山ブロックが混じる褐灰シルト質極細砂であるが、底付近には炭や焼土が層をなす部分がある。炭・焼土が混じる状況や出土遺物などから、本遺構は竪穴住居に伴う竃の残欠である可能性がある。

出土遺物 埋土内より須恵器直口壺(153)が出土している。

SK-C08 (図版29 写真図版42)

検出状況 掘立柱建物群SB-C23~27の南西角に接している。

形状・規模 南北方向に主軸をもつ卵形を呈する。長径1.65m、短径1.22mを測る。深さは6 cmで、断面は皿状を呈する。

埋土 極細砂~粗砂に細礫・中礫が混じっており、粒度は揃っていない。

出土遺物 須恵器椀 (154) が出土している。この遺物から遺構の時期は13世紀代と考えられる。

SK-C10 (図版30 写真図版)

検出状況 SB-C23~27が重なる南東寄りで検出された。

形状・規模 円形の土坑で内部には礫・土器などが多量に検出された。直径0.7m、深さ0.1mの規模である。 出土遺物 須恵器椀皿(158)、青磁碗(159)が出土している。この遺物から遺構の時期は13世紀代と 考えられる。

SK-C11 (図版30 写真図版43)

検出状況 SB-C23~27が重なる南端で検出された土坑である。

形状・規模 長さ0.9m、幅0.7m、深さ0.18mの隅円方形の土坑である。

出土遺物 須恵器埦 (160) ~ (162)、黒色土器埦 (163) が出土している。これらの遺物から土坑の時期は12世紀代と考えられる。

SK-C13 (図版30 写真図版43)

検出状況 調査区調査区中央付近の谷に面した段丘東端付近で検出したP-C52などの中世の柱穴と重複 し本遺構が切られている。

形状・規模 北西-南東方向に主軸をもつ不整な楕円形を呈する。規模は、長さ3m、幅2.2mを測る。

断面は浅いU字状を呈する。検出面からの深さは30cmである。

埋土 側面からの流入土が堆積した後、1・2層により埋没する。自然堆積である。

出土遺物 埋土内より須恵器甕(165・167)、須恵器高坏脚部(166)が出土している。

SK-C14 (図版30 写真図版43)

検出状況 SB-C23~27が重なる東側で検出された土坑である。

形状・規模 不定形土坑で長さ3.3m、幅2.3m、深さ0.1mの規模である。

出土遺物 須恵器埦 (168)・皿 (169)、土師器羽釜 (170・171) が出土している。この遺物から遺構の時期は13世紀代と考えられる。

SK-C15 (図版31 写真図版44)

検出状況 東半部段丘上の中央部南端付近で検出した。遺構ベース土は礫層である。

形状・規模 平面形は隅丸長方形に近い長楕円形を呈する。長軸は東西方向で、長径1.45m、短径0.70 mの規模であることから墓の可能性もあるが、側面の傾斜が緩やかであることから、墓とは断定していない。検出面からの深さは12cmで、底面はほぼ平坦・水平であり、底面の高低差は5cm以内におさまる。埋土 単一層で、10YR5/2灰黄褐色の極細砂に10YR5/6黄褐色の極細砂が混じる層で、大礫も含んでいた。

出土遺物 土坑埋土中の西側に集中して土師器堝 (172・173) が破片となって出土した。 2 点は同一個体である可能性が高い。中世後期と考えられる。

SK-C16 (図版 5 写真図版21)

検出状況 東半部段丘上の北西隅部分で検出した。

形状・規模 平面楕円形に近く、南北1.50m、東西1.18mの規模である。底面は平坦で長径0.95m、短径0.80mを測る。検出面からの深さは52cmである。近世の肥溜めと推測しているが、明確な根拠はない。

出土遺物 本土坑からは遺物は出土しなかった。

SK-C17 (図版31 写真図版45)

検出状況 東半部段丘上の北東部で検出した。遺構ベース土は礫層である。

形状・規模 平面不整方形を呈するが、西辺は確認調査により不明となっている。南北方向の最大規模は2.78m、東西方向は2.75mである。底面はほぼ水平・平坦で、検出面からの深さは、最も深いところで約20cmを測る。

埋土 上部包含層と同一土層である、10YR5/2灰黄褐色を呈する極細粒砂まじりの細粒砂で埋まっていた。

出土遺物 図示できなかったが、埋土中から東播系須恵器の14世紀頃の片口鉢片が出土した。

SK-C18 (図版 5 写真図版21)

検出状況 西半部の段丘下面の中央部北端で検出した。斜面上側にあたる東側で弧状を呈する壁状の段差を検出したが、南側および西側では検出できず、北側は調査区外にひろがる可能性が高い。

形状・規模 高さ9cmの東側壁が弧状を呈することから、平面円形と思われるが、方形である可能性も捨てきれない。また、住居跡に伴う柱穴が検出できなかったことから、住居跡との断定はしていない。 埋土 埋土は下部包含層である、第39層の単一層である。

出土遺物 埋土中から弥生土器底部 (176)・土師器甕口縁部 (174)・土師器高坏脚柱部 (175) および サヌカイト剥片が出土した。出土遺物は弥生時代~古墳時代のものであるが、本土坑の時期を決定できるものではない。

6. 井戸

SE-C01 (図版31 写真図版45)

検出状況 掘立柱建物群SB-C23~27の北側西寄りに位置している。

形状・規模 ややいびつな円形を呈し、長径2.2m、短径1.8mを測る。深さは90cmで、断面は下端の円い逆台形を呈する。

埋土 断面観察の結果、井戸枠の痕跡は認められず、中央に向かって落ち込む土層の重なりから判断すると、素掘りの井戸とみられる。 5層・7層は有機成分を多く含むシルト層で、水が溜まっていた状態を表す。その間の6層はブロック状の埋土に礫や土器が多数混じっており、意識的に埋め戻した状況を示す。 4層以上にも礫・土器が含まれるが、段階的に埋まっていったようである。

遺物 出土した土器量は非常に多く、上層・中層・下層に分けて取り上げている。上層からは須恵器こね鉢 (192)、土師器鍋 (193~195)・羽釜 (196) が、下層からは土師器鍋 (197) が、底面からは須恵器こね鉢 (198)、土師器羽釜 (199) が出土した。

7. 溝

SD-C01 (図版29)

検出状況 SB-C22に重なって検出された溝で、SK-C06に切られる。

形状・規模 幅0.7~0.8m、深さ0.18mの規模で、検出長は8.0mである。時期は中世と考えられる。

出土遺物 土師器羽釜(177) \sim (179)の3点が出土しており、これらの遺物から遺構は13世紀代のものと考えられる。

SD-C02·03 (図版22)

検出状況 SB-C23~27が集中する東側を区画する溝である。

形状・規模 SD-C02が幅0.7~0.8m、深さ0.15m、検出長17m、SD-C03が幅0.7~0.9m、深さ0.18m、 検出長13mの規模である。

出土遺物 SD-C02からは須恵器埦(180)が出土している。

SD-C04 (図版 5 写真図版21)

検出状況 東半部段丘上の南西端付近で検出した。北西 - 南東方向にのびる小規模な溝状遺構である。 形状・規模 全長は約4.5mで、西端は傾斜面により自然消滅している。西部で東方向に短く枝状にの びる部分がある。溝の最大幅は40cmで、検出面からの最大深は17cmである。底は西側が東側よりも16cm 低くなっている。 出土遺物 本溝からは遺物は出土しなかった。

8. 谷部

SV-C01 (図版4 写真図版21·22)

検出状況 調査区中央付近の北端から調査区東半部へのびる。東区SV-E01とは同一の谷である。この谷を切る遺構はなく、中区の東を限るものと考えている。

形状・規模 北端は溝状を呈し、さらに調査区北側へのびる。また東側は、東区SV-E01へ続き、東区 西南隅付近を経て調査区南側へ続いている。

出土遺物 東区や神戸市教委の調査ではまとまった遺物の出土がみられたが、少なくとも本調査区内においては、遺物の出土はごく少量である。また図化しえなかったが東半部より土師器甕が出土している。

第4節 出土遺物

1. 竪穴住居

SH-C01 (図版45 写真図版66·67)

19は周壁溝から出土した弥生土器広口壺で頸部から口縁部が残存する。口縁部は短く外反する。口縁端は上下に拡張して面をなし1条の凹線を巡らせる。頸部付近には列点文を施す。外面はミガキ調整である。20は床面から出土した弥生土器底部である。摩滅のため調整は不明である。弥生時代中期後半~末のものであろう。

S1は粘板岩を用いた柱状片刃石斧。刃先は摩滅し、基部は前主面の左側約1/2を欠く。長さ15.0cm、幅2.7 cm、厚さ4.2cm、重さ302.5g。刃部と基部の境界をなす鎬から直線的に基端に至り、後主面は中央部から刃部へ外湾する。横断面は幅より厚さが大きい長方形を呈する。加工は節理方向と平行に行う。

M1は残存状況が不良であるものの鉄鏃であると考える。鏃身は柳葉状を呈し残存長約4.5cm、幅2.5cmを測る。茎部分は欠損するものの、断面は一辺が5mm前後の方形を呈する。

SH-C02 (図版45 写真図版67)

21は竃から出土した土師器甕である。頸部から口縁部が屈曲しわずかに外反しつつ立ち上がり端部は丸くおさめる。体部外面にはタテ方向にハケメ調整を施す。

SH-C03 (図版45 写真図版65)

22は須恵器坏蓋である。丸みをおび天井部と体部との境界は認められない。TK209~217型式期の所産と思われる。

SH-C04 (図版45 写真図版65)

23は須恵器坏身である。立ち上がりは短く内傾し、口縁端部はまるくおさめる。TK217型式期の所産と思われる。

SH-C06 (図版45 写真図版67)

24は柱穴から出土した須恵器坏蓋である。天井部と体部との境界は沈線状となる。TK43型式期前後の所産と思われる。

SH-C07 (図版45 写真図版68)

S2は石皿。半折した亜円礫を用いる。上面は滑らかで中央部が楕円状にわずかにくぼむ。長さ20.4cm、幅20.5cm、厚さ9.05cmを測る。

SH-C08 (図版45 写真図版65)

25は竃から出土した須恵器坏蓋である。天井部と体部との境界がわずかな段差として残っており、 TK10型式期前後の所産と思われる。

SH-C09 (図版45 写真図版67)

26は柱穴から出土した須恵器坏身である。立ち上がりは短く内傾する。底部外面に直線状に描かれた ヘラ記号がある。TK209~217型式期の所産と思われる。

SH-C10 (図版45 写真図版65·67)

27は竃付近から出土した須恵器蓋である。扁平な器形で、低単な天井部から体部が屈曲し口縁端部は まるくおさめる。MT85型式期の所産と思われる。

28・29は須恵器坏身でいずれも立ち上がりが内傾する。29は竃付近から出土したもので、底部外面に直線状に描かれたヘラ記号がある。いずれもTK10型式期の所産と思われる。

SH-C12 (図版45·46 写真図版65·66)

出土遺物は須恵器、土師器がある。須恵器はいずれも埋土内より出土している。

30・31は須恵器坏蓋である。天井部と体部の境界は、30がわずかな段差として残り、31は段差がにぶく凹線状となっている。32・33は須恵器坏身である。立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。32の底部内面には同心円上の当て具痕が認められる。MT15型式期の所産と思われる。

土師器のうち、34と37~40は床面から、その他は埋土内から出土したものである。

34~36は土師器甕である。34は球状の体部からく字に屈曲して口縁部となり、端部は丸い。体部外面は縦方向のハケ目、内面は板ナデを施す。35・36は体部を欠くが34と同様の形状をなすとみられる。

37は小型丸底壺であり、体部はやや扁平な球状をなす。38~40は小型丸底鉢であり、扁平な球状をなす体部から口縁部が長くのびている。41は高坏坏部である。平底から屈曲し口縁部が大きく開く。底部と口縁部との境界は稜を有さない。外面は横方向のミガキを施す。

SH-C14 (図版46 写真図版65·68)

42は土師器小型高坏またはミニチュア土器脚柱部である。柱状の脚柱部から裾部が緩く屈曲して開く。 S3は細粒砂岩製の砥石。半折する。横断面形は長方形を呈する。上端部を除いて全ての面が平滑で 上下面に弱い凹面をもつ。また右側面には斜方向の擦過痕がみられる。現存長5.5cm、幅2.7cm、厚さ1.5cm。 S4は敲石。球状をなし、前面平滑であるが一部に敲打によりつぶれた痕跡が認められる。

SH-C15 (図版47 写真図版66)

43はミニチュアの壺形土器である。頸部は若干のすぼまりをもち、口縁部が短く外反する。頸部には棒状工具による刺突文がみられる。同様に加飾した例は玉津田中遺跡や上脇遺跡に出土例がみられる。 44は弥生土器有段高坏坏部である。口縁部は大きく外反して開く。屈曲部に2条の凹線を巡らせ、その上に波状文を施す。弥生時代後期から末のものであろう。

S5は砂岩の台石である。上面は平坦で中央付近がわずかに窪む。左側面には横方向に溝状の痕跡が みられる。

SH-C16 (図版47 写真図版67)

45は表記の遺構としているが断面の土層観察では、重複するSB-C31P6出土の遺物である。須恵器坏身であり、口径に対し器高が低く、立ち上がり部は内傾する。TK217型式期の所産と思われる。

SH-C17 (図版47 写真図版65·67)

46は土師器甕である。体部を欠く。口縁部は直立ぎみに立ち上がり緩やかに外反する。47・48は土師器高坏である。47は埋土から、48は本住居に伴う可能性があると判断した柱穴P-C53から出土したものである。47は坏部が椀形に内湾して口縁部にいたる。脚柱部から裾部への屈曲は緩やかである。48は有段高坏であり、坏部は稜をもって屈曲し口縁部にいたる。脚柱部と裾部の境界は屈曲する。

2. 掘立柱建物跡

SB-C05 (図版48 写真図版68)

49はP2出土の須恵器皿で、法量は口径9.0cm、器高1.5cmである。薄手の作りで体部を外方に短く開く個体である。

SB-C06 (図版48 写真図版70)

50はP10出土の土師器埦の底部片である。底径2.1cmを測る。

SB-C07 (図版48 写真図版70)

51はP2出土の須恵器埦である。体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部をやや肥厚させる個体である。 法量は口径13.7cmである。52はP6出土の須恵器鉢である。法量は口径29.1cmを測る。口縁部を上下に肥厚させ、縁帯状にする。口縁部内面は横ナデによって窪む。法量は口径29.1cmである。

SB-C09 (図版48)

53はP1出土の須恵器埦の口縁部片である。細片のため詳細は不明。

SB-C12 (図版48 写真図版68·70)

54は須恵器埦で、法量は口径15.7cm、器高5.15cmを測る。内湾気味に立ち上がる体部をもち、口縁部端部を丸くおえる。内面底部はやや窪ませる。55は須恵器皿で、法量は口径8.0cm、器高1.65cmを測る。糸切底で体部を外方に開き、器壁はやや厚手である。いずれもP2より出土。

SB-C17 (図版48 写真図版72·74)

56は須恵器坏蓋である。口径に対し器高の低い扁平な形状である。天井部と体部の境界は丸みをもち 不明瞭である。MT85型式期の所産と思われるが、混入遺物であろう。

57は土師器羽釜である。内傾する口縁部の外面直下に小さな鍔を持つ。58は白磁碗で、法量は口径 15.85cmを測る。薄手の個体で口縁端部を外反させる。森田分類のⅡ類白磁碗に該当する。

SB-C20 (図版48)

59は土師器小皿である。外反する体部をもち、体部上半を横ナデし、口縁端部を尖り気味におえる。 SB-C21 (図版48)

60・61は須恵器埦である。60は直線的に外方に開く体部をもち、口縁部をやや丸く終える。法量は口径15.85cm、器高4.15cmである。61は外方に開く体部であるが中位で小さくくの字に折る。口縁部を丸く終える。法量は口径15.6cm、器高3.2cmを測る。いずれもP2より出土。

SB-C22 (図版48)

62はマダコ壺である。頸部が若干すぼまり口縁部が短く外反する。口縁端部は肥厚させる。外面は縦 方向のハケ目を施す。口径12.0cm。

SB-C23 (図版48 写真図版69·70)

63は須恵器埦である。直線的に外方に開く体部をもち、口縁部をやや丸く終える。口径24.7cm。64は

須恵器鉢である。口縁部を上方に肥厚させ、端部を丸くおえる。65は土師器小皿である。糸切底で体部は短く斜め上方に開く。口径13.55cmである。66は土師器甕である。くの字に外反する口縁部で、外面に縦ハケ、内面は横方向の板ナデ調整が観察される。67は須恵器甕である。口径7.1cm、底径5.4cmの小型のもので、口縁部は頸部から短く外反して終える。外面に右上がりの平行タタキが観察される。

M2は鉄鏃で、柄の部分を欠損し鏃部のみが残存ずる。

SB-C24 (図版48 写真図版68·70)

68~70は須恵器埦でP03から出土した。68は体部を直線的に斜め上方に立ちあげ、口縁部を丸くおえる。口径15.6cm、器高4.35cm、底径5.9cmである。69は体部は直線的に斜め上方に立ちあげ、口縁部を丸くおえる。口径16.5cm、器高4.5cm、底径6.15cmを測る。70は体部を内湾しながら立ちあげ、口縁部を丸くおえる。口径16.7cmである。

71・72は土師器坏で口径13.4~15.15cmである。71は器壁がやや厚く、体部が斜め上方に立ち上がる。72は体部下位で小さく屈曲する個体で、端部を尖り気味におえる。73・74は土師器小皿である。73は体部を短くやや上方に立ち上げる。法量は口径7.85cm、器高1.75cm、底径6.95cmである。74は糸切りで短く斜め上方に立ち上がる体部を持つ。法量は口径7.1cm、器高1.1cm、底径5.6cmである。

SB-C26 (図版48)

75は須恵器埦である。75はやや内湾する体部をもち、端部を小さく丸くおえる。口径14.7cm。M3は 鉄釘で、頭部分および先端を欠く個体である。

SB-27 (図版48 写真図版70)

76はやや直線的な体部で、端部の上端に小さく面を持つ。口径15.5cm、器高4.35cm、底径6.85cm。

SB-C30 (図版48 写真図版68)

77は須恵器埦である。高台を持ち外面底部にヘラ記号が観察される。底径5.6cmである。

SB-C31 (図版48 写真図版69)

M4はP2から出土した釶である。刃部と茎部の幅がほぼ同じ柳葉形を呈し、長さ10.8cm、幅0.8cmを測る。刃部の長さは4.5cmで刃先には鎬が明瞭に認められる。

3. 柱穴

P-C01 (図版49)

78は須恵器埦である。内湾する体部で口縁部を丸くおえる。口径15.75cmである。

P-C02 (図版49 写真図版68)

79は須恵器埦である。直線的に外開きの体部を持つ。口径16.1cm、底径5.3cmである。

P-C03 (図版49 写真図版71)

80は須恵器埦である。体部を屈曲しながら立ち上げ、口縁部を丸くおえる。法量は口径16.1cm、器高4.1 cm、底径7.2cmである。

P-C04 (図版49)

81は須恵器埦である。体部を直線的に立ち上げ、口縁部を丸くおえる。法量は口径16.1cm、器高4.85cm、 底径5.85cmである。

P-C05 (図版49 写真図版)

82は須恵器埦である。口縁部の破片で端部を丸くおえる。口径14.6cmである。

P-C06 (図版49 写真図版68)

83は須恵器皿である。短く斜め上方に立ち上げ、口縁部を丸くおえる。法量は口径 7.85cm、器高1.8cm、 底径5.35cmである。

P-C07 (図版49)

84は須恵器鉢である。口縁部を上方に拡張し、口縁部内面直下を窪ませる。法量は口径26.1cm。

P-C08 (図版49)

85は須恵器鉢である。口縁部を上下に拡張し、口縁部内面直下を窪ませる。法量は口径29.85cmである。

P-C09 (図版49)

86は須恵器鉢である。口縁部を上方に拡張し、口縁部上端をやや丸くおえる。

P-C10 (図版49 写真図版71)

87は土師器坏である。法量は口径13.1cm、器高3.6cm、底径7.5cmで、小型の製品である。

P-C11 (図版49 写真図版71)

88は土師器台付坏である。外開きの体部を持ち、口縁部を丸くおえる。広大内面は中空で全体に薄手のつくりである。口径15.85cmである。

P-C12 (図版49 写真図版71)

89は土師器小皿である。外開きの体部を持ち、口縁部を丸くおえる。法量は口径8.65cm、器高1.7cm、底径5.5cmである。

P-C13 (図版49)

90は土師器小皿である。短く上方に立ち上げ、口縁部を丸くおえる。法量は口径7.4cm、器高1.2cm、 底径6.9cmである。

P-C14 (図版49 写真図版71)

91は土師器羽釜である。丸い体部を持ち、口縁部も内湾する。口縁部外面下方に板状の鍔を貼り付ける。口径22.15cmである。

P-C15 (図版49 写真図版71)

92は土師器足鍋の脚である。外面にハケ目の痕跡がわずかに観察される。

P-C16 (図版49 写真図版)

93は土師器羽釜である。直立する口縁の外面に板状の鍔を持つ個体である。ハケ目の痕跡がわずかに観察される。

P-C17 (図版49 写真図版74)

94は白磁壺の口縁部片である。口縁部を大きく外方に開くもので、口径7.75cmを測る。

P-C18 (図版49 写真図版72)

95は須恵器壺である。頸部から口縁部のみ残存する。口縁部は外反し端部は玉縁状を呈する。頸部にはカキ目を巡らせる。

P-C19 (図版49 写真図版69)

96は土師器堝である。口縁部が外反ぎみに開き端部は丸くおさめる。内面の体部と口縁部の境界には 稜を有さない。飛鳥時代から奈良時代初頭のものであろう。

P-C20 (図版49 写真図版72)

97・98は土師器堝である。いずれも口縁部は体部から屈曲して直線的に開き端面をもつ。内面の体部

と口縁部の境界には稜を有する。飛鳥時代から奈良時代初頭のものであるが、97は同じ器種である96に 先行するものであろう。

P-C21 (図版49 写真図版69)

M5は和釘である。頭部は残るが、先端が折れ曲がる。

P-C22 (図版50 写真図版72下)

99はP-C22の掘形から出土した弥生土器甕口縁部の小片である。口縁端部には面をもつが、無文である。わずかに残る体部内面はヘラ削りのようである。中期後半と思われる。小片のため、柱穴の時期を示すとは限らない。

P-C23 (図版50 写真図版72下)

100はP-C23埋土から出土した底部と思われる小片である。平底であることから弥生後期頃と思われるが、平安時代~鎌倉時代の土師器埦などの底部である可能性もある。

P-C24 (図版50 写真図版72下)

101はP-C24の掘形出土の須恵器坏片である。底部とたちあがり部を欠失している。1/5程度の破片であることから、柱穴の時期を示している可能性もあろう。TK10型式期~TK43型式期と思われる。

P-C25 (図版50 写真図版72下)

102はP-C25の埋土から出土した土師器甕口縁部の小片で、外面にはナデにより多数の凹線が認められるが文様を意識したものではないと思われる。奈良時代~平安時代の所産の可能性がある。

P-C26 (図版50 写真図版72下)

103はP-C26の掘形埋土から出土した竈破片である。竈の左側鍔上部が異様なほど左側に傾いている。 二次的被熱により赤紫橙色化した部分がある。古墳時代後期の所産の可能性がある。

P-C27 (図版50 写真図版72下)

104はP-C27掘形出土の土師器埦口縁部小片である。口径13.0cmで、体部下半以下を欠失している。体部外面にはロクロ目が目立つ。平安時代頃と思われる。胎土にはクサリ礫を含んでいる。

P-C28 (図版50 写真図版69)

105・106は手づくねの土師器小皿である。 2 個体とも同一技法で製作される。手づくね皿で体部上半を横ナデし、外面下半から底部は未調整である。口径11.4~11.65cmである。

P-C29 (図版50 写真図版69)

107は土師器埦である。底部はやや丸みをもち、口縁端部は丸くおさめる。内面はミガキを施す。108は土師器鉢である。体部は丸みをもち、口縁端部は丸くおさめる。体部外面は横方向のミガキを施し、体部内面の下段に渦巻き状の暗文がある。

P-C30 (図版50 写真図版73)

109は須恵器埦である。器高が低く底部径がやや大きくなる個体である。法量は口径14.8cm、器高4.3cm、 底径7.6cmを測る。13世紀後半段階のものである。

P-C31 (図版50 写真図版)

110は須恵器埦である。口縁部片で大きく開く個体である。口径15.55cmである。時期は13世紀後半ものである。

P-C32 (図版50 写真図版)

111は須恵器埦である。体部が直線的で口縁部を丸くおえる。法量は口径15.9cm、器高4.85cm、底径7.6

cmである。時期は13世紀後半のものである。

P-C33 (図版50 写真図版73)

112は須恵器皿である。法量は口径8.55cm、器高2.25cm、底径4.7cmである。

P-C34 (図版50 写真図版73)

113は須恵器皿である。やや湾曲して外開きに立ち上がる体部を持つ。法量は口径7.9cm、器高1.35cm、 底径4.7cmである。

P-C35 (図版50 写真図版73)

114・115は須恵器鉢である。口縁部は上方に拡張され、外面に面を持つ。114は口径26.15cm、115は口径26.15cmである。

P-C36 (図版50 写真図版)

116は土師器埦の底部片である。内面底部がやや窪む個体で、底部は糸切りとなる。底径6.1cm。

P-C37 (図版50 写真図版73)

117は須恵器羽釜である。球形の体部で口縁部は内傾し、上端に面を持つ。口縁部のやや下に鍔を貼り付ける。内面には板ナデ調整がクシ描き状の痕跡として残される。口径18.6cmである。

P-C38 (図版50 写真図版)

118は須恵器坏身である。口径に対し器高は低い。立ち上がりは短く内傾する。

P-C39 (図版50 写真図版69)

119は須恵器塊である。内湾気味に立ち上がる体部で、口縁端をやや角ばらせておえる。口径15.4cm、器高5.1cm、底径5.45cmである。128は土師器小皿である。短く外反する体部を持ち、口縁端部を丸くおえる。口径7.9cm、器高1.5cm、底径4.9cm。

P-C40 (図版50)

120は須恵器埦である。やや内湾気味に立ち上がる体部で、口縁部を丸くおえる。口径15.0cmである。

P-C41 (図版50)

121は須恵器埦である。直立気味の体部を持ち、口縁部を丸くおえる。口径12.0cmである。

P-C42 (図版50)

122は須恵器埦である。口縁部下でやや屈曲し、端部を丸くおえる。

P-C43 (図版50)

123・124・133の3個体がある。123・124は須恵器埦、133は青磁碗である。123は薄手で内湾しながら立ち上がる体部を持ち、体部下半に二条の沈線を持つ。口径16.5cmである。124は底部片で、口径6.7cmである。削り出しの高台が残り、内面底体部の境がやや窪み、沈線状になる。133は底部片である。

P-C44 (図版50 写真図版69)

125は須恵器皿である。底部は糸切り手法のよって切り離す。器高の高い個体で直線的な体部を持つ。 法量は口径9.2cm、器高2.05cm、底径6.0cmである。

P-C45 (図版50 写真図版73)

126は須恵器皿である。底部は糸切り手法によって切り離す。腰部が丸く立ち上がり、口縁部を丸くおえる。法量は口径8.75cm、器高1.45cm、底径7.1cmである。

P-C46 (図版50 写真図版74)

127は須恵器埦の底部片である。輪高台が残り内面底部がやや窪む。底径7.4cmである。

P-C47 (図版50 写真図版73)

129は土師器甕である。外面に平行タタキ、内面は当て具痕跡をわずかに残す。口縁部は外方に面を持つ。口径24.05cmである。

P-C48 (図版50 写真図版73)

130は土師器甕である。口縁部をくの字に折り、上方に面を持つ。外面は縦ハケ、内面は板ナデ痕跡を観察する。口径31.9cmである。

P-C49 (図版50 写真図版69)

131は土師器甕である。口縁部をくの字に折り、外方に面を持つ。外面にやや右上がりの平行タタキ、 内面は指ナデ痕跡を観察する。口径26.9cmである。

P-C50 (図版50 写真図版74)

132は青磁皿である。竜泉窯系の製品と考えられる。口径10.25cmである。

P-C51 (図版50 写真図版74)

134は白磁の細片である。器種などの詳細は不明である。

P-C52 (図版50)

135は緑釉陶器の細片である。

4. 土器埋納遺構

SX-C01 (図版51 写真図版74)

136は弥生土器甕の下半部とみられる。外面にタテ方向のハケ目が認められる。弥生時代中期後半のものと思われる。

5. 土坑

SK-C01 (図版51 写真図版74)

137~140は土師器埦で、4個体とも同一タイプの技法で製作されたものである。口径11.25~12.3cm、器高4.65~5.2cm、底径5.4~6.3cmである。すべて高台を持つ個体で、内面底部が窪む。体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁端部をすんなりおえる。ただし140のみやや肥厚して丸くおえる。

SK-C02 (図版51 写真図版75)

141は須恵器甕であり、直線状に開く口縁部のみ残存する。端部は屈曲させて下方に拡張させる。外面は2条1単位の凹線3帯により分割され、その間に斜放射状のヘラ描き文を施す。142は須恵器坏身である。立ち上がりは短く内傾する。143は土師器甕である。外反する口縁部をもち端部は丸くおさめる。SK-C03(図版51 写真図版75・76)

144~146は須恵器坏蓋である。天井部と体部の境界は、144・145は段を有しないが、わずかな傾斜変化点として残存する。146は丸みをもち段は有さない。いずれも口縁端部は丸くおさめている。148は須恵器横瓶である。俵形を呈する体部外面はタタキの後中央付近にカキ目を施す。口縁部は短く開いて外反する。端部は外傾する面をもつ。147は須恵器腿である。体部は丸くなで肩ぎみである。頸部と肩部に沈線を巡らせ、これを切って孔を穿つ。沈線以外に体部に加飾しない。口頸部は外に開くが受け部を欠いている。

SK-C04 (図版51 写真図版75)

149は須恵器坏蓋である。天井部と体部の境界はわずかな段差となり、口縁端部は稜を有している。 MT15型式期と思われる。150は須恵器坏身である。受け部、立ち上がりともに短く退化した形態であり、 TK217型式期の所産と思われる。

SK-C05 (図版51 写真図版75)

151は土師器境である。底部は丸底ぎみで口縁部は弱く屈曲して丸くおさめる。内面はヘラミガキ、外面はハケ目調整を施す。

SK-C06 (図版51 写真図版74)

152は須恵器埦である。湾曲する体部を持ち、端部を丸くおえる。口径15.75cmである。

SK-C07 (図版52 写真図版75)

153は須恵器直口壺である。球状を呈する体部は最大径を上半部にもち、肩部はやや張って口縁部は 直立する。底部を欠くが丸底とみられる。肩部と体部の境界付近には凹線2条を施す。TK209~217型 式期の所産と思われる。

SK-C08 (図版52 写真図版74)

154は須恵器埦である。直線的に斜めに開く体部で、口縁端部をやや丸くおえる。法量は口径15.1cm、器高4.4cm、底径5.45cmである。

SK-C09 (図版52 写真図版78)

155・156の2個体がある。155は須恵器埦、156は須恵器皿である。155は口径15.65cmである。直線的に斜めに開く体部で、口縁端部をやや肥厚させて丸くおえる。156は斜めに立ち上がる体部を持ち、口縁端部を丸くおえる。口径7.9cm、器高1.45cm、底径6.15cmである。

SK-C10 (図版52)

157は須恵器境である。直線的に斜めに開く体部で、口縁端部をやや丸くおえる。口径14.85cm。158は土師器小皿である。手づくね皿で口径7.3cm、器高1.2cm、底径4.6cmである。159は青磁碗の底部片である。SK-C11(図版52 写真図版78)

160~163の4個体がある。160~162は須恵器城、163は黒色土器城である。160は口径15.2cm、器高4.0 cm、底径6.3cmである。体部下位で腰の張る器形である。高台はないが、内面底部が少し窪む。161はベタ高台が観察される個体で、内面は少し窪ませる。162は高台付城である。底部に「ハ」の字に踏ん張る輪高台を張り付ける。163は黒色土器械で内黒タイプのものである。底部は欠損するが、湾曲する体部を持ち、いわゆる椀形になる器形を持つ。内面に細かい磨きが観察される。

SK-C12 (図版52)

164は土師器羽釜の口縁部片である。口縁下に厚手で大きい鍔を持つ。口縁部外面は幅広のナデを施す。 口径22.15cmである。

SK-C13 (図版52 写真図版76)

165・167は須恵器甕である。165は口縁部のみ残存するが、体部は外面が平行タタキ、内面に同心円 文タタキがわずかに認められる。口縁部は外反し、端部を上方に拡張する。167は体部下半を欠くが肩 部がやや張りをもち、最大径は体部上半にあると思われる。外面はタテ方向の平行タタキの後カキ目を 施し、内面には同心円文タタキが残る。口縁部は外反しながら開き端部は外傾する面をもつ。166は須 恵器高坏脚部である。脚柱部から裾部へラッパ状に開き、境界付近に2条の凹線をめぐらせる。

SK-C14 (図版52 写真図版78)

168~171の4個体がある。168は須恵器埦、169は須恵器皿、170・171は土師器羽釜である。168は口径15.85cm、器高5.0cm、底径6.45~7.0cmである。体部下位をやや屈曲させ口縁端部を丸く肥厚させる。169は斜め上方に開く小さな体部を持つ。170・171は有段羽釜の模倣品である。170は球形の器形を持ち、口縁上端に面を持つ。外面には右上がりの平行タタキが観察される。171は直立気味の体部で、口縁上端に面を持つ。外面に平行タタキ、内面に板ナデの痕跡が確認される。

SK-C15 (図版53 写真図版77)

172・173はともに土坑埋土中で破片となって出土した土師器堝で、体部外面は平行タタキを施し、底部を欠失している。172の口径は18.8cm、残存高は9.8cm、173の口径は21.3cmを測るが、両者ともに口縁部などの形状が非常に似ていることから、両者は同一個体の可能性が高い。焼成はやや軟質で、クサリ礫を多く含み、器表が磨滅している部分が多い。体部内面は板ナデ状、体部外面には煤が付着しており、口縁部は暗色に変色している。中世後期の14世紀後半~15世紀の所産と考えられる。

SK-C18 (図版53 写真図版77)

土坑状窪みの埋土から3点の土器とサヌカイト剥片が1点出土した。

174は土師器甕の口縁部片で、口径は17.8cm。外上方に外反気味に大きく開き長くのびた口縁部で、端部は丸くおさめるが、残存状態が悪く、器表が剝離して器壁が薄くなっている。外面の頸部以下は縦ハケを施している。古墳時代中期頃と思われる。

175は土師器高坏の脚柱部で、坏部および裾部を欠失している。脚柱部は中実で、古墳時代後期頃であろうか。

176は底径6.7cmの弥生土器底部の破片で、大きめの平底であることから中期後半の可能性がある。

S6は打面側を折損した剝片である。腹面の右側面からの打撃の際、腹面に対する剝離と折れが、同時に形成された可能性が高い。ただし、折れ面の風化が、器表の剝離面の風化よりもやや浅いように見えるので、打撃によって潜在的な裂痕が生じ、埋没過程で折れに発展した可能性もある。縁辺の一部には小剝離痕が連続しているが、小剝離によって形成された縁辺の状態からは、二次加工の意図を判断し難い。腹面側下部の縁辺の小剝離痕は、折れ面に生じたヒンジ状の縁辺を除去したものとも思われる。

6. 溝

SD-C01 (図版53)

177~179は土師器羽釜である。口径31.9~33.3cmである。177は胴部の破片である。板状の鍔を持つもので、外面に縦ハケ、内面に板ナデが観察される。178・179は口縁部が内傾し、上端に面を持つ。鍔は板状のものである。

SD-C02 (図版53 写真図版)

180は須恵器埦である。底部を欠く個体で端部をやや膨らませて丸くおえる。口径15.1cmである。

7. 井戸

SE-C01 (図版54·55 写真図版77)

上層からは181~191の11個体の遺物が出土している。

181~183は須恵器鉢で、これらの口径は27.9~31.7cmである。181は口縁部を上下に拡張し縁帯状にす

る。182は口縁部を上方に拡張し、上端をやや尖らす。183は口縁部を上方にやや拡張し、上端をナデて 丸くおえる。184は須恵器甕である。口径43.7cmである。口縁を湾曲させて端部を外反し、外方に面を持つ。 外面に右上がりの平行タタキ、内面は板ナデ痕跡が確認される。

185~189は土師器鍋で、これらの口径は21.25~25.0cmである。すべての個体が外面に右上がりの平行タタキを持ち、内面は当て具痕跡ないし板ナデが観察される。185・186は口縁部がしゃくれ、上端に面を持つ。187はやや直立気味になるもので、口縁部が方形になるもので上面に面を持つ。188は口縁部が直立気味に立ち上がり、小さく玉縁状にする。189は口縁部がやや直立気味で体部は球形を呈する。内面の当て具痕跡が顕著に残る固体である。188・189は13世紀代の個体であるが、185~187は14世紀に下るものと考えられる。

190は瀬戸焼皿である。

191は土師器羽釜で、口径30.4cm。口縁外面に幅広のナデによる凹凸を持つ個体で有段羽釜の形態を 模倣する。体部は直立気味になる寸胴と推定される。外面にわずかに平行タタキの痕跡が観察される。 中層からは192~196の5個体の遺物が出土している。

192は須恵器鉢で、口径27.85cmである。口縁部を上方に拡張し、体部がやや外反気味に立ち上がる。

193~195は土師器鍋である。口径19.85~20.5cm、器高13.85~14.6cm、3個体とも外面に右上がりの平行タタキ、内面は当て具痕跡ないし板ナデ調整が観察される。193は口縁部をやや肥厚させ、上端に面を持つ。体部はやや下膨れ状の器形を持つ。194・195は体部が球形に近いもので、口縁部を直立気味に立ちあげ、小さく肥厚させる。

196は土師器羽釜で、有段羽釜の模倣品である。口径36.25cmをはかる。直立する体部で口縁部をやや内傾させる。口縁外面にはナデによる凹凸を付け鉄釜の形態を模倣する。外面に平行タタキの痕跡が若干残される。

下層からは197~199の3個体の遺物が出土している。

197は土師器鍋の口縁部細片である。復元口径は21.15cmを測る。しゃくれた口縁部を持つ個体で14世紀に下るものと考えられる。

198は須恵器鉢である。口縁部を上方に拡張し、内面を窪ませる。口径29.0cmを測る。

199は土師器羽釜で、有段羽釜の模倣品である。口径31.3cmを測る。内傾気味に立ち上がる体部で、口縁部を内傾させ上端に面を持つ。口縁外面にはナデによる凹凸を付け鉄釜の形態を模倣する。外面に平行タタキの痕跡が若干残される。

8. 谷部 (図版56 写真図版79)

200~206は須恵器境で、法量は口径12.75~16.0cm、器高4.65~5.95cm、底径4.4~6.0cmである。203・206以外は腰が貼るいわゆる椀形になる。203・206はやや体部が直線的で口縁端部を外方に折る。底部が残される個体はすべてベタ高台がしっかりと残されている。さらに200・204・205は体部中位に沈線を施す。12世紀代のものである。207は須恵器皿で、口径10.95cm、器高1.9cm、底径5.05cmである。薄手の個体で横ナデによって腰部が貼る器形となる。208は須恵器甕で、口径20.3cmである。口縁部を弧の字に湾曲させて、外反させ端部をナデる。頸部内面に"十"字のヘラ記号が描かれる。209(190)は土師器小皿で、口径8.7cm、器高1.6cm、底径6.1cmである。外開きに短い体部が立ち上がる。以上から北半谷部からの出土遺物は須恵器埦などの形態から12世紀代のものと考えられる。

9. 包含層

北西半部 (図版56·57 写真図版79·80·81)

 $210\sim215$ は須恵器埦で、口径 $14.2\sim15.4$ cm、器高 $4.35\sim5.6$ cm、底径 $4.45\sim5.7$ cmである。 $210\cdot211\cdot212$ など腰が貼りべ夕高台が残されるものと、 $213\sim215$ のように体部が直線的で高台が残らないものがある。このことから13世紀前半($210\cdot211\cdot212$)から後半($213\sim215$)のものが含まれる。 $216\sim218$ は須恵器鉢で、法量は $29.2\sim31.45$ cmである。216は口縁部が肥厚し、上方に拡張し、ややしゃくれたタイプのものである。これらは13世紀後半から14世紀のものである。

219~221は土師器小皿で、口径9.4~10.5cm、器高1.5~2.2cm、底径4.9~5.1である。219・221は底部糸切り、220は手づくねの製品である。222は土師器鍋である。口径22.3cmで、口縁部がくの字に外反し、上端を外側に折る。体部は欠損するが球形に近い器形を持つと思われる。外面に平行タタキ痕跡がわずかに確認される。223は土師器羽釜で口径29.8cmと大型の製品である。やや内傾する体部で口縁部を肥厚させて、端部を外側に折る。外面に右上がりの平行タタキ、内面に板ナデ痕跡が確認される。224は土師器羽釜で、口径24.0cmである。口縁部直下に板状の鍔を貼り付ける。外開き気味の直線的な体部をもつ。口縁部はやや薄く仕上げ端部に面を持つ。13世紀後半~14世紀前半のもと考えられる。

225は青磁碗である。外面に鎬蓮弁文を陽刻する。口径18.0cmである。226は青磁碗の底部片である。 227は白磁碗IV類の口縁部片である。口径16.5cmを測る。

228は須恵器 Pである。体部は丸くなで肩ぎみである。頸部と肩部に沈線を巡らせるが、これ以外に体部には加飾しない。沈線を切って孔を穿つ。口頸部は外に開くが端部を欠く。

229は土師器堝である。口縁部は体部から屈曲して直線的に開き端面をもつ。内面の体部と口縁部の境界には稜を有する。飛鳥時代から奈良時代初期のものであろう。

建物群付近 (図版57 写真図版)

230~234は須恵器城で、口径14.0~15.2cm、器高3.15~4.15cm、底径5.7~6.5cmである。230~232の3個体は器高が低く、底径がやや大きい個体である。233・234は器高が比較的高く、底径が小さい。前者の方が後出のタイプである。235~237は須恵器鉢で、口径29.85~32.7cmである。235は口縁部の断面四角形で、わずかに上下に肥厚させる。236は口縁部を上方に拡張し端部を尖り気味におえる。237は口縁部を肥厚させ、上方に拡張させて端部を丸くおえる。

238は白磁碗の底部片である。体部には透明釉が掛かるが高台は露胎となる。

239~241は須恵器坏蓋である。径は239・240が15cm前後、241は10cmを測る。天井部と体部の境界には239がわずかに段を有するのに対し240・241は段を有さない。いずれも口縁端部は丸くおさめる。242は須恵器高坏蓋である。天井部に扁平なつまみを有する。天井部と体部の境界は丸みをもち段は持たない。243は扁平な器形の蓋である。天井部は回転ヘラケズリ。244は須恵器坏身である。立ち上がり、受け部ともに退化しており、立ち上がりは短く内傾する。245・246は須恵器高坏である。245の坏部は底部から丸みをもって立ち上がり、段を有する。脚部は丸みをもって裾部へ広がり端部は拡張させる。246は坏部を欠く。裾端部は短く直立させる。247は須恵器短頸壺である。体部は丸底で扁平ぎみな球状を呈し肩部との境界付近に沈線を1条巡らせる。口縁部は体部から短く立ち上がるが屈曲は甘い。248は須恵器坏蓋である。天井部は丸みをもち宝珠つまみがつく。口縁部との境界付近に段を有し、口縁端部は短く直立する。249は須恵器稜境蓋である。天井部に輪状のつまみがつく。口縁部の段は明瞭で口縁端部は直立させる。250・251は須恵器坏Aである。平底の底部から体部が屈曲し直線的に立ち上がっ

て口縁部へ続く。

M6は火打鎌の破片である。M7~9は寛永通宝である。

下位段丘面(図版58 写真図版80・82下)

252・254~256は下部包含層から、257は上部包含層から出土したもので、いずれも段丘下に堆積した土層にあたる。

252は第39層の灰褐色砂質混礫層から出土した須恵器坏蓋で、口径12.7cm、器高5.4cmである。ロクロ回転は左方向で、回転へラ削りの範囲は天井部の約2/3である。口縁端部は凹面をなし、上部はやや鋭い。TK47型式期~MT15型式期の所産と思われる。

253は須恵器杯蓋である。天井部と体部の境界には段を有さず、口縁端部は丸くおさめる。

254は第39層の灰褐色砂質混礫層から出土した須恵器坏身で、口径9.3cm、器高4.6cmを測る。やや小ぶりで、たちあがり部の端部は内傾する凹面をなす。古墳時代中期末のTK47型式期の所産と思われる。 焼成はやや悪く軟質である。

255は平成8年度の確認調査の際に出土した須恵器直口壺で、口縁端部と底部を欠失している。体部最大径は12.6cmを測り、体部上半にはカキ目、下半にはカキ目ののち平行タタキを施している。頸部外面には櫛描波状文を1帯加飾している。焼成はやや良好で、灰被りが認められ肩部には自然釉が多く付着している。断面の色調は、口縁部付近上端の破面のみ青灰色で体部はセピア色を呈する。このことから、口縁部を打ち欠いた状態で長期間経過したものと思われ、その状態で使用していた可能性がある。

256は第39層にあたる褐灰色砂質層から出土した須恵器捏鉢の底部で、約半分を欠失している。底径は9.7cmで、底面には多数の刺突孔があるが、内面まで貫通しているものは認められない。焼成時の破損防止や使用時の滑り止め効果が考えられる。内面は使用により平滑となっている。古墳時代後期前半の可能性が高い。

257は第14層にあたる褐灰色砂礫混じり層から出土した、橙色を呈する土師器羽釜の口縁部で、出土層は上部包含層にあたる。口縁部外面には丸みのある段が認められ、鍔部は突出度が低い。口径は28.9 cmを測る。器表はすべて薄く剥離している。SK-C15出土の堝と同時期で、中世後期の14世紀後半~15世紀の所産と考えている。

第6章 東区の調査

第1節 調査区の概要

調査区は櫨谷川に東面した段丘上から台地にかけてである。調査区の地形は、丘陵への傾斜変換点となる北西部をピークにして南側へ台地が舌状にのびる。東西方向は斜面となるが、東側は段丘崖を経てその直下に櫨谷川の旧流路、その東側は氾濫原となる。また台地西側のうち北半部は丘陵へ続く。南半部は丘陵裾部を谷地形が北西 – 南東方向にのび、調査区西端でその一部を検出した。また台地北半部では北へわずかに傾斜することから調査区外にある谷地形への傾斜変換点にあたるものと考える。この北側で神戸市教委がほ場整備に伴い実施した確認調査では遺構が確認されていない。このことから、本調査区付近が遺跡の東端となり、北東半部も北側に広がりをもつものの、遺跡の端部に近いと考える。西側に位置する中区とは谷部および丘陵の張り出しにより隔てられ、遺構の広がりは連続していない。

本地区の発掘調査は、平成10年度に本線と市道菅野栃木線の交差部(B地区)、平成12年度に北側側道部分(Ⅲ区)、平成13年度に本線部分(第2次調査2区)の順で行い、さらに側溝敷設に伴う平成8年度調査区が平成10年度調査区の南半部と重複する。バイパスに伴う本地区に対する調査は合計4次にわたる。また本調査区南側にあたる神戸市道部分の調査を平成7年度に神戸市教委が実施している。

調査時における調査区の現況は水田であった。水田は段状をなしているが、この造成時に切り盛りなどの地形改変が行われている。切土部分にあたる範囲は大きく削平され、遺構検出面も段状をなしている。切土にあたる部分では遺構は検出されない。また台地から丘陵への高位となる部分は現水田面直下が遺構検出面となり、ここも大きく削平を受けており遺構の残存状況は良好でない。本来の地形は北西から南東に緩やかに傾斜していたものと推定する。

平成10年度の調査区は、西側の平面三角形と、東側にのびるトレンチ状の細長い調査区を合わせた「L」字に近い形状で、東西方向の長さ約79m、南北方向は約50mで、面積1.489㎡を測る。

遺構および遺構面の状態では、南西部に谷状遺構のSV-E01が存在しており、谷底の標高は約34.0mで、谷の上端は36.0m前後である。谷部は調査区の南西側に続いており、調査区内では北東隅部分を検出したかたちになる。谷部から東側は標高37.7mを中心とした台地状を呈しているが、その台地は調査区東端で崖状に東側へ約1.5m落ちるかたちとなっている。

調査区内の台地部分では、ほぼ耕土直下で遺構面となっており、後世に削平されたことが窺える。

台地部分で検出した遺構は、北西端で、大きく削平を受けた弥生時代の竪穴住居跡が1棟、その南側には奈良時代および平安時代末頃の掘立柱建物跡計4棟をはじめ多数の柱穴が存在しており、谷部へ流れ込む溝SD-E01も奈良時代に存在していたと思われる。なお、調査区南東部に存在していた土壙SK-E05は平安時代末頃と推定される。

平成12年度調査区は東区北半にあたり、段丘崖から台地上までを東西方向に調査した。遺構検出範囲は段丘崖から段丘面までで、高位となる西半部は削平されている。段丘崖に近い部分では遺構面を上下2面確認し、上面では中世の掘立柱建物跡、下面では古墳時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などを検出した。

平成13年度調査区は平成10年度調査区の東側、段丘崖までである。段丘崖に近い部分では奈良時代の遺物を含んだ遺物包含層が残存するものの、高位の部分は削平と切土による影響を受け、遺物包含層はほとんど残存しない。ほぼ水田面直下が地山となりここが遺構検出面である。遺構の分布は粗密がある

ものの、ほぼ全域に分布する。遺構がない範囲は削平の影響が大きい範囲と思われる。検出した遺構は 弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡、古代・中世の掘立柱建物跡などがある。その他に多数の柱穴がある ことから、復元しえない住居や建物が複数あったものと推定する。遺構の密度は高く、遺構の重複もみ られるが、残存状況は良好でない。

第2節 遺構

1. 竪穴住居跡

SH-E01 (図版36 写真図版52)

検出状況 調査区北東端で検出した。全容を検出しているが、削平の影響を受け一部平面形が明確でない部分もある。SB-E01・02などと重複し、本住居がこれらに先行する。

形状・規模 平面形は北東 - 南西方向に主軸をもつ長方形を呈する。規模は4.2m×3.2mであり、床面は3.9m×2.7mを測る。検出面から床面までの深さは約10cmである。

埋土 礫混じりの黒褐シルト~中砂の単層であり、自然堆積と考える。

屋内施設 床面では多数の柱穴を検出したが、後出するSB-E01・02に伴うものを除外すると、本住居 に伴うものは明確でない。ただし住居の平面形態から主柱穴は4本柱と推定する。

壁際には断続的に周壁溝の痕跡が認められる。また住居の西南辺の中央付近にはわずかに焼土痕跡の 広がりが認められ、この箇所に竃を有していた可能性がある。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SH-E02 (図版36 写真図版52)

検出状況 調査区中央付近、丘陵から派生した尾根の東側傾斜変換点付近で検出した。10mほどの範囲 に竪穴住居が密集する。本住居の西半部はSH-E03・05と重複し、本住居が切られている。

形状・規模 残存する周壁溝の形状から、平面形は方形または隅丸方形を呈するものと考える。規模は、 東西3.7m以上、南北4.2mを測る。床面は東西3.6m以上、南北3.8mである。削平により壁面の立ち上が りは残存しない。

埋土 残存しない。

屋内施設 周壁溝、柱穴がある。竃などの施設は検出していない。

周壁溝 東隅付近を欠くが、当初は全周していた可能性がある。断面は浅いU字状を呈し幅20cm、床面からの深さ5cm程度である。

柱穴 床面で柱穴を複数検出したが本住居に伴うものは抽出しえない。本来の主柱穴は4本柱と考える。 出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SH-E03 (図版36 写真図版52)

検出状況 調査区中央付近、丘陵から派生した尾根の東側傾斜変換点付近で検出した。10mほどの範囲に竪穴住居が密集する。本住居の東にSH-E02、西にSH-E04、北にSH-E05と重複関係にある。SH-E02より後出するが、SH-E04・05との先後関係は不明である。本住居周辺は遺構の密度が高く、SB-E05とも重複し、建物を構成する柱穴が複数床面に切り込む。

形状・規模 残存する周壁溝の形状から、平面方形を呈するものと考える。規模は、東西4m以上、南

北3 m以上を測る。床面は東西3.8m以上、南北2.8m以上である。検出面から床面までの深さは約10cmである。

埋土 流入土などの自然堆積層である。

屋内施設 周壁溝、柱穴がある。竈などの施設は検出していない。

周壁溝 南・東壁際に沿いL字状に検出した。南壁沿いでは中央付近で途切れる。断面は浅いU字状を呈し幅15cm、床面からの深さ3cm程度である。

柱穴 床面で柱穴を複数検出したが本住居に伴うものは抽出しえない。主柱穴は4本柱だと考える。 出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SH-E04 (図版36 写真図版52)

検出状況 調査区中央付近、丘陵から派生した尾根の東側傾斜変換点付近で検出した。10mほどの範囲に竪穴住居が密集し、本住居の東にSH-E03、北東にSH-E05がある。SH-E03とは重複関係にあるが先後関係は不明である。本住居周辺は遺構の密度が高く、SB-E05とも重複し、建物を構成する柱穴が複数床面に切り込む。北隅が撹乱により損なわれるが、全容を調査できた。

形状・規模 周壁溝の形状から、平面形は方形を呈するものと考える。規模は、東西3.8m、南北4.2mを測る。床面は東西3.6m、南北3.8mである。削平により壁面の立ち上がりはほとんど残存しないが、 検出面から床面までの深さは最大で約5cmである。

埋土 ほとんど残存しない。

屋内施設 周壁溝、柱穴がある。竃などの施設は検出していない。

周壁溝 西壁際の南半部を除いて壁際を巡る。南・東壁際に沿いL字状に検出した。断面は浅いU字状を呈し幅約20cm、床面からの深さ5cm程度である。

柱穴 床面で柱穴を複数検出したが本住居に伴うものは抽出しえない。主柱穴は4本柱だと考える。 出土遺物 図化しうる遺物は出土しない。

SH-E05 (図版36 写真図版52)

検出状況 調査区中央付近、丘陵から派生した尾根の東側傾斜変換点付近で検出した。10mほどの範囲 に竪穴住居が密集し、本住居の南側にSH-E02~05が並ぶ。SH-E02・03とは重複関係にあり、本住居が SH-E02に後出する。SH-E03との先後関係は不明である。本住居周辺は遺構の密度が高く、SB-E05とも重複し、建物を構成する柱穴が複数床面に切り込む。

形状・規模 平面形は方形を呈する。規模は、東西3.2m、南北3.6mを測る。床面は一辺約3.0mである。 検出面から床面までの深さは最大で約15cmである。

埋土 流入土などの自然堆積層である。

屋内施設 周壁溝、柱穴がある。竃などの施設は検出していない。

周壁溝 北隅付近が損なわれるが、他の部分は壁に沿い、本来は全周するものと考える。断面は浅いU字状を呈し幅20cm、床面からの深さ3cmである。

柱穴 床面で柱穴を複数検出したが本住居に伴うものは抽出しえない。主柱穴は4本柱だと考える。 出土遺物 床面付近では土器片の散布が見られた。このうち須恵器坏蓋(258)を図化した。 SH-E06 (図版36 写真図版52)

検出状況 調査区南東部の段丘崖付近で検出した。削平などにより大半は損なわれているが、弧状にの びる周壁溝から住居跡と判断した。

形状・規模 周壁溝が弧状にのびることから平面は円形を呈するものと考える。床面は周壁溝から0.5 m程度残存するのみである。検出面から床面までの深さは最大で25cmである。

埋土 にぶい黄褐細砂の単層で流入土の可能性がある。埋土には炭・焼土が混じる。

屋内施設 周壁溝のみ検出した。柱穴は2基検出したが、本住居に伴うものかは明らかでない。土坑は 検出していない。

周壁溝 検出長約3.7m、幅20cmを測る。断面はU字状を呈し、床面からの深さ15cmである。

出土遺物 埋土内から石鏃(S7)が出土した。したがって本住居は弥生時代のものと考える。

SH-E07 (図版37 写真図版53)

検出状況 厳密には調査区北端の中央部となる部分で検出した竪穴住居跡である。大きく削平を受けていたことから、壁は全く残っておらず、通常数多く存在するはずの床面の炉や周壁溝も全く認められなかったことから、床面についても削平により削り取られているものと判断できる。

形状・規模 大きく削平を受けていたため、竪穴住居跡の平面形状は不明である。ただし、主柱穴と想定される柱の数が7基であることから、平面が円形であった可能性が高い。ただし、その規模については、径5 m以上であること以外に確証は認められない。仮に主柱穴と壁の間隔を1 mと見積もれば、住居跡の径は7 mとなろう。

中央土坑 主柱穴と判断した柱列のほぼ中央に、平面が丸みをもった方形に近い形状の土坑が存在している。南北・東西とも83cmの規模で、南西部には幅約20cmで深さ4cmの張り出し部が存在し、長さ約20cmのびている。この張り出し部は、この住居跡床面に屋内溝があり、その溝に続いていた可能性が考えられる。その方向は地形が低くなる方向と合致している。なお、中央土坑がいわゆる「イチマル土坑」と呼ばれる複合タイプであるか否かは不明である。

中央土坑は検出面からの深さ約20cmで、埋土は5層に分けることができ、検出した上面には焼土が認められた。埋土の最下層は地山が土壌化した層で、厚さ約3cmである。水分が多く存在していたことを裏付けている。第4層は炭・灰混じりの黒褐色土層で、肩付近で高坏の脚柱部(259)が出土した。

柱穴 主柱穴と思われるものは7基 $(P1\sim P8)$ 存在している。このうちのP2とP3は一つの柱穴である可能性が高い。柱間は芯々で1.28m ~ 3.0 mで、最も狭い部分は南西部の $P1\sim P2\cdot P3$ 間、最も広い部分は北側の $P5\sim P6$ 間である。それ以外の柱間は1.68m ~ 2.0 mとなっている。

なお、住居跡と想定される範囲内には、主柱穴と判断したもの以外に、P72・P75・P76・P78~P80・P83・P84・P86・P88・P91・P92(いずれも調査時の番号)やP9があり、土器が出土したP9やP86・P88は主柱穴とは西側に少しずれて相似形に並んでいることから、これらも主柱穴であったかもしれない。

出土遺物 中央土坑からは先述の高坏脚柱部 (259) が出土し、主柱穴ではP3の掘形から高坏脚部片 (260)、P2かP3いずれかの掘形から底部片 (264) が出土している。その他の柱穴では、P9の掘形から 鉢の坏部片 (261) や高坏坏部片 (262)、底部片 (263) が出土しており、これらはいずれも弥生中期の 土器である。P10の埋土からは土師器の小片 (265) が出土しているが、時期が降る可能性があり、柱 痕出土かもしれない。

2. 掘立柱建物跡

SB-E01 (図版38 写真図版53·54)

検出状況 調査区北東端で検出した。この箇所は遺構面を上下2面に分け調査し、下面で検出した。 SB-E02、SH-E01と重複する。柱穴の切り合いから本建物がSB-E02に後出している。ほぼ全体を検出 したが、北東隅のみ調査区外となる。

形状・規模 南北 3 間 (5 m)、東西 3 間 (4.2 m) の総柱建物である。南北方向はN-16° Wの偏りを示す。 柱穴の芯々間距離は桁行で約1.6 m、梁行き1.2~1.4 mであり、並びは比較的良好である。

柱穴 掘形の平面形は、隅丸方形や楕円形を呈するもののあるが、多くは円形を呈している。隅丸方形長辺約1m、短辺0.8mと大型である。楕円形のものは長径約0.8m、短径0.6mを測る。円形のものは径0.4~0.7mとばらつきがある。検出面からの深さは40~60cmである。

出土遺物 P8から須恵器杯B底(266)、P10から須恵器杯B底(267)と土師器甕(268)が出土した。

SB-E02 (図版38 写真図版53·54)

検出状況 調査区北東端で検出した。この箇所は遺構面を上下2面に分け調査したが、本建物は下面で 検出した。SB-E01、SH-E01と重複する。柱穴の切り合いから本建物がSB-E01に先行している。北東 側の調査区外へ広がる可能性がある。

形状・規模 東西 3 間 (5 m)、東西 1 間 (1.4 m) を検出したのみである。南北方向はN-24° Wの偏りを示す。さらに北側へ続くと考えるが柱穴は検出できなかった。柱穴の芯々間距離は東西方向で約1.6 m、南北方向で1.4 mを測り並びは良好である。

柱穴 掘形の平面形は、円形か楕円形を呈し、径40~60cm、検出面からの深さは20~40cmであるが、P1のみ約10cmと浅い。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-E03 (図版39 写真図版54)

検出状況 調査区北東部、SB-E01・02の南側で検出した。この箇所は遺構面を上下2面に分け調査したが、本建物は下面で検出した。削平により大半の部分は損なわれ、北西隅が残存するのみである。

形状・規模 東西、南北ともに1間(1.7m)を検出したのみである。南北方向はN-13°Wの偏りを示す。 東および南側は削平により損なわれ、柱穴は現存しない。柱穴の並びは良好である。

柱穴 掘形の平面形は、円形を呈し、径60~80cm、検出面からの深さは20~25cmである。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-E04 (図版39 写真図版55)

検出状況 東区の東北端、段丘下に位置する建物で、上層から検出された。北および東側が調査区外に 伸びるため、全体の詳細を知ることはできない。

形状・規模 検出された範囲での建物の規模は東西 4 間以上、南北 3 間以上 (9.26×5.5m) で、状況からすると東西棟と推定される。検出された場所は東側に向かって傾斜する場所で、建物はこの傾斜地に建てられていた可能性が高い。

柱穴 平面形状はおおむね円形で、直径30~50cm、深さ10~15cmである。やはり上層の削平によって浅

くなっている。柱間は東西方向が2.0~2.3m、南北方向が1.6~2.0mと南北方向がやや狭くなっている。 柱並びは良好とはいえない、特に南辺はP8・9が北側に大きくずれる。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-E05 (図版40 写真図版55)

検出状況 調査区中央付近、丘陵から派生した尾根の東側傾斜変換点付近で検出した。遺構密度が高い 箇所であり、SH-E02~05などと重複する。断面観察では竪穴住居埋没後に柱穴が掘り込まれている。 一帯は削平され、一部撹乱により損なわれるが、ほぼ全容を検出した。

形状・規模 桁行 5 間 (9.6m)、梁行 3 間 (5.6m) の側柱建物である。桁行を南北方向にもちN-17°W の偏りを示す。柱穴の芯々間距離は桁行・梁行ともに1.8~2.0mであるが、梁行の中央の 1 間は1.6mと間隔が狭い。柱穴の並びは良好である。

柱穴 切り合いや撹乱により一部損なわれるものもあるが、掘形の平面形は、不整な隅丸方形や楕円形を呈する。径・長さは最小で0.7m、最大で1.2mを測る。検出面からの深さは20~60cmである。 出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-E06 (図版40 写真図版55)

検出状況 調査区南東部、丘陵から派生した尾根の東側傾斜変換点付近で検出した。後世の水田化に伴い一帯は大規模に削平され、本建物も北西半部が残存するに過ぎない。他の遺構との重複はないが、建物内では本建物に伴わない柱穴を検出している。

形状・規模 南北3間 (5.6m)、東西1間以上 (1.5m以上)を検出したのみである。南北方向はN-16°E の偏りを示す。東側は削平により損なわれ、柱穴は現存しない。南北方向の柱穴の芯々間距離は桁行・梁行ともに1.6~2.0mを測り、柱穴の並びは良好である。

柱穴 掘形の平面形は、円形を呈し、径40~50cm、検出面からの深さは10~20cmである。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SB-E07 (図版41 巻頭写真図版5 写真図版56~58)

検出状況 平成10年度調査区の中央南部で検出した。台地部分の南西端部にあたり、その西側は谷部 (SV-E01) となっている。

形状・規模 3間四方の建物跡であるが、その規模は芯々間で東西 $4.52 \cdot 4.80$ m、南北 $3.48 \cdot 3.72$ mであることから、東西方向が桁方向であることがわかる。桁方向は厳密にはN81°Eである。芯々間での柱間は桁方向が $1.40 \sim 1.68$ mで平均1.54mであるが、梁方向のうち中央の柱間は $1.00 \cdot 1.04$ mと特に狭く、その他の梁方向の柱間も $1.16 \sim 1.36$ mで平均1.29mと非常に狭いことを特徴としている。

柱穴 柱穴掘形の平面形はすべて円形で径72~100cmとやや大きめで、柱痕も円形を呈しているものが 大半を占め径28~36cmを測る。検出面からの柱穴の深さは31 (P9) ~47 (P12) cmを測る。柱穴の規模 や深さおよび柱間から、重量物を収納する倉庫の可能性を指摘することができよう。

出土遺物 北西隅のP10埋土から東播系須恵器埦底部 (269)、東側柱列のP2の掘形からはサヌカイトの剥片 (S8) が出土しているが、本建物は奈良時代頃の建物跡と推定している。

SB-E08 (図版41 巻頭写真図版5 写真図版56·58·59)

検出状況 平成10年度調査区の中央南端で検出した。台地部分の南西端部にあたり、その西側は谷部 (SV-E01) となっている。東側柱列が平成10年度調査区外に存在するが、その後の調査はできていない。 形状・規模 SB-E07と同様に3間四方の建物跡であり、桁方向はN84°EでSB-E07とほぼ同一方向となっている。芯々間での桁方向南側での規模は5.00m、梁方向西側の規模は4.08mである。芯々間での 柱間のうち、桁方向は1.48~1.80mで平均1.62m、梁方向が1.32~1.44mで平均1.37mとなっており、柱間の平均値での梁・桁の差は北側に存在するSB-E07とほぼ同じである。

柱穴 柱穴掘形の平面形はすべて円形で径36~84cmで60cmのものが多く、SB-E07よりも規模が小さく、 検出できた柱痕も円形を呈し径20~34cmを測り、28cm程度が最も多い。柱穴の検出面からの深さは5 (P5) ~33 (P2) cmである。

出土遺物 本建物跡の柱穴からは遺物は出土していないが、奈良時代の建物跡と推定している。

SB-E09 (図版42 写真図版59)

検出状況 平成10年度調査区の北東部で検出した。谷部(SV-E01)東肩から東へ約15m入った台地部分に位置している。

形状・規模 N4°Eに桁方向をとる2間×3間の総柱建物跡であるが、梁方向北辺中央の柱穴は検出できなかった。また、桁方向の南側1間分では東西で梁間が異なっている。芯々間での南北規模は7.32・7.28mと差がないが、東西規模は北側で4.04m、南側では4.34mと差が大きい。桁方向側柱の各柱間は芯々距離で2.40~2.46mとばらつきが少ないが、屋内のP6とP11の桁方向柱間は2.56mとやや長い。梁方向の柱間は北から2番目では2.04mと2.12mで差は少ないが、南から2番目では西側が2.48mであるのに対し、東側では1.66mと西側が78cmも長く、南端でも西側が2.66m、東側は1.70mとなっており、ここでも西側が96cm長くなっている。このことは、この建物が総柱建物であることに加えて、間仕切りも存在していた可能性が高い。

柱穴 柱穴掘形の平面形はすべて円形で、検出できた柱痕もすべて円形となっている。掘形の径は30~38cmであるが、東側のP18(調査時の番号)がP4の建替え柱穴とすれば、掘形径26cmで最小となる。柱穴掘形径の平均は32cmとなっている。柱痕径は16~24cmで平均値は19cmである。柱穴の検出面からの深さは11 (P9)~29 (P8) cmである。

出土遺物 東側柱列のP4掘形埋土から須恵器坏Bの底部 (270)、西側柱列のP9柱痕埋土からは須恵器 坏口縁部小片 (271) がそれぞれ出土している。土器が示す時期は飛鳥~奈良時代前期と推定されるが、本建物跡は平安時代末も含めた中世前期と想定している。

SB-E10 (図版42 写真図版59)

検出状況 平成10年度調査区の中央部で、SB-E09の南西側に近接した位置で検出した。台地部分の西辺に近いが、谷部(SV-E01)肩からは約12mの距離がある。東側柱列のうち2基は削平により遺存していなかった。

形状・規模 2間四方の小規模な建物跡で、ここでは側柱建物としたが、P-E25が本建物に関係する可能性もあり、総柱建物跡とすべきかもしれない。南北方向の規模は芯々間で2.64m、東西方向は2.50mであることから、桁方向は南北方向である可能性が高い。その方向はN13°Eであり、SB-E09にやや近

い。桁方向と思われる各柱間は芯々距離で1.28・1.38m、梁方向の各柱間は1.20・1.30・1.56mである。

柱穴 柱穴掘形の平面形は円形もしくは楕円形で、径・長径は40~60cmを測り、平均は52cmである。柱痕もすべて平面円形で、径20~30cmにおさまる。柱穴の検出面からの深さは9(P2)~18(P6)cmと浅く、全体に削平を受けているためと判断できる。また、柱穴を検出することができた面と、さらに削平を受けたため柱穴を検出できなかった面の高低差はで約10cmである。

出土遺物 本建物跡の柱穴からは遺物は出土していないが、本建物に関連する可能性があるP-E25の埋土から須恵器底部片(307)が出土している。なお、本建物跡の時期は平安時代末も含めた中世前期と想定している。

3. 柱穴

P-E01 (図版43 写真図版59)

検出状況 東区北端の上層で検出された。

形状・規模 柱穴で直径30cm、深さ0.15m、平面円形である。

出土遺物 須恵器埦 (272) が出土している。13世紀代のものである。

P-E18 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央南部の掘立柱建物跡SB-E07の範囲内で検出した。

形状・規模 北西 - 南東方向に長い平面楕円形を呈し、長径46cm、短径30cmを測る。柱痕は検出されなかった。検出面からの深さは8cmである。

出土遺物 埋土から弥生土器甕の口縁部(299)と底部(300)が出土したが、柱穴の時期は不明である。

P-E19 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央南部の掘立柱建物跡SB-E07の南で検出した。

形状・規模 平面円形を呈し、掘形径40cm、柱痕径20cmを測る。検出面からの深さは28cmである。

出土遺物 埋土から弥生中期土器の鉢と思われる脚部(301)が出土したが、柱穴の時期は不明である。

P-E20 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区北東端部で検出した。

形状・規模 柱痕・掘形ともに平面円形を呈し、掘形径35cm、柱痕径15cmと小規模である。検出面からの深さは19cmである。

出土遺物 埋土から古墳時代後期末~飛鳥時代の須恵器坏口縁部片(302)が出土している。

P-E21 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区北部中央の弥生中期竪穴住居跡SH-E07の東部で検出した。

形状・規模 平面楕円形を呈し、掘形径40cm、柱痕径20cmを測る。検出面からの深さは11cmである。

出土遺物 柱痕から飛鳥時代の須恵器坏口縁部片 (303) が出土したが、柱穴の時期は中世前期の可能性がある。

P-E22 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央部の掘立柱建物跡SB-E10の北部で検出した。

形状・規模 平面円形を呈し、径20cmと小規模である。柱痕は検出されなかった。検出面からの深さは 13cmである。

出土遺物 埋土から奈良時代の須恵器坏蓋(304)が出土した。柱穴の時期を示している可能性がある。

P-E23 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央部のSD-E01の北岸で検出した。

形状・規模 掘形平面は北東 - 南西方向に長い楕円形を呈し、長径56cm、短径46cmを測る。柱痕は円形で径20cmを測る。検出面からの深さは26cmである。

出土遺物 掘形から奈良時代の須恵器坏蓋口縁部小片(305)が出土したが、柱穴の時期は不明である。

P-E24 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央部の掘立柱建物跡SB-E10の南側で検出した。

形状・規模 掘形平面は南北方向に長い楕円形を呈し、長径92cm、短径68cmを測る。柱痕は平面円形で、径29cmである。検出面からの深さは20cmである。

出土遺物 埋土から奈良時代の須恵器坏片(306・310)が出土しており、柱穴時期の可能性がある。

P-E25 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央部の掘立柱建物跡SB-E10内の中央部で検出した。

形状・規模 平面はほぼ円形で、径40cmを測る。柱痕も平面円形で、径16cmである。検出面からの深さは25cmを測る。

出土遺物 埋土から須恵器の輪高台部分 (307) が出土したが、柱穴の時期は不明である。本柱穴は SB-E10の可能性もあり、柱穴の時期は中世前期かもしれない。

P-E26 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央部の掘立柱建物跡SB-E10の北側で検出した。

形状・規模 掘形・柱痕ともに平面円形を呈し、掘形径43cm、柱痕径20cmを測る。検出面からの深さは 22cmである。

出土遺物 埋土から奈良時代と思われる須恵器坏口縁部片(308)と須恵器坏蓋口縁部片(309)が出土 したが、柱穴の時期は不明である。

P-E27 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央部の掘立柱建物跡SB-E10の西側で検出した。

形状・規模 掘形・柱痕ともに平面はほぼ円形を呈し、掘形径32cm、柱痕径15cmを測る。検出面からの深さは17cmである。

出土遺物 埋土から土師器坏片(311)と須恵器坏蓋片(312)が出土しており、平安時代初期と思われる。

P-E28 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央南端で検出した柱穴である。

形状・規模 掘形・柱痕ともに平面ほぼ円形を呈し、掘形径38cm、柱痕径20cmを測る。検出面からの深さは14cmである。

出土遺物 掘形から奈良時代~平安時代初期の土師器坏Aの大きな破片が出土しており、柱穴の時期を示していると判断している。

P-E29 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区北東端部で検出した。

形状・規模 平面は平面円形を呈し、径30cmである。柱痕は検出できなかった。検出面からの深さは11 cmである。

出土遺物 埋土から土師器堝口縁部片(314)が出土しているが、柱穴の時期は中世の可能性がある。

P-E30 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央北部のSD-E01の北側で検出した。

形状・規模 柱痕・掘形ともに平面円形を呈し、掘形径37cm、柱痕径は20cmを測る。検出面からの深さは23cmである。

出土遺物 柱痕から奈良時代の須恵器坏B底部片(315)と平安時代中頃の須恵器坏片(316)が出土しており、平安時代の柱穴の可能性がある。

P-E31 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央北部のSD-E01の北側で検出した。他の柱穴と重複している。

形状・規模 平面はほぼ円形を呈し、径20cmと小規模である。柱痕は検出できなかった。検出面からの深さは6cmである。

出土遺物 埋土から奈良時代~平安時代初期の須恵器坏片(317)が出土しており、柱穴時期を示している可能性がある。

P-E32 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区北部中央の弥生中期竪穴住居跡SH-E07に近接して南東側で検出した。

形状・規模 北西 - 南東方向にやや長い平面楕円形を呈し、長径28cm、短径24cmを測る。柱痕は検出されなかった。検出面からの深さは12cmである。

出土遺物 柱痕から平安時代前期の須恵器坏片(318)が出土しており、柱穴時期の可能性がある。

P-E33 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央北部のSD-E01の北側で検出した。

形状・規模 平面は北東 - 南西方向にやや長い楕円形を呈し、長径33cm、短径22cmを測る。柱痕は検出されなかった。検出面からの深さは13cmである。

出土遺物 柱痕から平安時代中頃の東播系須恵器埦(319)が出土したており、柱穴時期を示している

ものと思われる。

P-E34 (図版33 写真図版46·47)

検出状況 平成10年度調査区中央北部のSD-E01北側のやや離れた位置で検出した。

形状・規模 径20cmの平面円形を呈するが、柱痕は検出されなかった。検出面からの深さは20cmである。 出土遺物 埋土から中世前期の須恵器埦口縁部片 (320) が出土しているが、柱穴の時期は不明である。

4. 土坑

SK-E01 (図版43)

検出状況 調査区東側、段丘縁部で検出された土坑である。

形状・規模 平面不定形で、長軸4.0m、短軸2.9m、深さ0.2mの規模である。

出土遺物 須恵器境(321)が出土した。この遺物から遺構の時期は12世紀のものと判断される。

SK-E04 (図版37 写真図版60)

検出状況 平成10年度調査区の中央南端に近い部分で検出した。SB-E08の北東側に近接して位置している。

形状・規模 約10cmの深さの不整形な溜り状部分の底に存在する。平面は長楕円形を呈し、北北東 - 南南西方向に主軸をとる。長さ1.2m、幅51cmで、検出面からの深さは20cmである。法面の傾斜角度はやや緩いことから、墓とは判断していない。

出土遺物 図示できる遺物は出土していないが、東側に15m離れて存在する土坑のSK-E05と形状が似ているうえに位置的に近いことから、同時期の可能性がある。

SK-E05 (図版37 写真図版60)

検出状況 平成10年度調査区の東部で検出した。台地部分で削平があまり及ばなかった部分に位置し、 検出面の標高は37.7m前後である。

形状・規模 平面は長楕円形を呈し、北東-南西方向に主軸をとる。長さ1.59m、幅0.9mで、検出面からの深さは27cmである。底面はほぼ水平で平坦に近い。規模や平面形からは墓の可能性があるものの、 法面の傾斜角度がやや緩いことから断定していない。

埋土 土坑埋土の大半は10YR5/2灰黄褐色と10YR4/3にぶい黄褐色の2色に分かれるが、粒度的に大きな差はない。どちらもほぼ水平に堆積している。

出土遺物 埋土から東播系須恵器が3点出土している。それらは捏鉢底部片(325)と境の底部片(326)・口縁部片(327)である。境は12世紀代のもので、土坑の時期を示していると思われる。

5. その他の遺構

SX-E01 (図版43 写真図版59)

検出状況 調査区中央部、段丘頂部付近で検出した。遺構の密度が高い箇所であり、本遺構はSB-E05の北西側に位置する。主軸方向はSX-E02やSB-E05とほぼ同じである。また本遺構埋没後に柱穴が掘り込まれている。削平により遺存状況はやや不良である。

形状・規模 北西 – 南西に主軸をもち平面はやや不整な隅丸長方形を呈する。長さ1.35m、幅0.75mを測る。検出面からの深さは約10cmであり、断面は逆台形状を呈する。底部はほぼ平坦で10cm大の礫を複数検出しているほか、部分的に炭・焼土の痕跡が認められる。SX-E02と類似する遺構であるが、棺状の痕跡は認められない。

埋土 灰黄褐細砂の単層であり、炭・焼土が混じる。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

SX-E02 (図版43 写真図版60)

検出状況 調査区中央部、段丘頂部付近で検出した。遺構の密度が高い箇所であり、本遺構はSB-E05と重複する。SB-E05とは主軸方向もほぼ同じであるが建物の施設となるのか、時期が異なるのかは明らかにしえない。また本遺構埋没後にSB-E05に伴わない柱穴が掘り込まれている。

形状・規模 北西 - 南西に主軸をもち平面はやや不整な隅丸長方形を呈する。長さ2.0m、幅0.8m、検出面からの深さは約25cmである。断面は逆台形状を呈する。底部には長軸方向に沿って検出長1.4~1.5m、約20cm間隔で並ぶ2条の炭化材とみられる炭の集積部分がある。その上に堆積する土は自然堆積と考えられるが、灰褐細砂層をはさんで堆積するにぶい褐シルト質細砂層にも炭が混じる。底部には炭・焼土に混じり若干の礫を検出した。断面の土層観察では棺状の痕跡が認められる。断面から想定される棺状痕跡の規模は、長さ1.5m、幅0.5mである。火葬跡の可能性もあるが、骨片などの散布は認められない。埋土 最下層には炭が数cmの厚さで層をなし、掘方や側面の流入土、埋土中層にも炭化物が混じる。出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

6. 溝

SD-E01 (図版35 写真図版61)

検出状況 平成10年度調査区の西半中央で検出した。方向は北東から南西に流れるもので、南西端は谷部SV-E01につながっている。

形状・規模 北東端は削平により幅を減じて自然消滅しているが、遺存状況が良好な南西部では、約5.0 mの幅があり、平面的には幅の狭いV字形を呈している。残存長は約15mである。最も残存している南西端では検出面から約70cmの深さを測る。なお、底面の高さは北東端が標高37.41m、南西端では35.9mで、延長約15mで約1.5mの高低差があり、旧傾斜のようである。底面の幅は70cmの部分が多いが、底の横断面形は丸みをもっている。なお、本溝と重複して存在する柱穴が多く認められ、いずれも本溝が古い。埋土 $5\sim6$ 層に分けることができ、最下層は地山ブロックを含む層になっており、最上層は黒褐色を呈している。北東部では主として北側から埋まった状況を示しており、南西部では南北両側から埋まっている状況がうかがえるものの、第2層は北側から埋まっている。いずれも自然堆積層である。

出土遺物 最下層を除くほぼすべての層から奈良時代の多量の土器等を中心として、弥生時代の石器等も出土している。最も出土量が多いのは、溝検出面から深さ20cmまでの上部であり、弥生時代の石器も含まれる。

 また、弥生土器底部 (368) も認められる。

出土石器類(S9~S12)のうち、弥生時代の石器では重量が1kgを超える大型剥片(S9)が特筆され、 奈良時代と推定される石製品には砥石(S11)がある。

7. 谷部

SV-E01 (図版34·35 巻頭写真図版4 写真図版61·62)

検出状況 平成10年度調査区の南西部で検出した。巨視的には台地崖が北側に大きく入り込んだ谷状部分の北東隅部分にあたると思われる。

形状・規模 検出した部分は明確なコーナー部をもっており、やや鈍角になっている。コーナー部分には溝SD-E01が流れ込んでいる。検出した部分の東西規模は上端で約16.0m、南北は上端で約18.0mの長さである。谷上端の台地部分の標高は36.0mあたりで、谷底の標高は34.0mであることから、検出した部分での谷の深さは約2.0mである。谷北辺の上端部分は、北辺に平行するかたちで上端幅約1.5mの溝状になっている。その溝下端部の幅は約50cmである。この溝状部分はSD-E01とは異なるものと判断している。あえて言及すれば、SV-E01のコーナー部分の標高35.9mあたりから34.7mあたりまで存在する幅1.0m前後の溝状部分が、SD-E01の続きにあたると判断している。そのことは、谷部中央で溝SD-E01と同時期の遺物が出土する谷埋土層の標高が、34.3m以上35.6m以下であることからも推察できよう。埋土 谷底部分では黒褐色ないし黒色を呈するシルト~極細砂の土層(第22~26層)が堆積しているが、各層の厚さが薄くほぼ水平堆積であることから、自然堆積層と判断できる。これらの層からは弥生時代中期後半を中心とした土器が出土している。これらの層を「谷包含層下層」と呼称しておく。

これらの層よりも上層(第12~19層)では、谷部西側壁土層断面では水平に近い堆積状況を示しているが、南側壁断面では東側から堆積している状況(第12~15層)がうかがえる。第12~15層は厚く、第12・13層の上端が谷上端と同じレベルの水平面となっていることから、人工的に埋められた部分の可能性が高い。これらの層には飛鳥~奈良時代の遺物が含まれる(谷包含層中層)ことから、谷の東側台地上に同時期の掘立柱建物跡SB-E07・08が存在していることと無関係でないことは想像に難くないであろう。なお、第14層は黒褐色を呈し炭化物を多く含んでいたことから放射性炭素年代(AMS)測定をおこなった。その結果、飛鳥時代頃との結果を得た。

さらに上層は、水田嵩上げによる攪乱層の第2層および旧耕土や水田嵩上げ土の第4層を除いた、第 $6\sim9$ 層の黄灰色系の土層には中世までの土器を含んでおり(谷包含層上層)、主として北側から堆積している。第8層の上端が削平されているため、堆積していた高さは不明であるが、複数の色が混じった層であることから、ここも埋め立てられた部分であると判断できよう。

出土遺物 谷包含層下層からは弥生時代中期後半の壺・高坏・鉢などの土器片(369~376・378・379) や弥生後期の土器片(377・380)が出土しており、それよりも時代が降る時期の遺物は出土していない。 谷包含層中層からは381~385の須恵器壺片・土師器甕片・竈片・飯蛸壺片が出土しているが、飛鳥時 代~奈良時代にほぼ限定できる。

谷包含層上層からは白磁碗口縁部片 (386)、東播系須恵器塊片 (387・388)、東播系須恵器捏鉢 (389) といった12世紀以降の遺物が出土している。

これらのことから、谷部SV-E01は弥生時代中期後半には存在し、飛鳥時代~奈良時代の堆積や埋め立てを経て、その後中世に埋め立ても含めほぼ埋没したと判断される。

第3節 出土遺物

1. 竪穴住居

SH-E05 (図版59 写真図版)

258は須恵器坏蓋である。天井部から体部へは丸みをもち、境界付近に段を有さない。口縁端部は丸くおさめる。

SH-E06 (図版59 写真図版)

S7は有茎式石鏃。石材は肉眼観察では讃岐産のサヌカイトである。基部は欠損するため形状は不明。 現存長2.9cm、幅2.0cm、厚さ0.45cmを測る。最大幅は基部付近にもち、外縁は直線的である。

SH-E07 (図版59 写真図版83·84)

中央土坑

259は土坑埋土第4層の土坑肩に近い部分で出土した中空の弥生土器高坏脚部である。軟質のため、磨滅や剥離により器壁が薄くなってしまっており、端部も変形している。脚端部径は8.7cm、残存高は8.7cmである。中期後半の所産と思われる。

柱穴

260は主柱穴と思われるP3の掘形から出土した弥生土器高坏脚部である。259と異なって、残存状況は内面を除いて比較的良好である。中空のもので、脚柱部から裾部へは屈曲ぎみに外反している。脚端部は主として上方に拡張し、端部に幅広い面を作り出しているが、凹線文は施さず、上下2段のわずかな凹面を呈するにとどまる。外面は縦方向のやや幅広いヘラミガキで、内面にはシボリ目が残存している。脚端径は14.8cm、残存高は9.0cmである。7.5YR6/6の橙色を呈している。

261は主柱穴とは判断しなかったP9の掘形から出土した弥生土器鉢の坏部片である。口径は14.6cmと小ぶりであるが、小片のためやや不安を残す。また、傾きも口縁端部が内傾する面となることから、水平面に置くならば高坏の形状となろう。その際には口径がさらに大きくなる必要がある。口縁部外面の約1.5cm下には、幅約5mmの鈍く幅広い凹線文が認められる。内外面はヘラミガキ調整であるが、外面下半はヘラミガキ後、その他の部分ではハケの後に施している。5YR6/6の橙色である。中期後半の時期である。

262も261と同様にP9の掘形から出土したものである。口径約11.5cmと小ぶりの弥生土器の高坏坏部片で、口縁端部内側が欠けている。内面および坏底部外面は縦方向、坏口縁部外面は横方向のヘラミガキで、やや細かい点が特徴である。外面の口縁端部直下と坏底部との境のすぐ上に沈線状の直線文を描いている。幅はいずれも1mm以内で、坏底部のすぐ上のものは、2.5mmの間隔を空けて2条施している。中期後半に位置づけできよう。10YR7/3~7/4のにぶい黄橙色を呈している。

263もP9の掘形から出土したものである。弥生土器底部のやや大きめの破片で、底径は7.1cmである。 内外面とも縦ハケで仕上げており、底部が若干突出気味であることから、中期後半でもやや古い様相を 示しているものと思われる。残存高は12.6cmで、外面がハケ調整であることから、器種は甕と思われる。

264は出土遺構がP2、P3のいずれかであるが、掘形からの出土である。弥生土器底部であるが、器壁がやや薄い底部から横外上方にひろがる体部となる。外面はヘラミガキ、底部外面および外面の体部下端にはハケ状工具を使用したナデが認められる。壺の可能性が高く、中期後半でもやや古い様相を示していると思われる。5YR6/6の橙色を呈している。

265はP1の埋土から出土した土師器の埦または鉢底部と思われる小片である。高坏の可能性も残す。

残存高は5.1cmで、器壁は通常の土師器埦よりもやや厚く、内面がハケ、外面がハケのちヘラミガキであることから、古墳時代の可能性がある。この土器が示す時期と柱穴の時期とは合わない。2.5Y7/2の 灰黄色を呈する。

2. 掘立柱建物

SB-E01 (図版59 写真図版84)

266・267は須恵器坏Bであり、底部のみ残存する。平底にハ字に開く高台を貼り付ける。268は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反しながら開いて端部は丸くおさめる。

SB-E07 (図版59 写真図版83·84)

269は北西隅のP10の埋土から出土した平安時代後期の東播系須恵器埦底部の小片で、おそらく柱痕部分から出土したものであろう。回転糸切の平高台は径5.1cmで、体部内外面は回転ナデである。平高台は側面の高さが3.5mmあり、側面に工具によるオサエが認められる。11世紀末~12世紀前半の所産と推定される。

S8は東側柱列のP2の掘形から出土したサヌカイトの剥片である。末端側で厚みを増す剝片の上下両縁に、細かな剝離痕が認められる石器である。楔形石器の可能性も捨象できないが、縁辺の潰れがほとんど見られないことから、二次加工のある剝片に分類しておく。本遺跡では他に見られない、緻密なサヌカイトを用いており、肉眼観察では二上山産と推定される。弥生時代中期の包含層が柱穴掘削時には残存していたことから、石器が掘形埋土に混入したものと思われる。

SB-E09 (図版59 写真図版83·84)

270は東側柱列のP4の掘形埋土から出土した須恵器坏Bの底部である。やや外側に踏ん張る輪高台は径9.2cmで、内面は使用により少し平滑になっている。断面にはセピア色を呈する部分が少し認められる。 奈良時代前半頃のものと思われる。

271は西側柱列のP9の柱痕から出土した須恵器坏口縁部の小片である。焼成はやや良好・堅緻で、N7/の灰白色を呈しており、口縁端部は外側に少し屈曲している。飛鳥~奈良時代前期の可能性がある。

3. 柱穴

P-E01 (図版59 写真図版83)

272は須恵器埦で、法量は口径16.6cm、器高5.2cm、底径5.8cmである。

P-E02 (図版59 写真図版)

273は土師器皿で、口径8.0cmである。

P-E03 (図版59 写真図版)

274は須恵器埦で、口径15.0cmである。

P-E04 (図版59 写真図版83)

275は須恵器埦で法量は口径13.1cm、器高4.55cm、底径5.25cmである。

P-E05 (図版59 写真図版)

276は須恵器埦である。底部片で高台を持つ埦である。

P-E06 (図版59 写真図版83·85)

277~279は須恵器埦、280は須恵器小皿、282~284は土師器小皿である。277・278は胴体下部を欠き、

口径15.6~15.95cmで全体的に直線的な体部を持つ。279は底部片である。高くハの字に踏ん張る高台を持つ。

280は口径8.5cmでやや内湾気味に立ち上がる体部を持つ。やや深手の個体である。282~284は口径8.0~9.1cm、器高1.3~2.2cm、底径4.5~6.15cmを測る。いずれも糸切り皿で、体部が外方に開く。

281は須恵器坏蓋である。天井部から体部へは丸みをもち、境界付近にやや鈍い段を有する。口縁端部は丸くおさめる。

P-E07 (図版59 写真図版83)

285・286は土師器小皿で、口径8.35~8.9cm、器高1.45cm、底径4.6~5.4cmである。いずれも糸切り皿で285はやや厚手の個体である。286は口縁部を丸くおえる。

P-E08 (図版60 写真図版85)

287は須恵器坏蓋である。天井部と体部の境界付近は屈曲をもつのみで段は有しない。口縁端部は丸くおさめる。288は須恵器横瓶である。口縁部は体部から屈曲し直線的に短く立ち上がる。端部は上下に拡張する。体部は大半を欠くが、外面は横方向の平行タタキ、内面は同心円文のタタキを施す。

P-E09 (図版60 写真図版85)

289は小型の須恵器壺である。やや扁平な体部のみ残存し、やや肩は張る。

P-E10 (図版60 写真図版85)

290は須恵器曃である。体部は丸くなで肩ぎみである。

P-E11 (図版60 写真図版85)

291は須恵器坏Bである。平底の底部に短くハ字に開く高台を貼り付ける。

P-E12 (図版60 写真図版85)

292は須恵器坏Aである。平底の底部から屈曲して口縁部が直線的に立ち上がる。

P-E13 (図版60 写真図版85)

293は須恵器壺である。肩の張った体部で底部は平底である。肩部は4条の凹線により分割され、その上半に波状文、下半に列点文を施す。

P-E14 (図版60 写真図版85)

294・295は弥生土器甕あるいは壺の底部である。

P-E15 (図版60 写真図版85)

296は土師器小型丸底鉢であり、扁平な球状をなす体部から口縁部が長くのびる。口径が体部径よりも大きい。

P-E16 (図版60 写真図版85)

297は土師器甕である。口縁部は体部からく字状に開き、端部はわずかに肥厚して面をもつ。

P-E17 (図版60 写真図版83)

298は須恵器埦である。口径14.1cm、器高5.1cm、底径6.3cmで高台を持ち内面底部は窪む。全体に薄手の個体で丁寧なつくりである。

P-E18 (図版60 写真図版86)

299は柱穴埋土出土の弥生土器甕の口縁部小片である。口縁部は「く」字形に外反し、端部は丸くおさめる。口径は13.8cmを測る。体部外面は細筋のタタキのようである。体部内面は磨滅により調整不明。弥生時代後期後半~古墳時代初頭におさまるものである。

300も柱穴埋土出土で、弥生土器底部片である。径6.2cmの平底で、器表は磨滅や剥離がみられる。中期の可能性がある。

P-E19 (図版60 写真図版86)

301は柱穴埋土出土の弥生土器脚部片で、鉢の可能性がある。「ハ」字形に直線的に開く脚端部は主として上方に拡張している。端面には丸みがある。器表磨滅により調整は不明である。残存高は6.9cmで、中期後半と思われる。

P-E20 (図版60 写真図版86)

302は埋土出土の須恵器坏口縁部である。内弯気味の体部で、口縁端部は丸みをもたせてわずかに外 反させている。細片のため口径は不明である。古墳時代後期末~飛鳥時代と思われる。

P-E21 (図版60 写真図版86)

303は柱痕から出土した須恵器坏の口縁部破片である。口縁部は、外上方にのびる体部から少し折れて上方にのびている。端部は丸い。口径は10.5cmを測る。焼成がやや悪く、やや軟質である。TK217型式期より新しい飛鳥時代と思われる。

P-E22 (図版60 写真図版86)

304は須恵器坏蓋の比較的大きな破片である。口縁部はほぼ垂直に短く垂下し、端面は凹面をなす。 口径は15.8cmである。天井部外面は回転ヘラ切のちナデを施している。残存高は1.6cmである。平城宮Ⅲ 前後の時期と推定している。柱穴埋土から出土したものである。

P-E23 (図版60 写真図版86)

305は掘形出土の須恵器坏蓋の口縁部小片である。口縁部はほぼ垂直に短く垂下する。口径は12.8cmで、 硬質の焼成となっている。平城宮Ⅲの時期と推定している。

P-E24 (図版60 写真図版86)

306は埋土出土の須恵器坏の比較的大きな破片であるが、口縁部を欠失する。断面三角形の輪高台径は9.8cmで、底部外面の高台内側には爪状の圧痕が認められる。底部から体部への変換は緩やかで丸みをもっている。平城宮Ⅱ頃の可能性がある。

310も埋土出の須恵器坏であるが、口縁部の小片である。直線的に外上方にのびる。

P-E25 (図版60 写真図版86)

307は埋土出土の輪高台を有する須恵器底部である。高台は断面長方形で、径9.5cm、高さは1.0cmと高い。外面に自然釉を薄く被るが、器種は不明である。内面には不定方向のナデが認められる。

P-E26 (図版60 写真図版86)

308は須恵器坏口縁部の小片で、埋土出土である。口径は13.9cmを測るが、不正確である。焼成はややあまく、やや軟質となっている。

309も埋土出土で、須恵器坏蓋の口縁部小片である。平城宮Ⅲ前後の時期と思われる。

P-E27 (図版60 写真図版86)

311は焼成不良で軟質の土師器坏で、口径は14.0cmを測る。口縁部は外上方に外反気味にのびる。底部は欠失する。器表磨滅・剥離のため調整不明である。柱穴埋土から出土した。

312も柱穴埋土から出土した。須恵器坏蓋の比較的大きな破片である。口縁部は天井部から丸みをもちながら下外方にのびた後、外反して水平に短くのびる。端部は丸くおさめるが、内面側には工具痕により凹面が認められる。口径は17.7cmで、焼成はやや悪い。一部に火襷痕が認められる。平安時代初期

と思われる。

P-E28 (図版60 写真図版85)

313は調査区南東端に近い柱穴の掘形から出土した土師器坏Aである。破片の量が多く、約1/2に達する。口径13.0cm、器高3.2cmで、回転ヘラ切の底部径は8.5cmである。体部の一部にはヘラミガキのようにみえる所がある。5YR6/6の橙色を呈する。奈良時代でも後半以降か平安時代初期の可能性がある。

P-E29 (図版60 写真図版86)

314は調査区北東部の柱穴埋土から出土した、土師器堝の口縁部片である。奈良頃の可能性がある。 ほぼ垂直と想定される体部から曲折するように外上方にのびる口縁部で、端部は内傾する面をもつ。口 径は26.7cmで、体部外面は横方向のハケのようである。外面全体に煤が付着している。軟質で、内面の 器表が剥離している。奈良時代頃の可能性がある。

P-E30 (図版60 写真図版86)

315は柱痕出土の須恵器坏B底部破片で、高台径は10.5cmである。底部から体部へは曲折してのびるようである。焼成は良好で堅緻となっている。奈良時代前半と推定している。

316も柱痕出土で、須恵器の坏片である。口径は12.6cm、器高3.1cmである。回転ヘラ切の平底から外上方に直線的にやや長くのびる口縁部で、端部は厚みを減じながら丸くおさめている。口縁端部には重ね焼きの痕跡が認められる。平安時代の10世紀頃の所産であろう。焼成はやや悪く軟質である。

P-E31 (図版60 写真図版86)

317は柱穴埋土出土の須恵器坏片であるが、焼成不良で軟質、器表が磨滅している。少し丸みのある 底部から曲折して外上方にのびる。奈良時代~平安時代前期の可能性がある。底径は10.5cm。

P-E32 (図版60 写真図版86)

318は柱痕出土の須恵器坏の比較的大きな破片であるが、焼成は不良である。底径11.0cmの平底から曲折して上方にのびる口縁部を有する。口径は13.9cmを測る。器高は3.6cmである。平安時代前期頃と思われる。

P-E33 (図版60 写真図版83)

319は柱痕出土の東播系須恵器境の約1/2の破片である。口径15.1cm、底部は輪高台を貼り付けており、径8.2cm。高台で囲まれた部分が高台よりも下方に下がっているが、器高は5.6cmである。内外面ともに火襷痕が認められ、焼成は良好、堅緻であるが、胎土には1~1.5mm大の砂粒を多く含んでいる。体部にはロクロ目が顕著である。10世紀後半の神出古窯跡群鴨谷窯の製品とされる。

P-E34 (図版60 写真図版86)

320埋土出土の東播系須恵器境口縁部の破片で、口径は15.4cmを測る。焼成は非常に悪く、土師器のようである。平安時代末~鎌倉時代初頭と思われる。

4. 土坑

SK-E01 (図版61 写真図版83)

321は須恵器埦である。口径16.75cm、器高6.75cm、高台径7.4cmである。薄手の個体で高台をもつ。内面底部を窪ませるもので、外面の体部中位には1条の沈線が観察される。

SK-E02 (図版61)

322・323は柿釉の小皿である。口径6.1~6.4cm、器高1.2~1.4cm、底径2.8~3.4cmである。

SK-E03 (図版61)

324は黒色土器埦である。口径16.4cm、器高4.65cm、高台径6.4cmを測る。摩滅のため調整は不明であるが、 器高が低くやや大振りの椀である。

SK-E05 (図版61 写真図版86)

南北に長い楕円形土坑のSK-E05埋土からは中世前期と思われる土器が出土した。

325は東播系須恵器捏鉢の底部片である。底径12.5cmで、焼成は悪く軟質であるが、底部内面は平滑となっており、使用の痕跡と思われる。

326も東播系須恵器であるが、埦の底部片である。平高台の底径は4.5cmで、焼成悪く軟質である。12世紀後半頃の時期と思われる。

327も東播系須恵器埦の口縁部片である。焼成やや悪く軟質である。12世紀代と思われる。

5. 溝

SD-E01 (図版62~64 写真図版87~90)

SD-E01からは奈良時代の土器を中心として、弥生時代の石器等も出土している。土器の出土層は主として上面(第1層)から第4層までであるが、特に検出面から深さ約20cmまでの上部に集中している傾向が認められる。弥生時代の石器も同じ層から出土したものである。なお、埋土最下層からは図示できる遺物は認められなかった。

須恵器坏蓋 328~333は須恵器坏蓋である。

328は内面にかえりを有するもので、その高さは口縁端部下端よりも若干低い。半分程度の破片で、口径は10.5cmである。天井部外面中央には宝珠つまみが剥がれた痕跡を残している。残存高は2.1cmである。天井部外面の回転へラケズリは約半分の範囲である。TK46型式期である。

329もつまみを有する蓋であるが、口縁端部は垂下するタイプである。口径16.6cm、器高3.3cmで、つまみは中央部が窪んだ扁平なものであり、径3.3cmを測る。焼成悪くやや軟質である。平城宮Ⅰか平城宮Ⅱの時期と思われる。

330は中央部を欠失しているため、つまみの有無は不明である。口径17.2cm、残存高2.0cmで、口縁部は天井部から屈曲ぎみに下外方へのびた後、屈曲して水平方向に短くのび、端部を垂下させるものである。焼成は良好、堅緻で、5Y7/1の灰白色を呈する。平城宮Ⅲ前後の時期であろう。

331もつまみの有無は不明である。口径17.9cmで、残存高は1.6cmである。口縁部はほぼ平らな天井部から下外方に丸みをもって緩やかにのびるもので、端部は下方に少し拡張している。平城宮Ⅲの可能性がある。

332は口径17.8cmを測る。口縁端部は下方に折り曲げたようになっており、外面は凹線状になっている。 焼成良好で、堅緻である。平城宮Ⅲ頃の可能性がある。

333はつまみを欠失するもので、約1/6の破片である。天井部から曲折して下外方にのびた後、垂下する口縁端部となっている。口径は15.8cmで、残存高は1.9cmである。平城宮Ⅲ頃の時期と思われる。 須恵器坏 334~343は須恵器坏である。

334は坏Gの比較的大きな破片である。口径は10.3cm、器高3.5cmで、回転ヘラ切の底径は6.7cmである。 焼成は良好で堅緻であるが、楕円形にやや歪む。飛鳥Ⅱの時期で、TK46型式期と思われる。

335は口径11.2cm、器高4.4cmの坏Aで、比較的薄いつくりである。底部と体部の境部分の外面には、

ヘラによるケズリ状の調整を、底部のヘラ切後に施している。飛鳥Ⅳ頃としておきたい。

336は1/3程度の坏Aの破片で、口径12.8cm。底部は水平ではなく、残存高は4.2cmである。底部外面は回転へラ切後未調整となっている。焼成はやや悪く、表面は10YR1/3の黒褐色を呈するが、断面はセピア色となっている。詳細時期は不明だが、奈良時代前半の可能性がある。

337は口縁端部がやや外反する坏Aで、口径13.4cm、器高3.6cmを測る。ナデを加えた回転ヘラ切の底部は径8.7cmである。底部外面以外の内外面が平滑となっており、使用によるものと思われる。平城宮Ⅱ頃と想定している。

338はやや丸みをもった底部と体部の境の外面に、幅約 $1 \, \mathrm{cm}$ にわたって、回転ヘラ切後にヘラ削り調整を加えている。口縁部は少し外反し、端部の器厚を若干厚くしている。焼成はやや悪く $2.5 \, \mathrm{Y8/10}$ の灰白色を呈し、やや軟質である。平城宮 $\Pi \, \mathrm{G}$ 切と思われる。

339は底部と体部の境が明瞭な坏Aで、口径15.7cm、器高3.6cm、底径10.9cmを測る。軟質で、全体に器表の磨滅が激しい。

340はSD-E01に設定したサブトレンチ内より出土した坏Aである。口径15.2cm、器高3.5cmで、底部の器厚は比較的薄い。底径は13.0cmで、焼成悪く乳白色で、軟質である。口縁部には灰色の重ね焼き痕跡が認められる。平安時代初期の可能性がある。

341は坏Bであるが、高台の厚さが薄く、小さい観がある。口径14.6cm、器高3.7cm、高台径11.3cmで、焼成悪く軟質である。底部内面は磨いたように非常に平滑となっており、使用痕と判断される。底部外面には、高台から約2cm内側に爪形の圧痕が高台と平行して多く認められる。奈良時代後半の可能性がある。

342は口径12.8cm、器高4.2cmの坏Bで、高台径は10.2cmである。焼成良好で堅緻であり、N6/の灰色を呈している。底部内面は平滑になっており、使用痕と思われる。平城宮Ⅱ頃と推定している。

343は口径16cm、器高5.9cmとやや大ぶりの坏Bである。高台径は11.1cmで、焼成は良好・堅緻であるが、 断面に暗橙色のラインがサンドイッチ状に入っている。内面の口縁端部付近に幅2mmほどの凹線状のも のが認められるが、意識的かどうかは不明である。径高指数は37で、平城宮Ⅱの時期と思われる。

344・345は土師器坏で、344の内面には暗文が遺存しているが、345は器表の傷みが激しい。ともに口縁端部を内側に短く折り曲げており、体部の屈曲も認められる。平城宮Ⅱの時期と思われる。344は口径18.5cm、残存高3.7cmである。345は口径19.0cm、残存高4.1cmで、345の底部外面にはヘラケズリが遺存している。両者は同一個体の可能性がある。

346は 虚のような形態で、注口部を有する 須恵器壺の体部であり、体部はほぼ完形である。体部最大径は12.9cm、残存高は10.9cmで、輪高台の径は約8.2cmである。体部上端の破面は丸みがあることから、頸部以上を欠失したまま使用していた可能性がある。肩部以上には 3 条を基本とした沈線を施している。焼成はやや不良で、やや軟質となっている。外面は N5/の灰色であるが、断面はセピア色を呈する。

347は須恵器の把手付中空円面硯である。外堤部を欠失しており、硯部の推定径は14.0cmで、推定器高は4.3cmである。陸部分の径は9.8cmで、海部分の底とは4mmの段差がある。陸は周囲が高く、中央に向かって約8mm窪んでおり、使用により非常に平滑となっている。

硯側面のほぼ中央には径1.0~1.2cmの孔が斜め下方向に穿たれており、その孔の周囲が高くなるように器表を削ってはいるが、孔の周囲には剥離痕が認められない。したがって、例えば竹や木といったものを孔に差し込んで把手としていたことが推察される。なお、硯側面には南あわじ市鈩田遺跡例のよう

な文様は施さず、無文である。

硯底径は10.6cmで、底部外面は回転ヘラケズリを施した後、ナデを施している。なお、内面にはロクロ目がよく残っており、器壁は厚く、焼成は良好・堅緻である。奈良時代と思われるが、詳細時期は不明である。

348は須恵器の壺である。破片であるが、復元すると、口径10.3cm、体部最大径21.1cmの肩部が丸い直口壺となる。器高は19.0cmであるが、輪高台が剥離した痕跡が底部に残っていることから完形での器高はもう少し高くなる。なお、剥離部分には平行タタキ目が遺存している。口縁部は外上方に外反気味に約3cmのび、端部は外方に少し拡張・肥厚させている。端面は水平でやや凹面をなす。焼成は良好・堅緻であるが、断面はセピア色を呈している。肩部外面には鮮やかな緑色の自然釉が付着している。平城宮Ⅱ頃と思われる。

349は須恵器長頸壺の口縁部であろう。焼成は良好で、表面に自然釉がかかり、外面よりも内面の方が釉の量が多い。外上方にのびた後大きく外反する口縁部で、端部は尖り気味になっている。口径は12.8cmである。7世紀代~奈良時代のものである。

350はSD-E01に設定したサブトレンチ内より出土した須恵器壺の下半部片である。輪高台の径は9.5 cmで、残存高は6.7cmを測る。焼成は良好で、断面の内面側はセピア色を呈している。外面に薄く灰釉がかかる。

351は短頸の須恵器壺Aの口縁部である。口径は11.8cmで、焼成は良好だが暗緑がかった灰色を呈しており、断面はセピア色である。

352は平安時代の可能性がある須恵器壺の口縁部で、口径は24.5cmである。大きく外反してのびる口縁部の端を主として上方に少し拡張して口縁端部としている。焼成良好で、堅緻である。

353は須恵器甕の口縁部で、端部を下方に肥厚させている。上端は上方に少し引きのばす。口径は21.1cmで、焼成良好である。平城宮 I 頃の所産と思われる。

354は「く」字形に短く外反する口縁部をもつ須恵器甕の口縁部である。口径は24.4cmで、体部外面には平行タタキ、内面には同心円の当て具痕が残っている。

355~361は各時期にわたるが、土師器の甕である。

355は体部がほぼ垂直で、外反する口縁部を有し、体部外面をタテハケ、口縁部をヨコハケする、奈良時代頃のものと思われる。口径は25.4cmで、体部内面は横方向の板ナデ状になっており、体部外面は器表が荒れている。

356は「く」字形に外反する口縁部を有する甕上半部である。口縁端部は上下にわずかに肥厚させている。口径は22.5cmで、器表の剥離のため調整痕はほとんど不明であるが、一部にヨコハケが遺存している。古墳時代中期後半~末頃の可能性がある。焼成はやや不良である。

357は体部からいちどほぼ垂直にのびた後、外反する口縁部を有するもので、端部は尖り気味に丸くおさめる。体部外面はヨコハケ、内面はヘラケズリのようである。口径は19.4cmで、古墳時代後期後半頃の可能性がある。

358は口縁端部を上方に少しひきのばすもので、体部外面は縦方向のハケのようである。口径は15.8 cmである。

359は口縁部がほぼ直立した後、短く外反する端部となる。体部外面は縦方向のハケで、器表の剥離が顕著である。口径は14.6cmで、形態的には古墳時代後期の可能性がある。

360は直立する体部から外反して短くのびる口縁部となる甕である。器表は磨滅している部分が多いが、体部外面は縦方向の粗いハケ目、内面は板ナデのようである。口径は27.1cmで、平安時代の可能性がある。

361も直立する体部から外反して短くのびる口縁部で、端部は上方に少し拡張している。体部外面は 縦方向の粗いハケ、体部内面および口縁部は粗いヨコハケである。口径は22.2cmで、平安時代の可能性 がある。

362~365は奈良時代を中心とした時期の製塩土器である。

362は埦形に近い形態のもので、外面には粘土の接合痕が2箇所残っている。表面は凹凸がやや多く、 外面は7.5YR7/4のにぶい橙色、内面は10YR7/4のにぶい黄橙色を呈している。

363の口縁端部は角張っているが、全体的なものかどうかは不明である。砲弾形に近い形態と思われる。 内外面とも362の外面と同色である。

364と384は砲弾形の体部破片で、外面には粘土紐の接合痕が残っており、それによれば粘土紐の幅は約2.5cmとなる。内外面とも362と同様の色調を示す。

 $366 \cdot 367$ は釣鐘形の蛸壺の釣手部分である。その大きさから飯蛸壺と思われる。釣手部分は高さ $3 \sim 4$ cm cm

368は弥生土器底部である。底径5.7cmの平底であるが、ドーナツ状上げ底に近い。体部外面には平行 タタキ目が遺存していることなどから後期後半とすることができる。全体にローリングを受けたように なっている。

S9~S12は石器類である。

S9は重量が1kgを超える大型剝片である。全体に、厚さが2.5cm前後を測る板状剝片で、打面部は二次的な剝離によって除去されている。剝片末端側は、折れ面となっている。ほぼ全周にわたって表裏で剝離がおこなわれているため、一見、石核状に見えるが、剝離面を精査すると、相対的に大型の剝離痕のほとんどは、その後におこなわれた小剝離によって打面部を失っている。また、背面側左側縁の突出した端部は、繰り返された打撃によって顕著な潰れの状態を見せている。こうしたことから、本資料の縁辺に見られる剝離は、剝片剝離を目的としたものとするよりも、本資料の形状を整えるための剝離とした方が穏当であろう。

S10は剝片である。厚みのある剥片であるが、2側面は折れ面であり、主要剝離面の打面は残されていない。図示した剝片も2点の断片が、接合したものである。縁辺には、鋸歯状を呈する剝離痕が並ぶが、仔細に観察すると、剝離痕の大きさ・剝離角などにばらつきが大きく、二次加工としての意図が看取できないため、剝片に分類しておく。背面は、平坦な剝離面1面で構成されている。

S11は砥石である。細粒で硬質の凝灰質砂岩を用い、直方体に整形したもので、表裏および両側面ともに使用痕(研磨痕)が見られる。基本的には砥石の長軸に沿う方向で研磨が行われているが、左図の左側面では、長軸に直行する方向に、鋭利な傷が認められる。上下両端面は、打撃によって整形された面である。

S12は四辺形を呈する、厚みのある折断された剝片である。本来は、板状の大型剝片であったと思われるが、図下面に自然面をとどめるほかは、3側面すべてが折断面となっており、主要剝離面の打面も失われている。排土中より採集された資料であるが、溝状遺構出土の可能性が高い。

6·谷部

SV-E01 (図版65 写真図版90~92)

369~389は1998年度調査区の南西隅に位置する谷状遺構からの出土遺物である。弥生時代中期~後期、飛鳥時代~奈良時代、平安時代末~鎌倉時代のものが含まれる。369~380は大半が谷部の第22層~第26層の黒褐色系の層から出土したもので、381~384はにぶい黄褐色や黄灰色・灰黄色を示す第12層~第19層に相当する層から出土し、385は第14層から出土したものである。386~389は第6層~第9層に相当する灰黄色系の層から出土したものであり、調査時には包含層下半として取り上げたものである。

369・370は壺の口縁部小片で、369は口縁端部を上下に拡張し、端面に3条の凹線文を施している。 頸部に近い部分の外面は縦ハケ調整である。370は口径20.3cmを測り、口縁端部を上下に大きく拡張し、 端面に4条の凹線を施している。小片のため端面の浮文の有無は不明である。口縁端部内面には9条1 単位の櫛描波状文を描いている。369・370ともに弥生時代中期後半のIV期の時期が与えられる。

371・372は櫛描文を描いた壺体部の破片である。371は体部上半で、上から8条1単位の直線文、5~7条1単位の波状文、8条1単位の直線文を施している。最上部の直線文は頸部の直下と思われる。 櫛描文を描く前には縦方向のハケを施している。372は小片で、直線文の上下に波状文が認められる。 弥生時代中期に属する。

373は垂下口縁高坏の下垂部である。径は25.2cmである。焼成はやや良好であるが、遺存状態はやや悪い。外面は横方向のヘラミガキである。弥生時代中期後半である。

374・375は高坏等の脚裾部である。374は主として上方に端部を拡張する。脚端径は14.8cmで、端面は若干凹面となる。器表が荒れているため調整は不明である。375は脚端部を上下に若干拡張したものである。脚端径は13.2cmを測る。374・375ともに弥生時代中期後半の時期が与えられる。

376は鉢または無頸壺の口縁部片である。口径は14.4cmで、口縁部は内側に弯曲し、上面はほぼ水平な平坦面をなしている。外面の口縁部直下と約3cm下には幅2mmと3mmの凹線を各1条施している。器表磨滅のため調整は不明である。弥生時代中期後半の土器である。

377は有孔の器種で、鉢と思われる。底部中央の焼成前に穿たれた孔は、径約2.3cmの円形と推定できる。 底径は7.5cmで、外上方に内湾ぎみにのびる体部の外面には太筋の平行タタキ目が遺存しており、底部 の形状と合わせると、弥生時代中期末頃から後期の時期が与えられよう。

378~380は底部で、すべて平底である。378は底径8.4cmとやや大きく、内面はヘラケズリのようであり、体部外面はタテハケの可能性がある。形状・調整から弥生時代中期後半に位置づけられよう。379は底径9.4cmとさらに径が大きいもので、調整は不明であるが、形状から弥生時代中期に属することは明白である。380は底径6.2cmとやや小ぶりで、底面は凹面を呈している。底部はやや突出している。体部の外面はヘラミガキのようであり、内面はヘラケズリのようにみえる。時期的には弥生時代中期後半から後期の幅が与えられよう。

381は須恵器横瓶の口縁部片で、口径は13.3cmを測る。口縁端部は上方に少し拡張し、端部外面には 凹面を有する。焼成は良好・堅緻で、体部外面は平行タタキ、内面には同心円の当て具痕が明瞭に残る。

382は須恵器壺の下半部で、径13.6cmの輪高台を有する。体部外面の下端にはカキ目が残り、自然釉が付着している。焼成は良好・堅緻で、体部内面には高台と同じ位置にまで自然釉が付着していることから、口径がやや大きめの種類であることが推察される。

383は口径11.8cmの土師器甕片である。口縁部は外反して、器厚を減じながら外上方にのびる。端部

は丸くおさめる。体部外面にはタテハケが遺存し、内面は横方向のヘラケズリである。焼成は悪く軟質である。古墳時代後期~奈良時代頃と思われる。

384は移動式竈の口縁部片である。器厚は1.0~1.5cmと厚く、口縁部は外側に拡張している。外面は粗いタテハケで、内面はナデのようである。上端面を水平にした場合、かなり下外方に傾く形状となる。詳細時期は不明であるが、古墳時代末~奈良時代の間におさまる。

385は釣鐘形の飯蛸壺で、釣手部分の破片である。釣手部分の形状は角張っており、円孔は径1.5cmである。焼成は悪く軟質である。

386は玉縁口縁の白磁碗の口縁部片で、玉縁であることから横田・森田分類の白磁碗Ⅳ類に分類される。 口径は14.9cmで、遺存している部分の全面に釉が認められる。平安時代後期~鎌倉時代に位置づけされる。

387・388は回転糸切の平高台をもつ、東播系須恵器埦の底部付近の破片である。387の高台径は5.3cmで、高さは約4mmとやや高いが、底部側面の調整はおこなわれていない。体部から底部にかけての内面には大きな段が認められる。焼成はややあまく、緑がかった灰色を呈している。12世紀でも早い段階のものと思われる。388の底径は7.6cmとやや大きいが、平高台が楕円形の可能性がある。平高台の高さは約3mmで、内面の体部と底部の境には小さな段を有する。12世紀中頃を中心とした時期と考えられる。

389は東播系須恵器捏鉢である。口径31.7cmで、口縁端部を若干肥厚させ上方にひきのばしている。 焼成は良好・堅緻で、暗灰色を呈する。内面の使用痕は顕著でないが、ロクロ目は顕著である。なお、 重ね焼き痕跡として、口縁部外面に黒っぽい自然釉が付着している。14世紀と思われる。

7. 包含層

包含層(台地面)(図版66 写真図版90・92)

390は中空の脚柱部で、高坏と思われる。残存高は10.8cmで上下端に各4条単位のヘラ描直線文を施している。外面は器表が荒れているため調整痕は不明であるが、内面は下部にヘラケズリが認められる。なお、坏底部中央は円板充填である。弥生時代中期後半の所産であろう。

391は須恵器の大形甕の口縁部片である。口縁端部は主として下方に拡張し、端面には2面の凹面が認められる。口縁部外面には波状文の省略形である斜行直線文を密にヘラで施している。シャープなつくりとなっており、焼成も良好である。また、表面には灰被りが認められ、外面のみ黒色化している。MT15型式期~TK10型式期頃で、6世紀前半頃と思われる。

392は平城宮 I か平城宮 II の頃と思われる須恵器坏蓋である。つまみを欠失している。口径13.5cm、 残存高2.2cmで、天井部はほぼ水平で、口縁部へはややにぶい稜をもって続き、口縁端部は下方に折り 曲げているが、稜はあまい。焼成はやや良好である。

393は口径11.6cmの須恵器口縁部片である。開く角度が大きく、下部には2条の沈線文を施していることから、平瓶の口縁部と推察される。奈良時代と推定される。焼成は良好、堅緻である。

394は東播系須恵器埦の破片である。口径15.1cm、器高5.1cmで、体部は外弯気味で、端部は若干外反する。 径8.0cm、高さ1.0cmの平高台の側面にはヨコナデを施しており、底面との境の稜は幅1mm強の面取りを おこなっている。神戸市西区の神出窯跡群で最古の鴨谷窯(10世紀後半)の製品と推測される。

包含層上層 (図版66 写真図版92・93)

主として谷部SV-E01の北東側部分の包含層から出土した遺物について、包含層上層出土遺物として

報告する。395~410の16点で、飛鳥時代~13・14世紀頃の遺物がある。

395は口径12.6cmの須恵器無蓋高坏の坏部である。坏部の高さは3.9cmで、径7.2cmの坏底部外面はほぼ水平である。口縁部はやや屈曲ぎみに外上方にのびる。焼成は良好である。TK217型式期と思われる。

396は平城宮 Ⅵ 頃と推定される須恵器坏蓋である。天井部から下外方に稜をもってのびた後、横外方に外反しながら短かくのびて、さらに大きく下方に弯曲して短くのびる口縁部としている。端部は丸い。口径は17.0cmで、残存高は1.7cmである。つまみの有無は不明である。焼成は良好であり、自然釉が内面の外周付近に認められることから、天地逆の状態で焼成されたことが窺える。

397は非常に精良な胎土を使用した須恵器皿Aの破片である。口径は23.8cm、器高2.4cmで、底部外面は回転ヘラケズリ後に回転ナデを加え、さらに磨いたように平滑になっている。内面も非常に平滑であり、焼成も良好である。平城宮Ⅱの頃と思われる。

398は須恵器の鉢Xである。口径18.9cm、残存高11.3cmで、底部外面には輪高台状に張り出す部分がへ ラ成形により造出されている。その径は13.1cmを測る。体部から口縁部へは直線的に外上方にのび、端 部は丸くおさめている。内面は全体に平滑になっており、使用痕と思われる。焼成はやや不良だが、堅 緻である。奈良時代と想定している。

399は須恵器甕の上部片である。口縁部は外上方に直線的に短くのび、端部にゆくにつれ厚みを増している。口径は14.3cmで、口縁端部はほぼ水平な凹面を呈している。肩部外面は平行タタキ、内面は同心円の当て具痕を残している。焼成は堅緻だが、発色が悪く、表面は10Y3/1のオリーブ黒色、断面はセピア色を呈している。平城宮 I 頃の甕の可能性がある。

400は口径22.7cmの土師器甕の破片で、体部はタテハケ、口縁部内面はヨコハケ調整である。口縁部は体部から外反して外上方にのび、内面には境の稜線を有する。口縁端部は端面を抑えることにより上方に若干拡張したかたちとなる。飛鳥時代~奈良時代前半の時期と判断している。

401も土師器甕であるが、全体に磨滅が激しく、器表が剥離した部分も多く、図上では器壁が薄くなっている。口縁端部は若干肥厚させ、垂直に近い端面とする。口径は16.2cmである。

402~404は製塩土器あるいは製塩土器と推定しているものである。402は形態的には平底となって、類例がないようである。内外面ともに凹凸が多く、粘土の接合痕も顕著であることから、製作技法的には製塩土器と推定している。しかし、胎土に含まれる混和剤の砂粒の量は少なく、砲弾形製塩土器と異なっている。口径は不明だが、器高は8.0cmである。403は口縁端部が鈎形になっているが、全体的なものかどうかは不明である。やや硬質で直径0.7mm~1.5mmの砂粒を多く含む。404は外面に粘土接合痕が残る。

405は釣鐘形の飯蛸壺である。釣手部分は扇形に近く、円孔の径は約1.8cmである。体部の最大径は5.6 cmと推定される。やや軟質である。

406・407は東播系須恵器境の破片である。406の平高台は全く突出せず、回転糸切痕が残っている。 体部は外上方に直線的にのび、口縁端部は丸くおさめている。口径は15.6cmとやや大きく、器高は3.6cm である。器厚が浅く、口縁部が外側に直線的に開くという形態から、13世紀前半の時期が与えられよう。 407は口縁部の小片で、口径14.8cm、外面の口縁端部直下に沈線状の窪みが認められるが、意識的なも のではないと思われる。焼成悪く5Y7/1の灰白色で、やや軟質である。口縁端部付近には重ね焼きの痕 跡があり、7.5Y3/1のオリーブ黒色を呈している。13世紀頃と判断している。

408は須恵器壺の下半部で、輪高台の径は9.8cmである。体部下半は直線的に上方にのびており、外面

は回転ナデ後ナデを加えている。残存高は7.6cmである。焼成は良好・堅緻で、平城宮 II 頃と想定している。 409・410は場の口縁部片である。両者は同一個体の可能性が高い。409の口径は22.8cmで、口縁部は 体部から曲折して外上方にやや長くのびた後、端部を横外方に短くひきのばしている。体部外面には平 行タタキ痕が残る。軟質で器表が磨滅している。410は409とほぼ同一形状で、口径は22.8cmを測る。中 世の場であり、13~14世紀の時期と判断している。

411は弥生土器甕である。体部を欠くためその形態は不明だが、口縁部はく字状に屈曲させて開き端部は丸くおさめる。412は弥生土器底部である。外面はハケ目調整。413は土師器場である。体部は内湾しつつ大きく開く。口縁部はL字に屈曲させ水平に開くが、さらに小さく屈曲させて端部にいたる。415は釣鐘形のイイダコ壺である。方形状の把手部から体部上半が残存する。416は弥生土器甕である。体部からく字に外反する口縁部をもち端部は上下に拡張して面をもつ。417・418は須恵器杯蓋である。いずれも天井部と体部の境界付近に段は有しない。口縁端部は丸くおさめる。418は内面に「×」とみられるへラ記号がある。419は須恵器杯身である。立ち上がりは短く内傾する。420は須恵器稜椀蓋である。天井部に輪状のつまみがつき、天井部と口縁部の境界付近に段をもつ。421は須恵器杯Aである。平底の底部から屈曲して体部が直線的にのびる。422は須恵器鉢である。口縁部は外面をナデて短く外反させる。端部は平坦でわずかに外傾する。

S13は有茎式石鏃。石材は肉眼観察では讃岐産のサヌカイトである。基部は欠損するが逆三角形とみられる。現存長3.6cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。最大幅は基部付近にもち、外縁は直線的である。

S14は削器。石材は肉眼観察では讃岐産のサヌカイトである。表裏から二次加工を施す。長さ5.5cm、幅5.1 cm、厚さ1.4cm、重さ31.2gを測る。

423・424は須恵器埦である。口径15.25~15.7cm、器高5.2~5.75cm、底径5.65~6.25cmを測る。両方とも薄手の個体で、高台をもち、内面が窪む。425・426は須恵器皿である。口径7.8~8.2cm、器高2.2~2.4 cm、底径4.1cmである。やや深手の個体で口径のわりに底径が小さい。427は須恵器鉢である。口径32.3cm、器高2.4cm、底径4.1cmを測る。

428は土師器境である。口径11.85cm、器高4.2cm、底径5.5cmである。体部が口縁部付近でやや内湾気味に立ち上がる個体で、先端を尖り気味におえる。429は土師器小皿。口径8.2cm、器高1.5cm、底径5.5cmで、底部糸切りで短い体部を持つ。430は土師器鍋で細片で近世に下るものである。431は土師器羽釜である。口径29.1cmで外面口縁部下に板状の鍔を貼り付ける。内面に板ナデ調整の痕跡が顕著に観察される。

432は青磁碗。口縁部を外反させるもので内面に1条の沈線を持つ。口径17.15cmである。433は白磁碗で、外開きの体部で口縁部を尖らせておえる。口径16.2cmである。434・435は陶器の平仄である。

第7章 自然科学分析

西神ニュータウンNo.62遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

西神ニュータウンNo.62遺跡は、兵庫県神戸市西区櫨谷町菅野字野手に所在する。測定対象試料は、 東区(平成10年度調査区B地区)遺物包含層採取土壌(1:IAAA-102494) 1点である(第1表)。

2 測定の意義

遺物包含層の年代を確定する。

3 化学処理工程

- 1)メス・ピンセットを使い、石や根などの混入物を取り除く。
- 2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。 処理には $1 \text{mol}/\ell$ (1 M) の塩酸 (1 HOL) を用い、表1 に「HOL」と記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C) を生成させる。
- 6) グラファイトを内径 1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

3MVタンデム加速器 (NEC Pelletron 9SDH-2) をベースとした 14 C-AMS専用装置を使用し、 14 Cの計数、 13 C濃度 (13 C/ 12 C)、 14 C濃度 (14 C/ 12 C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) δ ¹³C は、試料炭素の¹³C 濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(第 1 表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) 14 C年代(Libby Age:yrBP)は、過去の大気中 14 C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 14 C年代は δ 13 Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第1表に、補正していない値を参考値として第2表に示した。 14 C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 14 C年代の誤差(\pm 1 σ)は、試料の 14 C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3)pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。 pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)

の場合Modernとする。この値も δ ¹³Cによって補正する必要があるため、補正した値を第1表に、補正していない値を参考値として第2表に示した。

(4)暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14 C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14 C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 14 C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が 14 C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 δ^{13} C補正を行い、下一桁を丸めない 14 C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 14 C年代に基づいて較正(Calibrate)された年代値であることを明示するために「Cal BC/AD」(Calibrate)という単位で表される。

6 測定結果

B地区遺物包含層採取土壌 1 の 14 C年代は 1430 ± 30 yrBP、暦年較正年代(1σ)は $611\sim647$ cal ADの範囲で示される。

試料の炭素含有率は約3%で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第1表 測定結果(1)

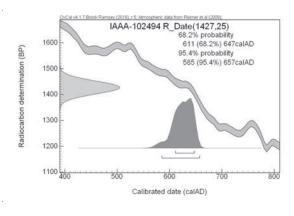
測定番号	試料名	採取場所				δ ¹³ C (‰) (AMS)	δ^{13} C 補正あり	
							Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-102494	1	東区	遺物包含層	土壌	HCl	-27.01 ± 0.63	$1,430 \pm 30$	83.72 ± 0.26

[#4028]

第2表 測定結果(2)

測定番号	δ 13 C \grave{n}	浦正なし	暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102494	$1,460 \pm 20$	83.37 ± 0.24	$1,427 \pm 25$	611calAD-647calAD (68.2%)	585calAD-657calAD (95.4%)

「参考値」



第11図 [参考] 暦年較正年代グラフ

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355–363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337–360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

第8章 まとめ

1. 遺跡について

第11図は本報告の調査区周辺の微地形を復元したものに調査区と主要検出遺構を重ねたものである。 西区付近は河川付け替えなど地形改変が行われているため旧地形は損なわれているが、その他は概ね旧 地形を看取することができる。

本報告の調査および神戸市教委による調査により、遺跡は河川の河道、氾濫原および丘陵を除いて、 段丘上の広範囲に広がっていることが明らかとなった。西神N.T.No62遺跡は狭義には西区西側の丘陵上 (標高51m付近)を指すが、広義には同地点から櫨谷川西岸と菅野谷川にはさまれた段丘までを範囲とし、 一部北側丘陵斜面も含まれる。この範囲に弥生時代、古墳時代、古代、中世の集落が立地する。いずれ の調査区でも遺構の密度が高く、櫨谷川流域において各時期を通して中核的な集落であったことが想定 される。

本報告の調査範囲は、櫨谷川の西側段丘上から菅野谷川の西岸までであり、北限は段丘背後の丘陵斜面までである。さらに遺跡のうち菅野谷川より東側は谷により東西に分けることができる。西半部は本報告の中区にあたり、遺跡の範囲の中では北半部にあたる。段丘は南側に緩やかに傾斜しつつ広がりをもち、その範囲は南北約250m、東西約100mを測る。東半部は本報告の東区にあたり、遺跡の範囲の中では北東半部にあたる。

本遺跡は地形から見ると、3地区が川や谷によって断絶された3つの遺跡とすることも可能かもしれない。しかし検出した遺構やその存続時期などに特に大きな差異も見られないことから、従来どおり1つの遺跡として把握することは妥当であると考える。

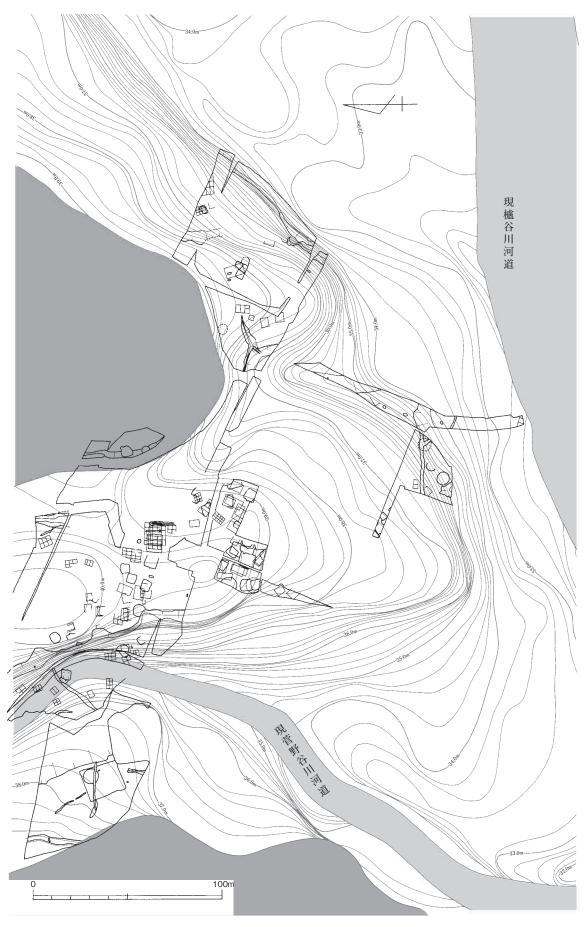
2. 遺跡の変遷

今回の調査では、弥生時代、古墳時代、古代、中世の集落を検出した。この成果は神戸市教委による 既調査の成果と同じである。時期ごとの動向と変遷を述べていきたい。

①弥生時代

本調査区内で確認できる遺構は弥生時代中期後半から中期末のものであり、西・中・東区で検出されている。神戸市教委調査区で検出された遺構もこの時期をさかのぼるものがみられないことから、本遺跡の始まりを弥生時代中期後半におくことは妥当であろう。当該時期は明石川流域では画期となる時期である。この時期、沖積地に所在した拠点的集落が途絶する一方で、丘陵上に高地性集落が出現している。この要因は明らかではないが、水害などの自然的な要因や、社会の大きな変化が指摘されている。本遺跡も明石川流域でみられたなんらかの事象の影響下で発生した集落であろうことが推定される。

調査で検出した住居は、中区の上位段丘の端に位置するもの、中区から東区へのびる谷沿いの丘陵裾から斜面に位置するものに大別できる。中区北側の谷部をはさんだ丘陵斜面でも竪穴住居を検出した。この時期の遺構は神戸市教委による第7次調査区でも検出される (註1)。したがって中区を含めた段丘上でも高位部分が集落の中心にあたると考えられる。高い密度で住居が検出されることはなく、菅野谷川を見下ろす段丘端部や中・東区間にのびる谷の西向き斜面に1~数棟単位で疎らに分布している。このような分布状況は開墾などによる削平の影響もあると思われるが、本来の集落のありかたが疎らであったとも考えられる。調査区北側の丘陵上については、確認調査の結果などから遺跡の広がりは認められ



第12図 調査区周辺の地形と検出遺構

なかったが、この丘陵の頂部、標高45m付近からは櫨谷川下流方向に播磨灘を眺望することができる。このような地理的条件を有することから、菅野谷川左岸の段丘上および中・東区間の丘陵部に疎らな分布形態で比較的広範囲に集落が展開している可能性は否定しえない。中・東区間にのびる谷SV-E01下層からは中期の土器がまとまって出土している。この状況は神戸市教委が調査したこの延長部でも同じ状況がみられ、この谷地形沿いに土器の供給元が所在していることを物語っていると考える。

西区では竪穴住居を1棟検出したのみであったが、中区以東の状況を鑑みれば疎らながらも集落としての広がりを想定することができる。旧地形から判断すると、集落は菅野谷川沿いに展開せざるをえないが、調査対象地外、具体的には丘陵によって一部隔てられながらも、南東側に広がる菅野遺跡に続き、一体となる可能性がある。

本遺跡から菅野谷川により開析された谷をさかのぼると弥生時代中期の高地性集落である西神N.T.No.65遺跡が所在する丘陵に続く。西神N.T.No.65地点は遺跡の範囲が約5万㎡と想定され、調査により11棟以上の竪穴住居など多数の遺構が検出されている (註2)。西神N.T.No.62遺跡の中心部はこの谷の開口部にあたる。また、本調査区北西に所在する西神N.T.No.63遺跡ではサヌカイト片などが採集されている (註3)。ここでは遺構は確認されなかったが (註4)、付近の丘陵に集落が立地することを示唆するものと考える。西神N.T.No.62遺跡から西神N.T.No.63遺跡付近、さらに北側へ、疎らながら谷筋に沿い広がっている縦深のある集落の存在が想定される。

後期に属する遺構は今回の調査では検出していないが、遺跡全体では、神戸市第5次調査区で2棟 (量5)、第7次調査区で1棟(量6)、住居跡を検出している。竪穴住居跡の平面形態は中期後半のものと同じく円形である。また昭和57年度調査区では溝を検出している(量7)。遺構は段丘高位から下位まで広域に分布し、谷の開口部から櫨谷川沿いの平野部を指向する傾向が読み取れる。

明石川流域では、中期から後期の段階の集落はその存続が短期間の場合が多いが、本遺跡は中期から 後期にわたり継続して集落が営まれている。櫨谷川流域における弥生時代集落の状況は、丘陵上の高地 性集落を除けば明らかでなかったが、南側に隣接する菅野遺跡や櫨谷川対岸の段丘上に所在する栃木遺 跡とともに、流域の拠点的な集落であったと考えられる。

西神N.T.No.62遺跡では後期後半以降集落は廃絶するとみられる。

②古墳時代

古墳時代前期の遺構は確認できず、本遺跡の空白時期となっている。遺構が確認されるのは中期以降であり、基本的には須恵器使用以後の時期である。ただし本報告の調査区内では当該期の竪穴住居跡は検出していない。この時期の集落の中心は中区南側の神戸市第7次調査区付近であると考えられ、比較的狭い範囲で当該期の竪穴住居跡6棟を検出し、一部は重複している(註8)。第7次調査区に北接する中区では当該期の遺構・遺物は検出されないことから、集落として利用されたのは段丘の先端に近い範囲に限られていたのかもしれない。また西区SD-W03からは中期末の土器が出土しており、住居は検出していないものの、菅野谷川沿いの段丘面にも生活域が広がっている可能性はある。東区では当該期の遺構・遺物は確認していない。

後期は遺跡の盛期の1つであり、中期から継続して集落が形成されている。中・東区をはじめとする 菅野谷川東岸の段丘の全域に集落が広がり竪穴住居跡を多数検出した。竪穴住居跡や掘立柱建物跡を構 成しない単独の柱穴から当該期の遺物が出土したものがあり、削平などにより消滅し復元できなかった ものが少なからずあると推定される。神戸市第5~7次調査区でも当該期の竪穴住居跡を多数検出しており、中区をはじめ、そこから南にのびる段丘上の広範囲に濃密に分布する。隣接・重複する例も多く、 集落が長期にわたり存続したことを物語る。

本調査区では、当該期の竪穴住居跡を14棟検出した。出土遺物から6世紀後半が主体であるが、SH-C12のみ6世紀前半にさかのぼると考える。大半の住居は残存状況が良好でなかったが、竃を有するものを3棟(SH-C02・10・16)、竃の残欠あるいは痕跡と推定される施設を有するもの2棟(SH-C08、SH-E01)を検出している。

電を有する竪穴住居跡は、神戸市第7次調査では陶邑編年のTK216からTK43までの間とされ、それ 以前は屋内炉あるいは貯蔵穴を屋内に設けるという^(註9)。SH-C10出土須恵器はTK43型式の特徴をも ち、神戸市第7次調査の成果を追認した。電は住居の西辺側に設置するのが大半だが、東辺側に設置す るSH-C02がある。神戸市調査分でも2棟検出され合計3棟存在している。ただしこれらは住居の規模・ 時期などで西辺側に設置する住居と大きな差異は認められない。また、本調査においては屋内炉あるい は貯蔵穴を屋内に設けた住居は検出できなかった。

掘立柱建物跡の時期は柱穴内からの遺物の出土が少ないこと、混入の可能性もあることから明確な時期は示すことのできる例は少ない。ただし後世の柱穴と比較すると、当該期の柱穴は掘形の平面形は方形を意識し、大型であるなどの特徴がみられる。このような観点から遺構を抽出するとまた竪穴住居跡に隣接・重複する傾向が認められる。これらの柱穴のいくつかからは図化しえないが、古墳時代後期の特徴をもつ土器片が出土している。

神戸市第7次調査ではTK43型式以降竪穴住居から掘立柱建物への転換を想定している (註10)。本調査区の場合、掘立柱建物跡を構成する柱穴から遺物の出土が限られるが、今回唯一図化しえたSB-C31の遺物を積極的に評価したい。この遺物はTK217型式の特徴をもつ。出土状況から廃絶に伴い柱抜き取りの後投入したものの可能性がある。したがってこの建物の存続時期は7世紀前半以前と推定し6世紀末から7世紀前半頃に、竪穴住居から掘立柱建物へ暫時移行したものと推定される。これは神戸市第7次調査における想定と大きな齟齬はないと考える。

伊川流域に所在する上脇遺跡では、TK85~43の段階(V-2期)に竪穴住居と掘立柱建物が併存し、TK217の段階(VI期)で若干の竪穴住居を残してほぼ掘立柱建物に移行する状況が看取されている (注11)。SB-C31についてはこの事例とも大きく矛盾することはないと考える。竪穴住居から掘立柱建物への移行は、上脇遺跡の事例から、本遺跡の中だけで完結するものではなく、明石川流域の中での変化としてとらえることができるだろう。

③古代

当該期の集落は、古墳時代から飛鳥時代の集落とは時間的に断絶することはなかったものと考える。 遺構は中・東区に疎らに分布するだけである。検出した遺構は中区で掘立柱建物跡、東区で掘立柱建物 跡と溝がある。西区では遺構は検出していない。ただし遺物は中・東区のほかに西区の包含層からも出 土しており、調査対象範囲のほぼ全域が生活域となっていたと考えられる。

本遺跡の場合、遺構面の削平が著しいことなどから、掘立柱建物として復元しえたのは一部に過ぎないと考えている。また柱穴から遺物の出土がない場合が多いため時期を決定しえない場合もある。この時期の柱穴は一般的に大型の掘形をもち、平面が方形であるなどの特徴をもつが、遺物の出土の少なさ

から時期決定は困難である。また古墳時代の柱穴も規模・形状が類似するため、出土遺物なくして両者を区別することは不可能である。このような理由から当該期の集落について全容を明らかにすることは困難である。ただし東区の谷部からは当該期の土器などがまとまって出土している状況を鑑みれば、集落はある程度の規模を有していたものと考えている。

復元できた建物が示す方向は一定ではない。上脇遺跡では飛鳥時代に掘立柱建物が方向を北に向け、 集落の再編成が行われた可能性を指摘している^(註12)。このような事象は本遺跡ではみられない。これは 櫨谷川流域では段丘が発達し、沖積地の面積が狭いことから、大規模な土地開発が進まなかったことに 起因するためと推定する。したがって建物の方向は土地区画による規制ではなく、地形の影響が大きい と思われる。

神戸市第7次調査区で検出されたN-30° E前後の方向を示す一群^(注13) は、明確な時期は不明だが、大型の掘形をもつ柱穴により構成され、建物を揃えるなどの規則性が看取できる。この検出地点付近は段丘上でもある程度の広さを有した場所であり、一定の規制が働いていたとも考えられ、中区付近も含めて弥生・古墳時代と同様集落の中心であった可能性がある。東区SV-E01から出土した遺物の大半の供給元をこの付近に想定することは可能であろう。

4)中世

神戸市教委の調査区を含め、ほぼすべての調査区で当該期の遺構・遺物を検出している。検出した遺構は、掘立柱建物跡、墓、土坑、井戸、溝などである。遺跡内では少なくとも古代末には集落が形成され、中世後期まで存続すると考える。中区では多数の掘立柱建物跡を復元しているが、その他にも単独の柱穴が多数あり、本来はもっと多くの建物があったものと考え、上位段丘上が集落の中心的な部分であったと考える。建物は重複するものが多く、同じ場所で数次の建て替えが行われる例も確認できた。したがって集落が一定期間は存続していたものと考える。中でもSB-C22~28は大型建物やその付属屋と思われる建物が複数棟重複し、集落の中心となる屋敷地だったと考える。この屋敷地を区画する施設は東側でSD-C02・03を検出しただけだが、本来は他の辺にも区画溝を有していた可能性がある。

東区もまた復元できた掘立柱建物跡は少ないが、当該期の遺物が出土した単独の柱穴は多く、SB-E04・09・10の他にも復元しえなかった建物が少なからずあるものと考える。

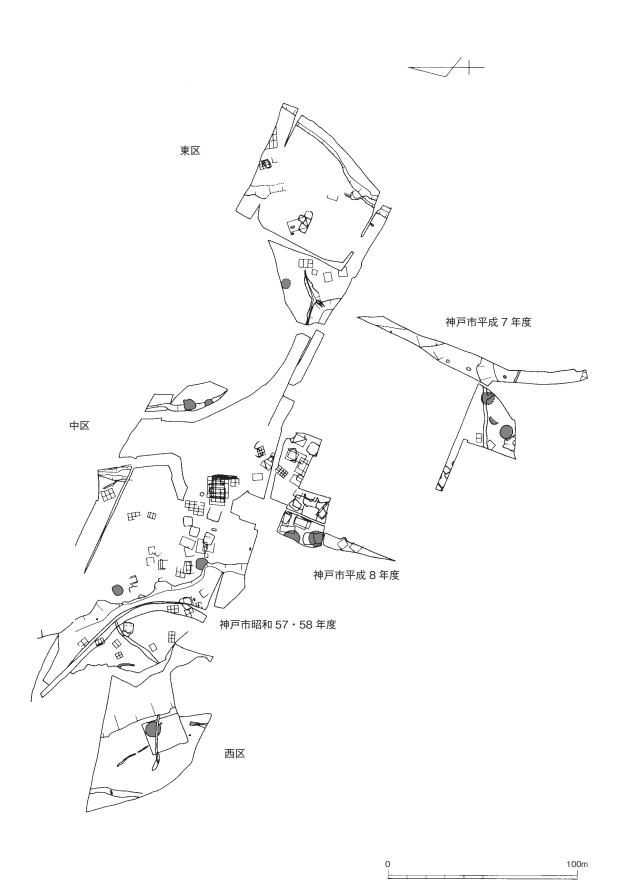
西区では掘立柱建物は復元できなかったが、当該期の遺物が出土した単独の柱穴があり、他地区と同じく生活の場として利用されていたことは間違いない。

当該期の掘立柱建物跡もその示す方向は一定ではない。これは櫨谷川沿いに沖積地の占める面積が狭いため、櫨谷川流域は明石川や伊川流域よりも大規模な土地開発が遅れており、建物や溝などの方向を規制するいわゆる条里制地割がみられないためであろうと考える。神戸市第6次調査区では櫨谷川右岸の下位段丘でも遺構が検出されており (駐14)、低地の開発が進んでいないとは言えないが、平成8年度調査における1・2区の調査では、少なくとも中世における開発の痕跡は認められなかったため、開発は大規模・広範囲なものではなかったのであろう。建物などの方向を規制する土地区画がないため、建物の方向は前時代と同じく地形の影響を大きく受けていたと推定する。

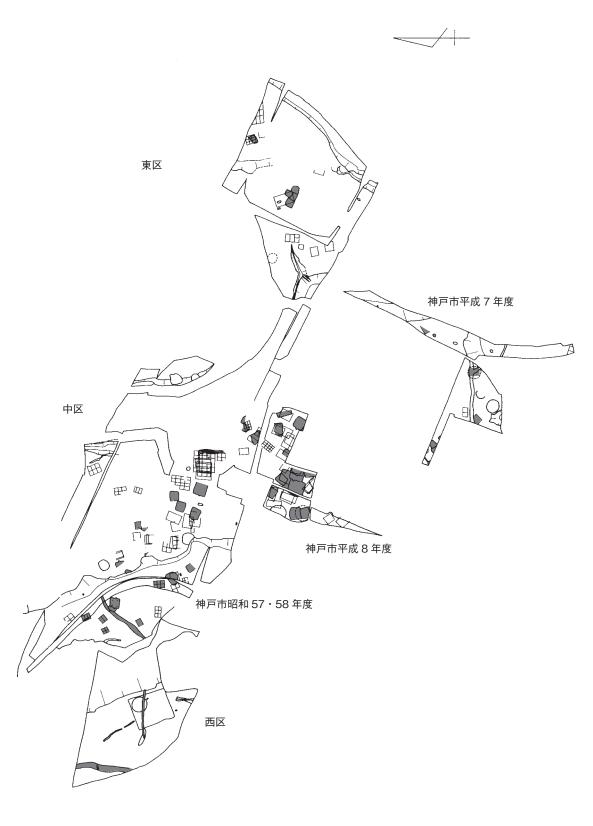
櫨谷川対岸に所在する栃木遺跡は、段丘上に所在する12世紀後半を起源とする集落であるが、溝により 方形に屋敷地や耕作地が区画された集落を検出している^(註15)。ただし存続期間が短く、13世紀代には廃絶 し本遺跡とは対象的である。栃木遺跡は付近に所在する如意寺が土地開発に関与した可能性があり^(註16)、 本遺跡検出の集落とは性格を異にするものと考える。神戸市第5次調査区では溝内より窯体片や融着した須恵器片の出土が報告されている。周辺に窯跡が存在する可能性が指摘され^(註17)、集落の起源・展開が須恵器生産と関与していた可能性も考慮する必要があるだろう。今後の周辺地域の調査成果の蓄積に期待したい。

註

- 1. 神戸市教育委員会「西神ニュータウン内第62地点遺跡」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』1999年
- 2. 新修神戸市史編集委員会「第9章 神戸の遺跡」『神戸市史 歴史編Ⅰ自然・考古』神戸市 1989年
- 3. 神戸市教育委員会「第62地点A遺跡」『昭和56年度 神戸市埋蔵文化財年報』1983年
- 4. 前掲註3
- 5. 神戸市教育委員会「西神ニュータウン第62地点遺跡第5次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』 1998年
- 6. 前掲註1
- 7. 神戸市教育委員会「西神第62地点B遺跡」『昭和57年度 神戸市埋蔵文化財年報』1985年
- 8. 前掲註1
- 9. 前掲註1
- 10. 前掲註1
- 11. 兵庫県教育委員会『神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ上脇遺跡 I 』 2002年
- 12. 前掲註11
- 13. 前掲註1
- 14. 神戸市教育委員会「西神ニュータウン第62地点遺跡第6次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財度年報』 1998年
- 15. 兵庫県教育委員会『神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 V 栃木遺跡』2009年
- 16. 前掲註15
- 17. 前掲註5

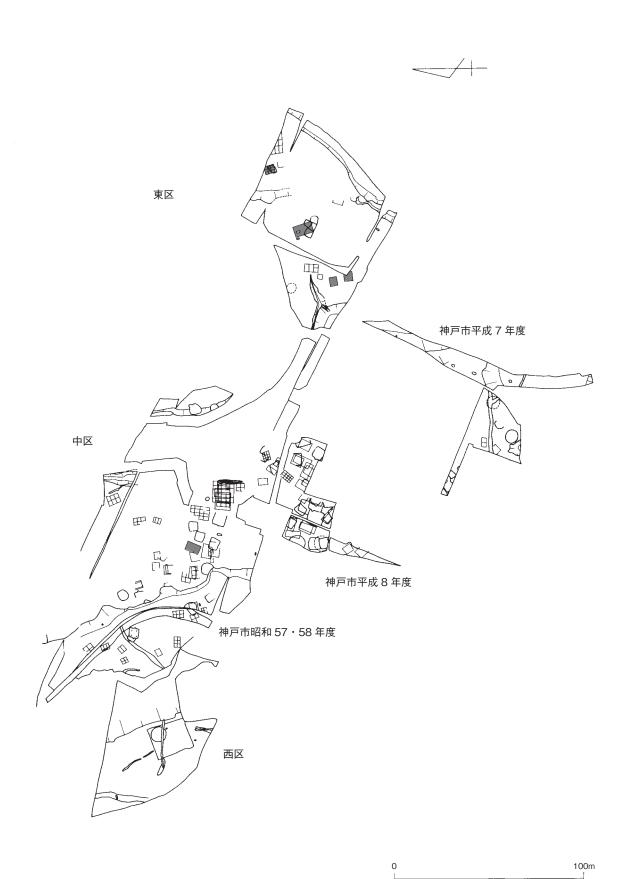


第13図 弥生時代の遺構

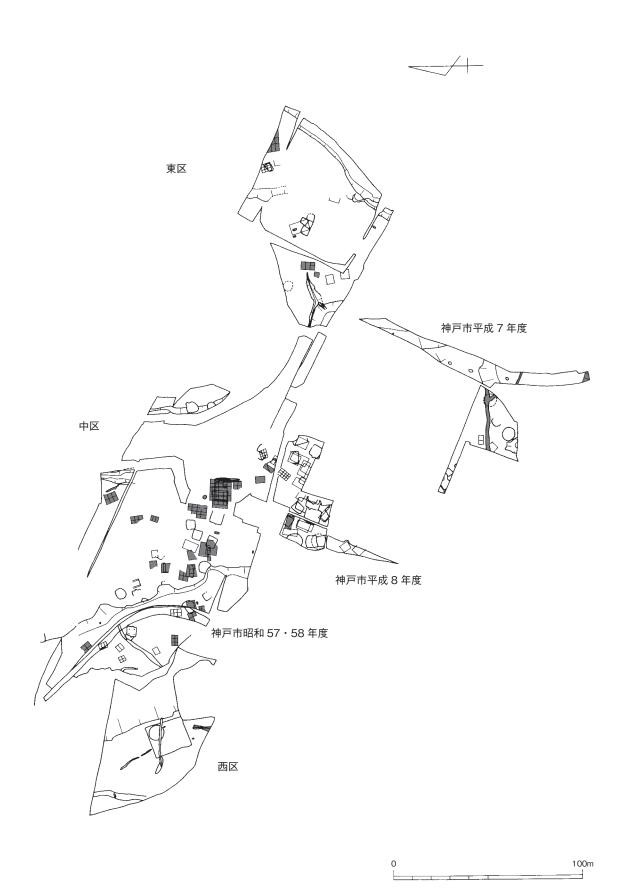




第14図 古墳時代の遺構



第15図 古代の遺構



第16図 中世の遺構

第3表 西区新旧遺構番号対照表

柱穴

新遺構 番 号 | 旧遺構番号 | 2001002 地区 1 P-W01 P-20 P-16 P-W03 P-17 P-W04 P-02

土坑

立て, 帝 1 年	旧遺標	毒番号
新遺構 番 号	調査番号	2001002
田田り	地区	1
SK-W01		SK-02
SK-W02		SK-03
SK-W03		SK-01

墓

近, 串.f菲	旧遺構番号					
新遺構 番 号	調査番号	2001002				
田りり	地区	1				
SX-W01		SK-02				

溝

立C, (串-1)推	旧遺構番号					
新遺構 番 号	調査番号	2001002				
田り	地区	1				
SD-W01		SD-01				
SD-W02		SD-02				
SD-W03		SD-03				
SD-W04		SD-04				

第4表 中区新旧遺構番号対照表(1)

竪穴住居跡

4C/中1#			旧	遺	構	番	号		
新遺構 番 号	調査番号	980215	2000	0248	200	1002	200	1142	2001243
笛 ク 	地区	A	I	П	2 - 1	2 - 2	1 - 1	1 - 2	
SH-C01						SH-201			
SH-C02						SH-202			
SH-C03						SH-203			
SH-C04						SH-208			
SH-C05						SH-207			
SH-C06						0			
SH-C07					SH-06				
SH-C08					SH-01				
SH-C09					SH-03				
SH-C10					SH-02				
SH-C11					SH-04				
SH-C12						SH-206			
SH-C13						SH-204			
SH-C14								SH-01	
SH-C15								SH-02	
SH-C16				SH-01					
SH-C17				SH-02					
SH-C18							SH-03		
SH-C19		竪穴住周	引大遺構						

第5表 中区新旧遺構番号対照表(2)

竪穴住居跡

华广,中 17年			旧	遺	構	番	号		
新遺構番 号	調査番号	980215	2000)248	200	1002	200	1142	2001243
省 万	地区	A	I	П	2 - 1	2 - 2	1 - 1	1 - 2	
SB-C01						0			
SB-C02						SB202			
SB-C03						0			
SB-C04			0						
SB-C05					0				
SB-C06					SB-03				
SB-C07						SB201			
SB-C08					0	0			
SB-C09						0			
SB-C10						0			
SB-C11						0			
SB-C12						0			
SB-C13					SB-04				
SB-C14					0				
SB-C15					0				
SB-C16					SB-01				
SB-C17					SB-02				
SB-C18					0				
SB-C19					0				
SB-C20						0			
SB-C21						0			
SB-C22					0				0
SB-C23							0		0
SB-C24							0		0
SB-C25]						0		0
SB-C26							0		0
SB-C27							0		
SB-C28							0		
SB-C29]			SB-04					
SB-C30]			SB-03					
SB-C31				SB-02					
SB-C32				SB-01			0		

第6表 中区新旧遺構番号対照表 (3)

柱穴

立て,帝·1菲			旧	遺	構	番	号		
新遺構 番 号	調査番号	980215	2000)248	200	1002	2001	142	2001243
笛 与	地区	А	I	II	2 - 1	2 - 2	1 - 1	1 - 2	
P-C01							P-270		
P-C02							P-387		
P-C03							P-335		
P-C04							P-152		
P-C05							P-394		
P-C06							P-087		
P-C07							P-039		
P-C08							P-262		
P-C09							P-223		
P-C10							P-132		
P-C11							P-127		
P-C12							P-090		
P-C13							P-393		
P-C14							P-076		
P-C15							P-154		
P-C16							P-040		
P-C17							P-246		
P-C18							P-239		
P-C19							P-219		
P-C20							P-060		
P-C21		D 004					P-310		
P-C22		P-204							
P-C23		P-205							
P-C24		P-214							
P-C25		P-219							
P-C26		P-212							
P-C27		P-231							
P-C28		P-047			D 117				
P-C29 P-C30					P-117 P-130				
P-C31					P-275				
P-C32					F-273	0			
P-C33					P-019				
P-C34					P-201				
P-C35	1				P-084				
P-C36	-				P-158				
P-C37	-				P-273				
P-C38	-				1 270		P-141		
P-C39	-			SK-64			1 141		
P-C40	-			SK-49					
P-C41	-			P-60					
P-C42	†			SK-66					
P-C43	1			511 00			P-309		
P-C44	1						P-285		
P-C45	†						P-356		
P-C46	1			SK-10			1 300		
P-C47	1			~ 10			P-29/30		
P-C48	1						P-301		
P-C49	†						P-318		
P-C50	1						P-334		

第7表 中区新旧遺構番号対照表 (4)

墓

立た,串 1 排			旧	遺	構	番	号		
新遺構番号	調査番号	980215	2000248		2001002		2001142		2001243
田田り	地区	A	I	II	2 - 1	2 - 2	1 - 1	1 - 2	
SX-C01						SX02			
SX-C02						SX01			
SX-C03					SX-03				

土坑

がい声 1非			旧	遺	構	番	号		
新遺構 番 号	調査番号	980215	2000)248	200	1002	200	1142	2001243
田田	地区	А	I	П	2 - 1	2 - 2	1 - 1	1 - 2	
SK-C01					P286				
SK-C02					SK06				
SK-C03					SK02				
SK-C04						SK03			
SK-C05					SK03				
SK-C06					SK01				
SK-C07							SK06		
SK-C08									SK04
SK-C09							SK12		
SK-C10							SK01		
SK-C11							SK09		
SK-C12							SK03		
SK-C13							SK10		
SK-C14							SK11		
SK-C15			SK01						
SK-C16			SK02						
SK-C17			SK03						
SK-C18			SX201						

井戸

次C,1年14年			旧	遺	構	番	号		
新遺構番号	調査番号	980215	2000248		2001002		2001142		2001243
笛 ク	地区	A	I	П	2 - 1	2 - 2	1 - 1	1 - 2	
SE-C01									SE-01

溝

立て,帝+秣			旧	遺	構	番	号		
新遺構番号	調査番号	980215	2000248		2001002		2001142		2001243
笛 万	地区	A	I	П	2 - 1	2 - 2	1 - 1	1 - 2	
SD-C01					SD-02				
SD-C02								SD02-2	
SD-C03								SD02-1	

第8表 東区新旧遺構番号対照表

竪穴住居跡

が、唐·排		旧遺構	毒番号	
新遺構番号	調査番号	980215	2000248	2001142
笛 ク	地区	В	Ш	2
SH-E01			SH-01	
SH-E02				SH-03
SH-E03				SH-02
SH-E04				SH-01
SH-E05				SH-05
SH-E06				SH-04
SH-E07		竪穴住居跡		

掘立柱建物跡

かじ /中・1#		旧遺構番号								
新遺構番号	調査番号	980215	2000248	2001142						
笛 ク 	地区	В	Ш	2						
SB-E01			SB-01							
SB-E02			SB-02							
SB-E03			SB-03							
SB-E04			SB-04							
SB-E05				SB-01						
SB-E06				0						
SB-E07		SB-01								
SB-E08		SB-02								
SB-E09		SB-03								
SB-E10		SB-04								

○:遺構番号なし

土坑

5° \ 10 1 1#	旧遺構番号			
新遺構番号	調査番号	980215	2000248	2001142
田田石	地区	В	Ш	2
SK-E01				SK-21
SK-E02				SK-19
SK-E03				SK-07
SK-E04		SK-02		
SK-E05		SK-03		

その他遺構

如, 审,排	旧遺構番号			
新遺構番号	調査番号	980215	2000248	2001142
笛 ケ	地区	В	Ш	2
SX-E01				SK-03
SX-E02				SK-09

柱穴

		旧遺構番号		
新遺構	調査番号	980215	2000248	2001142
番号	地区	В	Ш	2
P-E01			SK-15	
P-E02			SK-40	
P-E03			SK-48	
P-E04			SK-74	
P-E05			SK-76	
P-E06			SK-52	
P-E07			SK-247	
P-E08				P-124
P-E09				P-036
P-E10				P-057
P-E11				P-143
P-E12				P-199
P-E13				P-077
P-E14				P-174
P-E15			SK-070	
P-E16			SK-020	
P-E17				P-208
P-E18		P-169		
P-E19		P-165		
P-E20		P-002		
P-E21		P-039		
P-E22		P-193		
P-E23		P-197		
P-E24		P-134		
P-E25		P-131		
P-E26		P-128		
P-E27		P-205		
P-E28		P-189		
P-E29		P-004		
P-E30		P-053		
P-E31		P-056		
P-E32		P-068		
P-E33		P-055		
P-E34		P-060		

溝状遺構

*C /B 146	旧遺構番号		
新遺構 番 号	調査番号	980215	
笛 ケ 	地区	В	
SD-E01		溝状遺構	

第9表 中区掘立柱建物 新旧柱穴番号対照表 (1)

SB-C01

5C.1年1年	旧遺構番号		
新遺構番号	調査番号	2001002	
	地区	2 - 2	
P 1		0	
P 2		P 42	
P 3		0	
P 4		0	
P 5		0	

SB-C02

如 电抽	旧遺構番号		
新遺構番号	調査番号	2001002	
	地区	2 - 2	
P 1		P 67	
P 2		P 60	
P 3		P 59	
P 4		P 19	
P 5		P 50	
P 6		P 61	
P 7		P 62	
P 8		P 66	

SB-C03

36-003			
50.7年1年	旧遺構番号		
新遺構 番 号	調査番号	2001002	
宙っク	地区	2 - 2	
P 1		0	
P 2		0	
P 3		0	
P 4		0	
P 5		P 20	
P 6		P 21	
P 7		P 22	
P 8		0	
P 9		0	
P 10		0	
P 11		0	

○:遺構番号なし

SB-C04

近, '卑.ł莊	旧遺標	毒番号
新遺構 番 号	調査番号	2001248
H 7	地区	Ι
P 1		0
P 2		0
P 3		0
P 4		0
P 5		0
P 6		\circ
P 7		\circ
P 8		0
P 9		0
P 10		0
P11		0
P 12		0

SB-C05

がい事 1年	旧遺構番号		
新遺構 番 号	調査番号	2001002	
田田	地区	2 - 1	
P 1		0	
P 2		P 185	
P 3		0	
P 4		0	
P 5		0	
P 6		0	
P 7		0	
P 8		0	
P 9		0	
P 10		0	

SB-C06

がい事 1年	旧遺構番号		
新遺構 番 号	調査番号	2001002	
笛 ク	地区	2 - 1	
P 1		0	
P 2		0	
P 3		0	
P 4		0	
P 5		0	
P 6		0	
P 7		0	
P 8		0	
P 9		0	
P 10		P 179	
P 11		0	
P 12		0	

SB-C07

立€, /幸-{##	旧遺植	
新遺構番号	調査番号	2001002
TET ク	地区	2 - 2
P 1		0
P 2		P 65
P 3		P 152
P 4		P 53
P 5		P 64
P 6		P 63
P 7		P 01
P 8		0

SB-C08

が、声 h推	旧遺構番号			
新遺構 番 号	調査番号	2001002	2001002	
H 7	地区	2 - 1	2 - 2	
P 1			0	
P 2			P 13	
P 3			0	
P 4		P 170		
P 5		P 172		
P 6			P 59	
P 7			P 06	

SB-C09

☆C.\=+#±	旧遺構番号		
新遺構 番 号	調査番号	2001002	
田りり	地区	2 - 2	
P 1		P 16	
P 2		0	
P 3		0	
P 4		0	
P 5		P 36	
P 6		0	

かじ /中 1#	旧遺構番号		
新遺構番号	調査番号	2001002	
TET ク	地区	2 - 2	
P 1		P 15	
P 2		0	
P 3		0	
P 4		P 37	
P 5		0	

第10表 中区掘立柱建物 新旧柱穴番号対照表 (2)

SB-C11

47、中1#	旧遺構番号		
新遺構番号	調査番号	2001002	
笛 ク	地区	2 - 2	
P 1		P 08	
P 2		0	
P 3		0	
P 4		0	
P 5		0	

SB-C12

かじ /中14年	旧遺構番号		
新遺構番号	調査番号	2001002	
田田力	地区	2 - 2	
P 1		P 04	
P 2		P 10	
P 3		0	
P 4		0	
P 5		0	
P 6		P 27	
P 7		0	
P 8		0	

SB-C13

00 013					
立じ、中十年	Ī	旧遺構番号			
新遺構番号	調査番号	2001002	2001002		
笛 ク 	地区	2 - 1	2 - 2		
P 1			P 206		
P 2			P 113		
P 3		P 110			
P 4		P 207			
P 5		0			
P 6		0			
P 7		0			
P 8			0		
P 9		0			
P 10		0			
P 11		0			

○:遺構番号なし

SB-C14

立て, 帝·托菲	旧遺構番号		
新遺構番号	調査番号	2001002	2001002
笛 ク	地区	2 - 1	2 - 2
P 1			0
P 2		P 114	
P 3		P 226	
P 4		P 110	
P 5		0	
P 6		P 109	
P 7		0	
P 8		P 115	
P 9		0	
P 10		0	

SB-C15

立て,帝¹∓	旧遺構番号		
新遺構番号	調査番号	2001002	
H 7	地区	2 - 1	
P 1		P 192	
P 2		0	
P 3		0	
P 4		0	
P 5		P 227	
P 6		0	
P 7		0	

SB-C16

が、中1年	旧遺構	毒番号
新遺構 番 号	調査番号	2001002
田田力	地区	2 - 1
P 1		P 81
P 2		P 297
P 3		P 276
P 4		P 80
P 5		P 79
P 6		P 78
P 7		P 284
P 8		P 280
P 9		P 282
P 10		P 281
P 11		P 283
P 12		P 279
P 13		P 278

SB-C17

45.7年1#	旧遺構番号		
新遺構番号	調査番号	2001002	
田田り	地区	2 - 1	
P 1		P 105	
P 2		0	
P 3		P 163	
P 4		0	
P 5		0	
P 6		0	
P 7		P 176	
P 8		P 237	

北油排	旧遺構番号		
新遺構番 号	調査番号	2001002	
宙っク	地区	2 - 1	
P 1		P 204	
P 2		0	
P 3		P 203	
P 4		P 61	
P 5		0	
P 6		P 401	
P 6		P 401	

第11表 中区掘立柱建物 新旧柱穴番号対照表(3)

SB-C19

SB-C20

SB-C23

立て、中1年	旧遺構番号		
新遺構番 号	調査番号	2001002	
一笛 ク	地区	2 - 1	
P 1		P 199	
P 2		0	
P 3		0	
P 4		0	
P 5		P 44	
P 6		P 85	
P 7		0	
P 8		P 68	
P 9		0	
P 10		P 223	
P 11		P 41	
P 12		0	

心()电 计非	旧遺構番号	
新遺構番号	調査番号	2001002
田田り	地区	2 - 2
P 1		P 55
P 2		P 57
P 3		0
P 4		0
P 5		0
P 6		0
P 7		P 143

SB-C21

近 油 推	旧遺構番号		
新遺構番号	調査番号	2001002	
	地区	2 - 2	
P 1		0	
P 2		P 45	
P 3		0	
P 4		P 96	
P 5		P 39	

新遺構	Ţ	日遺構番号	7
番 号	調査番号	2001142	2001243
H 7	地区	1 - 1	
P 1		\circ	
P 2		0	
P 3		0	
P 4		0	
P 5		P 187	
P 6		P 142	
P 7		P 97	
P 8		P 121	
P 9		P 88	
P 10		P 86	
P 11		P 175	
P 12		P 172	
P 13		P 129	
P 14		0	
P 15		P 144	
P 16		P 148	
P 17		P 108	
P 18		P 122/339	
P 19		0	
P 20		P 80	
P 21		P 78	
P 22		P 74	
P 23		P 71	
P 24		P 68	
P 25		P316/61	
P 26			P 15
P 27			0
P 28			0
P 29			P 12
P 30			0
P 31			0
P 32			0
P 33			0
P 34			0
○ : 遺構番			

○:遺構番号なし

かじ /申 / 排	I	日遺構番号	1.
新遺構番号	調査番号	2001002	2001002
宙力	地区	2 - 1	
P 1			0
P 2			P 01
P 3			0
P 4			SK05
P 5		0	
P 6		0	
P 7		P 98	
P 8		P 103	
P 9		0	
P 10		0	
P 11		P 93	
P 12		P 211	
P 13		0	
P 14		P 120	
P 15		0	
P 16		0	
P 17		0	
P 18		0	

第12表 中区掘立柱建物 新旧柱穴番号対照表 (4)

SB-C24

SB-C25

SB-C24			
立广, 市斗菲	1	<u>1.</u> /	
新遺構番号	調査番号	2001142	2001243
笛 ク 	地区	1 - 1	
P 1		P 327	
P 2		P 95	
P 3		P 140	
P 4		0	
P 5		0	
P 6		P 203	
P 7		P 212	
P 8		P 101	
P 9		P 170	
P 10		P 173	
P 11		0	
P 12		P 382	
P 13		P 179	
P 14		0	
P 15		P 247	
P 16		P 119	
P 17		P 120	
P 18		P 73	
P 19		P 77	
P 20			0
P 21			0
P 22			0
P 23			P 54
P 24			0
P 25			0
P 26			0
P 27			0

4c, vib 14t	I	日遺構番号	1.
新遺構番号	調査番号	2001142	2001243
笛 夕 	地区	1 - 1	
P 1			0
P 2			0
P 3			P 11
P 4		P 347	
P 5		P 125	
P 6		0	
P 7		P320/72	
P 8			0
P 9			P 08
P 10			0
P 11			\circ
P 12		P 115	
P 13		P 107	
P 14		P 202	
P 15		P 119	
P 16		P 164	
P 17			0
P 18			P 18
P 19			0
P 20			0
P 21		P 357	
P 22		P 63	
P 23		0	

SB-C26

SB-C27

SB-C28

新遺構

SB-C26				
*C.\#\##		日遺構番号		
新遺構 番 号	調査番号	2001142	2001243	
田 勺	地区	1 - 1		
P 1			0	
P 2				
P 3		0		
P 4		P 124		
P 5		0		
P 6		P 210		
P 7			0	
P 8			0	
P 9			P 39	
P 10				
P 11		P 316		
P 12		0		

が、、中1排	旧遺構	毒番号
新遺構番号	調査番号	2001142
笛 ク	地区	1 - 1
P 1		P 225
P 2		P 103
P 3		0
P 4		0
P 5		P 137/329
P 6		0
P 7		P 201
P 8		0
P 9		0
P 10		P 218
P 11		P 157

番 号 地区 1 - 1 P 1 P 42 P 2 P 190 P 3 P 326 P 4 P 263 P 5 P 224 P 6 P 252 P 7 P 166 P 8 \bigcirc

旧遺構番号

調査番号 2001142

第13表 中区掘立柱建物 新旧柱穴番号対照表 (5)

SB-C29

SB-C31

新遺構	旧遺構番号		
番 号	調査番号	960029	2000248
	地区		П
P 1			SK63
P 2			SK61
P 3		0	SK77
P 4			SK41
P 5			SK79
P 6		P 14	

が、中1排	旧遺構番号		
新遺構番号	調査番号	2000248	
田田石	地区	П	
P 1		SK42	
P 2		SK59	
P 3		SK57	
P 4		SK33	
P 5		SK93	
P 6		SK22	

SB-C30

SB-C32

がい 申4推	旧遺構番号		
新遺構 番 号	調査番号	960029	2000248
	地区		П
P 1			SK80
P 2			SK19
P 3			SK17
P 4		P 12	
P 5			SK24
P 6		\circ	
P 7			SK38
P 8			SK37
P 9			SK82
P 10			SK81

☆C \=-1#±		旧遺植	構番号	
新遺構番号	調査番号	960029	2000248	2001142
TET 7	地区		П	1 - 1
P 1			SK15	
P 2			SK31	
P 3				0
P 4				0
P 5			SK55	0
P 6			SK32	
P 7			SK27	
P 8			SK16	
P 9		P 02	0	
P 10			SK30	
P 11			SK68	
P 12			SK69	
P 13			SK56	
P 14		P 01		
P 15		P 13	SK76	

第14表 東区掘立柱建物·竪穴住居 新旧柱穴番号対照表

SB-F01

SB-E01			
新遺構	旧遺構番号		
新 退 併 番 号	調査番号	2000248	
宙力	地区	${\rm I\hspace{1em}I\hspace{1em}I}$	
P 1		SK222	
P 2		SK240	
P 3		SK244	
P 4		SK249	
P 5		SK208	
P 6		SK232	
P 7		SK227	
P 8		SK203	
P 9		SK285	
P 10		SK298	
P 11		SK212	
P 12		SK214	
P 13		SK306	
	1		

SB-E02

P 14

P 15

新遺構	旧遺構番号				
都 号	調査番号	2000248			
笛 ク	地区	${\rm I\hspace{1em}I\hspace{1em}I}$			
P 1		SK226			
P 2		SK237			
P 3		SK234			
P 4		SK209			
P 5		SK287			

SB-E03

新遺構	旧遺構番号				
利退情 番 号	調査番号	2000248			
田田	地区	${\rm I\hspace{1em}I\hspace{1em}I}$			
P 1		SK267			
P 2		SK263			
P 3		SK270			

SB-E04

	旧畫樹	毒番号
新遺構 番 号	調査番号	2000248
田田り	地区	Ш
P 1		SK88
P 2		SK85
P 3		SK95
P 4		SK309
P 5		SK317
P 6		SK101
P 7		SK112
P 8		0
P 9		SK122
P 10		SK319
P 11		SK328

SB-E05

並、'卑.]建	旧遺構番号					
新遺構 番 号	調査番号	2001142				
宙り	地区	2				
P 1		P 87				
P 2		P 41				
P 3		P 40				
P 4		P 13				
P 5		P 200				
P 6		P 123				
P 7		P 64				
P 8		P 75				
P 9		P 68				
P 10		P 65				
P 11		0				
P 12		P 33				
P 13		P 01				
P 14		P 49				

SB-E06

SK205

SK202

新遺構	旧遺構番号				
利退情 番 号	調査番号	2001142			
笛 ケ	地区	2			
P 1		0			
P 2		0			
P 3		P 182			
P 4		P 183			
P 5		P 189			

SB-E07

新遺構番号 番 号 地区 B P 1 P 2 P 160	7
番 号 調査番号 98021 地区 B P1 P157	7
地区 B P1 P15	
P 2 P 160	٦_
	J
P 3 P 16:	1
P 4 P 162	2
P 5 P 164	1
P 6 P 160	ŝ
P 7 P 172	2
P 8 P 17	1
P 9 P170)
P 10 P 154	1
P11 P15	5
P 12 P 150	3

○:遺構番号なし

SB-E08

新遺構	旧遺構番号					
番 号	調査番号	980215				
田り	地区	В				
P 1		P 183				
P 2		P 182				
P 3		P 181				
P 4		P 180				
P 5		P 178				
P 6		P 176				
P 7		P 173				
P 8		P 174				

SB-E09

新遺構	旧遺構番号					
利退冊 番 号	調査番号	980215				
笛 ケ	地区	В				
P 1		P 28				
P 2		P 16				
P 3		P 17				
P 4		P 19				
P 5		P 115				
P 6		P 117				
P 7		P 125				
P 8		P 127				
P 9		P 29				
P10		P 24				
P11		P 118				

SB-E10

新遺構	旧遺構番号					
利退冊 番 号	調査番号	980215				
笛 与	地区	В				
P 1		P 140				
P 2		P 130				
P 3		P 132				
P 4		P 133				
P 5		P 135				
P 6		P 138				

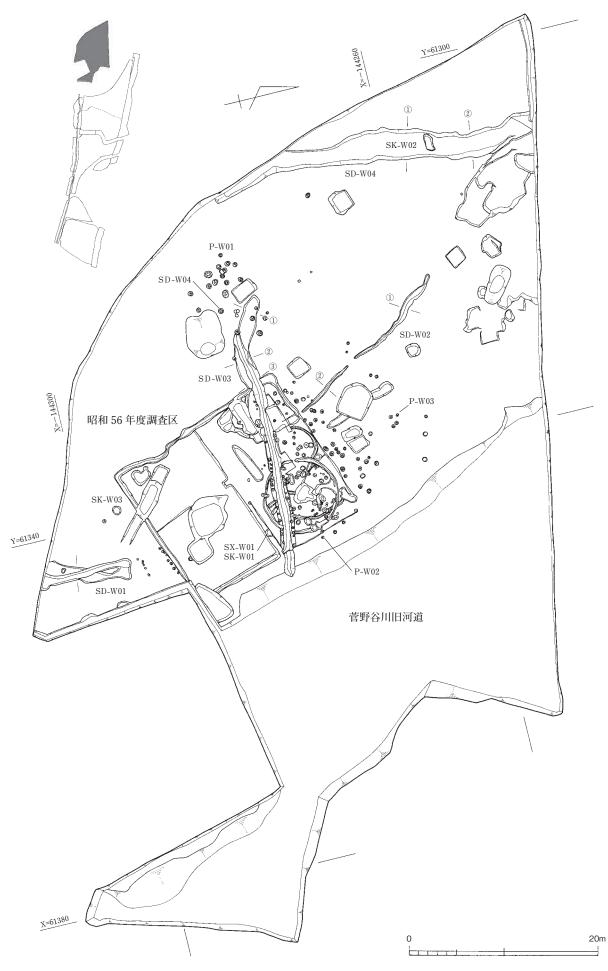
SH-E07

新遺構	旧遺構番号					
利退冊	調査番号	980215				
宙ケ	地区	В				
P 1		P 71				
P 2		P 89				
P 3		P 90				
P 4		P 87				
P 5		P 82				
P 6		P 77				
P 7		P 74				
P 8		P 73				
P 9		P 81				

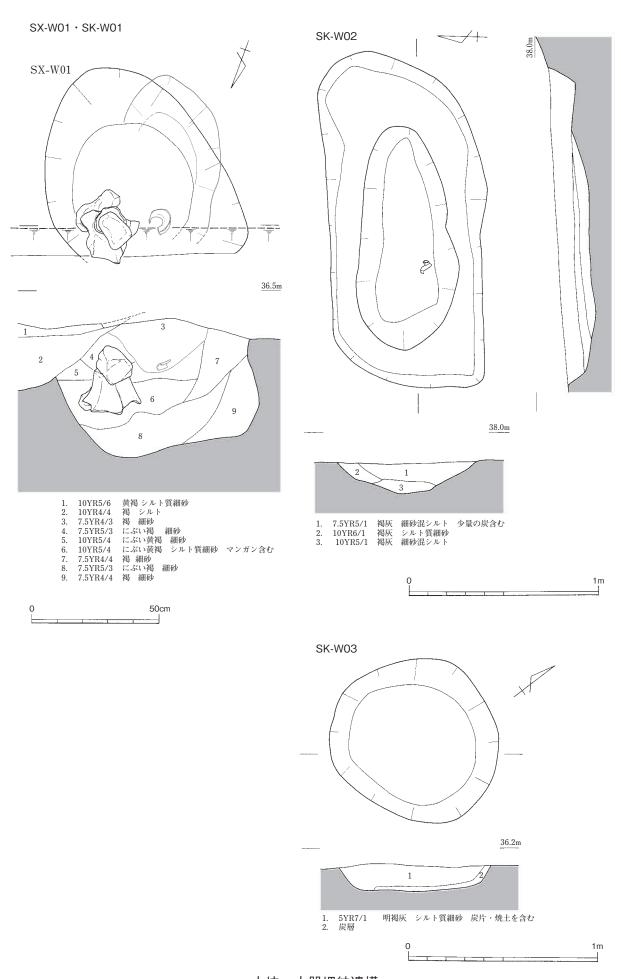
報告 書 抄 録

, , , , , ,											
ふりが	なり、	せいしんにゅーたうん No.62いせき									
書	名	西神ニュータウンNo.62遺跡									
副書	名	2号神戸西バイパス事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 VI									
シリーズ	名 :	兵庫県文化財調査報告									
シリーズ番	号	第438冊									
編著者	名:	長濱誠司 山上雅弘 岸本一宏									
編集機		公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部									
所 在	地	= 675-0)142 兵	いごけん かこぐ	んはりまちょうお 耶播磨町 ラ	大中	口丁月1番1号	(兵庫	けんりつこう こはくぶつかんな	j) TEL 079-	437-5561
発 行 機	関 :	兵庫県教	效育委員	員会							
所 在	地	∓ 650-8	567 神	戸市中央[区下山手边	重 5	丁月10番1号	号 IEI	. 078-362-3784		
発行年月	日 :	平成25(2013) 3	年2月26日							
資料保管機	関 .	兵庫県立	立考古	専物館							
所在力	也	⊤ 675-0)142 兵	:庫県加古港	郡播磨町フ	大中	1丁月1番	1号	TEL 079-437-5589		
写的同义电影友	=0 -	/ − bi.	コ	- F	جئ _{ام} ال		± 0▽		調査期間	調査面積	细木匠口
所収遺跡名	<i>H</i> T 1	在 地	市町村	寸 遺跡番号	北緯 遺跡番号		東経	(遺跡調査番号)		(m²)	調査原因
でいた人にから 西神ニュー たらん No.62 タウンNo.62 遺跡	神神經絡	市計	28111	1 19136	34° 42′	0"	135° 0′ 7″	1999 2001 2001 2001	$0507 \sim 19960515$ (960029) $0105 \sim 19990325$ (980215) $0105 \sim 20010323$ (2000248) $0618 \sim 20011020$ (2001002) $1022 \sim 20020215$ (2001142) $0128 \sim 20020315$ (2001213)	340 m ² 2,007 m ² 3,220 m ² 7,928 m ² 5,798 m ² 148 m ²	記録保存調
所収遺跡名	種別	主な	時代	主な道	遺構		主な遺物		特	記事項	
西神ニュー	集落	弥生	時代	竪穴住居 土器埋納			生土器・ 器・鉄器		中期後半から後の拠点的集落	期まで存続	売する流域
タウンNo.62 遺跡		古墳	時代	竪穴住居掘立柱建	跡		恵器・土師器	器	中期から終末期	明まで存続し、竪穴住 建物への転換を確認	
		古 代 掘立柱建物跡		須恵器・土師器		複数の建物を検出した					
		中	世	掘立柱建物跡 土坑・井戸・墓			須恵器・土師器・ 陶磁器 多数の建物が重複する		複する		
要約	明石川支流櫨谷川沿いの段丘上に位置する集落遺跡である。遺跡は河川や谷により細分されるが神戸市教育委員会の実施した調査成果と合わせると、段丘上を中心に東西・南北ともに約380mの広がりをもつ。各時期ともに遺構の分布範囲は広く、密度も高い。また遺構の多くに重複がみられることから、一定期間存続していたことが明らかとなった。櫨谷川流域における中核的な集落になると考える。										

図版



全体図



土坑・土器埋納遺構

SD-W01



- 1. N6/ 2. 7.5Y6/1 3. N6/1

- 灰 細砂混じりシルト 灰 中砂 灰 シルト混じり中砂

SD-W021



1. 2.5Y4/1 黄灰 シルト質極細砂 細礫を多く含む

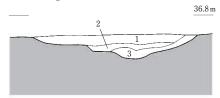
SD-W022



36.8 m

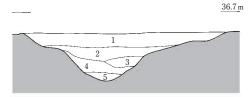
1. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混シルト質極細砂 小礫少量含む

SD-W031



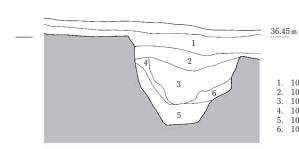
- 1. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂 ややシルト質 2. 5Y6/2 灰オリーブ 細砂 3. 2.5Y5/1 黄灰 細砂

SD-W032



- 1. 10YR6/3 にぶい黄橙 シルト質細砂~極細砂 2. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質細砂~極細砂 3. 7.5YR4/1 褐灰 シルト質細砂~極細砂 4. N4/ 灰 シルト質極細砂 少量の細砂含む 5. 10YR6/2 灰黄褐 細砂

SD-W032



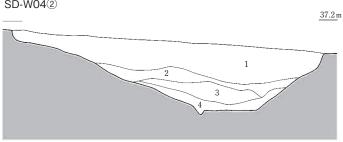
- 1. 10YR3/4 暗褐 シルト質細砂 2. 10YR2/3 黒褐 シルト 3. 10YR3/4 暗褐 礫混シルト 4. 10YR4/4 褐 礫混シルト わずかに細砂含む 5. 10YR4/4 褐 礫混シルト 細砂含む 6. 10YR3/3 暗褐 シルト

SD-W041



1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質粗砂 径 3~5mm の礫含む

SD-W04⁽²⁾

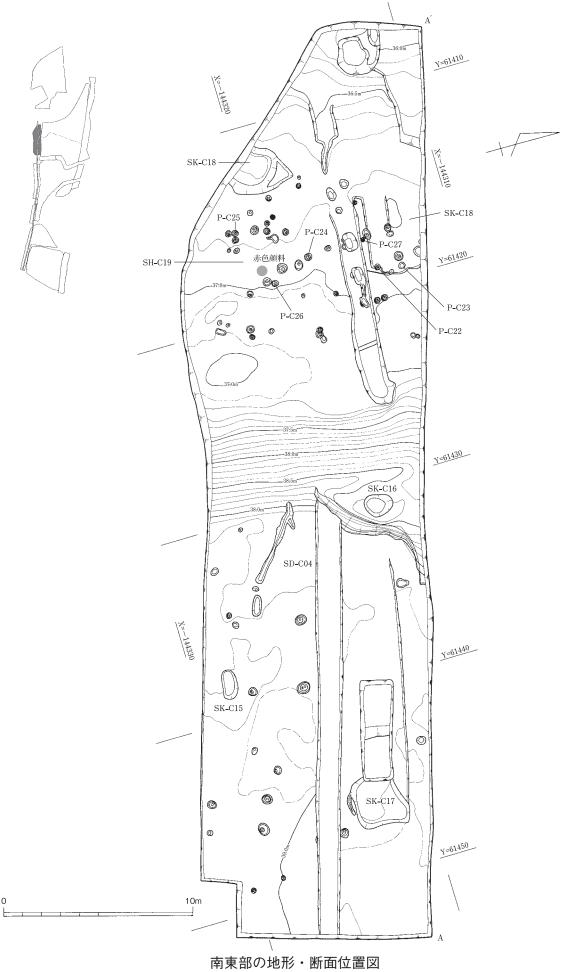


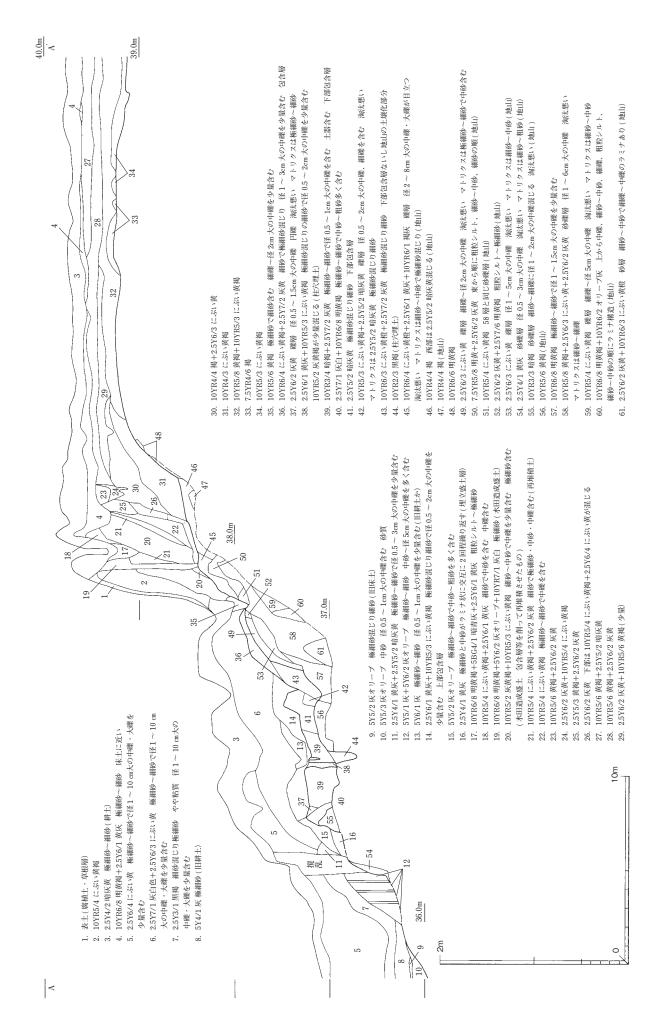
- 1. 10YR6/3 にぶい黄橙 シルト質細砂~極細砂 マンガン含む 2. 2.5Y5/1 黄灰 シルト質細砂~極細砂 3. 7.5YR4/1 褐灰 シルト質細砂~極細砂 4. N4/ 灰 シルト質極細砂 少量の細砂含む

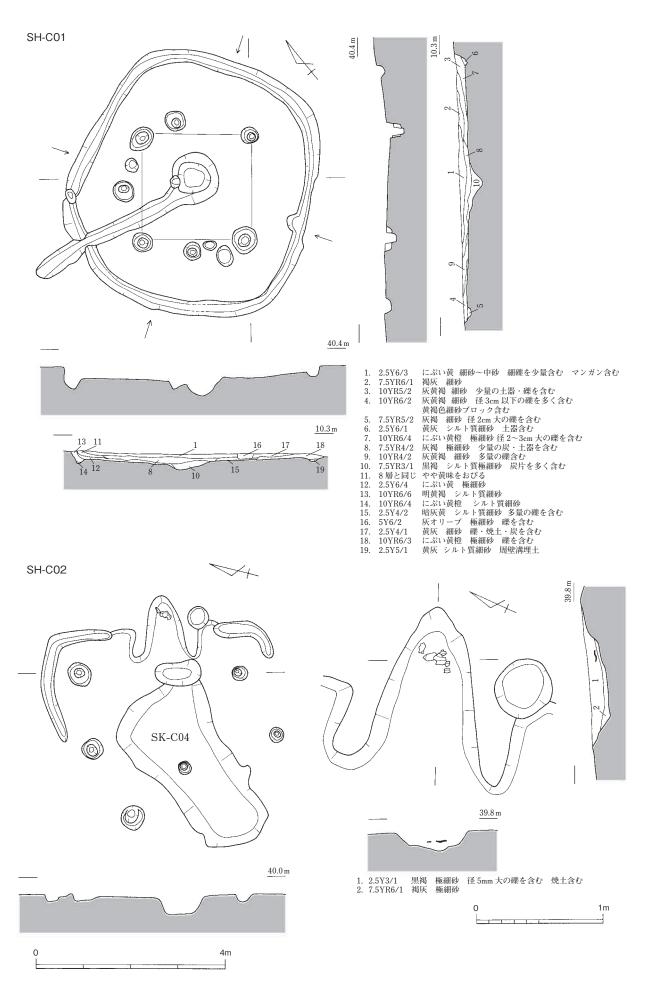
溝



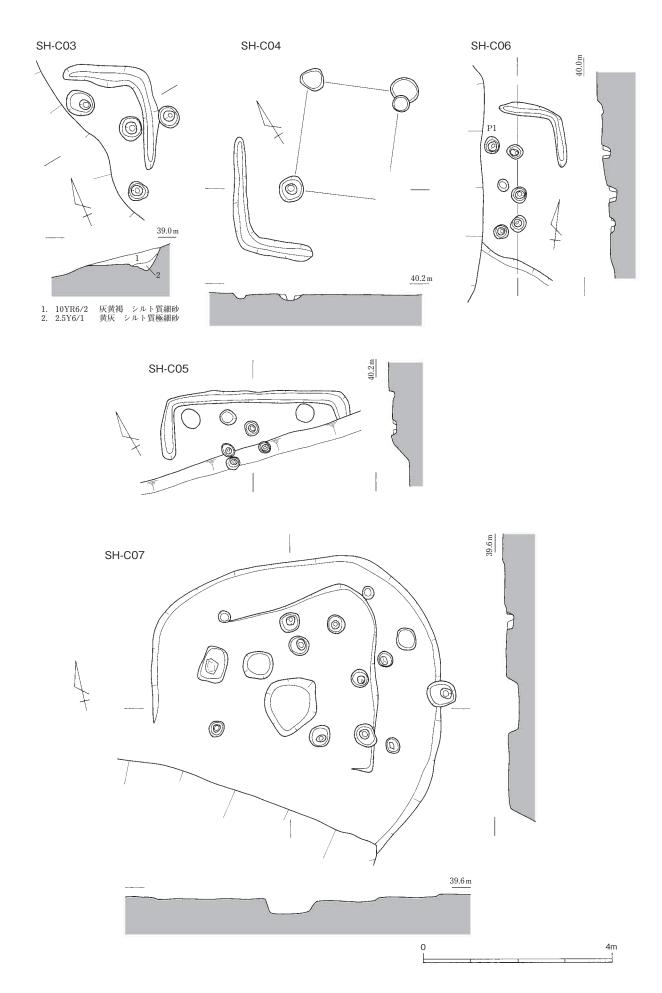
全体図



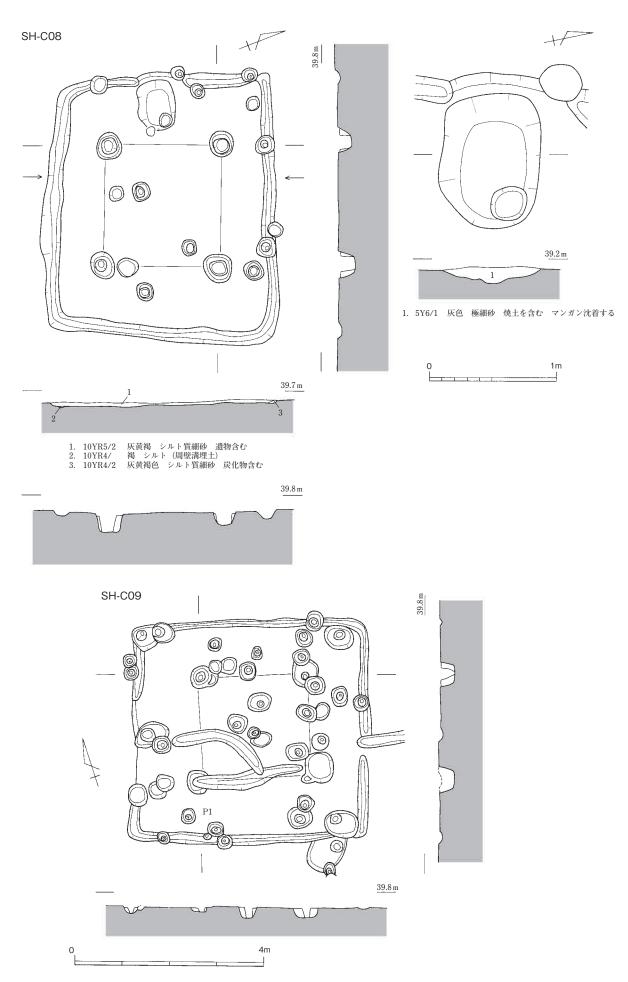




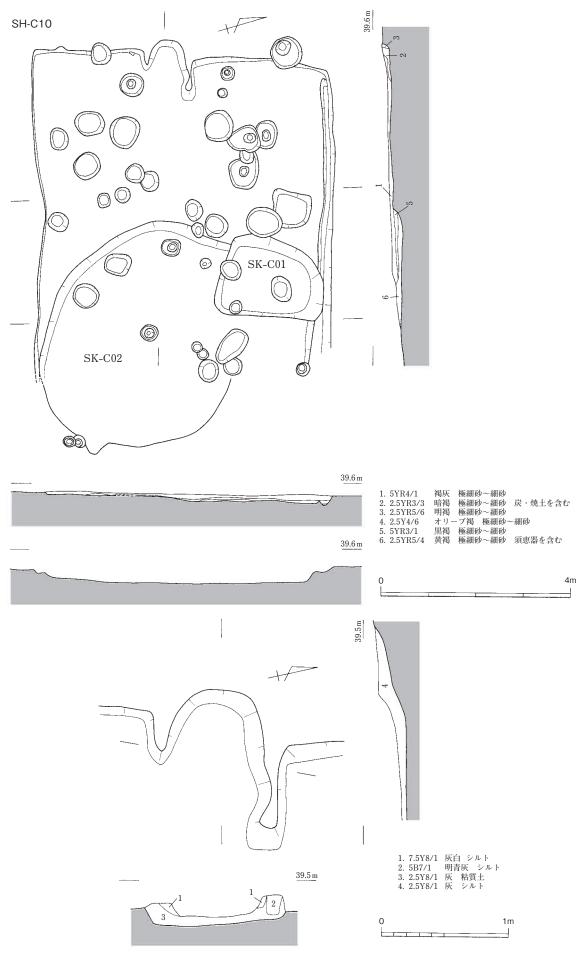
竪穴住居跡 1



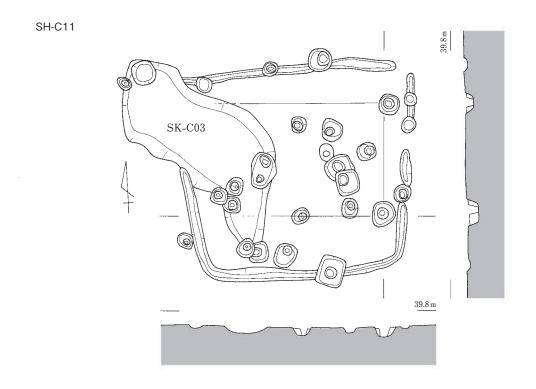
竪穴住居跡2

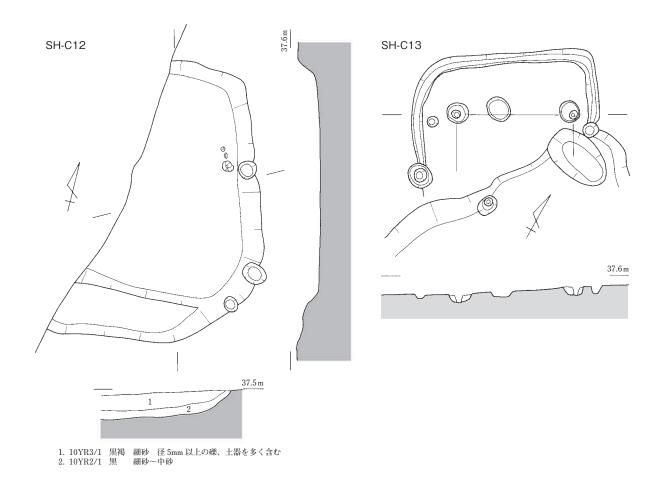


竪穴住居跡3

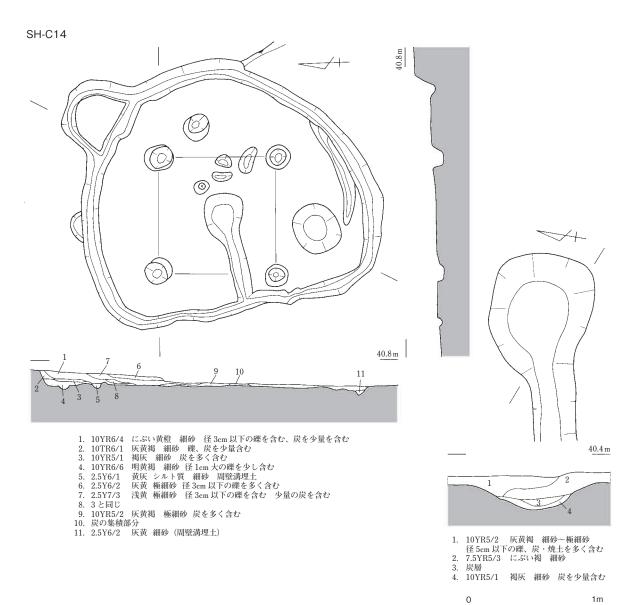


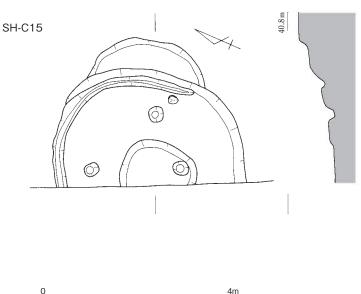
竪穴住居跡 4

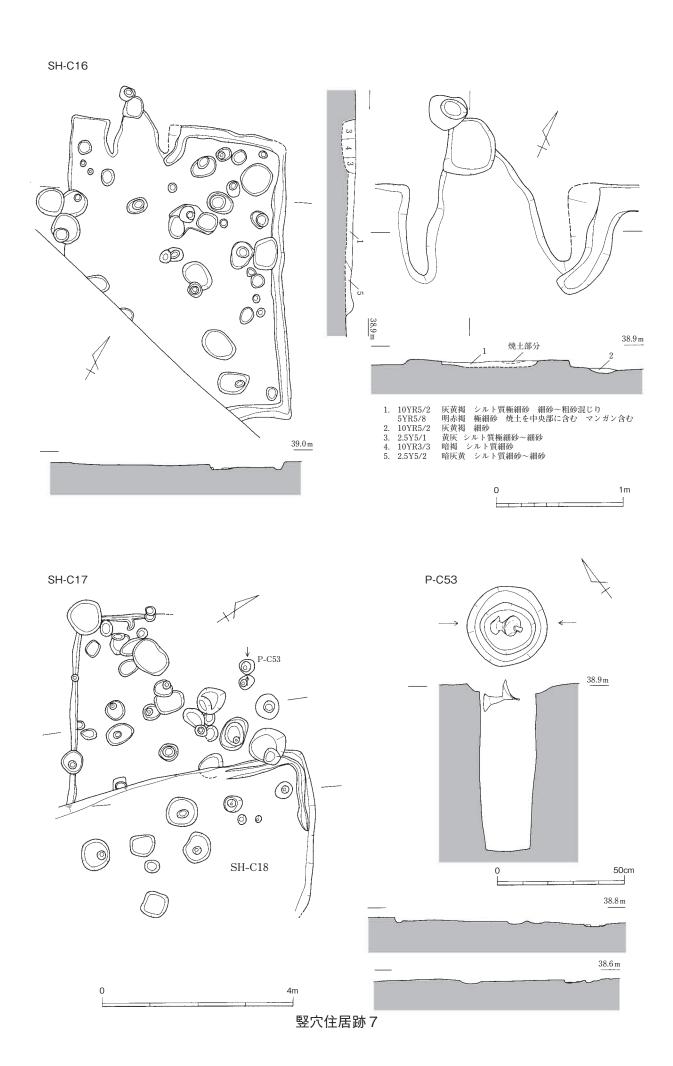


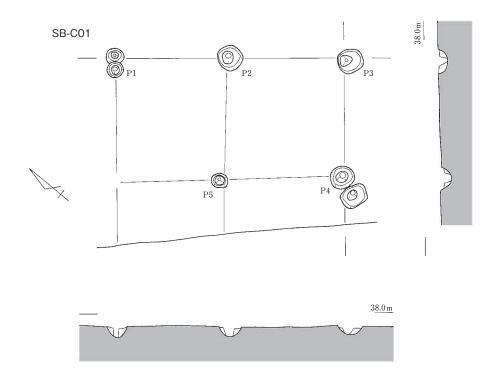


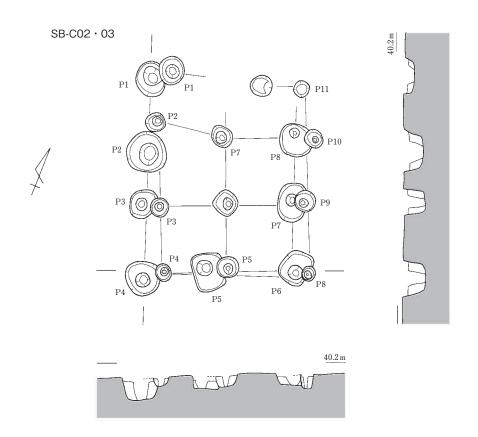
0 4m





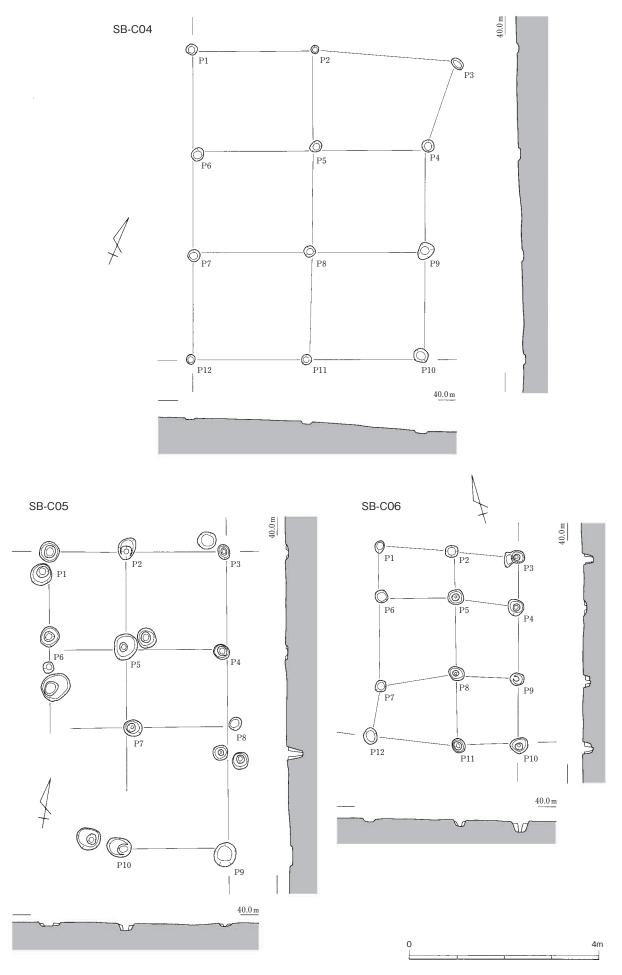




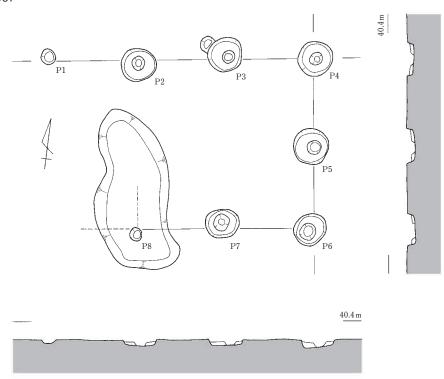


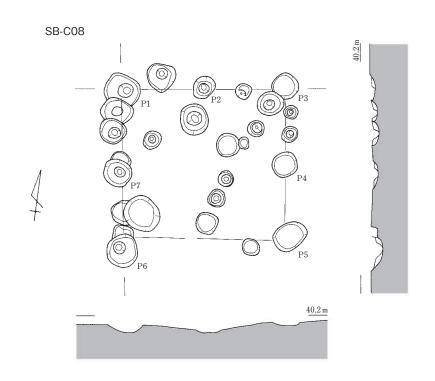
0 4n

掘立柱建物跡 1



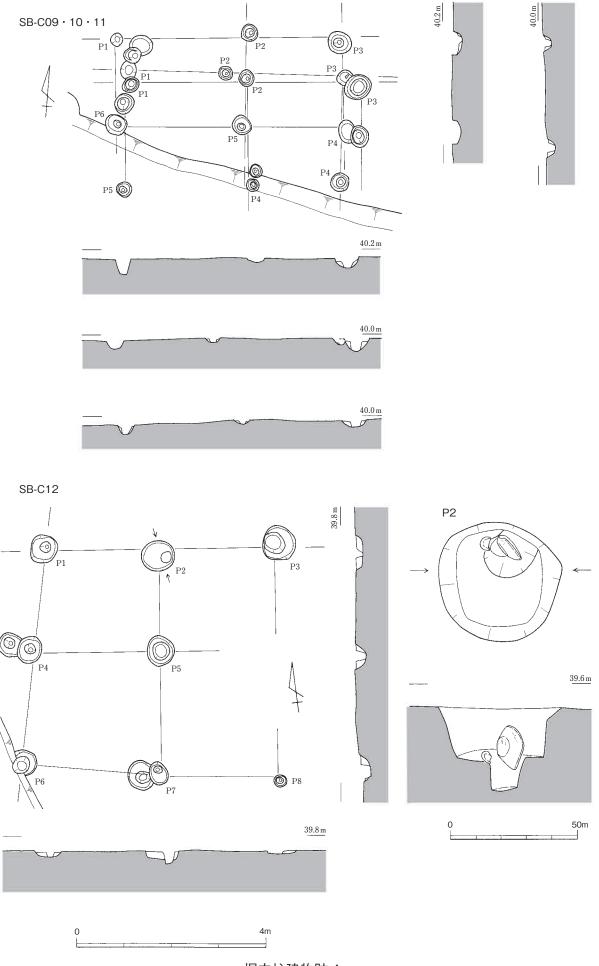
掘立柱建物跡2





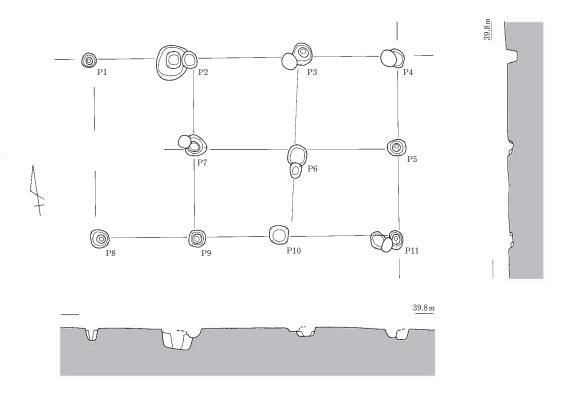


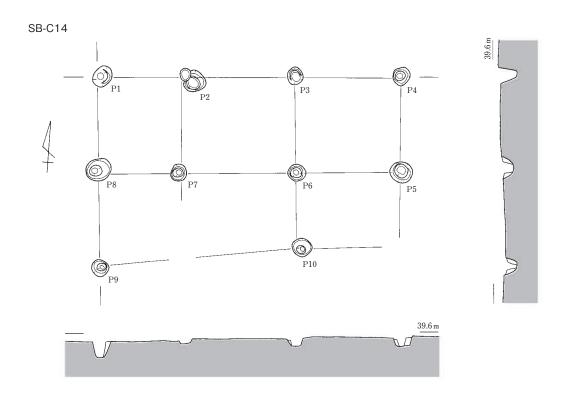
掘立柱建物跡3



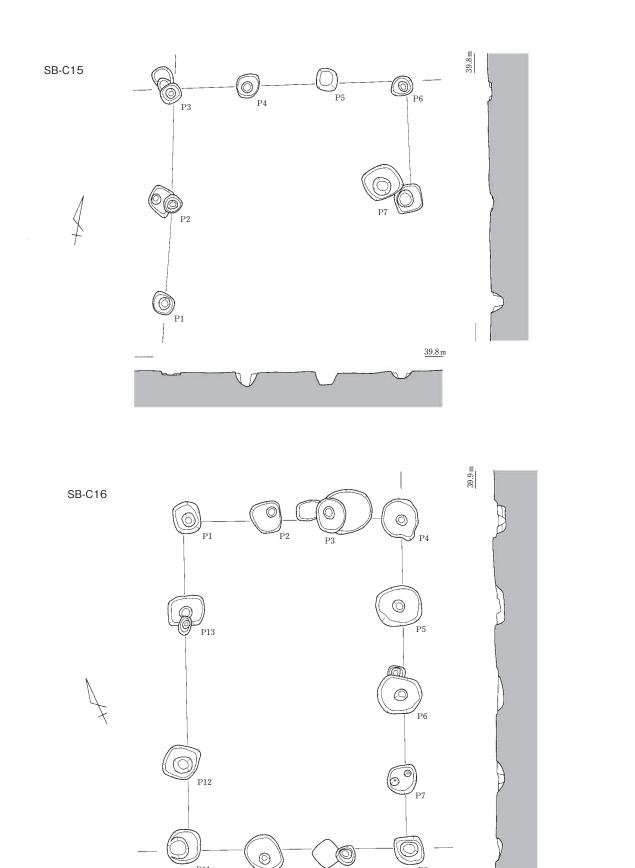
掘立柱建物跡4

SB-C13



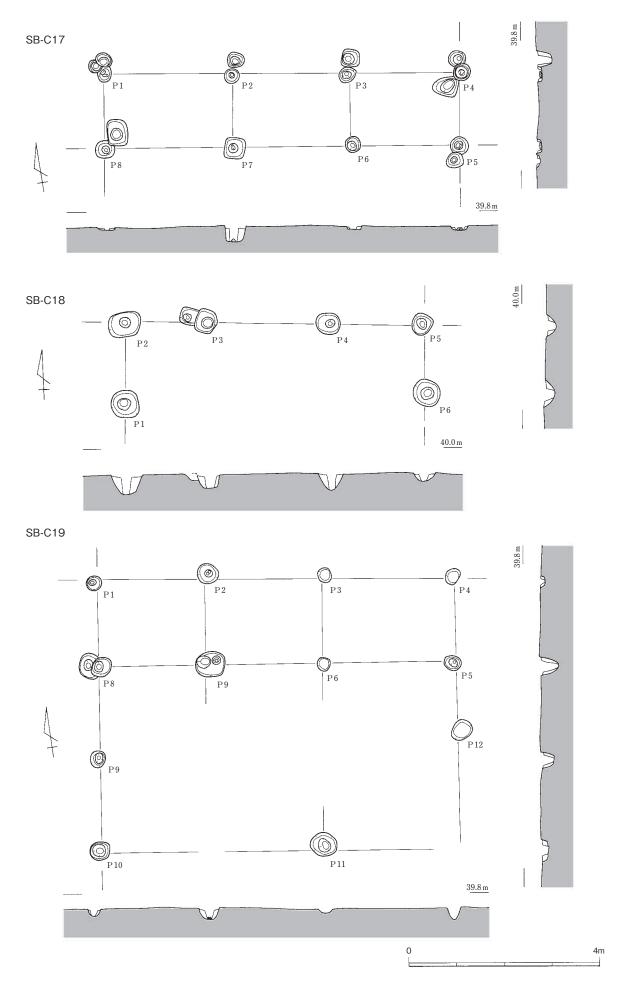




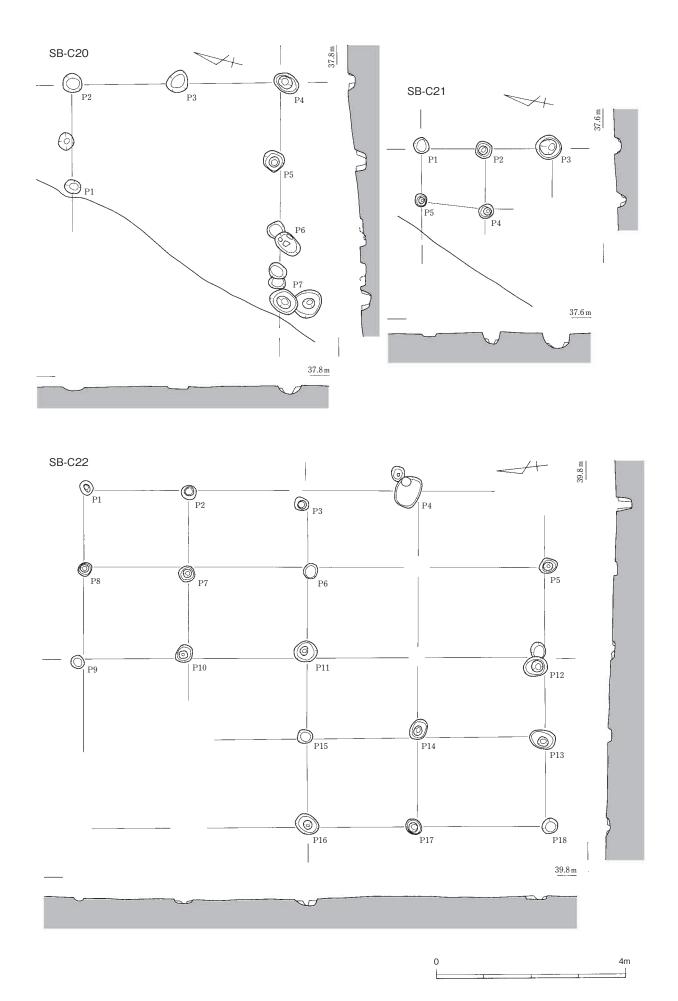


39.9 m

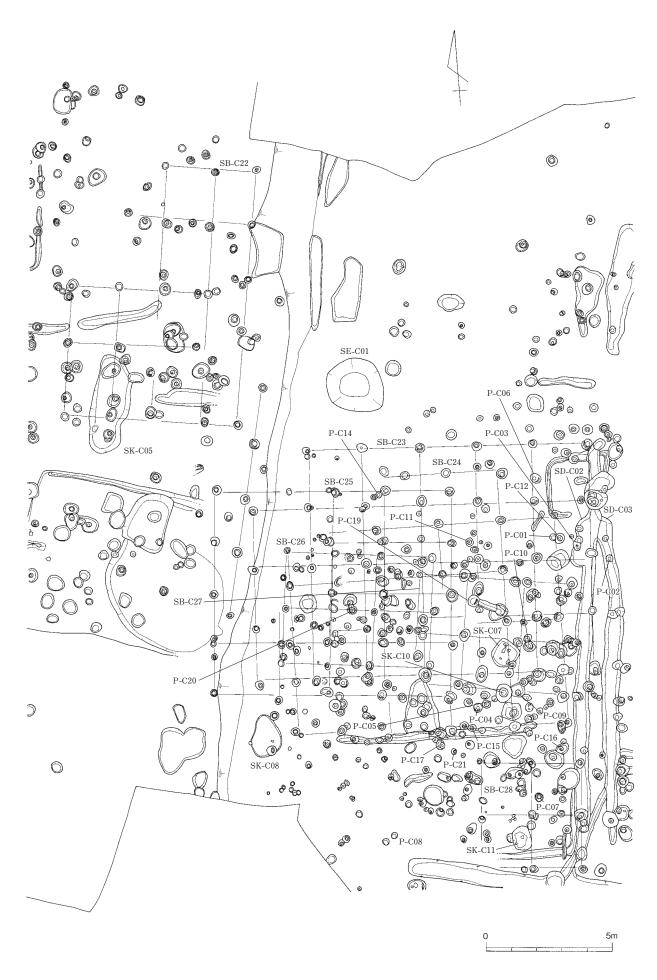
掘立柱建物跡6



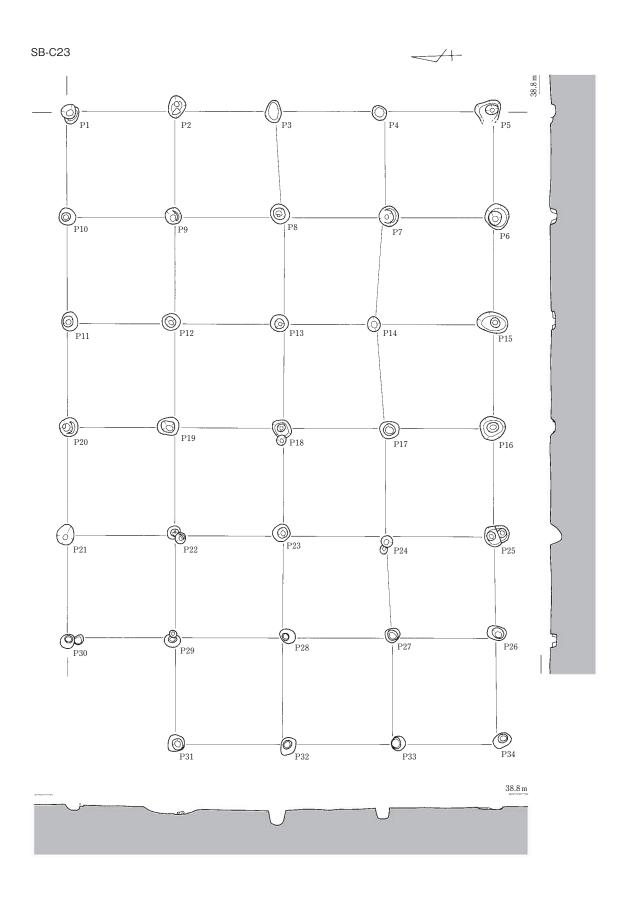
掘立柱建物跡7



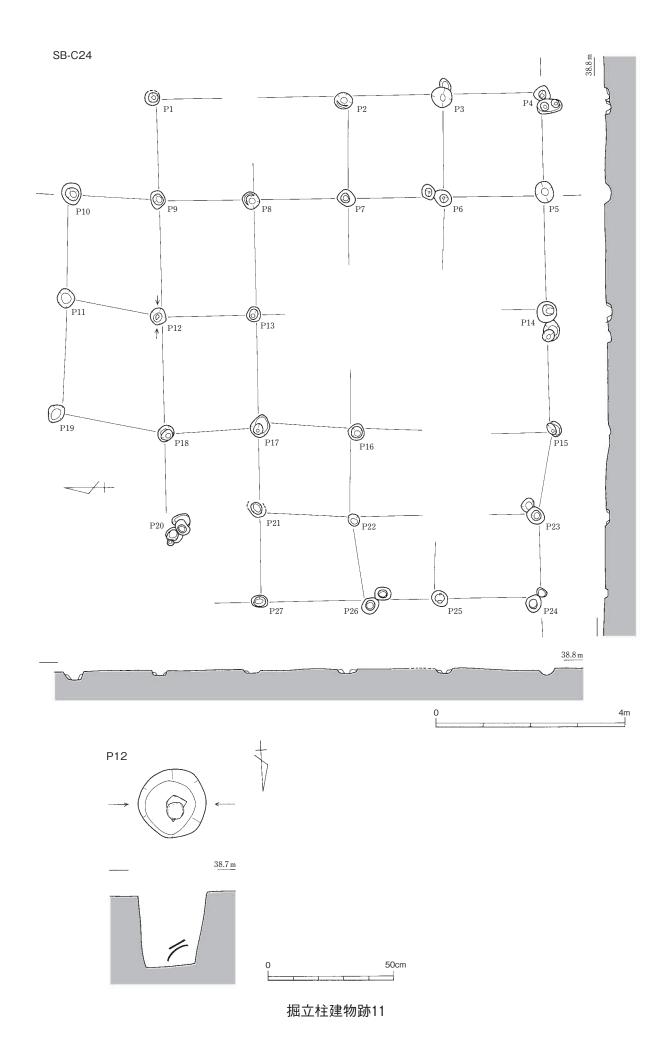
掘立柱建物跡8

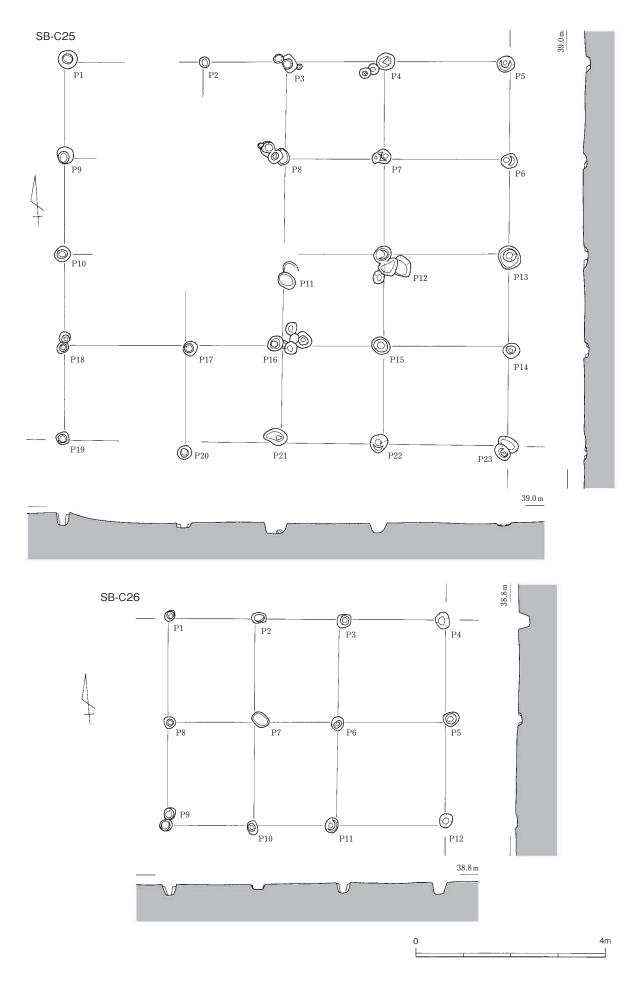


掘立柱建物跡9 (建物群詳細図)

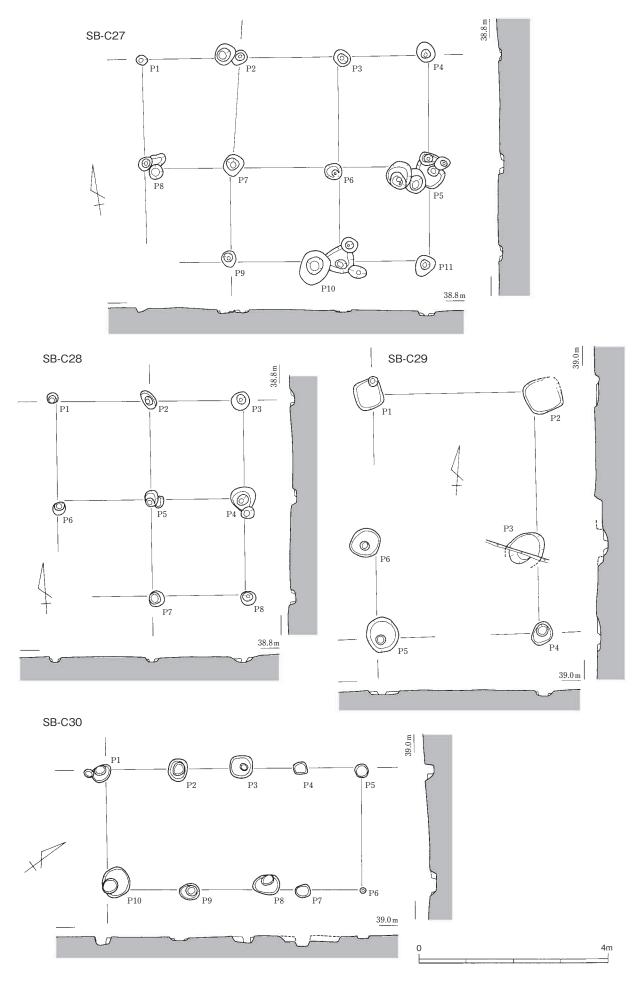




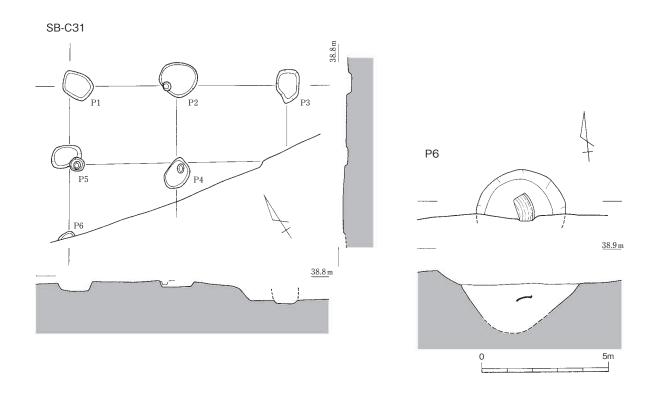


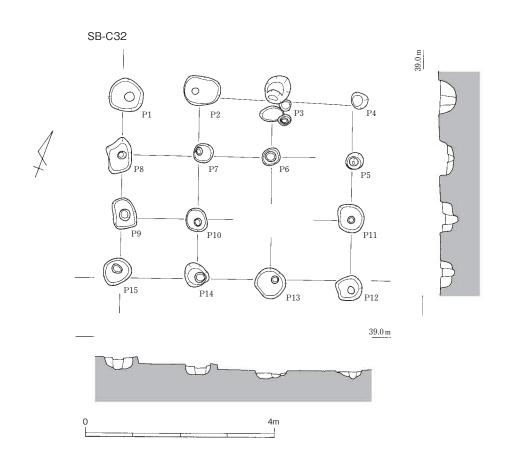


掘立柱建物跡12

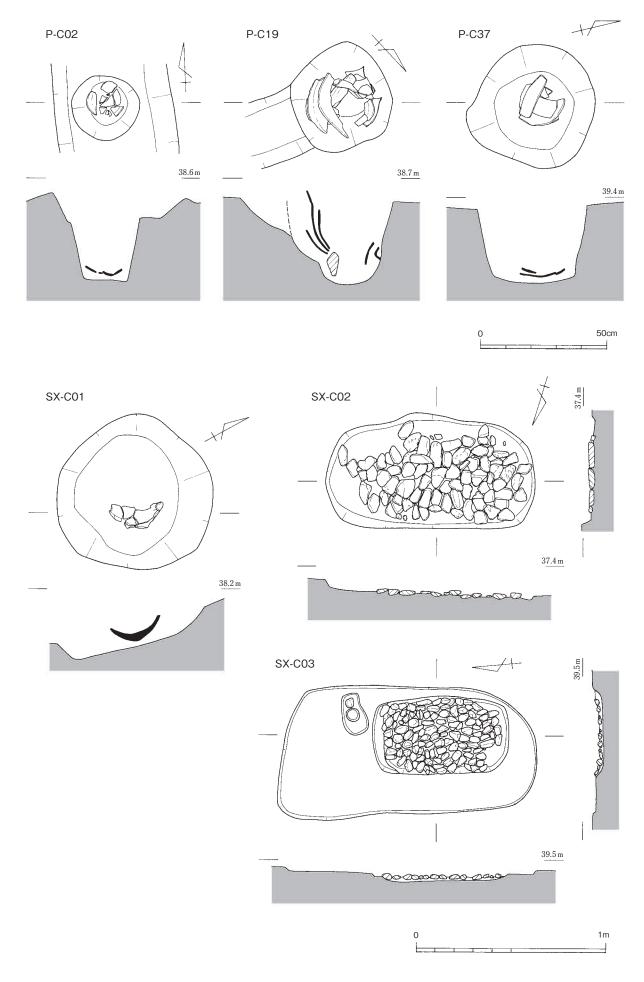


掘立柱建物跡13

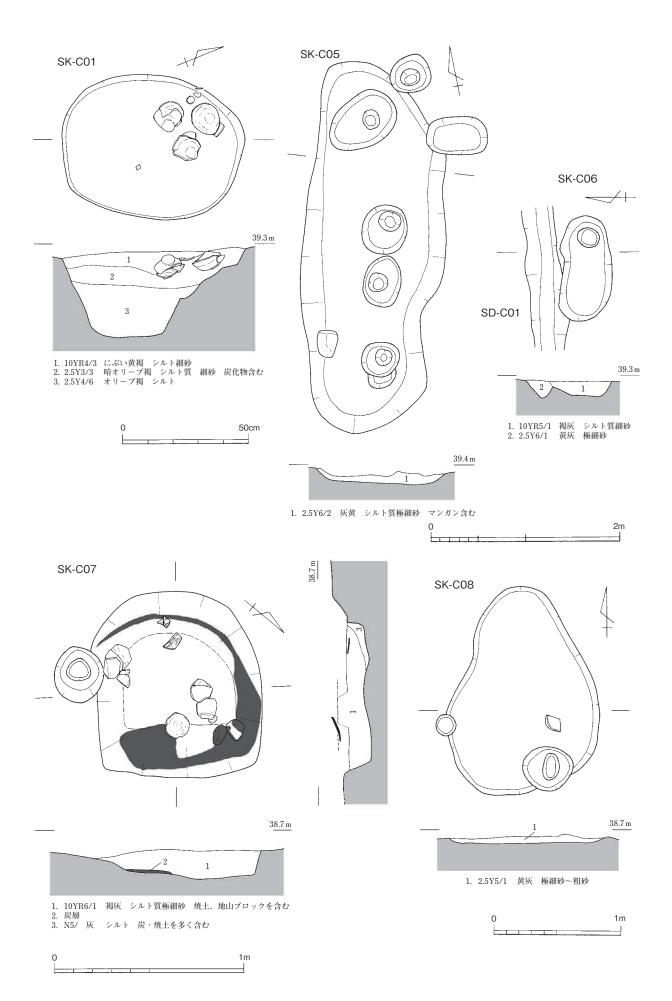




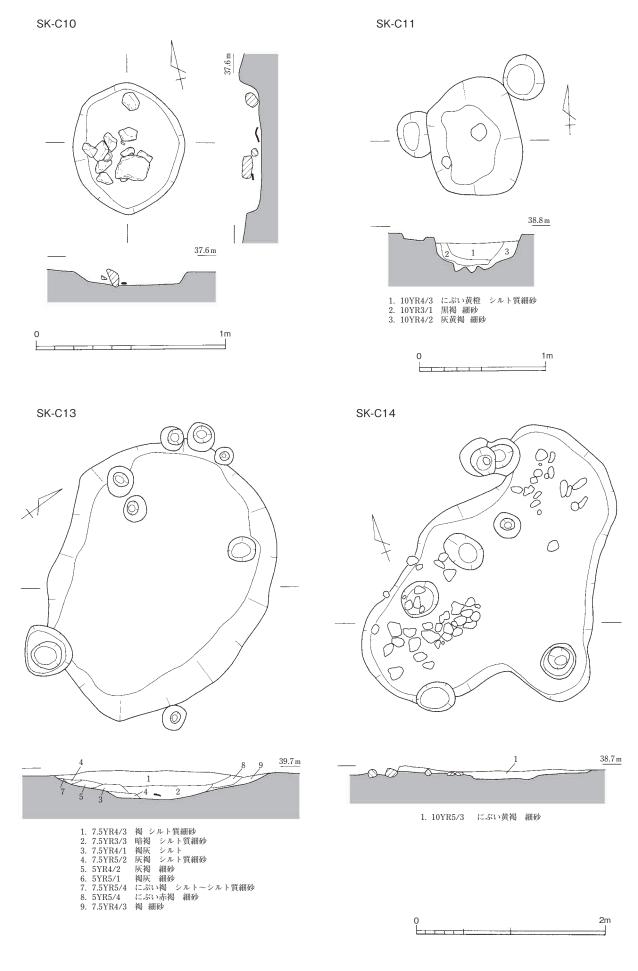
掘立柱建物跡14

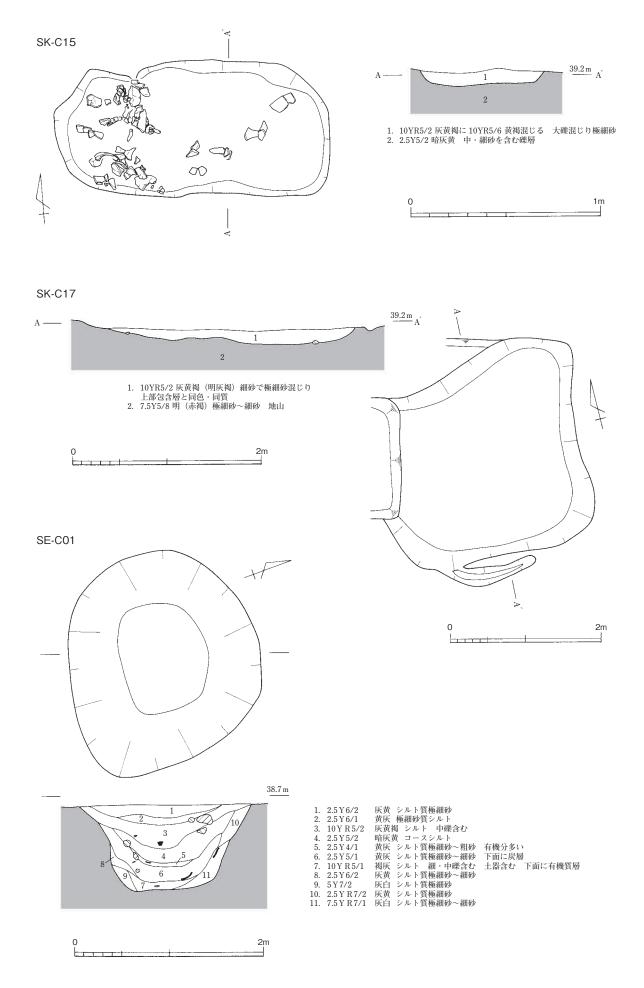


柱穴・土器埋納遺構・中世墓



土坑 1





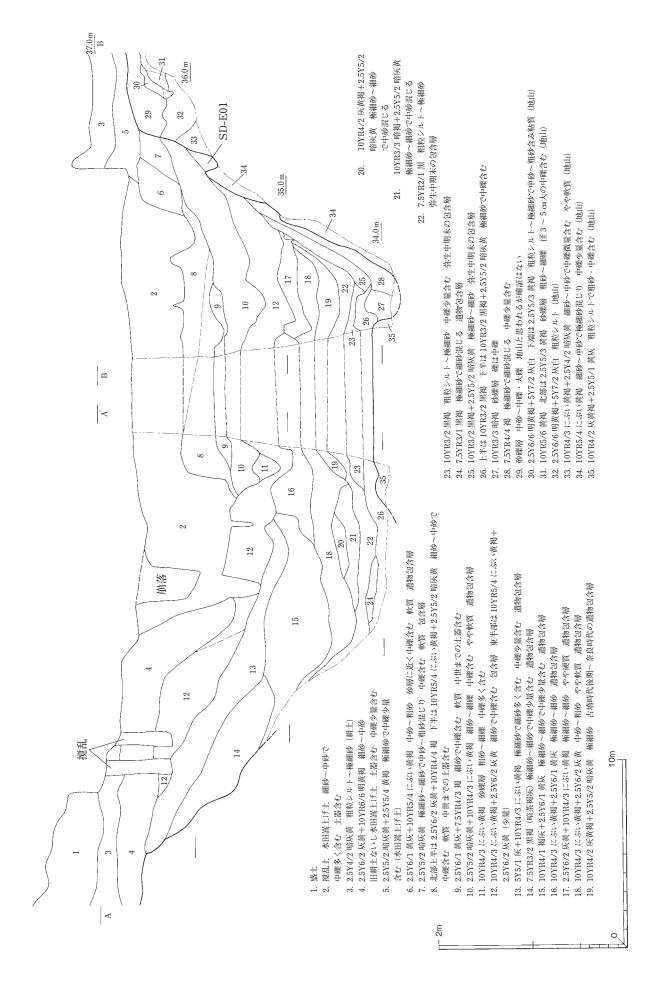
土坑3・井戸

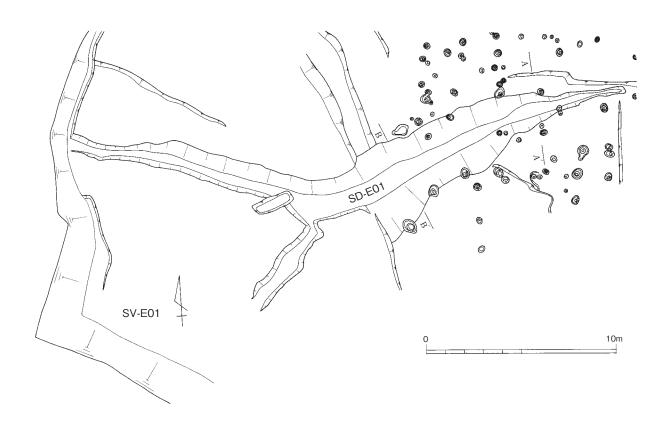


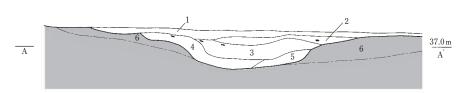
全体図



南東部の地形・断面位置図

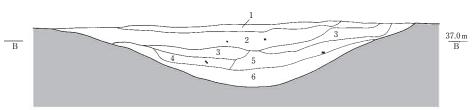






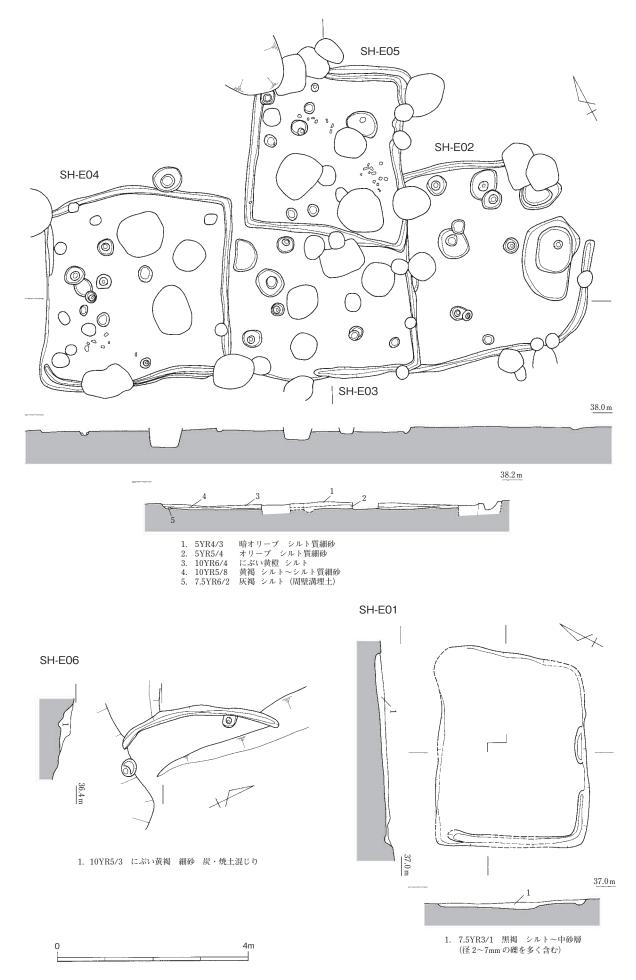
- 1. 10YR3/2 黒褐 (暗灰褐) 極細砂〜細砂 径 1~2 cm大の中碟少量含む マンガン含む
 2. 10YR4/2 灰黄褐 (灰褐色) 細砂で極細砂含む マンガン含む
 3. 10YR4/3 にぶい黄褐 (灰褐) 極細砂〜細砂 マンガン含む

- 4. 10YR4/3 にぶい黄褐(灰褐)10YR5/4 にぶい黄褐混じり 極細砂〜細砂 マンガン含む
- 5. 10YR5/3 にぶい黄褐(明灰褐)10YR6/6 明褐ブロック混じり 極細砂〜細砂 マンガン含む 軟質
- 6. 10YR6/8 明黄褐(明黄褐)極細砂〜細砂(地山)

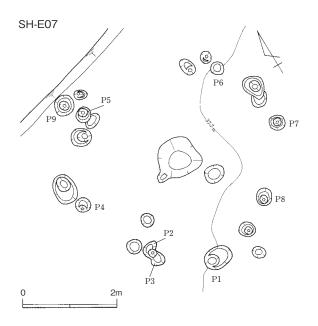


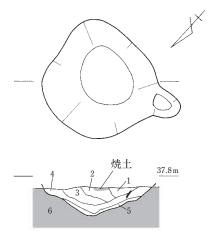
- 1. 10YR3/2 黒褐 (暗灰褐) 極細砂で細砂含む マンガン含む
- 2. 10YR3/3 暗褐 (灰褐) 極細砂で細砂含む マンガン含む
- 3. 10YR4/2 灰黄褐 (乳灰褐) 細砂で極細砂含む マンガン含む 4. 10YR4/1.5 灰黄褐 (乳灰褐) 極細砂〜細砂 マンガン含む
- 5. 10YR3/1 黒褐 (暗濃灰褐) 極細砂で細砂含む 炭多く含む マンガン含む
- 6. 10YR4/3 にぶい黄褐 (明褐) 10YR5/6 黄褐ブロック混じり 極細砂~細砂 中砂・径 $1 \sim 3$ cm大の中礫少量含む マンガン含む



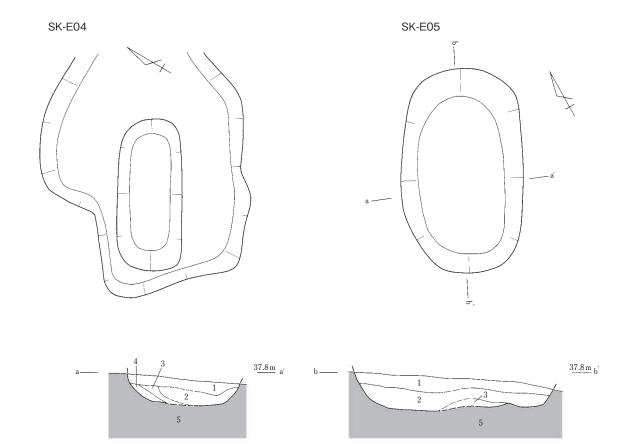


竪穴住居跡 1



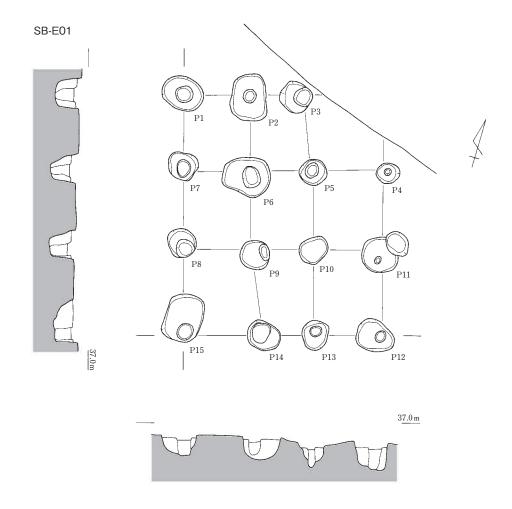


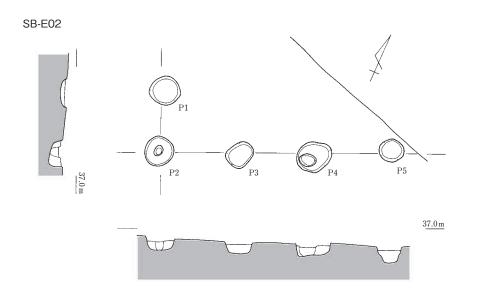
- 1. 10YR5/3 にぶい黄褐 (灰褐) 細砂 マンガン含む
- 2. 7.5YR3/1 黒褐(暗褐)極細砂〜細砂 炭化物・焼土・マンガン含む
- 3. 7.5YR4/2 灰褐(褐)極細砂混じり細砂 マンガン含む
- 4. 10YR3/1 黒褐(黒褐)極細砂〜細砂 炭・灰混じり
- 5. 10YR5/2 灰黄褐(明灰褐)細砂混じり 極細砂 (地山土壌化層)
- 6. 10YR6/8 明黄褐 (明黄褐) 細砂混じり 極細砂 (地山)



- 1. 10YR5/2 灰黄褐(乳明茶褐)細砂で極細砂含む 中礫少量含む
- 2. 10YR4/3 にぶい黄褐 (乳茶褐) 極細砂で細砂含む 中礫少量含む
- 3. 10YR6/6 明黄褐(明黄褐)極細砂で細砂含む(地山ブロック)中礫少量含む
- 4. 10YR4/3 にぶい黄褐(乳茶褐) 極細砂で細砂含む 中礫少量含む
- 5. 10YR6/6 明黄褐 (明黄褐) 極細砂〜細砂 中礫少量含む (地山)

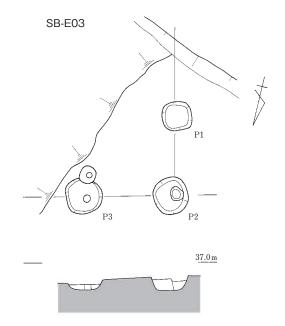


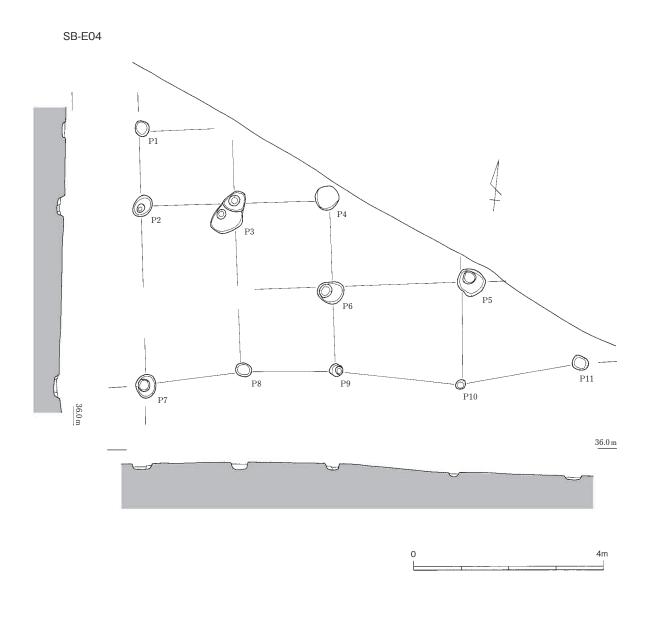




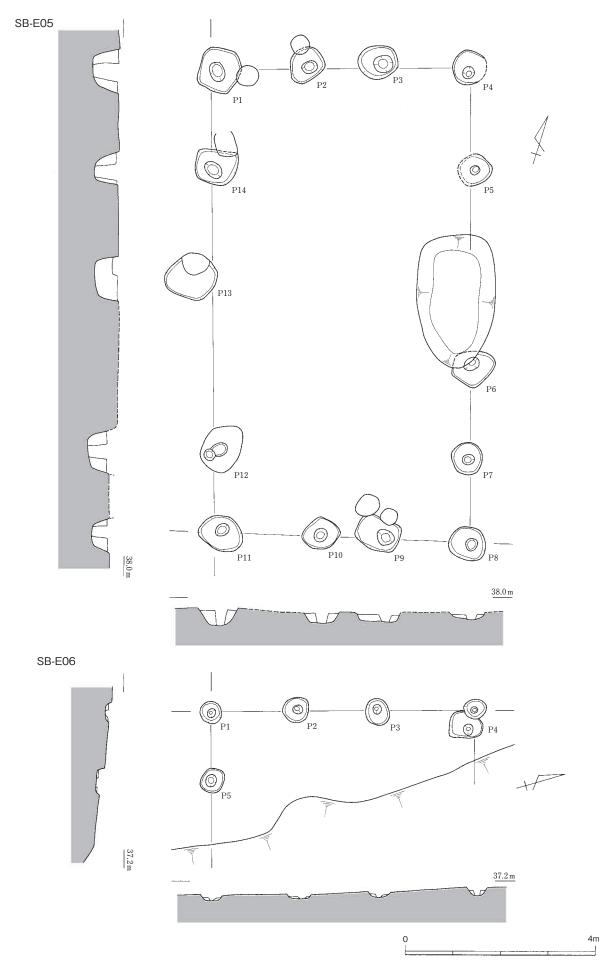
0 4m

掘立柱建物跡 1

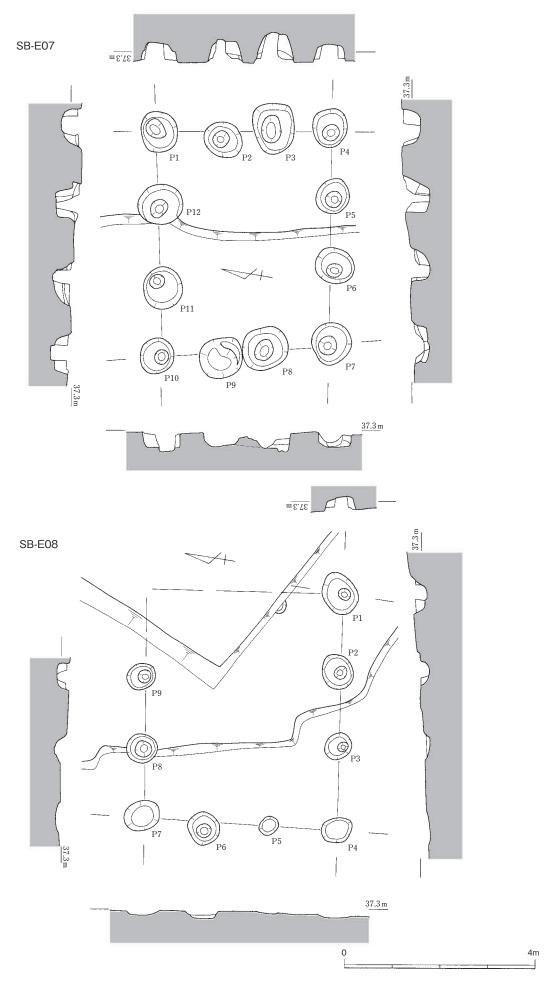




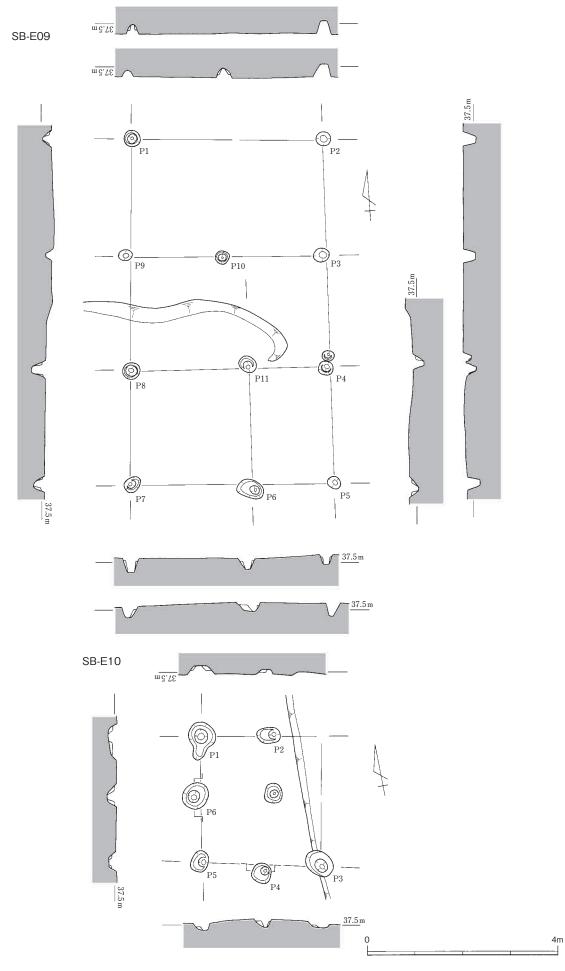
掘立柱建物跡2



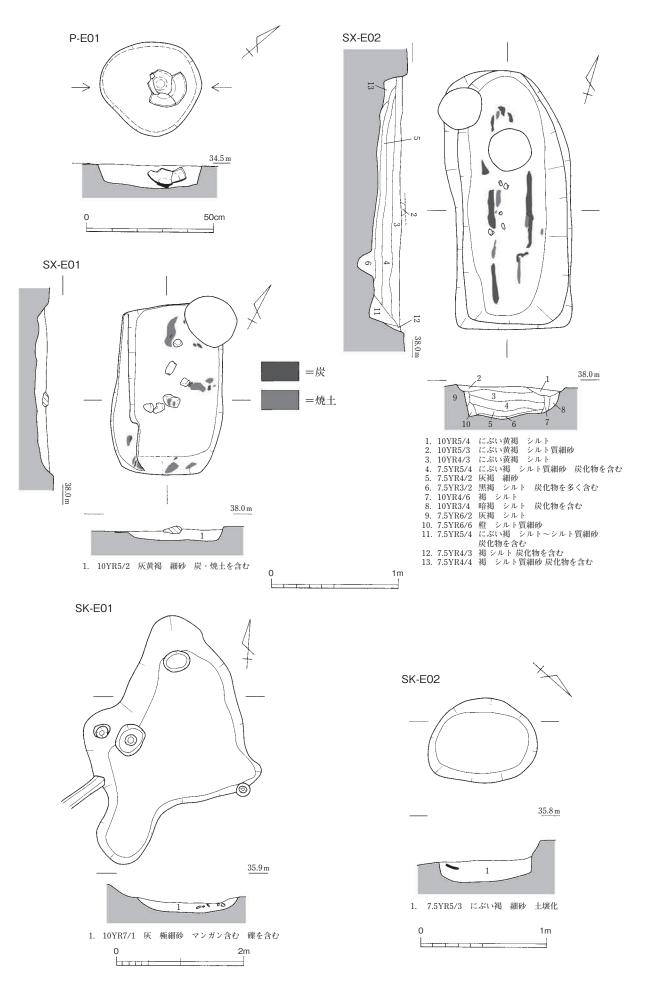
掘立柱建物跡3



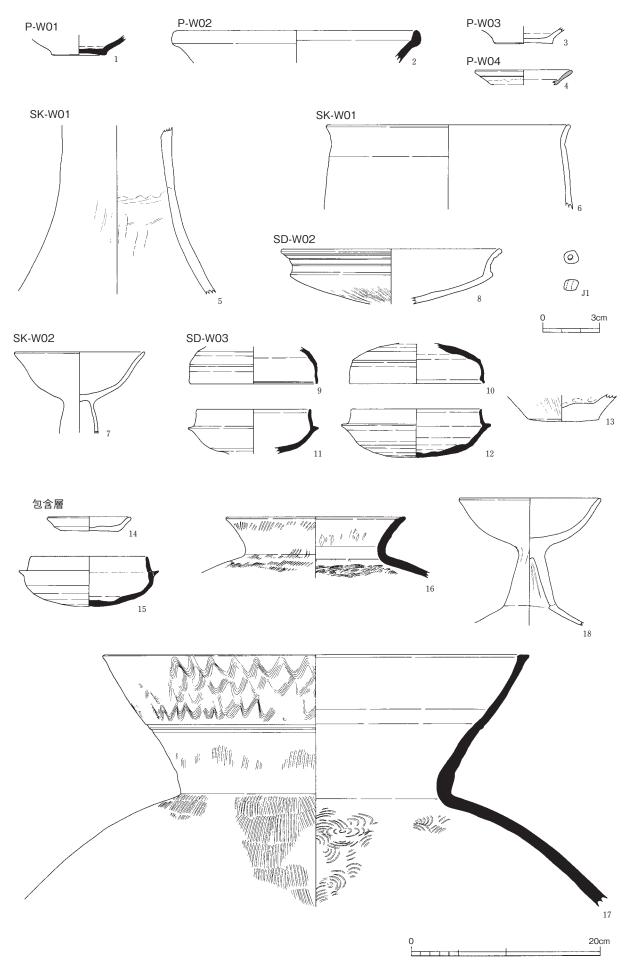
掘立柱建物跡4



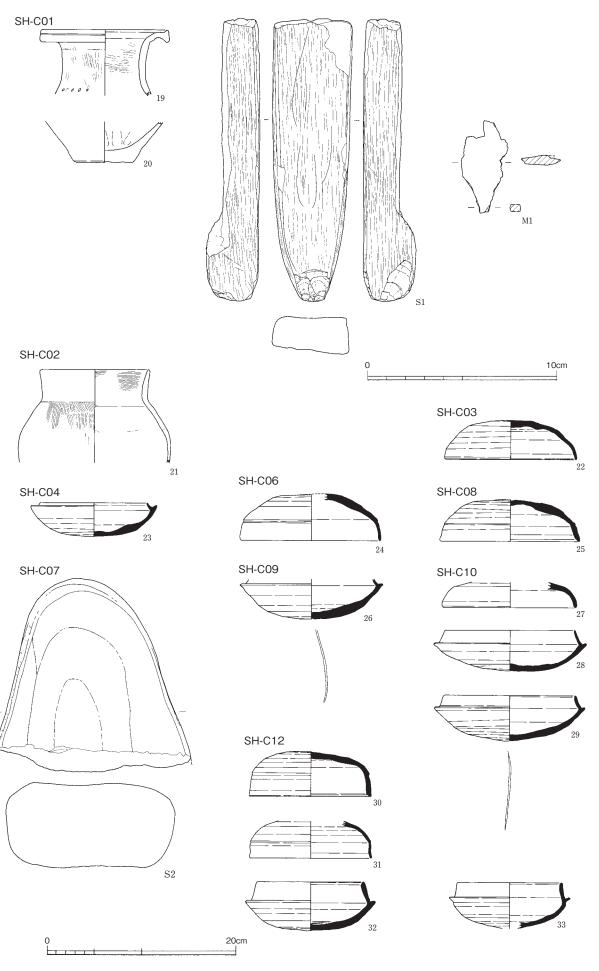
掘立柱建物跡5



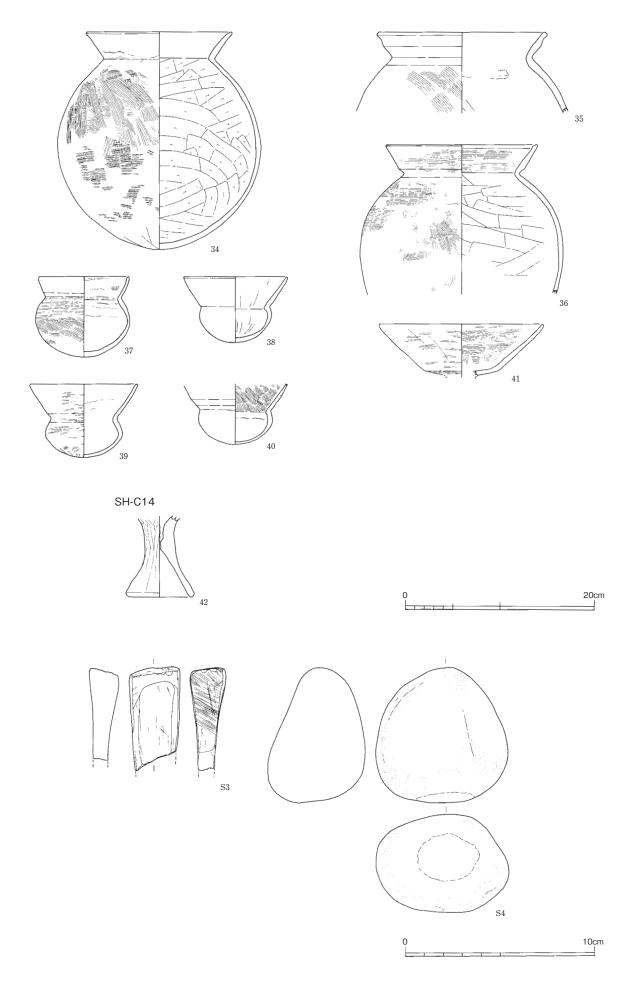
柱穴・土坑2



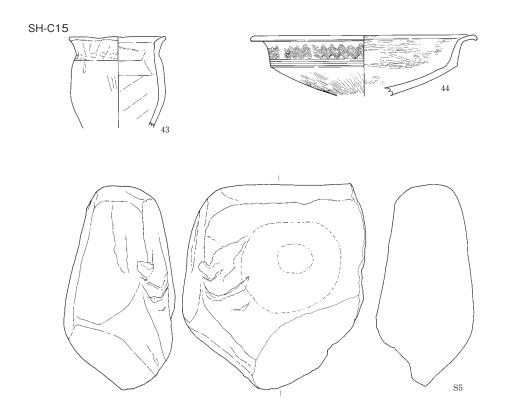
遺構・包含層

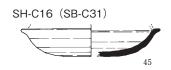


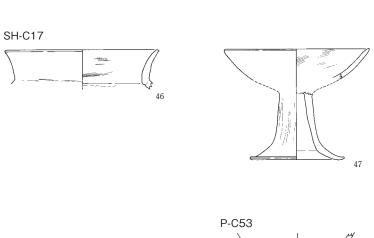
竪穴住居跡 1

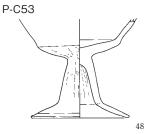


竪穴住居跡2



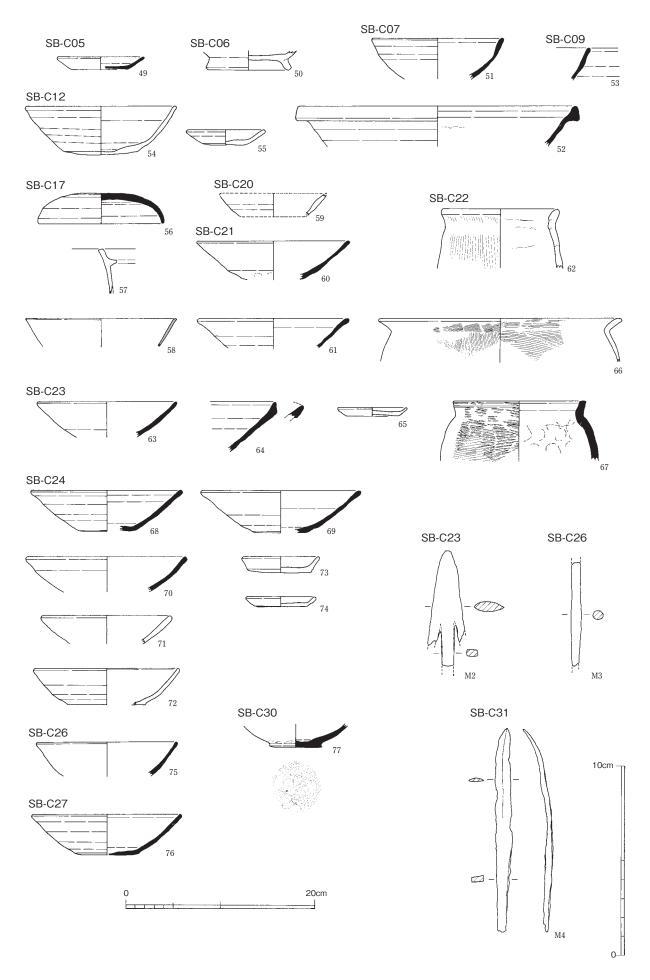




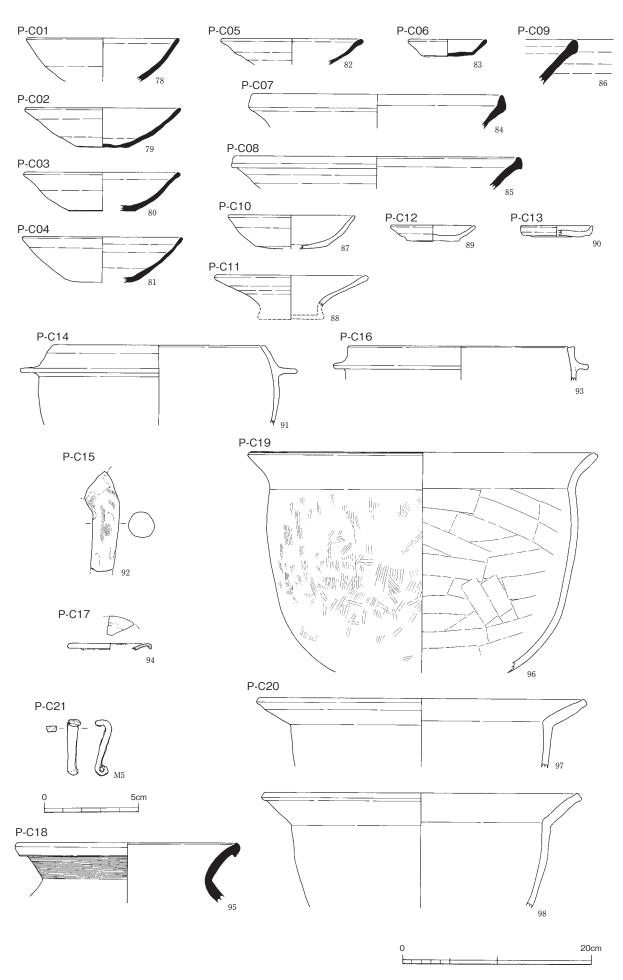




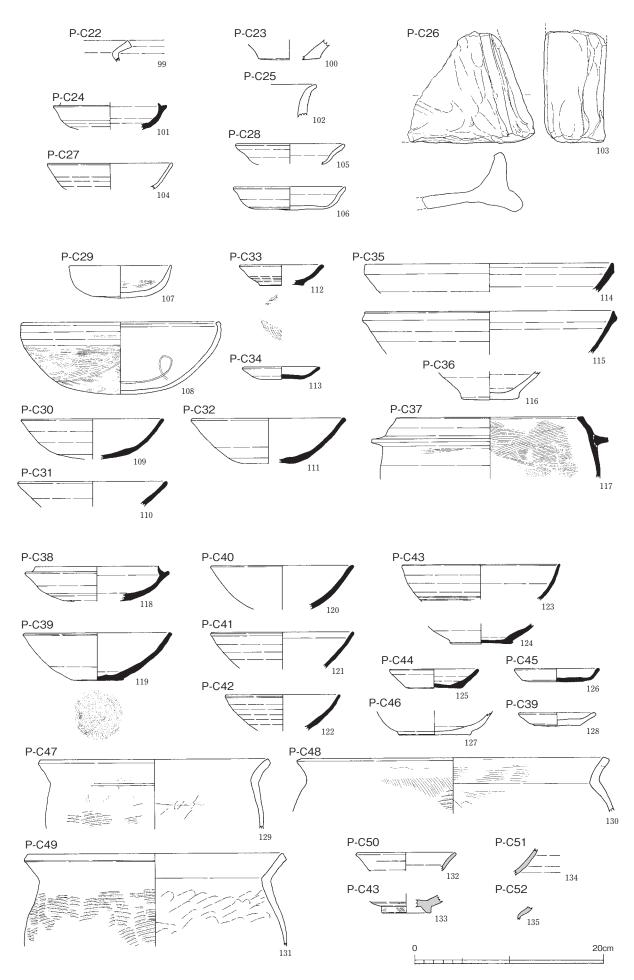
竪穴住居跡3



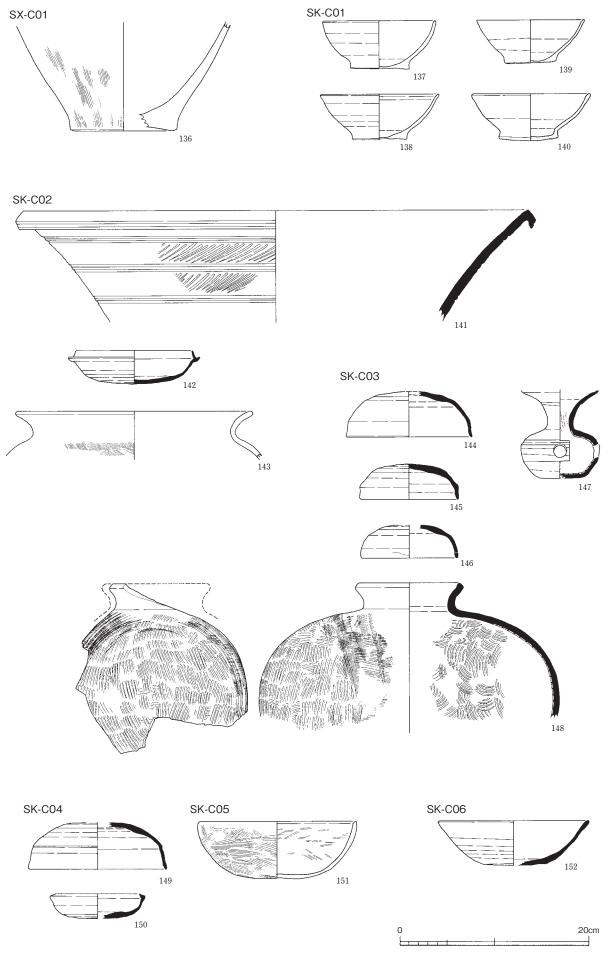
掘立柱建物跡



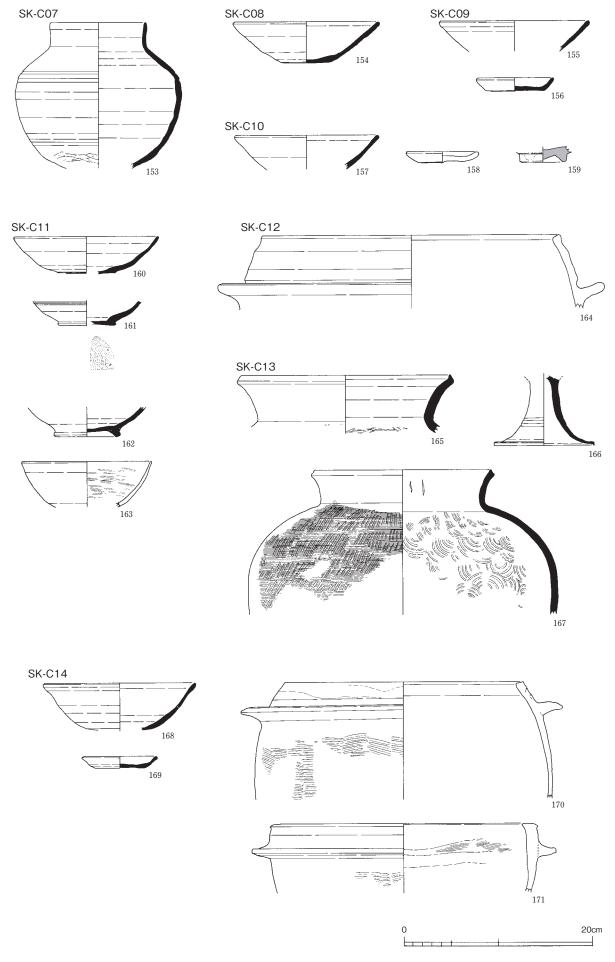
柱穴 1



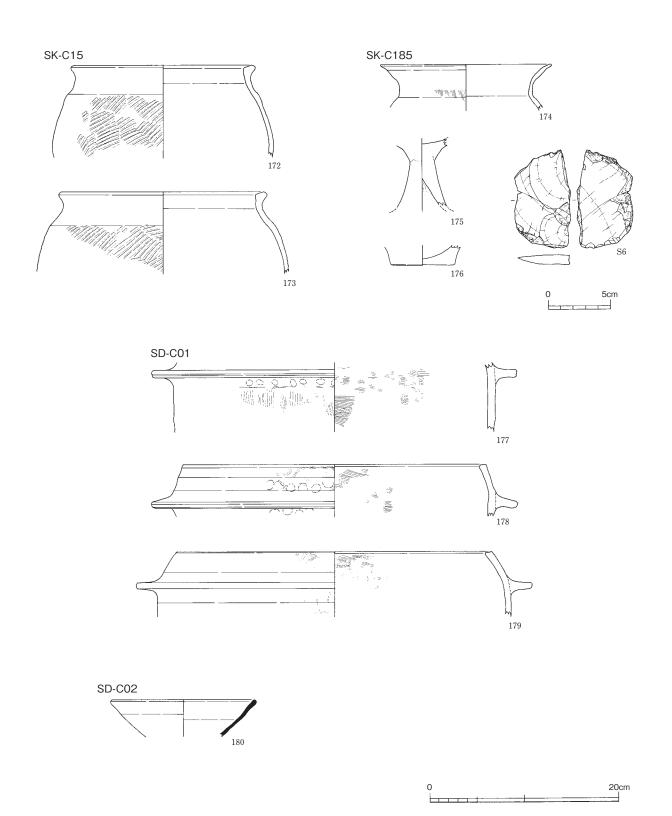
柱穴2

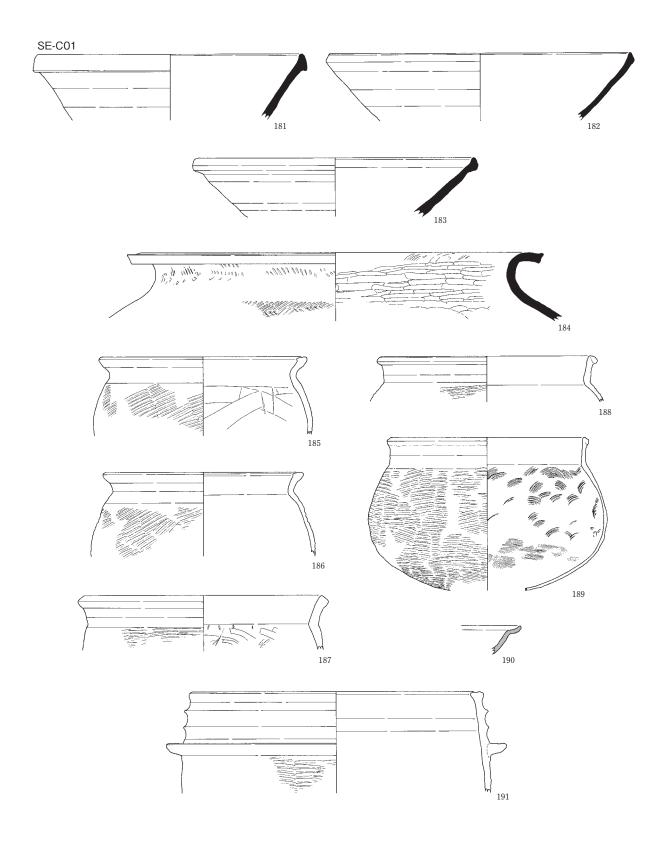


土坑 1

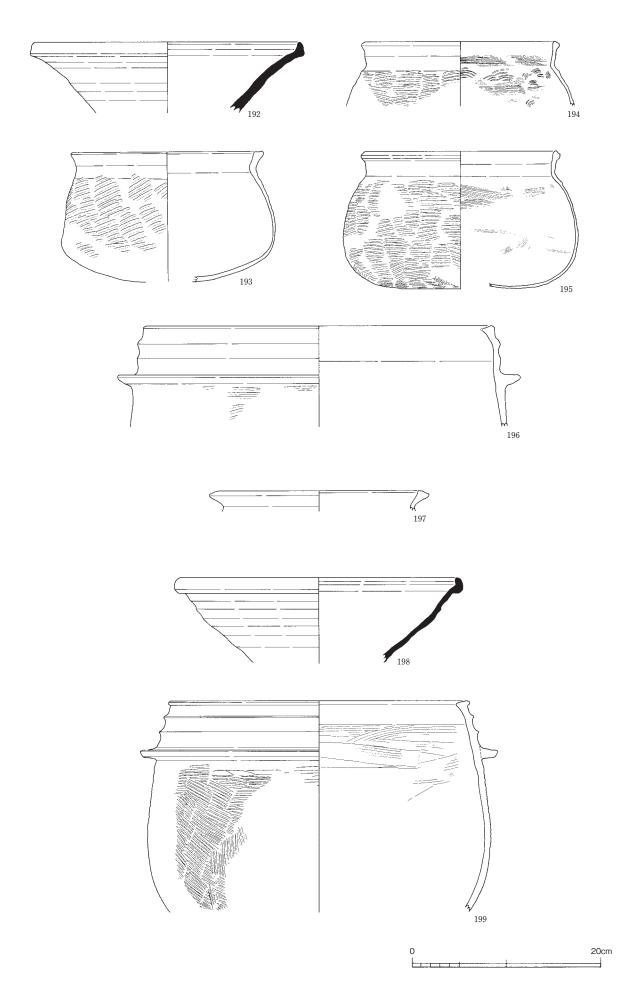


土坑2

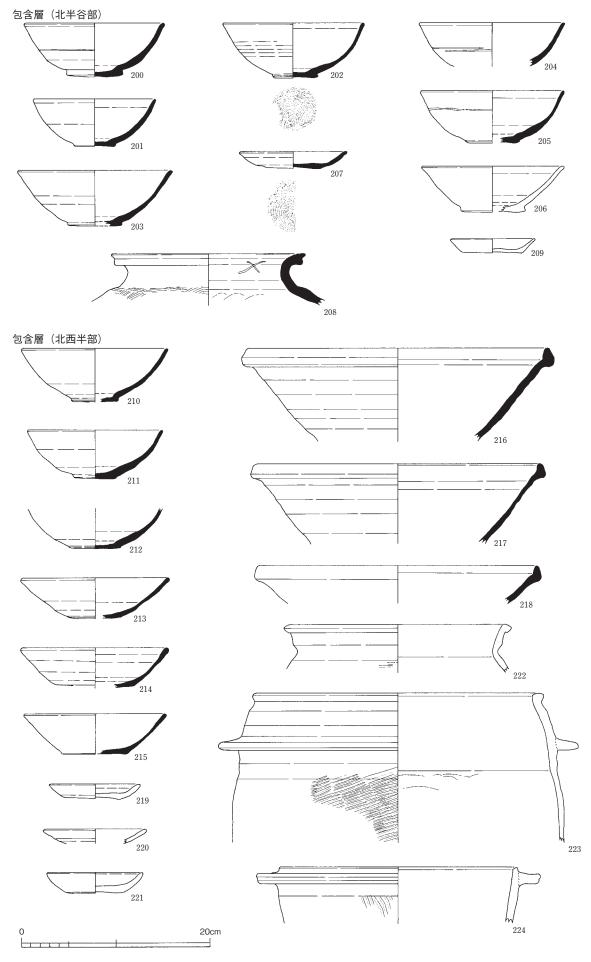




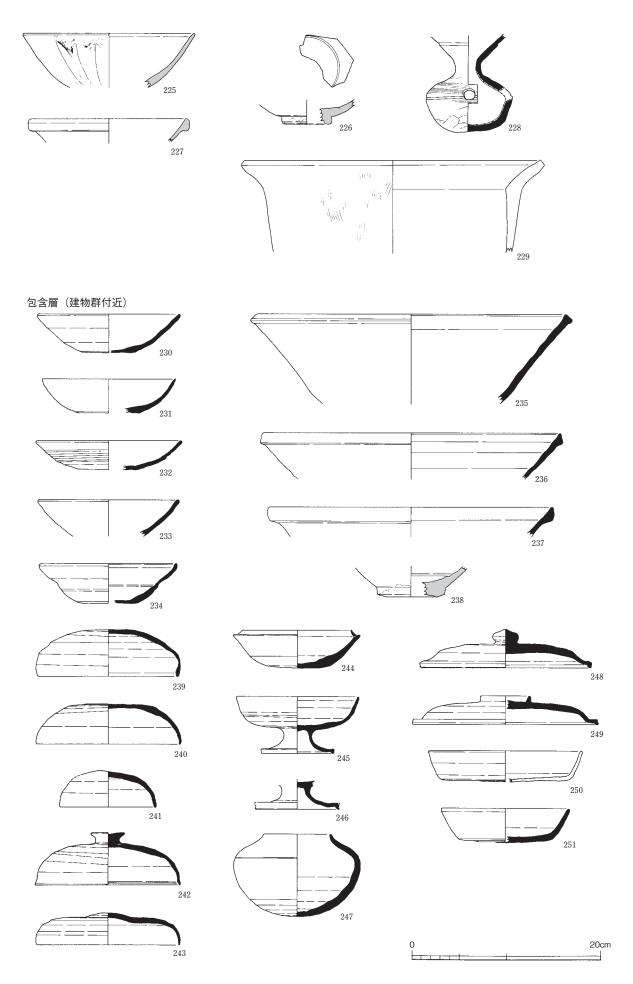




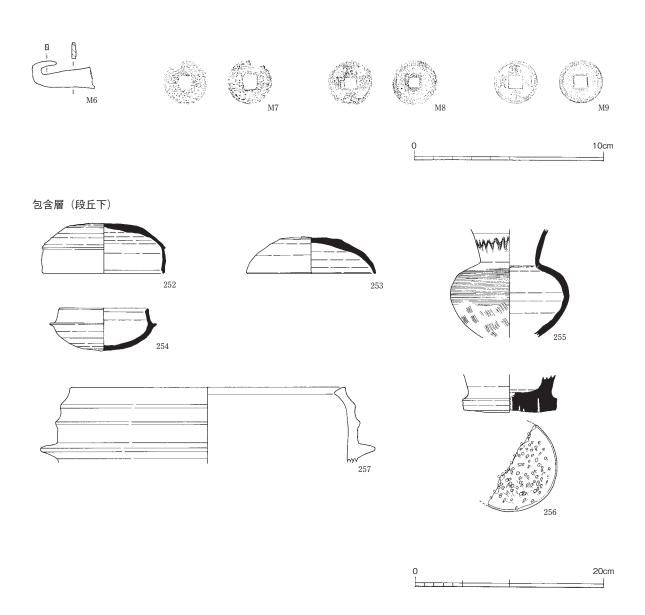
井戸2

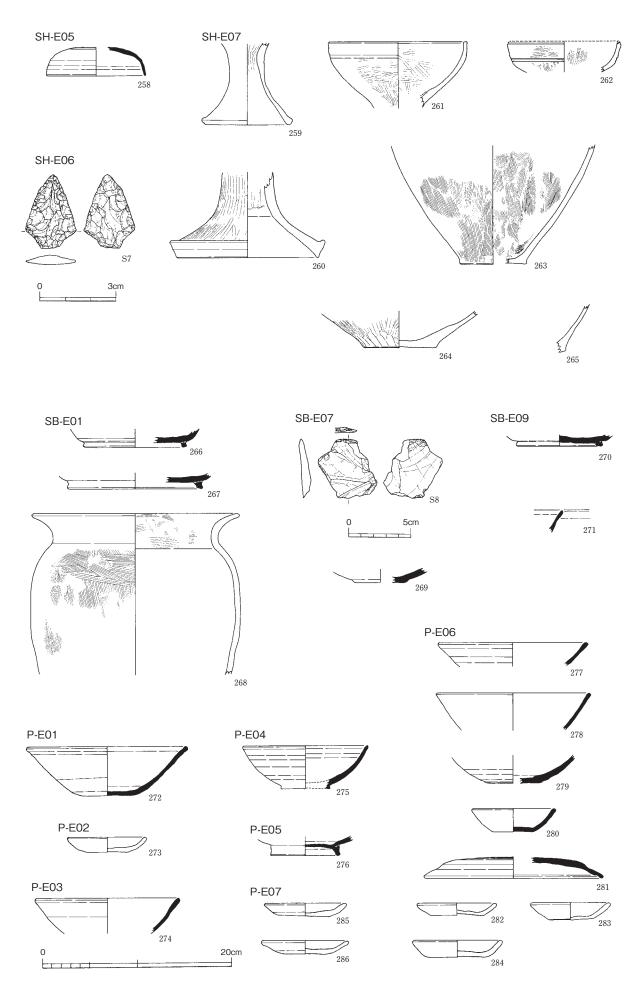


包含層 1

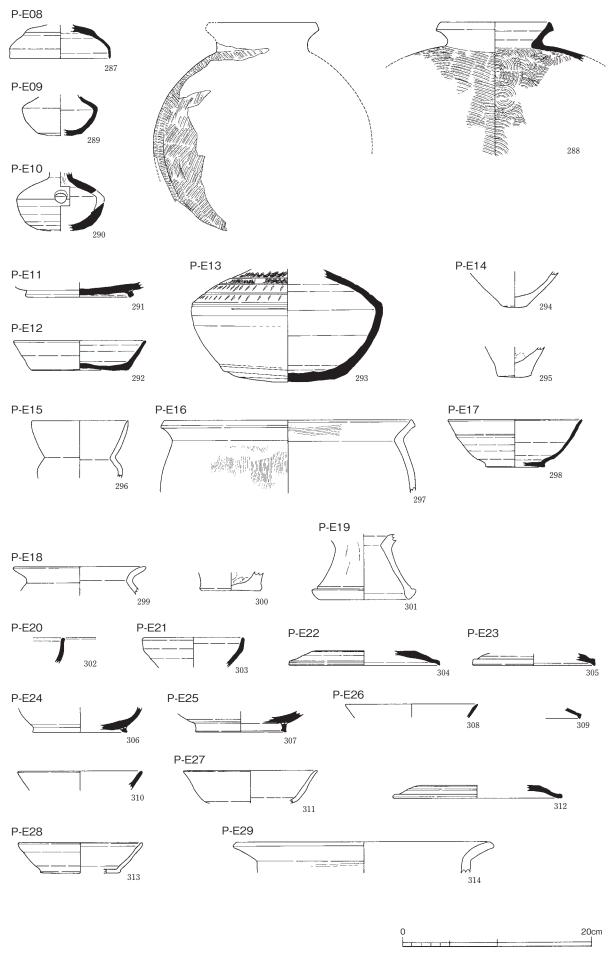


包含層2

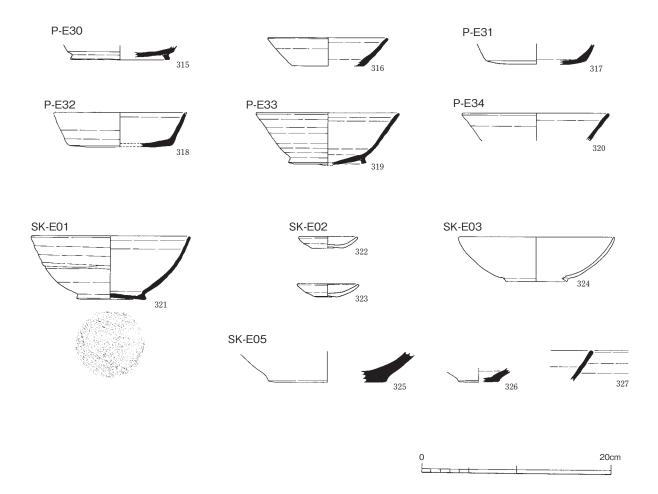


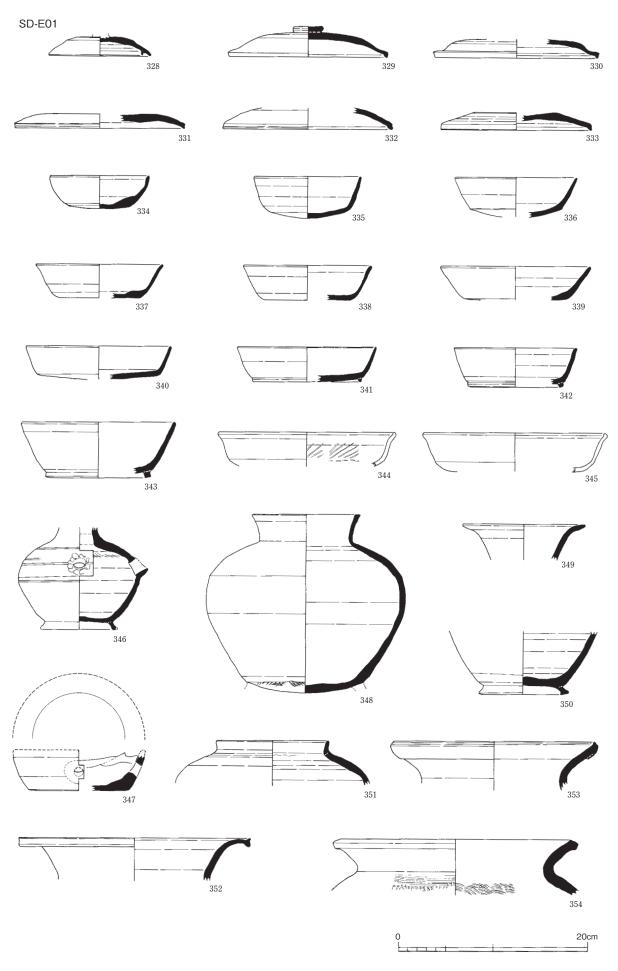


竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴1

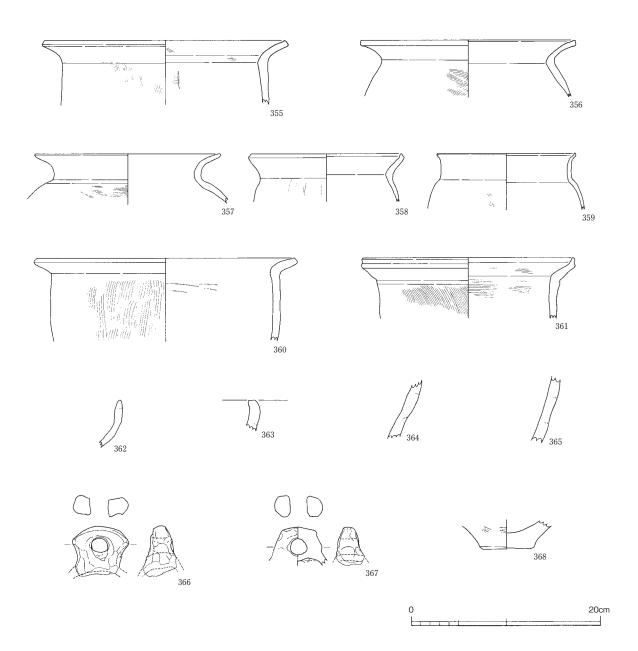


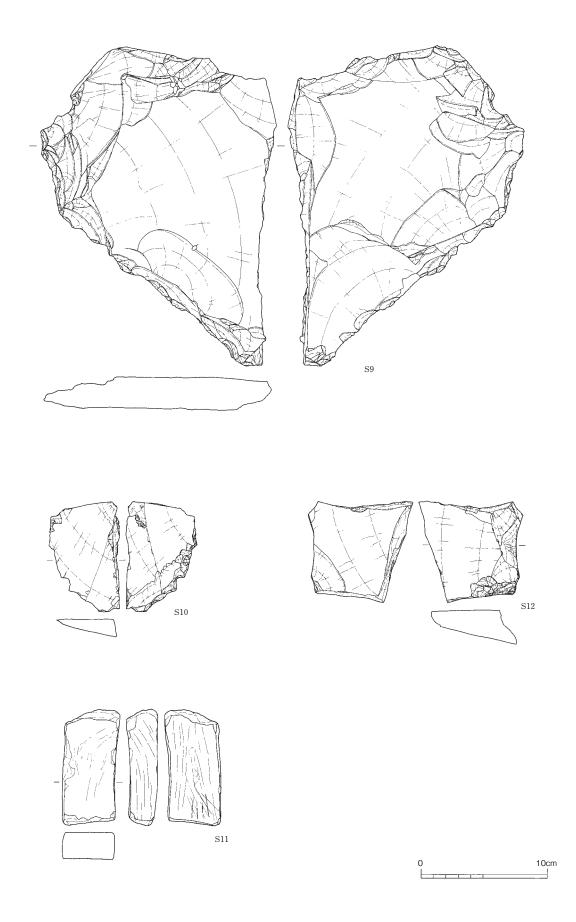
柱穴2

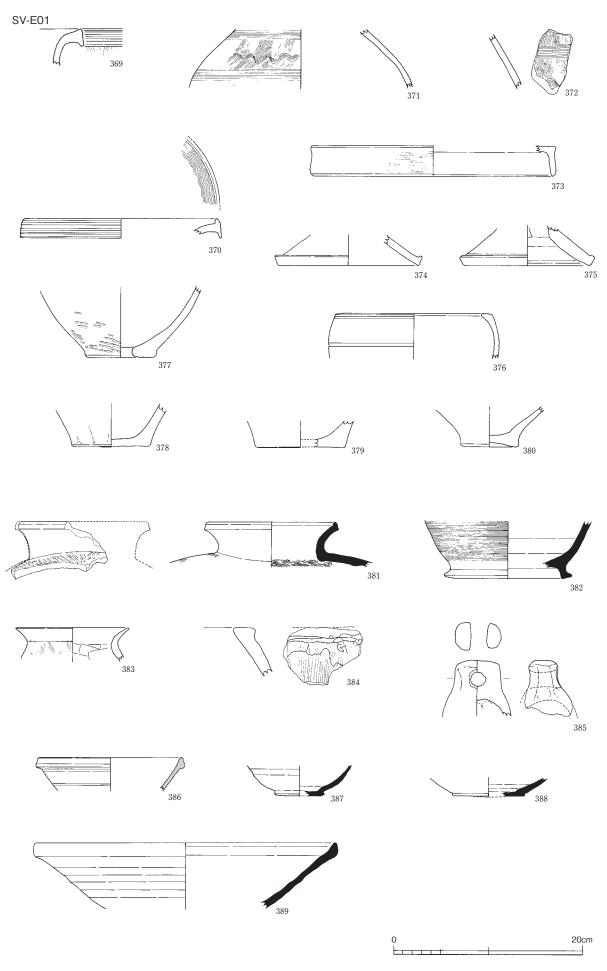




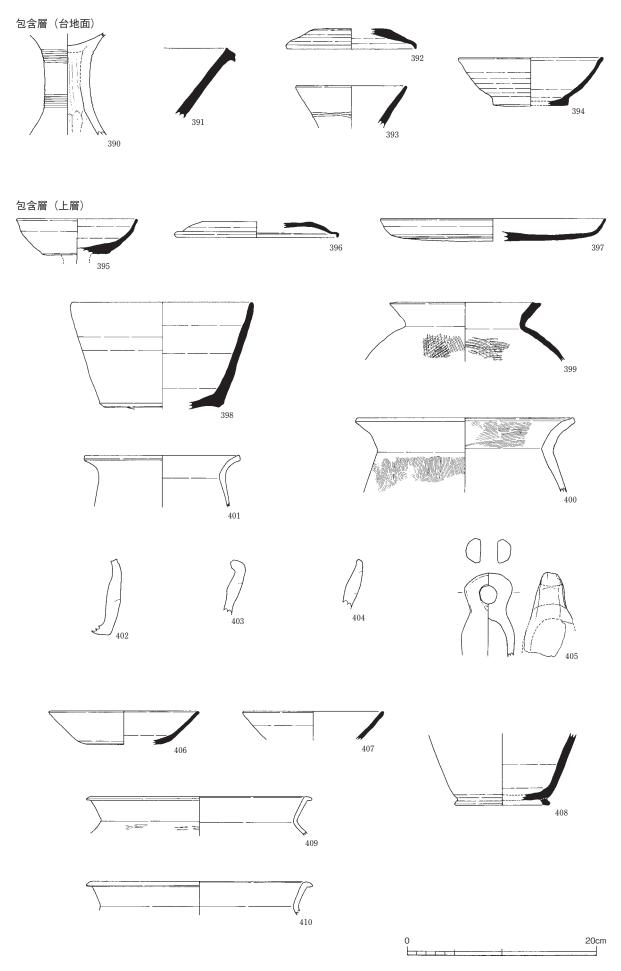
SD-E01 (1)



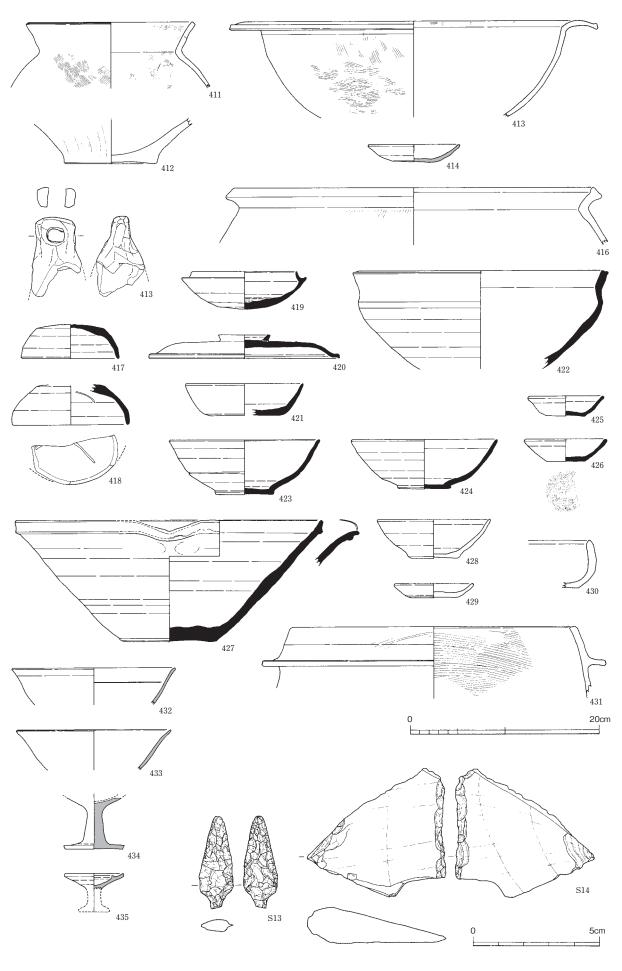




SV-E01



包含層 1



包含層2

写真図版



遺跡付近航空写真(1973年 国土地理院撮影)



明石川合流点付近から見た櫨谷川流域(南西から)



遺跡の遠景(西から)



遺跡の遠景 (南西から)



遺跡の遠景(南から)





全景 (垂直写真)



全景 (垂直写真)

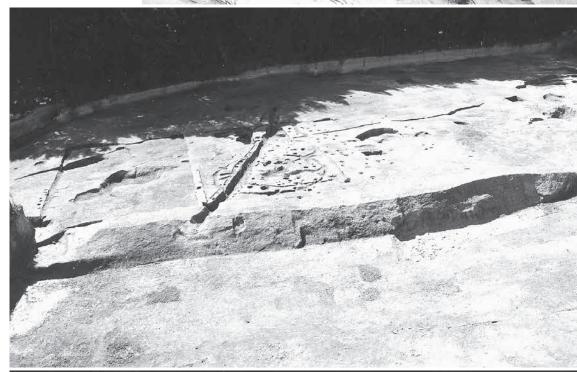


調査区付近の地形(北から) 調査区上方の畑が当初の西神N.T.No.62遺跡

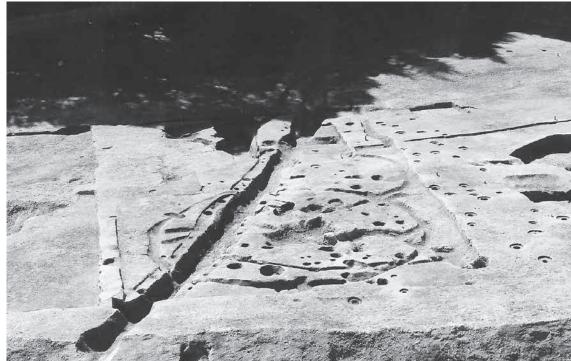
西区 遺構 写真図版7



全景 (北西から)

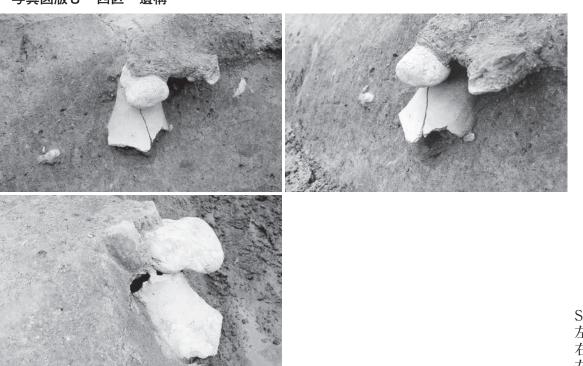


全景 (北から)

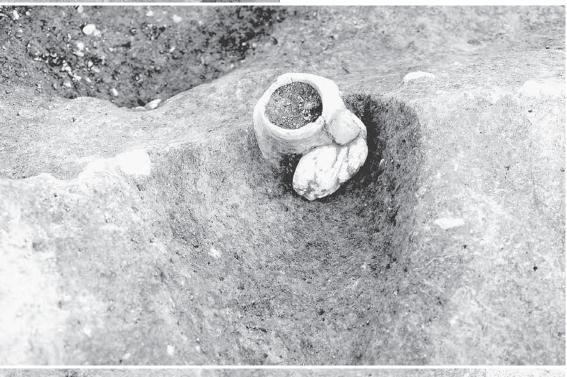


神戸市教委調査区重複箇所 (北東から)

写真図版8 西区 遺構



SX-W01検出状況 左)(南東から) 右)(北東から) 左下)(西から)

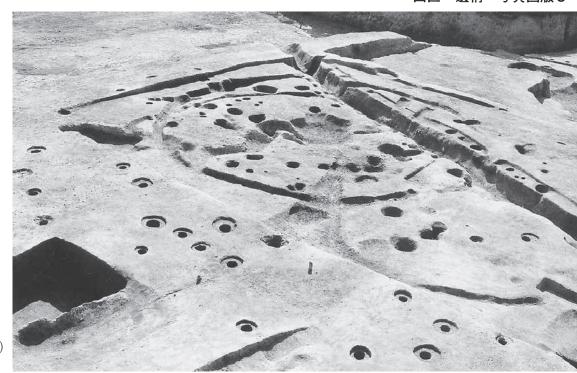


SX-W01 (北西から)



SX-W01 (南東から)

西区 遺構 写真図版9



竪穴住居跡 (神戸市教委調査) (北西から)



SK-W02 (東から)



左)SK-W02 土層断面 (東から) 右)SK-W02 土器出土状況 (東から)



SK-W03 土層断面 (東から)

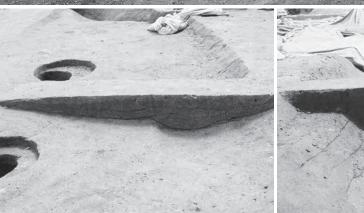
写真図版10 西区 遺構



SD-W01 土層断面 (東から)



SD-W03 (西から)





左)SD-W03 土層断面① (西から) 右)SD-W03 土層断面② (西から)





SD-W04 (東から)

西区 遺構 写真図版11





左) SD-W04 土層断面① (南から) 右)SD-W04 土層断面② (北から)



SD-W02 下層溝 (北西から)



下層焼土面 (南から)



平成13年度第1次調査区(2-2区)全景(垂直写真)

中区 遺構 写真図版13



平成13年度第1次調査区 (2-2区)全景

(東から)



平成13年度第1次調査区 (2-2区)全景 (北西から)



平成13年度第 1 次調査区 (2-2区) 全景

(南から)

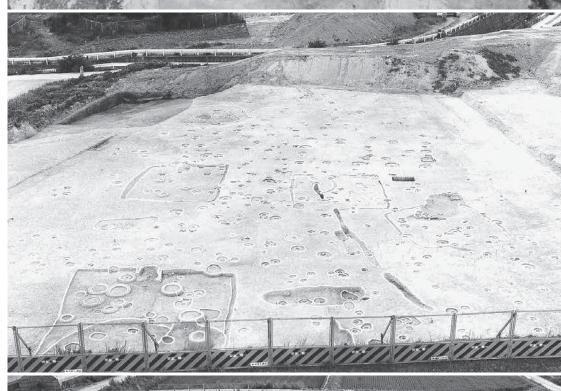


平成13年度第1次調査区(2-1区)全景(垂直写真)

中区 遺構 写真図版15



平成13年度第1次調査区 (2-1区)全景 (北西から)



平成13年度第 1 次調査区 (2-1区) 全景



平成13年度第1次調査区 (2-1区) 全景 (北から)

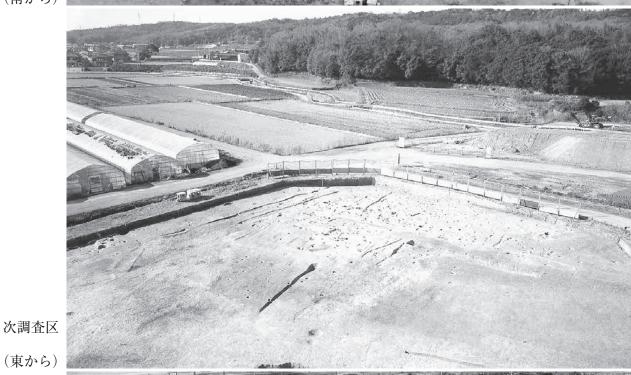


平成13年度第2次調査区全景(垂直写真)

中区 遺構 写真図版17



平成13年度第2次調査区 (1-1区) 全景 (南から)



平成13年度第2次調査区 (1-1区)全景



平成13年度第2次調査区 (1-1区)全景 (南東から)

写真図版18 中区 遺構



平成13年度第2次調査区 (1-2区)全景 (南から)



平成13年度第2次調査区 (1-2区)全景 (北から)



平成12年度調査区 (Ⅰ・Ⅱ区)全景 (垂直写真)

中区 遺構 写真図版19



平成12年度第2次調査区 (I区)全景

(北西から)

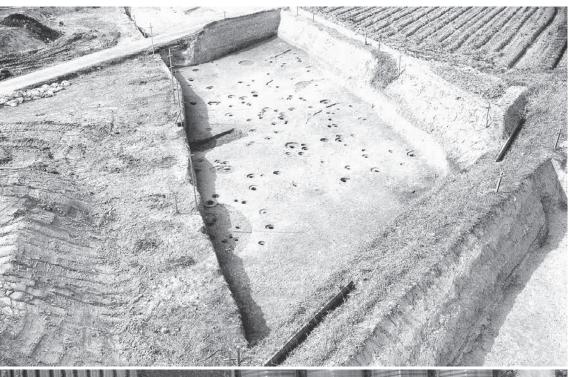


平成12年度調査区 (I-a区)全景 (垂直写真)



平成12年度調査区 (I-a区)全景 (南東から)

写真図版20 中区 遺構



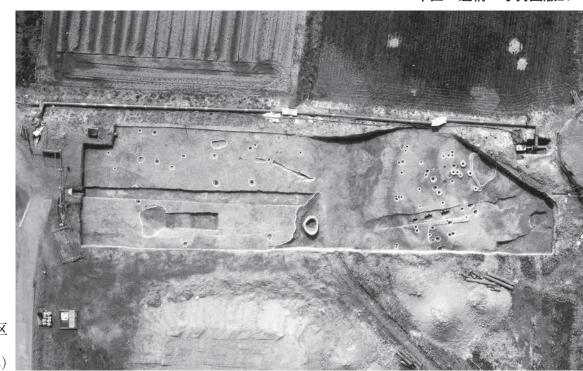
平成12年度調査区 (I-b区)全景 (垂直写真)



平成12年度調査区 (Ⅱ区) 全景 (垂直写真)



平成12年度調査区 (Ⅲ区)全景 (西から)



平成10年度調査区 (A区) 全景 (垂直写真)



平成10年度調査区 (A区) 全景 (東から)



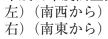
平成10年度調査区 (A区)全景 (西から)

写真図版22 中区 遺構





平成10年度調査区北壁土層断面 左) (南西から)





平成10年度調査区北壁 土層断面(段丘上) (南から)

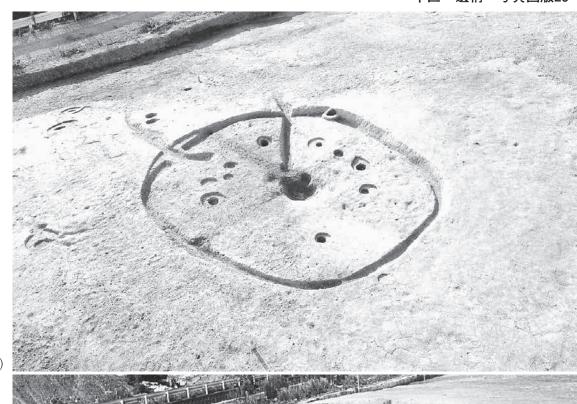


SV-C01 (南から)

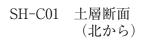


SV-C01 土器出土状況 (確認調査時) (北から)

中区 遺構 写真図版23



SH-C01 (東から)



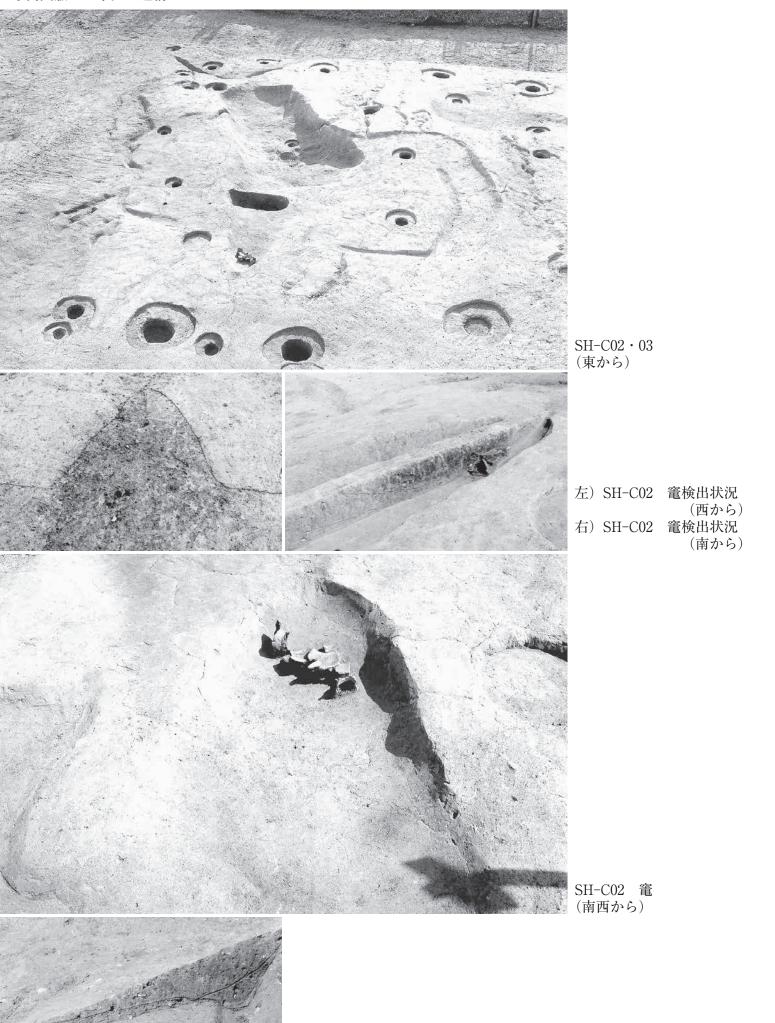


SH-C01 土層断面 (西から)

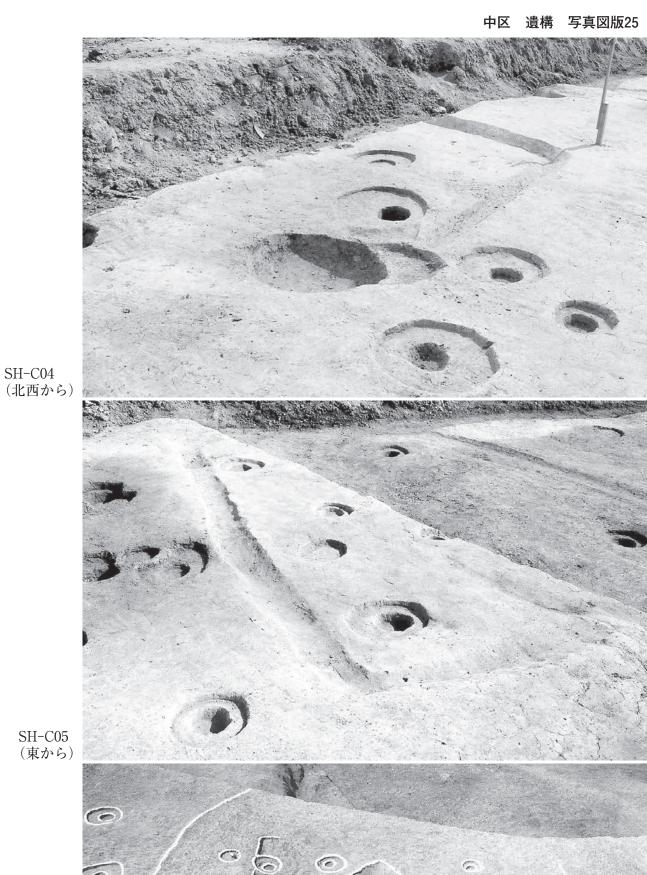


SH-C01 周壁溝内土器出土状況

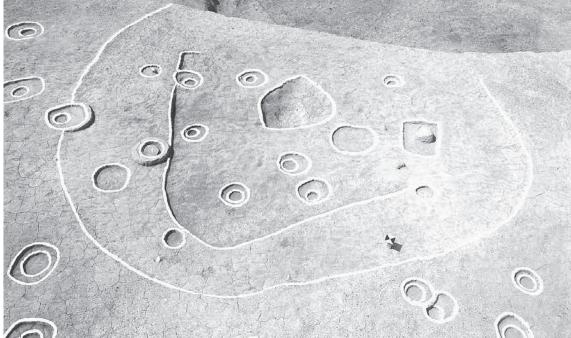
写真図版24 中区 遺構



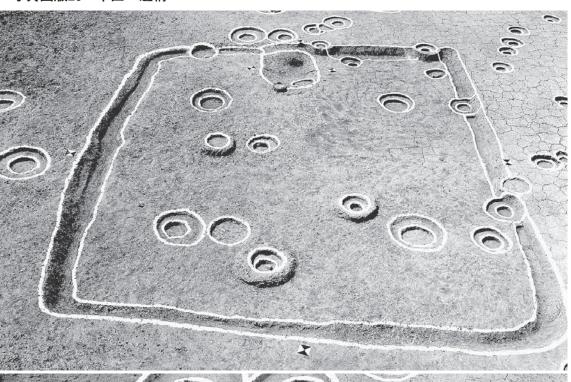
SH-C03 土層断面 (東から)



SH-C05 (東から)



SH-C07 (北東から)



SH-C08 (東から)



SH-C08 竃 (南東から)



SH-C09 (西から)



SH-C10 (東南から)



SH-C10 竃 (東南から)



SH-C11 (西から)

写真図版28 中区 遺構



SH-C12 (南東から)





左)SH-C12 土層断面 (南東から) 右)SH-C12 土器出土状況 (南から)





SH-C12 土器出土状況 左) 北半 (北から) 右) 南半 (北から)



SH-C13 (東から)

中区 遺構 写真図版29



SH-C14 (東から)

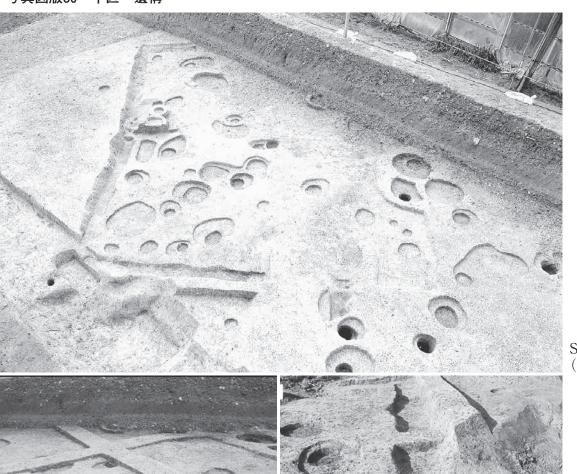


SH-C14 土層断面 (南東から)



SH-C15 (東から)

写真図版30 中区 遺構



SH-C16 (北西から)



左)SH-C16 土層断面 (北から) 右)SH-C16 周壁溝土層断面 (西から)



SH-C16 電土層断面 (南東から)



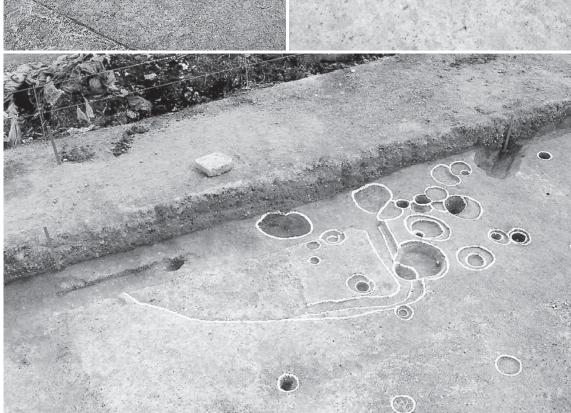
SH-C16 電土層断面 (南から)



SH-C17 (東から)

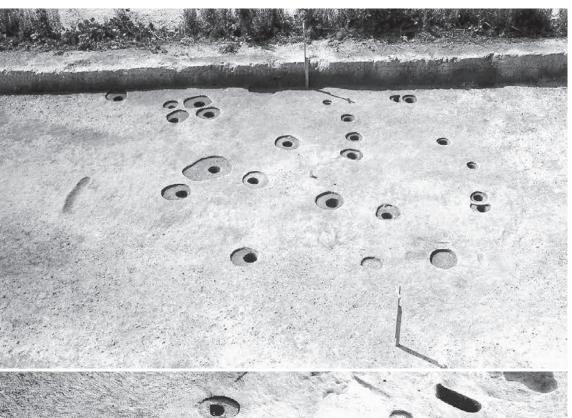
左)SH-C17 土層断面 (南東から) 右)SH-C17 土層断面 (南西から)

左)SH-C17 土器出土状況 (南から) 右)P-C53 土器出土状況 (南西から)



SH-C18 (北から)

写真図版32 中区 遺構



SB-C01 (東から)



SB-C02・03 (北東から)

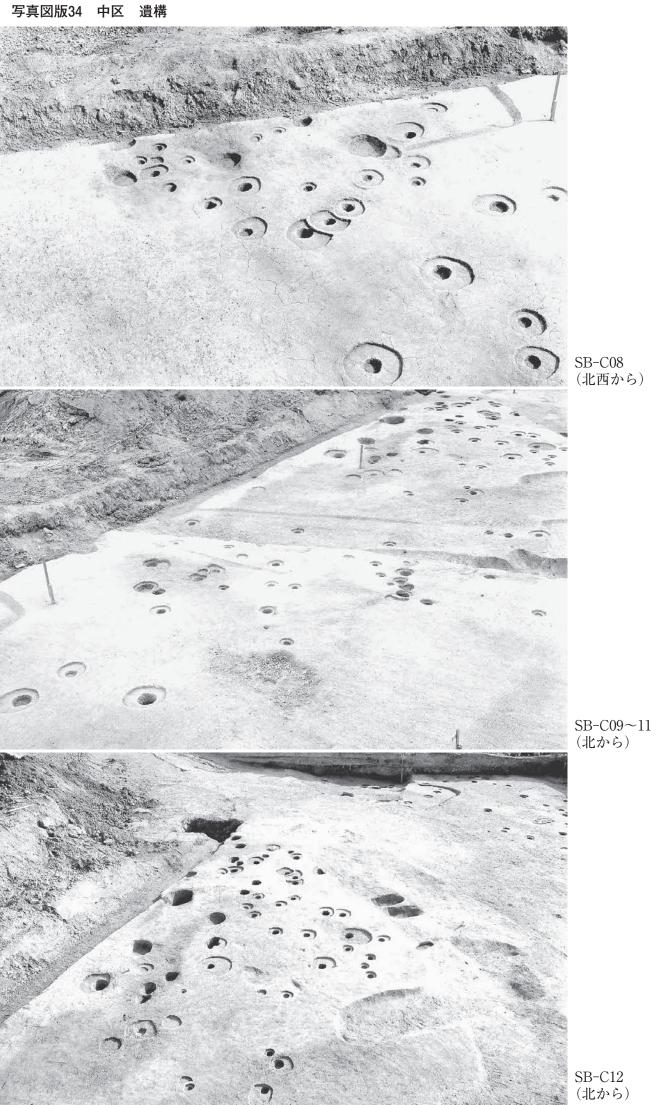


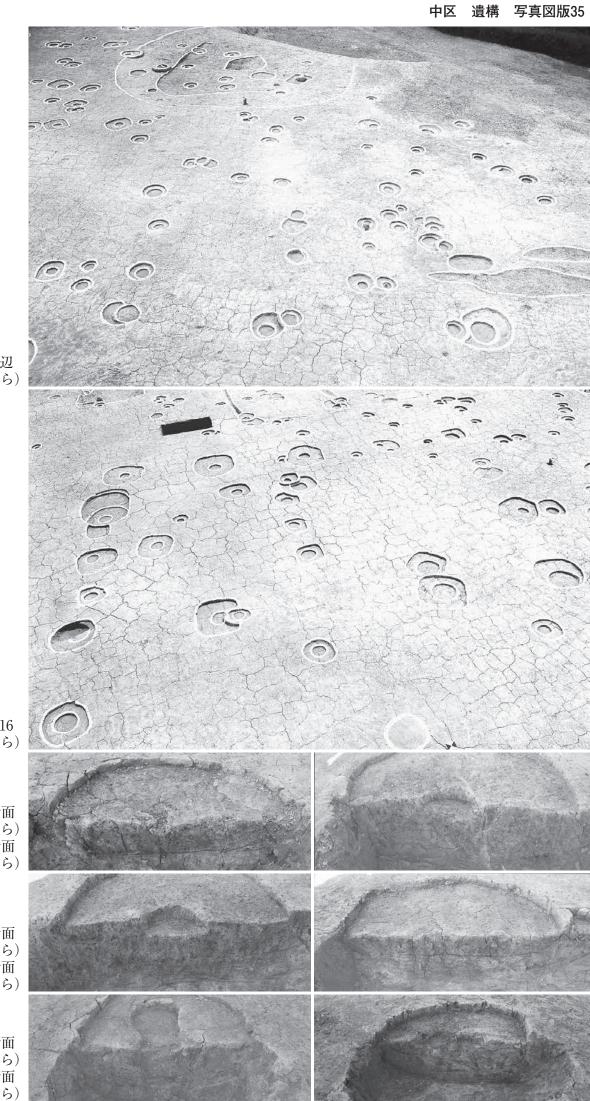
SB-C04 (南東から)



SB-C05・06周辺 (北東から)

SB-C06 (北西から)



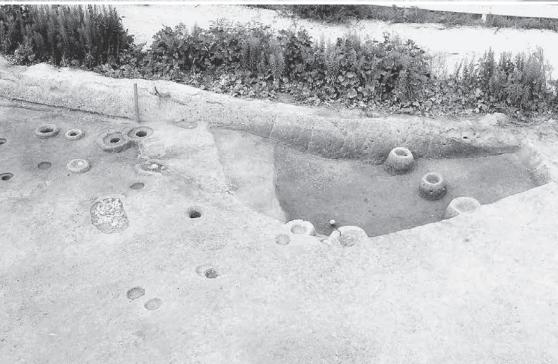


SB-C13・14周辺 (北から)

- SB-C16 (西から)
- 左)SB-C16 P1断割断面 (東から)
- 右)SB-C16 P4断割断面 (東から)
- 左)SB-C16 P5断割断面 (東から)
- 右)SB-C16 P6断割断面 (東から)
- 左)SB-C16 P7断割断面 (東から)
- 右)SB-C16 P8断割断面 (東から)



SB-C17~19周辺 (北から)



SB-C20・21 (東から)

SB-C20 (南東から)

中区 遺構 写真図版37



左)SB-C23~28周辺 (平成13年度第2次調査区) (北東から) 右)SB-C23~28周辺 (平成13年度第2次調査区) (南から)



SB-C23~28周辺 (平成13年度第2次調査区) (南から)

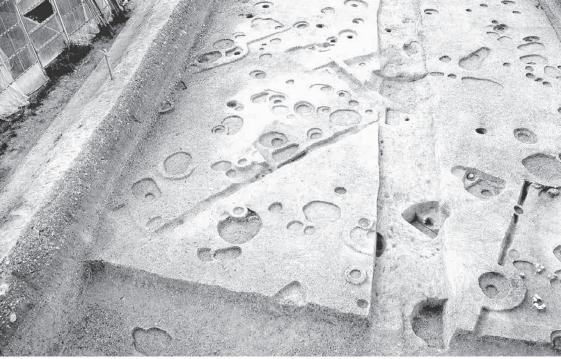


SB-C23~28周辺 (平成13年度第2次調査区) (北から)

写真図版38 中区 遺構



SB-C29~32周辺 (東から)



SB-C30・31 (東から)



SB-C32 (東から)

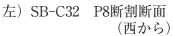


SB-C31 P6 土器出土状況 (北から)



左) SB-C31 P1断割断面 (北西から)

右) SB-C31 P3断割断面 (西から)



右) SB-C32 P11断割断面 (北東から)



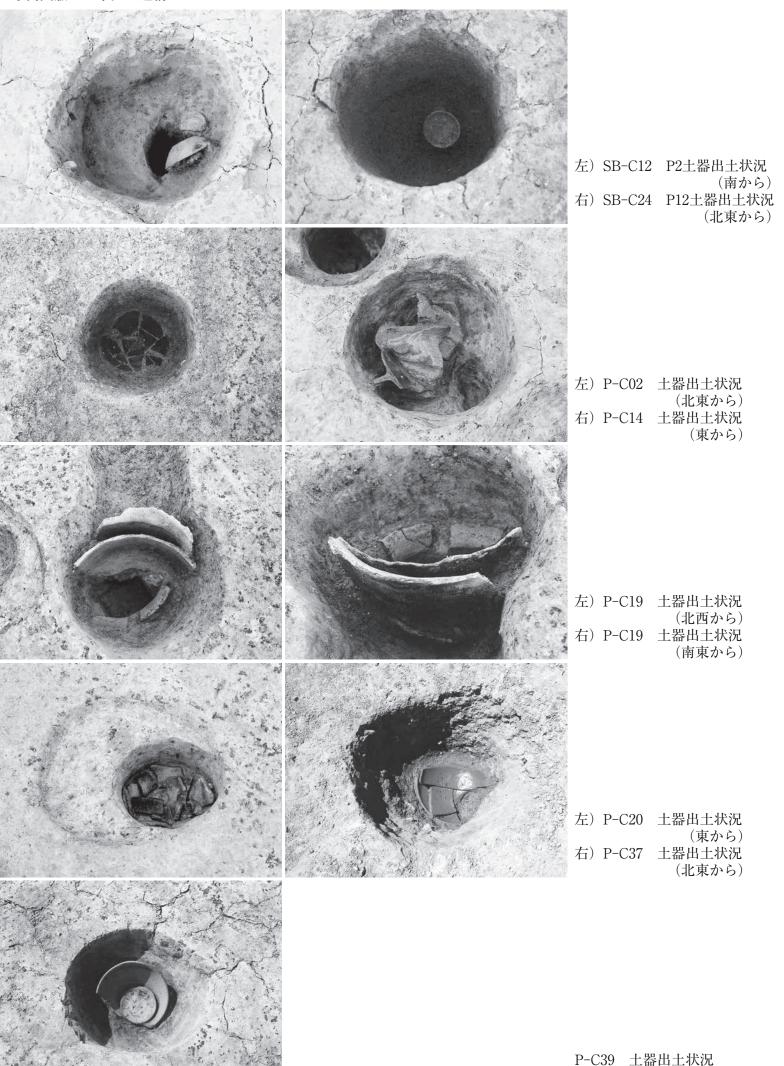
左) SB-C32 P12断割断面 (西から)

右) SB-C32 P13断割断面 (南から)



SB-C32 P15断割断面 (西から)

写真図版40 中区 遺構



(北西から)

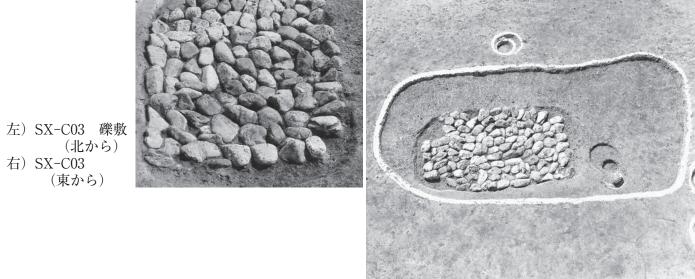


SX-C01 (北東から)

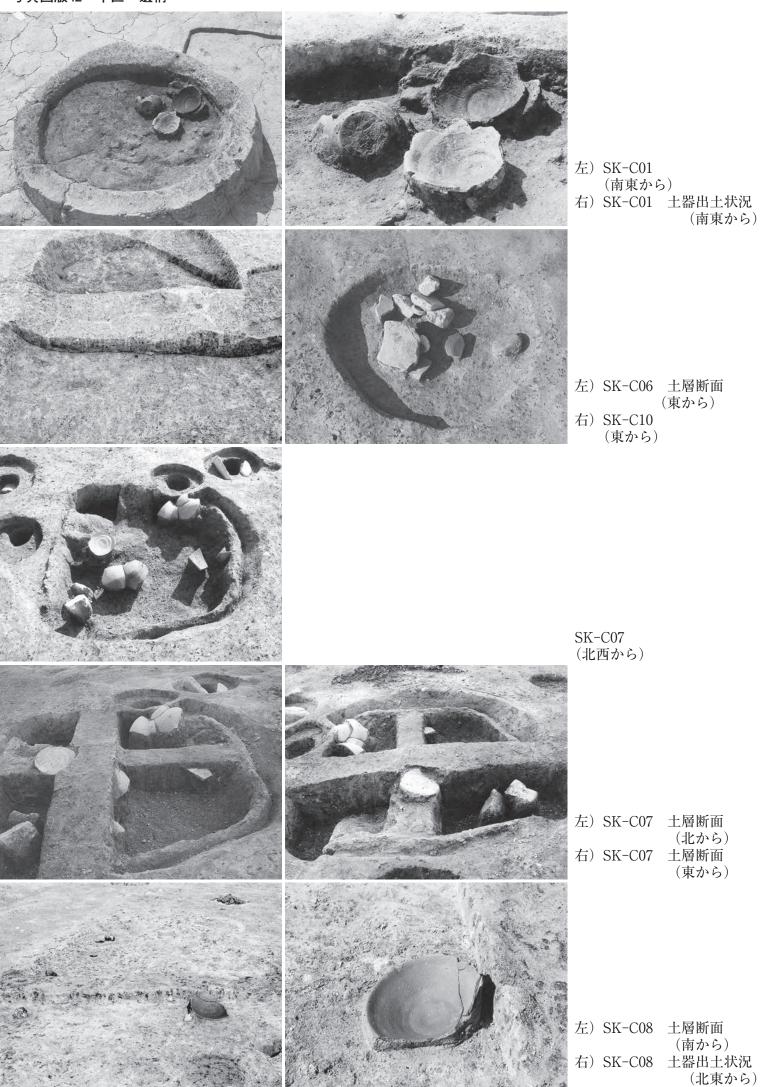


SX-C02 (北西から)





写真図版42 中区 遺構





SK-C11 土層断面 (南から)



SK-C13 (南東から)



SK-C13 土層断面 (南から)



SK-C14 (東から)

写真図版44 中区 遺構



SK-C15 (北から)



左)SK-C15 土器出土状況 (東から) 右)SK-C15 土層断面 (東から)



SK-C15 完掘状況 (北から)



SK-C17 (西から)

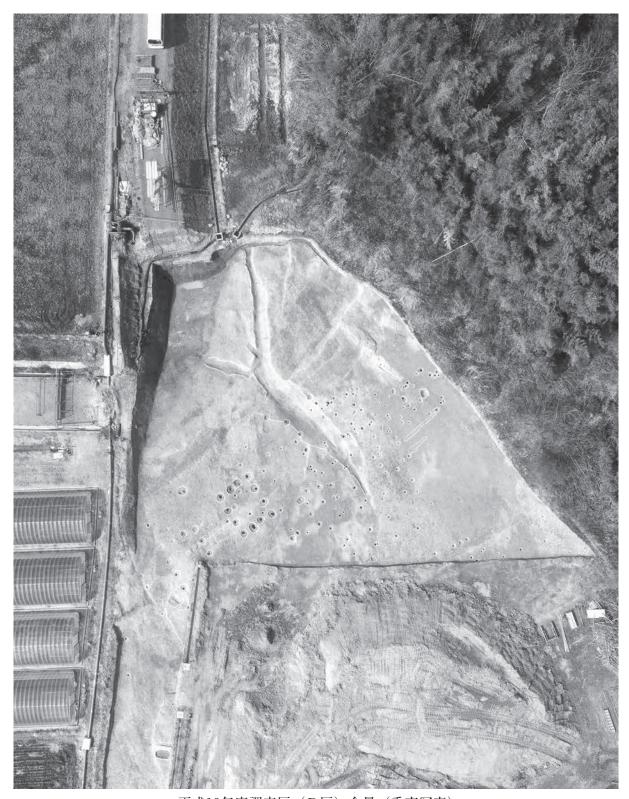


SE-C01 (南から)



左) SE-C01 土層断面 (東から) 右) SE-C01 断割断面 (東から)

左)SE-C01 土器出土状況 (中層) (北東から) 右)SE-C01 土器出土状況 (底) (東から)



平成10年度調査区 (B区) 全景 (垂直写真)



平成10年度調査区 (B区) 全景 (南から)



平成10年度調査区 (B区) 全景 (東から)



平成13年度調査区(2区)全景(垂直写真)

東区 遺構 写真図版49



平成13年度調査区 (2区) 全景と周辺の地形 (北東から)



平成13年度調査区 (2区) 全景 (南東から)



平成13年度調査区 (2区) 全景 (東から)



平成12年度調査区(Ⅲ区)全景(垂直写真)



平成12年度調査区 (Ⅲ区) と周辺の地形

東区 遺構 写真図版51



平成12年度調査区 (Ⅲ区) 全景 (西から)



平成12年度調査区 (Ⅲ区) 全景 (南東から)



平成12年度調査区 (Ⅲ区) 南半部上層検出遺構 (北西から)



SH-E01 (北東から)



SH-E02~05 (北東から)



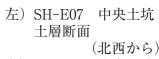
SH-E06 (南東から)



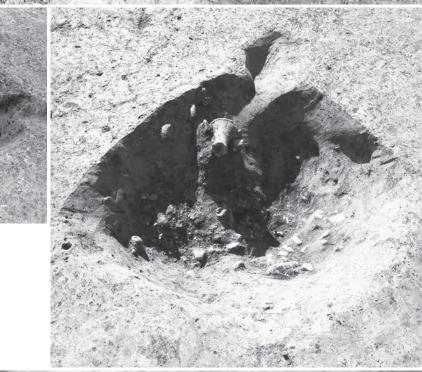
SH-E06土層断面 (南から)



SH-E07 (南西から)

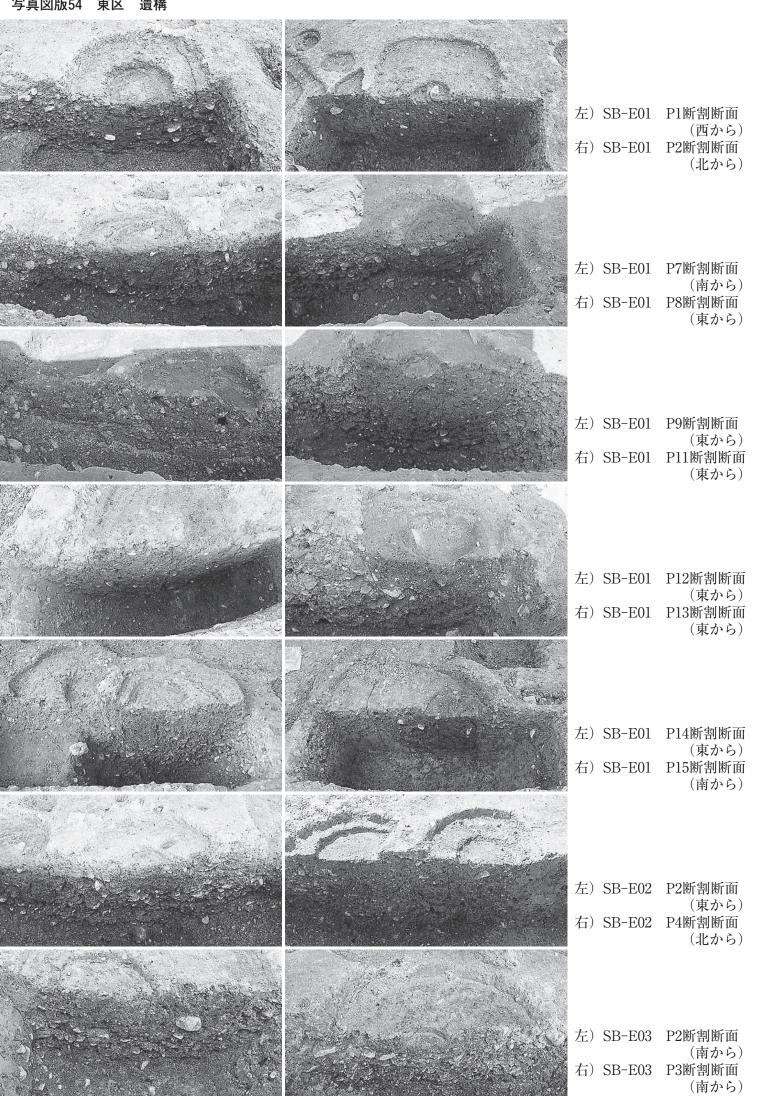


(北西から) 右) SH-E07 中央土坑 (北東から)



SB-E01・02 (北東から)

写真図版54 東区 遺構



東区 遺構 写真図版55



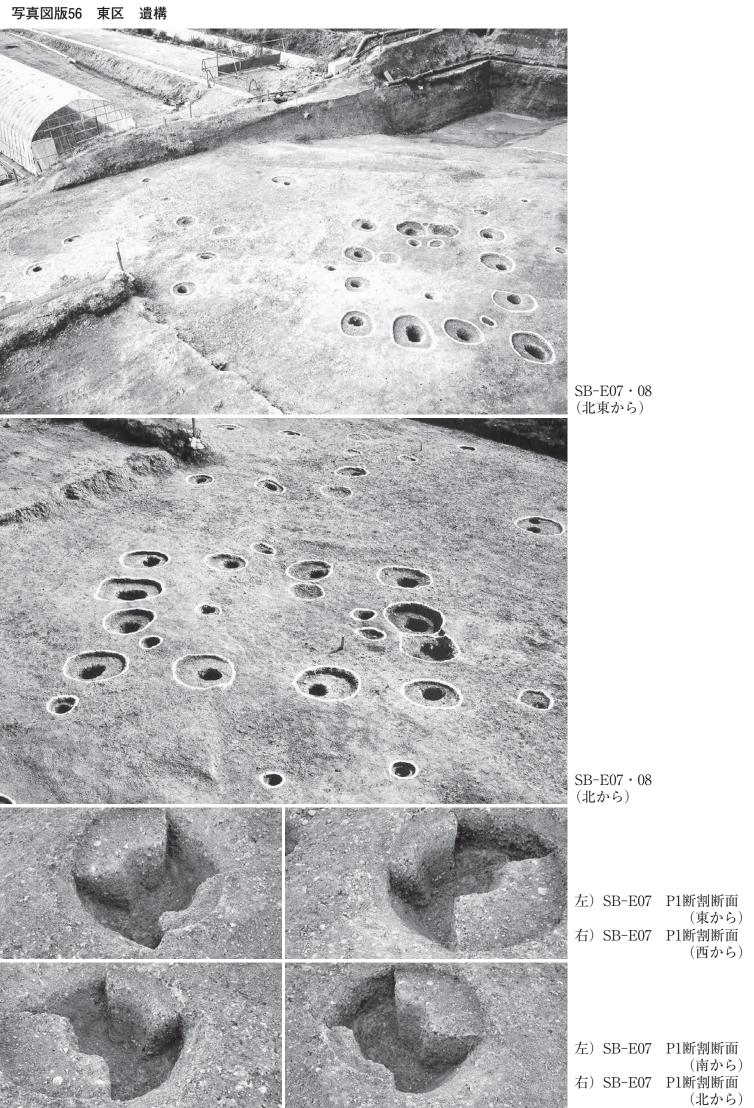
SB-E04 (東から)



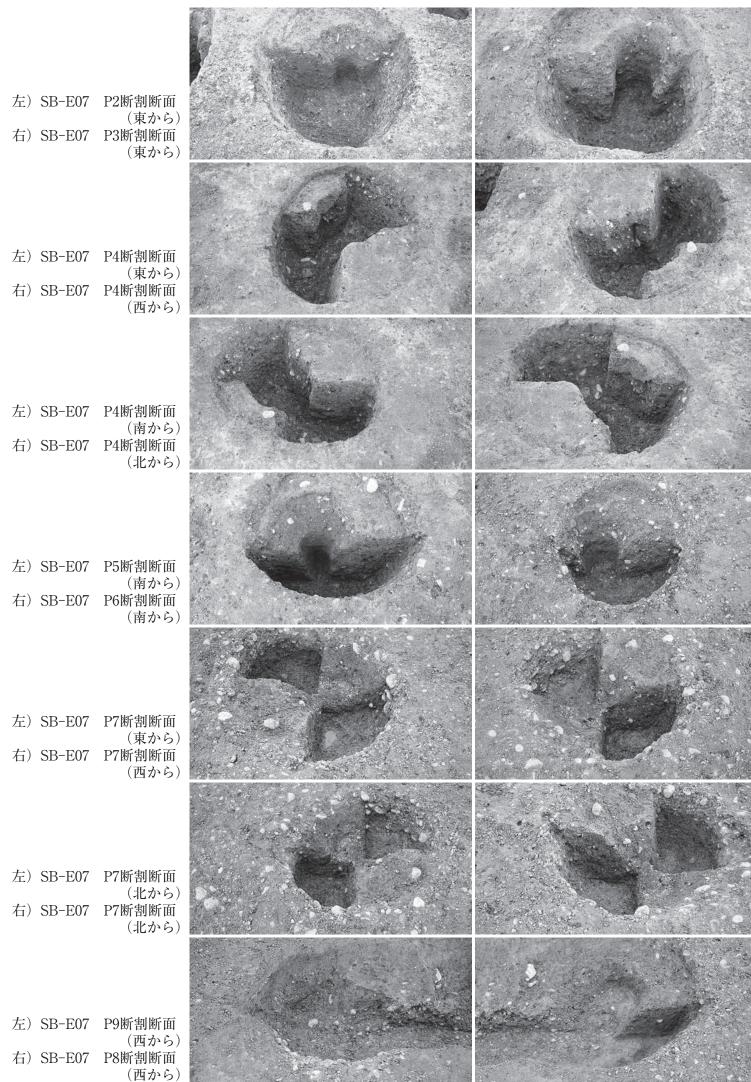
SB-E05 (北から)



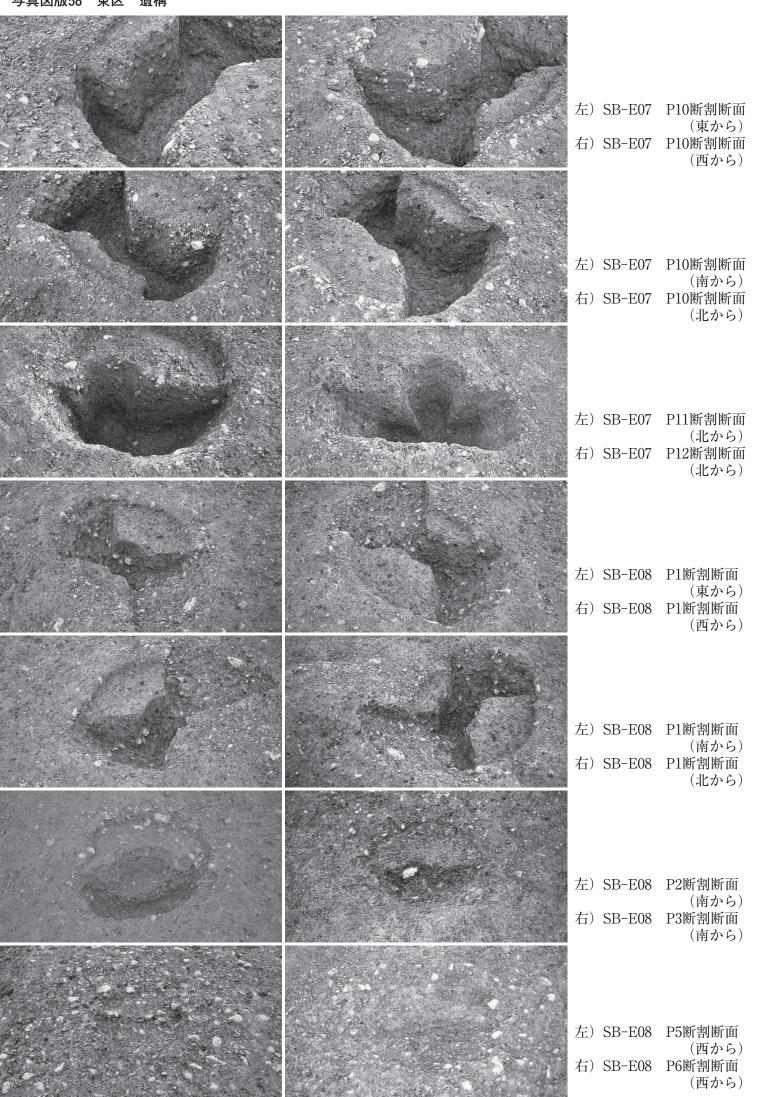
SB-E06 (南から)



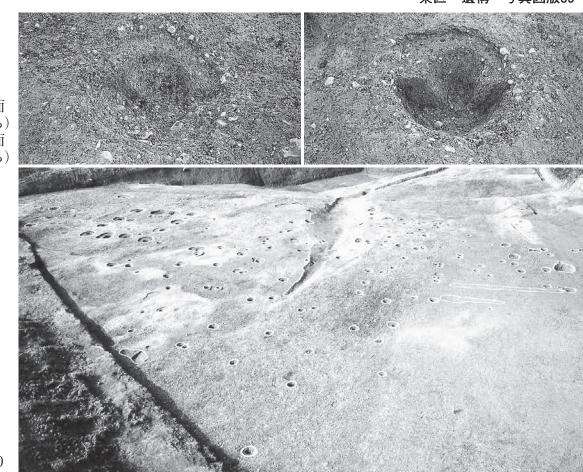
東区 遺構 写真図版57



写真図版58 東区 遺構



東区 遺構 写真図版59



左)SB-E08 P8断割断面 (北から) 右)SB-E08 P9断割断面 (北から)

SB-E09・10 (北東から)

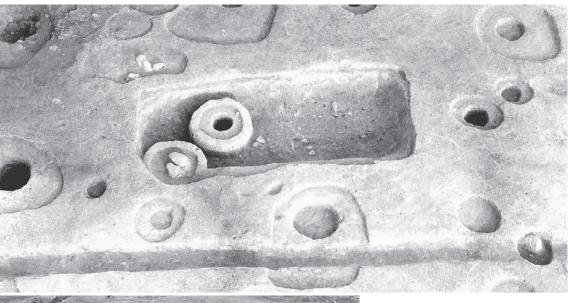
P-E01 土器出土状況 (東から)



SX-E01 (南西から)

左)SX-E01 土層断面 (南から) 右)SX-E01 土層断面 (南西から)

写真図版60 東区 遺構



SX-E02 (西から)



SX-E02 土層断面 (南から)

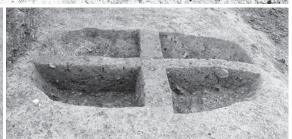


SX-E02 (東から)



SK-E05 (北西から)





左)SK-E05 土層断面

(南西から) 右) SK-E05 土層断面 (北西から)

東区 写真図版61



SD-E01 (北西から)



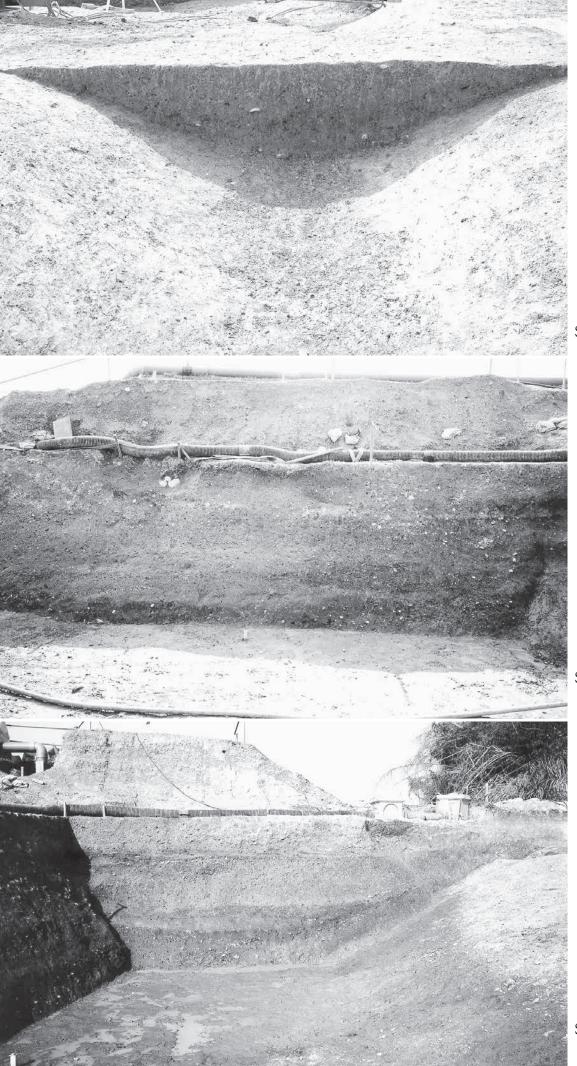
SD-E01 (南東から)





SD-E01 土層断面(A-A') (北西から)

写真図版62 東区 遺構



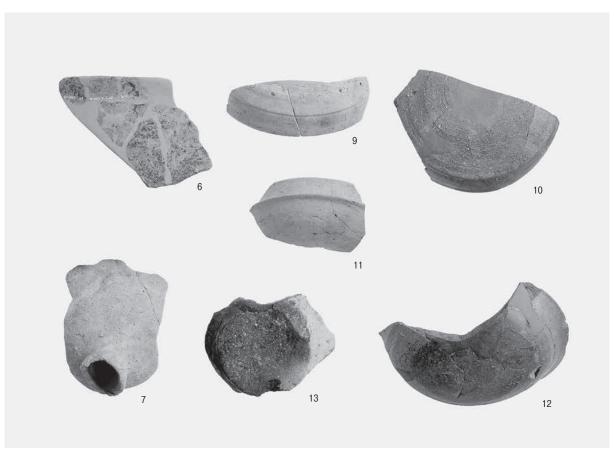
SD-E01 土層断面 (B-B') (東から)

SV-E01 埋土土層断面 (A-A') (北から)

SV-E01 埋土土層断面 (B-B')

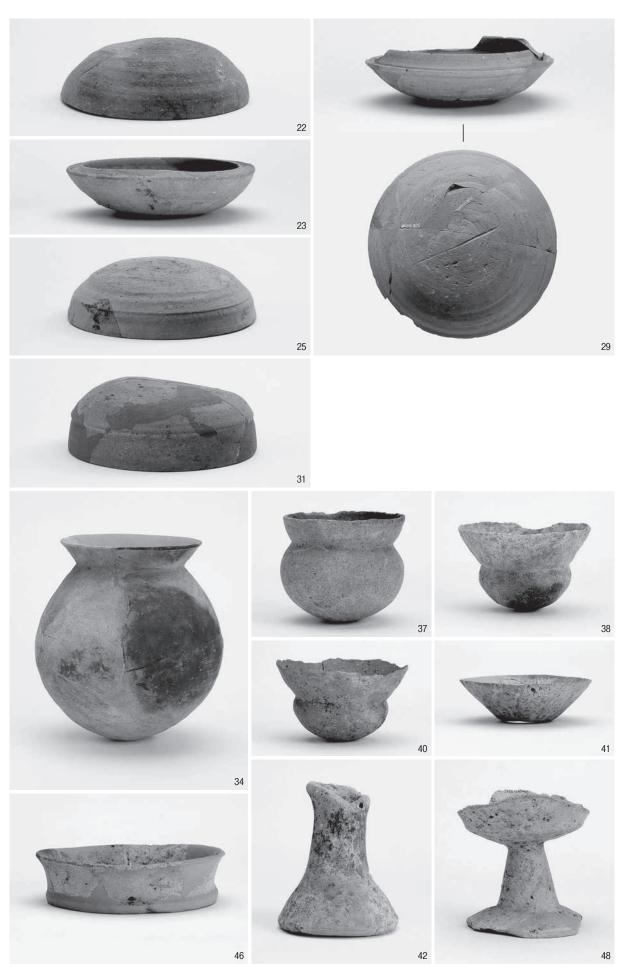
(東から)



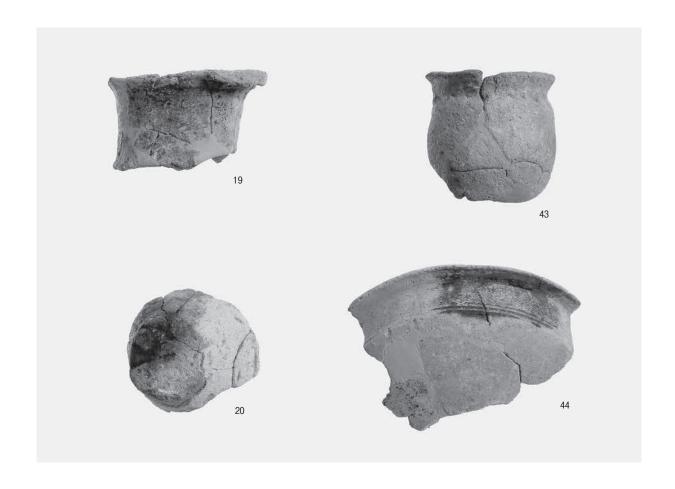


遺構・包含層 1



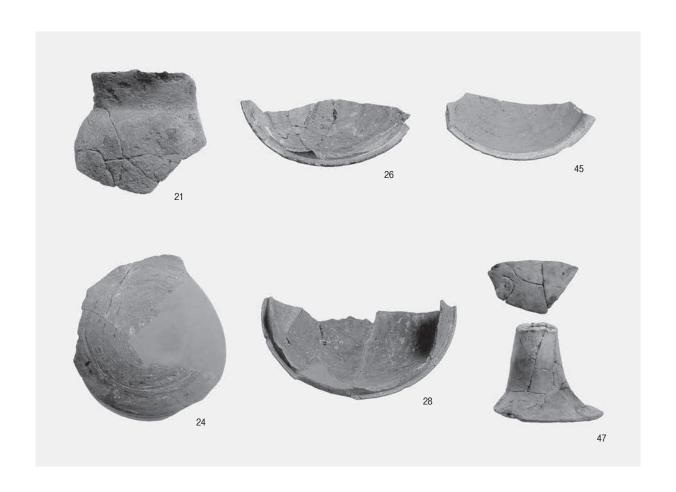


遺構 1



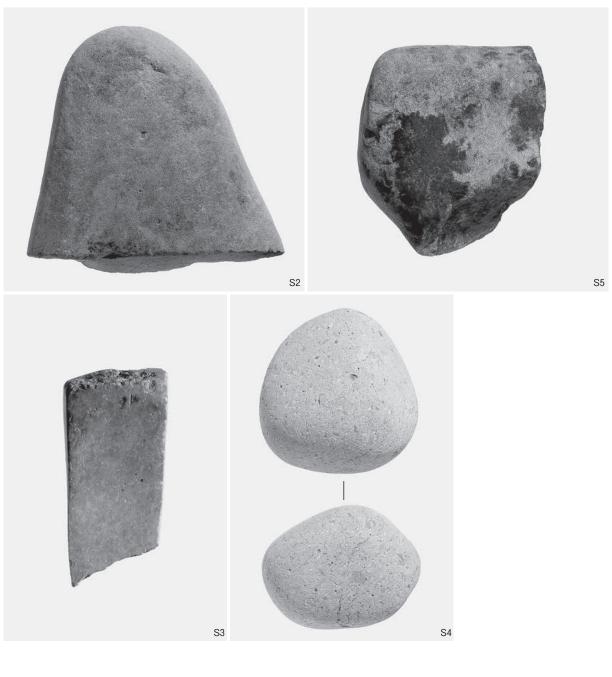


遺構 2









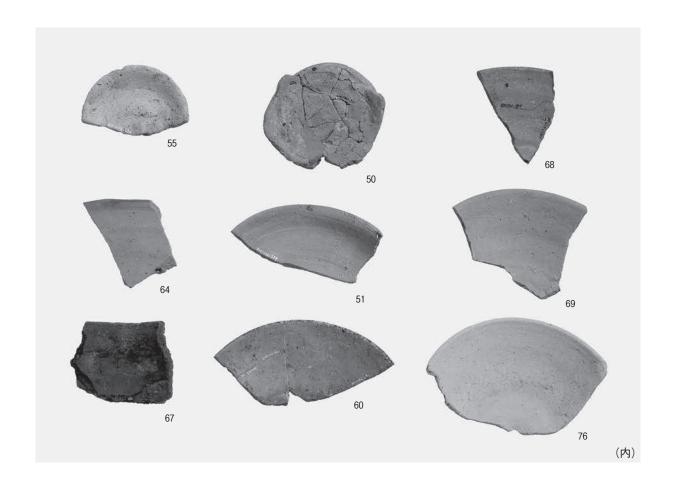


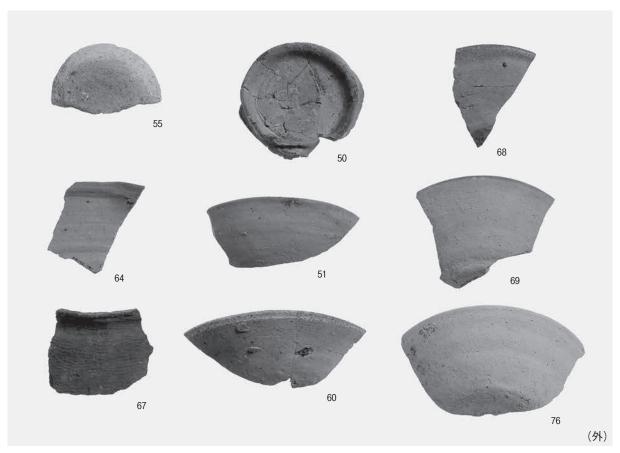
遺構 4



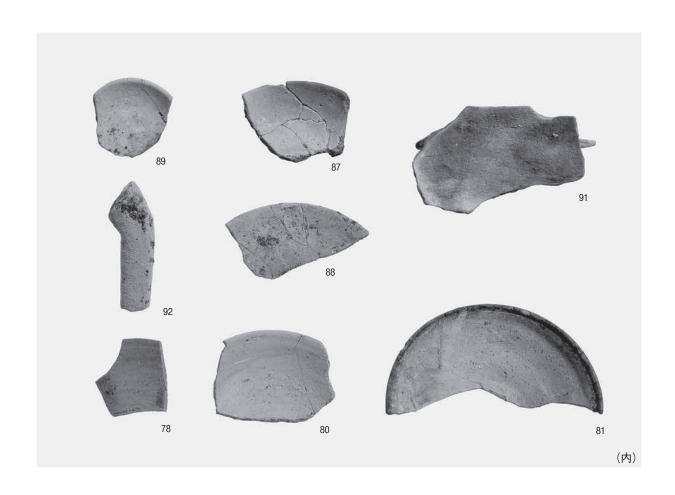


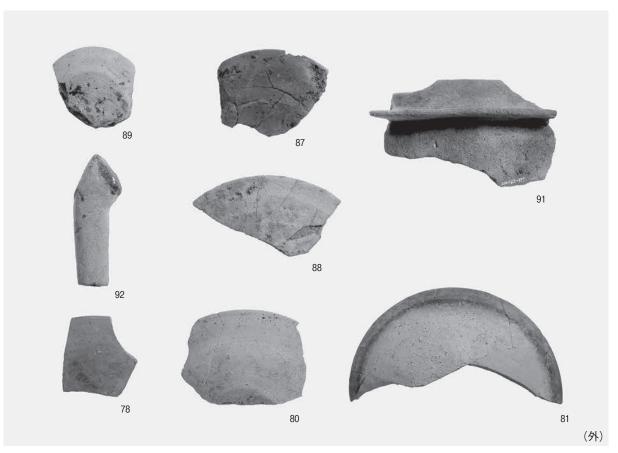
遺構 5



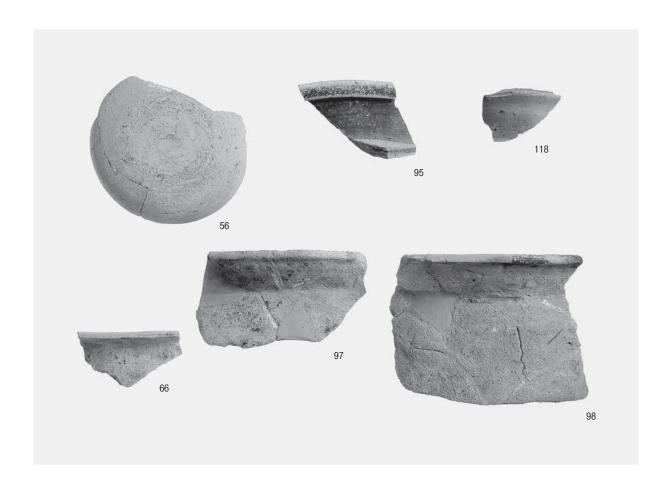


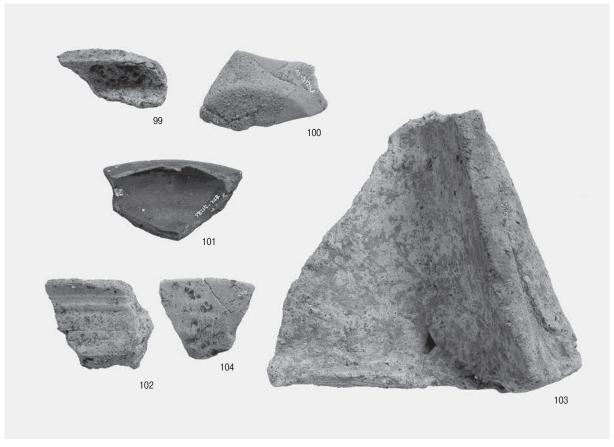
遺構 6



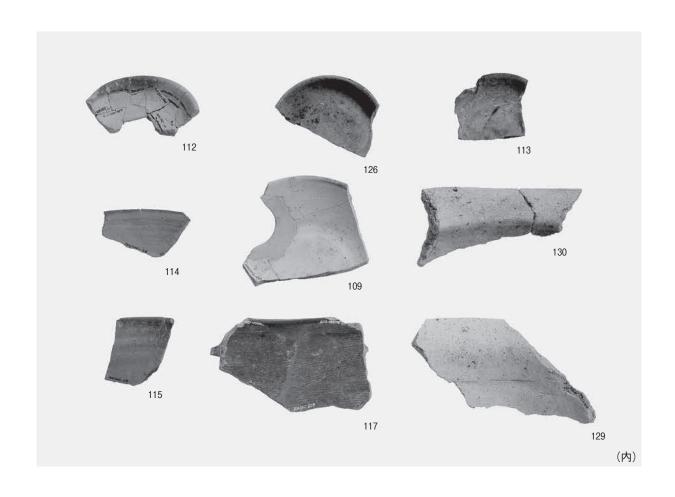


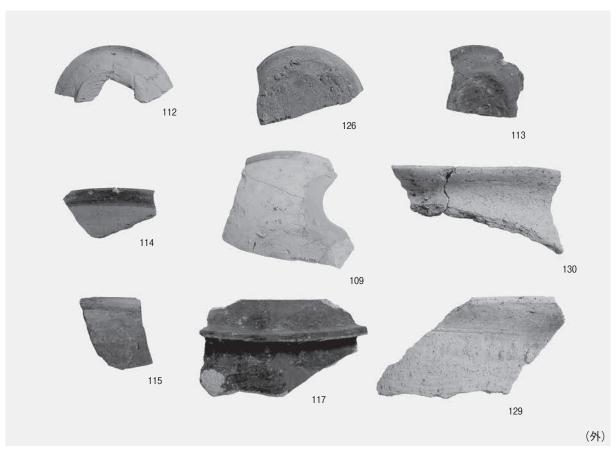
遺構 7



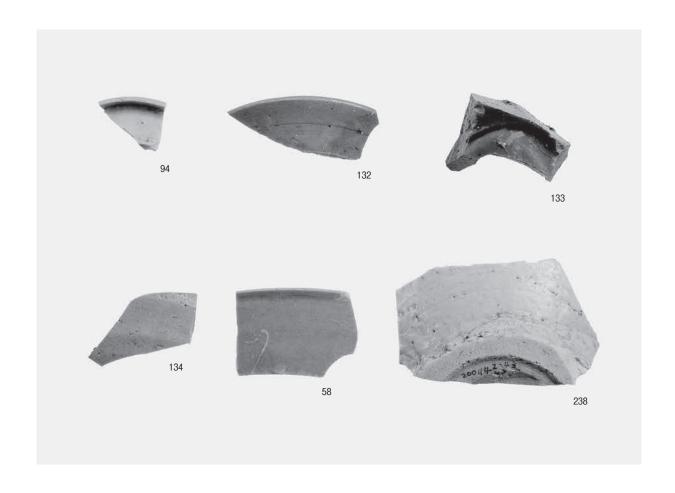


遺構 8





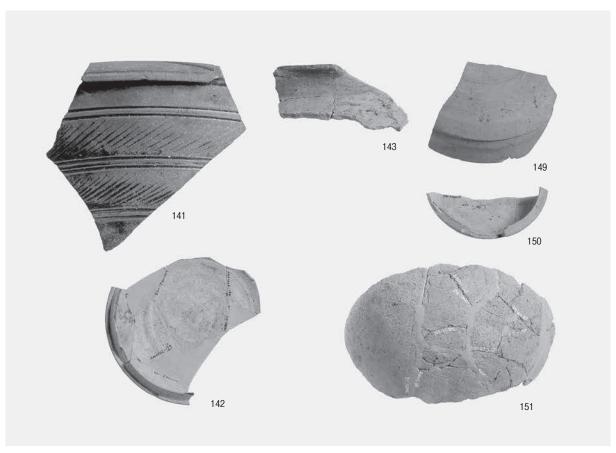
遺構 9





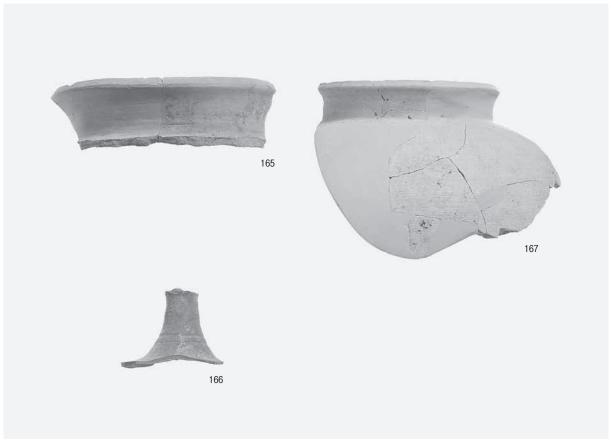
遺構10



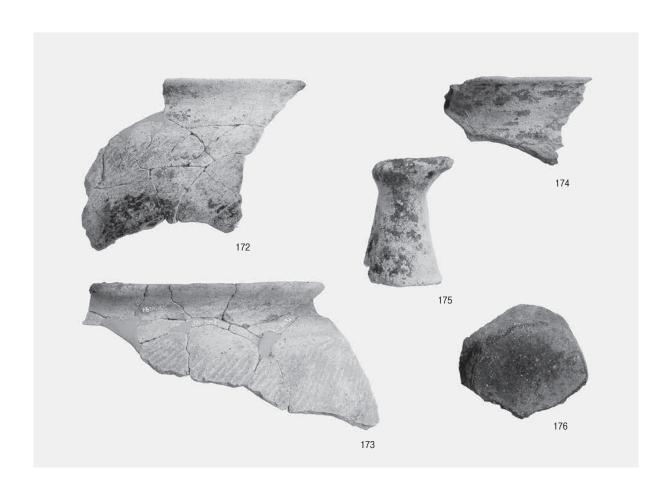


遺構11



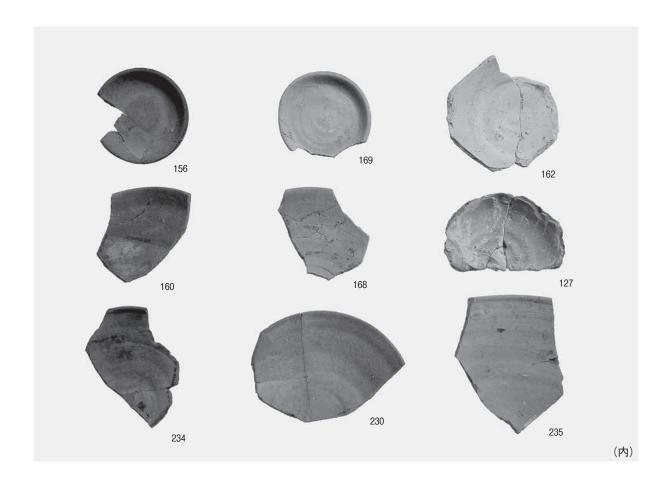


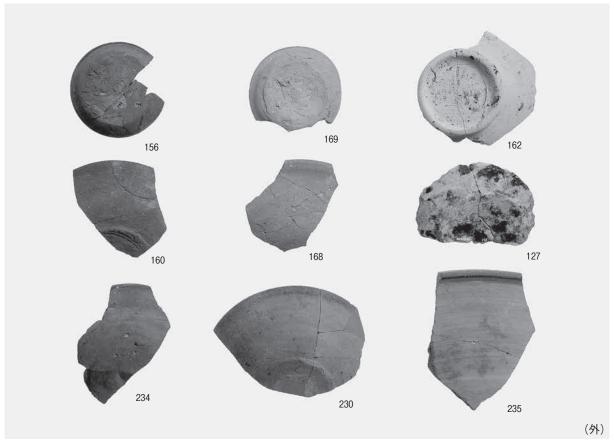
遺構12



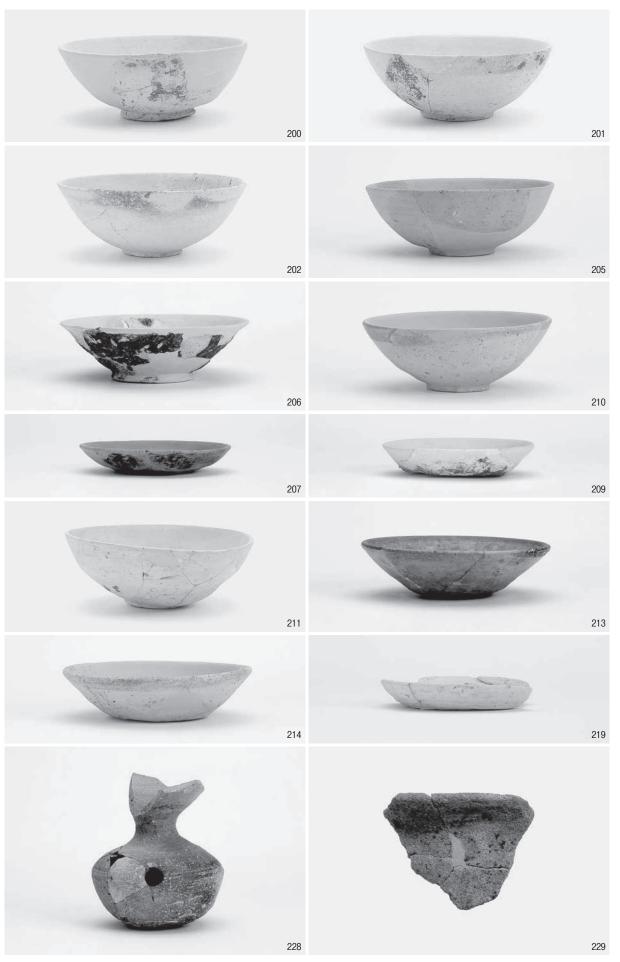


遺構13

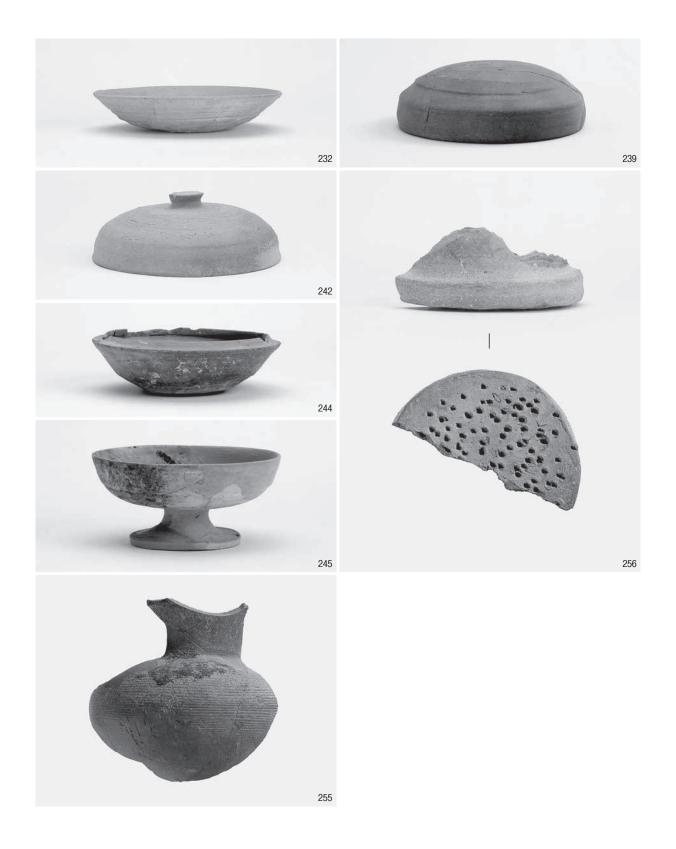


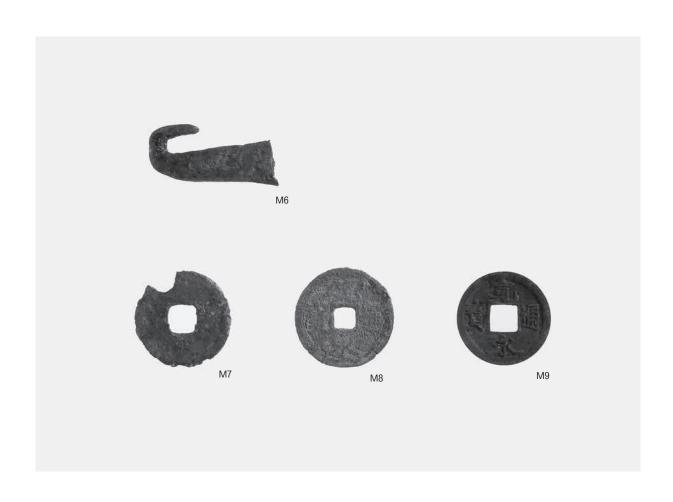


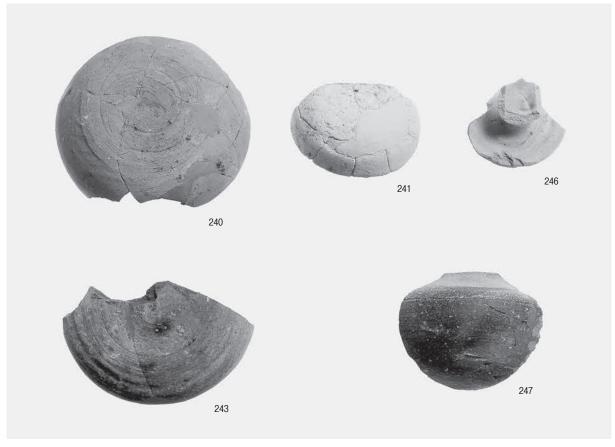
遺構14・包含層 1



包含層 2





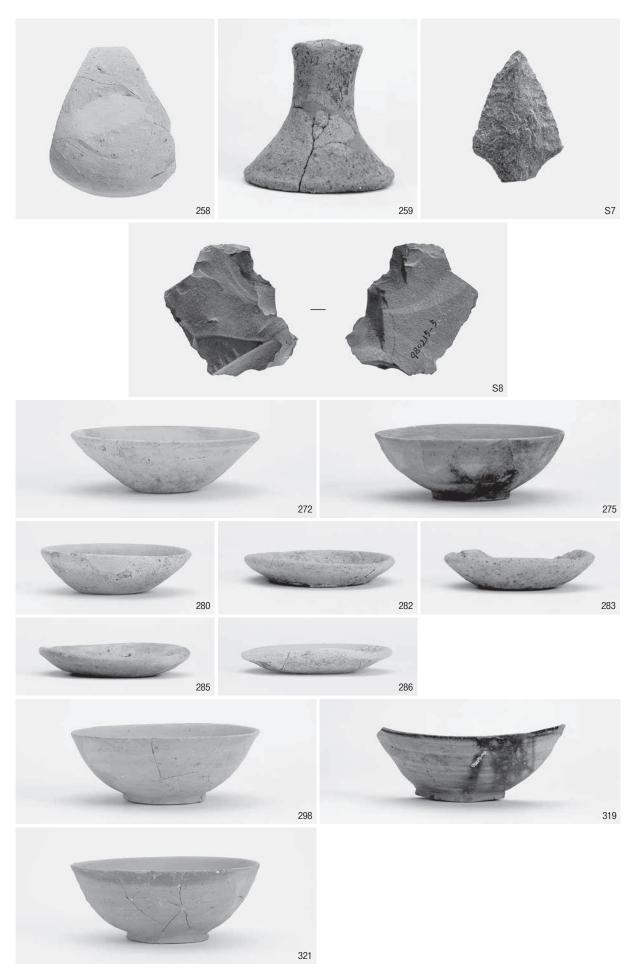


包含層 4



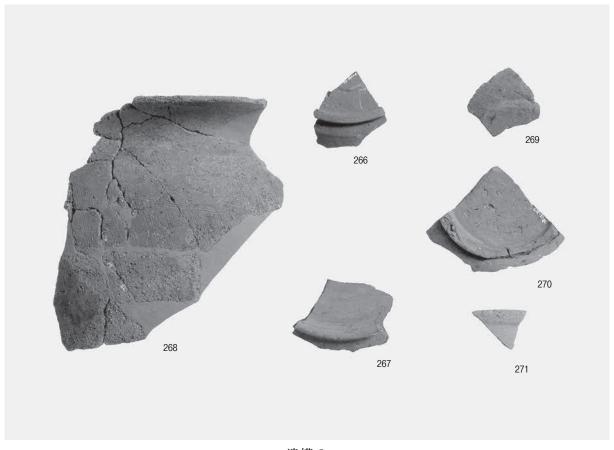


包含層 5



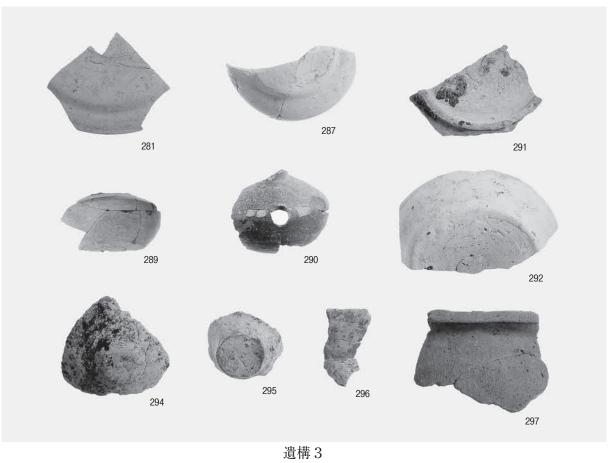
遺構 1

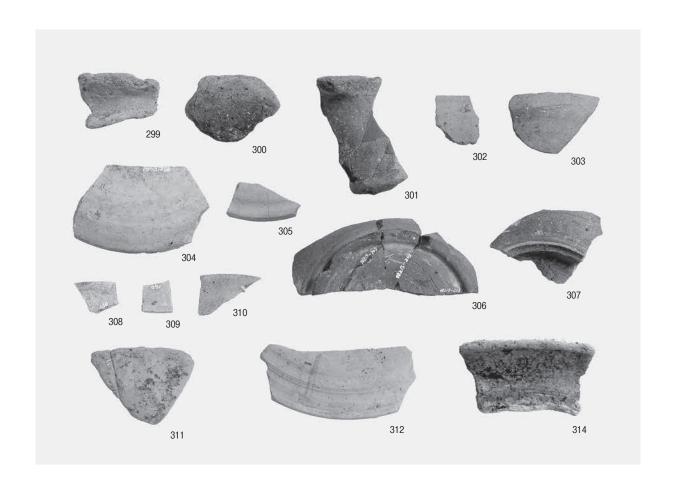


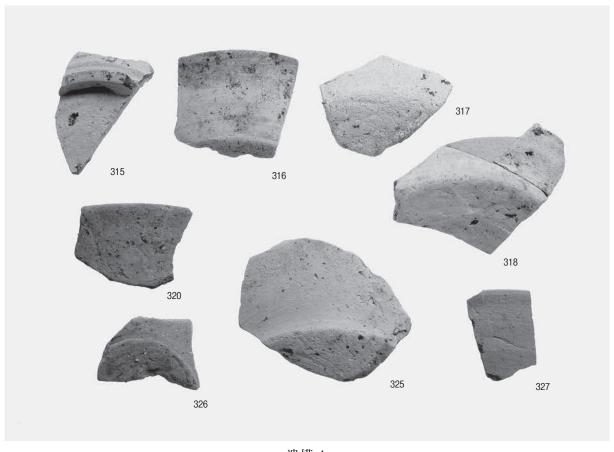


遺構 2

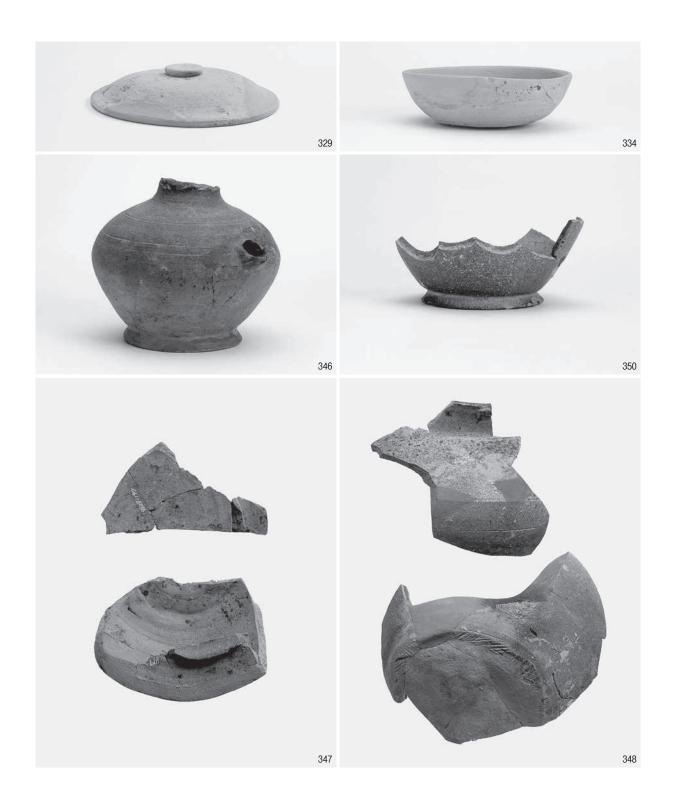


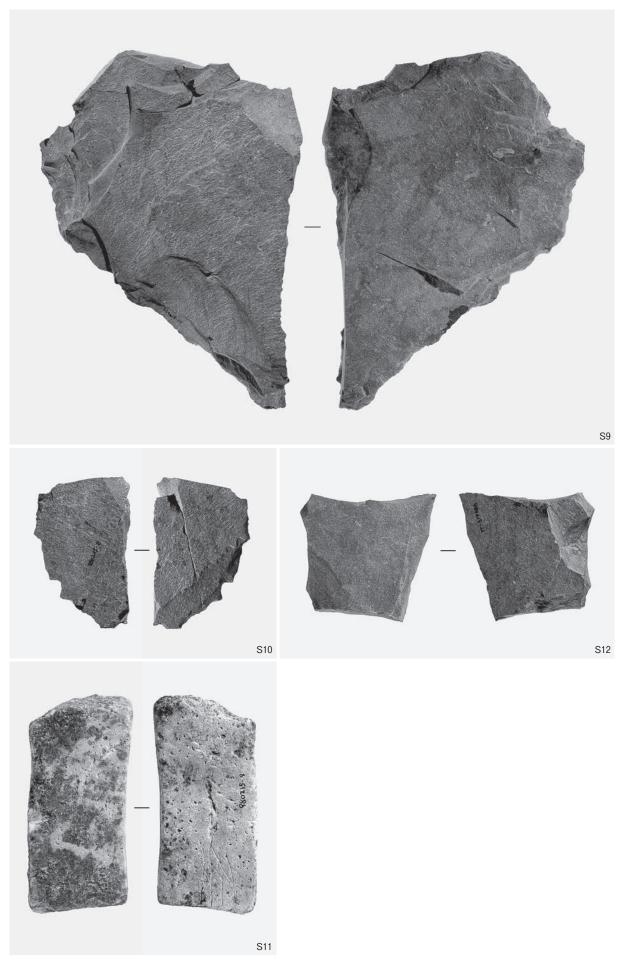




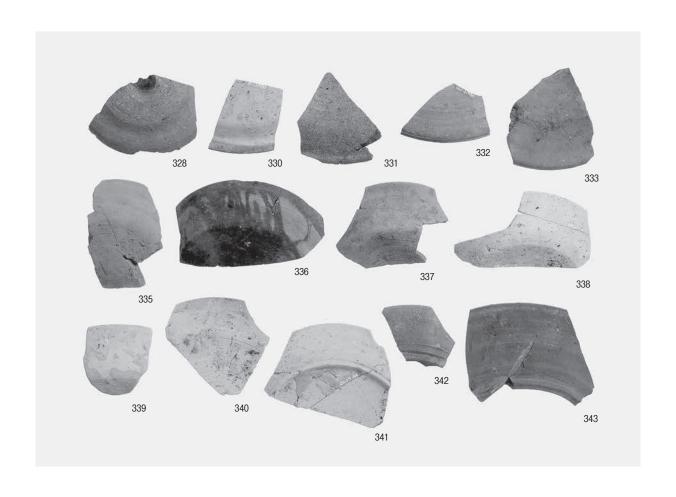


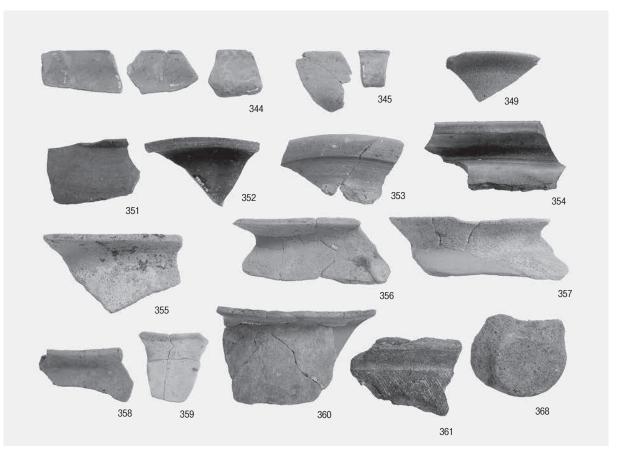
遺構 4



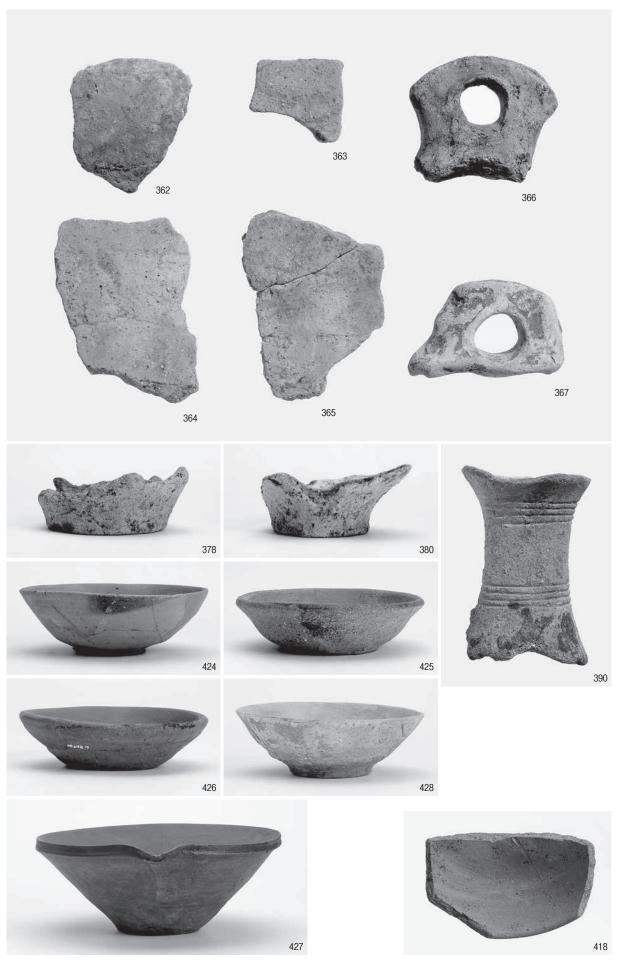


遺構6・包含層1



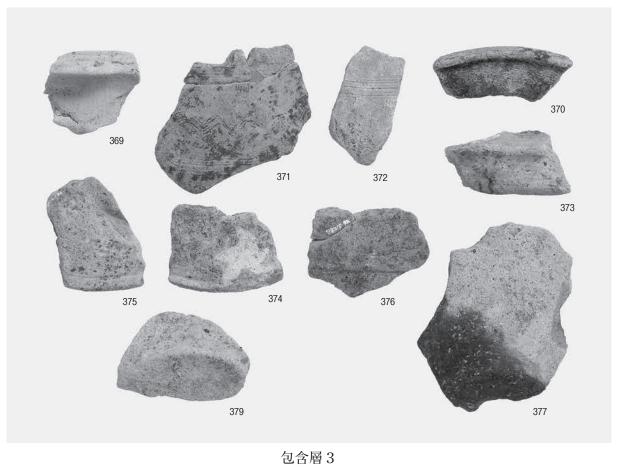


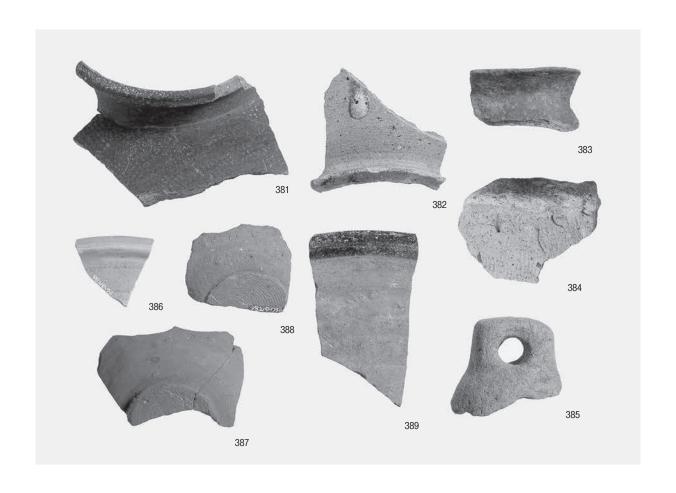
遺構7

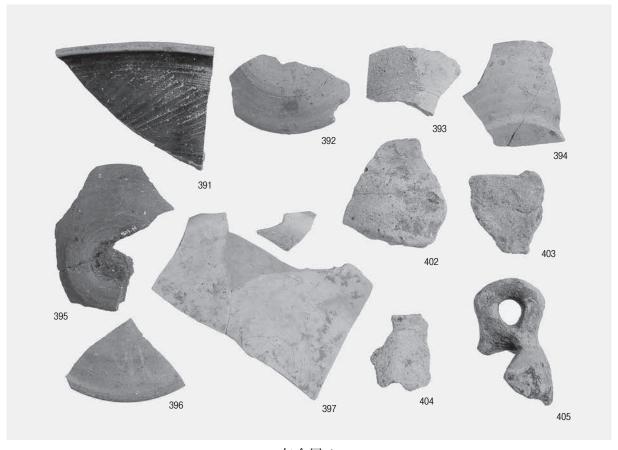


遺構8・包含層2

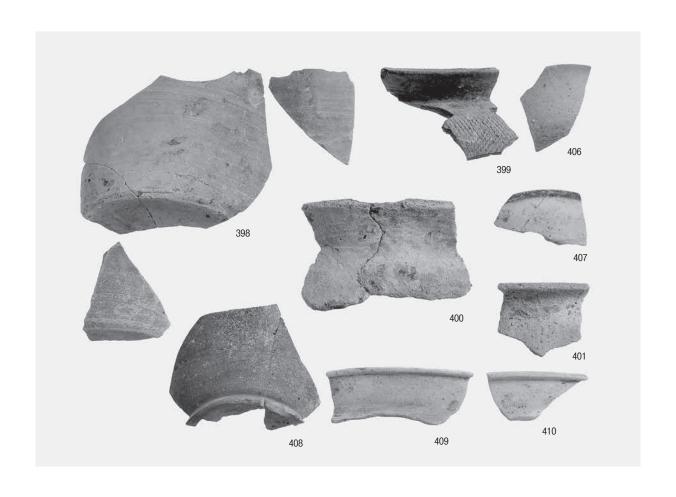


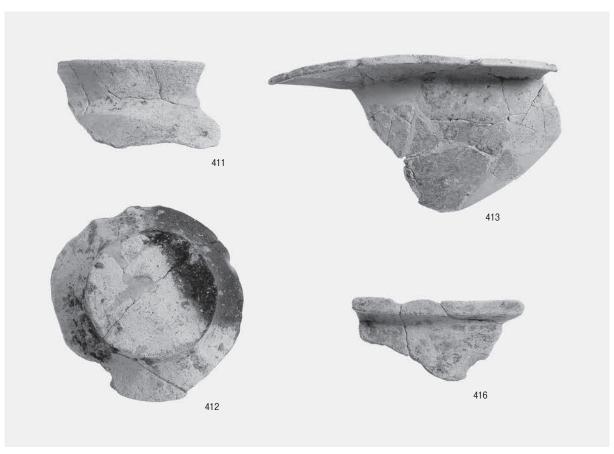




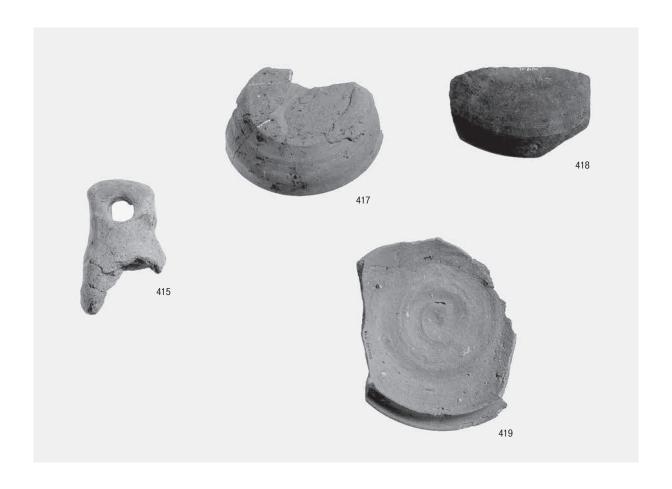


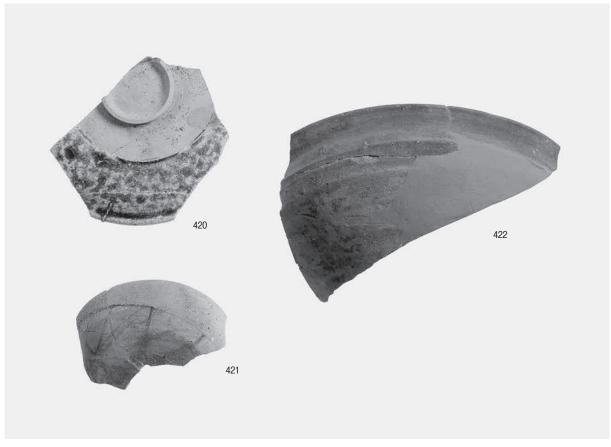
包含層 4





包含層 5





包含層 6

兵庫県文化財調査報告 第438冊

神戸市西区

西神ニュータウンNo.62 遺跡

-2号神戸西バイパス事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 VI-

平成25(2013)年2月26日 発行

編 集 公益財団法人

兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 (兵庫県立考古博物館内)

発 行 兵庫県教育委員会 〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁月10番1号

印 刷 ウニスガ印刷株式会社 〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39